

オリジナル国家を日本
国召喚に召喚してみた。

ATD—X

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

中央暦1939年1月23日。

地球から猟全共和国がアルタラス王国の西に。惑星ゾラからエクリップセ皇国がイルネティア王国北西に召喚された。

突然の事態に戸惑いつつ、彼らは弱肉強食のこの世界で生き残る手段を模索し始めた。

目次

飛ばしてもいいオリジナル転移国家設定

獵全共和国の詳細	1
獵全共和国航空戦力	50
獵全共和国陸上戦力	82
獵全共和国海上戦力	127
エクリプセ皇国の詳細	192
エクリプセ皇国空軍戦力	214
エクリプセ皇国陸軍戦力	242
エクリプセ皇国海軍戦力	267
魔法機士一覧	300
第一章「接触——Contact——」	
第一話「魔力なき侵犯機」	322

第二話「故郷は獵全」—— 339

第三話「アルタラス使節団、西へ（前編）」—— 356

第三話「アルタラス使節団、西へ（後編）」—— 368

第四話「来たのは何だ？」—— 384

第五話「エクリプセの使者」—— 399

第六話「日本との再開」—— 420

第七話「日本国の謎を追え！」—— 433

第八話「これが魔法機士（マジツシュアーバイター）だ！」—— 444

第九話「竜騎士対魔法少女対猫」

d——」

第十話「展開作戦第一号」—— 471

第十一話「ロウリア軍を撃て」

487

第十二話「自衛隊出撃せよ」—— 504

第十三話「エルフSOS」—— 525

第十四話「逆転のヒューイ」—— 541

飛ばしてもいいオリジナル転移国家設定

獵全共和国の詳細

獵全共和国

獵全共和国歴史

ラヴェジヤー

原生生物

民間武装組織

ラヴェジヤーのテクノロジーを有する部隊

ラヴェジヤーのテクノロジー

獵全のいた地球と史実地球の違い

1. 日本は獵全という競合相手の存在と日英同盟の存続及びロシア帝国の日英同盟入り、

アメリカとの決定的な対立が存在しないため、アメリカを始めとした工業国から技術指導等を受けた。

この為工業技術が史実より発達し、それに伴って兵器の発展が史実より早くなっている。

2. 諸外国ではラヴェジャーとの戦争の結果、史実より通常兵器にリソースが振り込まれ、史実より兵器の発展が早い。

なお、核兵器の発達は史実と同じペースだが、生産数はかなり少ない

3. ロシア革命不発により共産主義が育たなかった。

4. ラヴェジャーとの戦争の被害が原因で植民地独立が遅れている。一部の地域はラヴェジャーにより白人を含め現地住民が根絶やしにされ、

なし崩し的に宗主国の領土となっているが、実質無主地となっている植民地が多い。

獵全共和国

人口3000万人

総面積142,816 Km²

首都 共和国政府第一直轄区宮都市

日本列島より南に800kmのフィリピン海海域に存在。

古代から海外の生態系と比べ危険な生き物に頭を悩ませつつも国家を築く。

雷神を最高神に奉る独自の宗教が存在。
日本神話と同じく多神教。

狛全共和国本土

朱鷺舞州

五十島州

本土の北西と南東には南西諸島と同面積の群島が存在。

森林地帯が多く西部と南部には山岳地帯が存在。

恐竜を初め多種多様な巨大生物が多数生息。

生態系も狂暴な構成となっている。

鉱物資源が豊富で鉄鉱石はもちろんニッケルやタングステン等のレアメタルが豊富に眠っている。

連邦制で自治単位は

州、群、市町村、区

州の一覧と各州の特徴

朱鷺舞州ときまい

州都は神ノ木市

北西部の群島から構成される獵全最北の州。古くから船舶の休息地帯や海賊の拠点として

活用された。原油が埋蔵されており最近土師島で油田が稼働した。

憩月州けいげつ

州都は冬木市。

本土の北部に存在。東部で光野、西部で和峰と隣接する。天然の良港なのと琉球等の国々と

近いため貿易の要として発展した。

光野州みつの

州都は八幌市

北西に憩月。西部で和峰。南西で殻重城と隣接する。

北東部に存在。平原が広がり農耕地帯として栄え、食糧生産量が猟全で一番優れている。

国内で一番広い軍の演習場も存在する。

和峰州

和峰州は海鳴市

北東に憩月。東部で光野。南東で殻重城と隣接する。

北西部に存在。大きな森林地帯と山岳が存在し、自然も豊富に残っている。その為被害が最も頻発しているため武器の需要が高く猟師会本部が存在する。

壽州

壽州は空崎

北部に和峰、東部に殻重城と隣接し、二つの島から構成される。工業が盛んで殻重城と和峰の間にある為、殻重城から鉱物を輸入。加工して和峰に運ぶ事を繰り返した。

時たま和峰から海を渡ってくる生物や壽州内の生物による獣害も発生しており、壽州内部でも武器の需要は高い。

ラヴェジャーが占領した際にラヴェジャーの基地が設営されており、その基地を利用

して国内で残っているラヴェジャーのテクノロジーを全てここで保管、研究されている。

殻重城州からじゅうじょう

州都は川上市。

南部半島の山脈地帯から構成される。鉾山が盛ん。

和峰より険しい山岳地帯だが鉱物資源が豊富にとれる。

ラヴェジャーの生体兵器が製作した巣穴が存在しており、

生体兵器を駆逐したあと、坑道として利用している。

誇棟州こむな

南東の出島で構成される。宮都市が所在。

獣害が獵全国内では比較的酷くないため、人の往来が激しい。

都市圏が年々拡大している。

五十島州いそしま

州都は桐川市。

南東部の群島から構成される。油田はないが赤道に近い事からロケット発射基地が設置

されており、宇宙開発ロケットを度々発射する。

また、ラヴェンジャーが占領していた事でラヴェンジャーの遺したテクノロジーが大量に存在する。

歴史

古代に人が移り住んでから島で獣や恐竜等と激しい生存競争を繰り広げていた。時代が下ると冬木を拠点に琉球や日本と交流を保ち、そちらを通じて東アジアや東南アジアと貿易を行ったり傭兵を派遣していた。

1859年にイギリスが猟全に来訪。補給地点として利用したい旨を当時の猟全に要求。

猟全は承諾しイギリスが駐留。

その後程なくしてイギリスが原生生物への対策の名目で軍隊を駐留させ、在猟英軍が誕生。

当初イギリスは獵全を植民地にしようとは画策するも、知れば知るほど植民地化が困難で、植民地にしても現地の抵抗や生物の対策で旨味が少なく、むしろ近代化させて友好国に育て上げた方が、

利用できるために一部を拠点にする程度に留まる。

最終的にイギリスと日本を手本にアジアで二番目に近代化を達成。日本とイギリスと同盟を結ぶ。

様々な海外の戦争に観戦武官や義勇兵を派遣し、

或いは戦訓を集め、1900年に義和団の乱にて初陣を飾る。

次に日露戦争に日本側で参戦。203高地や旅順、奉天会戦や日本海海戦等に参戦して活躍。

第一次世界大戦では日本と共に遣欧部隊を編成。

連合国側で参戦し活躍する。末期では連合国だけでなく同盟陣営と共にロシア革命を阻止する。

戦間期は国家や軍の本格的近代化に乗り出す。

1939年9月1日にラヴェンジャーが地球に襲来し第二次世界大戦が勃発する。

ラヴェンジャーとの戦争では早期に戦時体制に移行。軍事物資を重点的に生産していた。

歐洲に援軍を派遣するも、派遣直後に本土南西部にラヴェジャーが襲来。五十島州と壽州、

穀重城州が占拠される。

この事態を受けて獵全政府は國家総力戦に移行。國民を全員徴兵し工場の生産活動を軍需生産のみに切り替える。

海外から強力な兵器を導入したり、援軍の到着により二年ほどで全土を奪還。

その後ボルネオのラヴェジャー本拠地での決戦に参加。

以後は各地のラヴェジャー狩りに戦力を送る。

また、大戦でラヴェジャーの侵略により多数の難民や身元不明の孤児が発生し、難民キャンプが

国内に設けられた。

殆どの難民は陥落した地域の奪還に伴い現地政府や国際連盟、民間の有志と協力して随時帰国

させているものの、現地政府が拒否したり亡命政府が複数存在し、主張が統一してない。そもそも現地政府機関が消滅している為、或いはラヴェジャーの生体兵器が残存しており帰国できない

難民や身寄りのない孤児については国や国内外の有志が保護。獵全へ帰化するか国

外の地域に

移住するかを選択させている。

1951年にラヴェジャー兵器の撲滅が確認され、第二次世界大戦が終結。

戦後は日本と共に、大陸が占領された場合の奪還の要として地球防衛軍が駐留。未だ地球に巢食う生体兵器の掃討も行っている。

1960年。新世界に転移する。



ラヴェジャー

地球に襲来した正体不明の侵略者。襲来当初は地球側の呼び掛けに答えずに

一方的な侵略活動を開始。

大戦中に地球にやって来たのはただの先遣部隊で偵察と本隊の誘導を担っていることが判明。1945年11月1日、誘導を行っていた装置がボルネオ島に有ることを突き止めた人類はこれを破壊し、本隊の襲来を阻止。以後は残敵の掃討に当たった。

戦後の調査で地球に襲来したのは全て無人兵器だったことが判明した。

動力源こそ不明だが、この未知のエネルギーを増幅装置により増幅。更に電気等に変

換することで稼働に必要な各種エネルギーを得ていた。

トライポッド

武装

殺人光線或いは電磁砲

三脚の歩行戦車だが飛行ユニットを本体上部に装着する事で空中を低速で移動出来る。武装は殺人光線か電磁砲のどちらかで、熱線は大和型戦艦を10秒程で爆沈する熱量を持つ。

電磁砲は貫通力が非常に高く、戦艦どころか地形を貫いて攻撃を行える。

どちらの武装も命中精度が高く、対空対地対艦の敵に対して凶悪な戦闘力を発揮する。

防御力も戦艦並みで陸戦兵器では時間稼ぎにしかない。

対処方法は武装に集中攻撃を加えるか、戦艦並みの主砲弾を直撃させるしかない。

地球の熱線砲や電磁砲はこれを元に行っているが、

地球の物とラヴェジャーの物は原理は同じでも素材が違う。

スカイステイングレイ

武装

殺人光線

最高速度

800 km/h

略称はSS。宇宙戦争(1953)のマーシャーン・ウォー・マシンの形をした無人戦闘機。武装は殺人光線のみ。大型艦艇こそ撃沈出来ないが、高い命中精度を誇り航空機や小型艦艇、重戦車程度なら確実に破壊できる。運動能力と、防御力も高く、20mm機関砲レベルの直撃なら防げる。但し連続して着弾すると怯み、動きが鈍くなる。

撃破には30mm口径の弾丸の直撃が必要。それ以上の口径であれば爆発時の破片で損傷或いは撃墜が可能。

或いは20mmガトリング砲で直撃弾を浴びせ続け、動きが鈍くなったところを砲撃するのも有効。

1号侵略生物

人を主食とする生物兵器。昆虫を彷彿させる外見で大きさは人間よりやや大きい程度。

拳銃弾レベルでもダメージは与えられるが、ライフル弾の方が一撃で倒しやすい。頑丈な糸を吐き、目標を絡めとる。力がとても強く人間なら二〜三人束ねても鯖折りに出来る。

他の侵略生物と共同して物量で突撃してくる。

2号侵略生物

戦車並みの大きさで役割も戦車と同等。長距離では火炎弾を、近距離では強力な酸を吐き出す。

1号と組んで戦線に出てくる事が多い。火炎弾は成形炸薬弾と同様の効果があり、吐き出される酸は戦車でもダメージを与える。他の侵略生物と共同して物量で突撃してくる。

3号侵略生物

戦闘機並みの大きさ。200km/hで飛行するが一部の個体は倍以上の速度を叩き出す。

主な攻撃方法は粘性の燃焼物質を吐き出して敵を攻撃する。

更に1号侵略生物を四体、2号なら一体を抱えて飛行でき、輸送や攻撃等に使用する。

他の侵略生物と共同して物量で突撃してくる。

女王級生物兵器

各種侵略生物を生産する巨大な個体。

見た目は羽の生えた巨大な1号侵略生物。動きは鈍いが広範囲に渡って酸と糸を吐き出す。

怪獣甲1ソラス

身長47m。白い体に鼻先に角があるのが特徴。大規模な火炎放射を放ち二足歩行で移動する。

両生類の特徴を持ち、水中でも活動可能。

戦争中はラヴェジャーに操られ、人類や猿神と激しい戦いを繰り広げた。

小規模な群れで生活する。本来の気性はおとなしい雑食性で積極的に攻撃は仕掛けてこない。戦後はひっそりと地球の生態系に組み込まれた。時たま無人島や人気のない海岸に上陸するが特に暴れることはない

怪獣甲2メカソラス

肉体の随所に金属部品が見え、耐久力が大幅に上がっている。火炎だけでなくレーザーガンや近接用のグレネードを装備する。

また、EMP攻撃も可能で広範囲の電子機器を破壊する。

怪獣乙1ヴァラク

身長65m。赤い体で所々に黒い甲殻を持つ。戦争中は猿神と人類相手に激しい戦いを繰り広げた。破壊光線を放ち二足歩行で移動。肉食で狂暴。ソラスより高い戦闘力を持つ。

ラヴェジャーに操られていたが、ラヴェジャーが壊滅した後も暴れた為に駆逐作戦の末に絶滅させられた。

怪獣乙2メカヴァラク

体が機械化している。腕がなくなった代わりに肩にビームランチャーが、腰にプラズマ弾発生装置が装着されており高い攻撃力を持つ。

常時ECMを展開しており小規模なEMPも行う。

揚陸歩行戦艦

武装

プラズマ砲、レールガン、レーザー砲、パルスレーザー
全長500mの巨大な四足歩行戦艦。

ロサンゼルス、敦煌市、ニューヨークニア、スマトラ島、ハワイ、ダンツイヒ、モスクワ、
に襲来。

陸上や海底を移動するが、航空戦力の発艦は水上で行う。水上での移動が一番早く戦
闘も

行えるのもつばら水上と地上で行動する。水上で航行するときには脚は畳んでいる
が、

海底や地上を動くときは歩いて移動する。

強力な攻撃力を持ち、さらに輸送艦や航空母艦としての機能をあわせ持ち、
一隻で艦隊レベルの能力と評価される。移動基地としての性格が強い。

下部に降下ハッチが存在し、そこが弱点となっている。

ネスト

侵略生物が設営した巢。巨大な構造物で地上には塔がそびえ立っており、
地下には広大な巢穴が存在する。

地上の塔には3号侵略生物が。1号と2号が地下部分に生息する。

降下拠点

宇宙軌道から地球に飛来した巨大基地。

全長3000mの巨大円盤。東南アジアボルネオ島の赤道上に一基飛来。ラヴェジャヤーの拠点と地球目指して飛行中のラヴェジャヤー母艦の誘導装置としての役割を持つ。

揚陸戦艦を三隻外付けしていた。

必要物資の精製ができないと言う弱点がある。

○●

原生生物

猿神

猿とあるが、実際はゴリラに近い。

成体の身長は18m程だが、特異個体と呼ばれるものは40mになる。

高い知能を持ち、群れで生活する。一部の地域では信仰の対象として信仰されている。

恐竜

獵全に唯一生息する。巨大で様々な種類が存在する。

一部の個体は家畜化に成功しており農耕や軍事等で活躍する。

軍事面では、中型以上の恐竜は義和団事件や日露戦争、第一次世界大戦で戦車代わり
の

塹壕突破要員として活躍していたが、機械化が進んだ現在では
輸送任務等の後方支援を主な任務としている。

ラプトルのような小型の恐竜は騎兵の騎乗する乗り物として現在でも活躍している。



民間武装組織

獵師会

獵全に生息する狂暴な生態系に対抗するために作られた組織。国外の獵師と違い機

関銃や戦車、

戦闘機を装備する軍隊染みた組織。戦前に国際連盟から廃止するかどうかの会議が行われた現地状況を詳しく知る獵全、イギリス。獵全から渡ってきた動物により被害

を被った経験のある日本、中国が反対活動を行い阻止された。

私物の持ち込みも可能で以下の採用兵器以外に様々な兵器が運用されている。

装備

航空機

38式戦闘機 旋風

41式戦闘機 台風

40式戦闘機 一式戦闘機隼

41式複座戦闘機 二式複座戦闘機屠龍

40式輸送機 DC-3

37式艦上攻撃機 ソードフィッシュ

54式回転翼機 Mi-4

57式回転翼機 Ka-25

車輛

30式戦車 ヴイツカース6t軽戦車獵全仕様

35式軽戦車

36式中戦車

30式豆戦車 カードンロイド豆戦車

17式装甲車 ロールスロイス装甲車

ジープ

ランドクルーザー（史実トヨタジープBJ）

火炮

10式40mm機関砲 QF 2ポンドポンプン砲

26式20mm野戦機関砲

41式対空機関銃 M45対空機関銃架

88式57mm歩兵砲

96式75mm山砲

35式40mm対戦車砲

携行火器

05式歩兵銃 リーエンフィールドSMLE Mk III及びSMLE Mk IV

18式軽機関銃 ルイス Mk I

96式回転拳銃 ウェブリーリボルバー

4 0 式対戦車狙撃銃

4 4 式対戦車狙撃砲

3 3 式擲弾砲 八九式重擲弾筒

4 3 式対戦車擲弾 P I A T

4 4 式対戦車墳進擲弾 パンツアーファウスト

民間警備会社

元々は金庫番や施設の巡回、イベントでの誘導、施設内への侵入阻止、現金輸送等の仕事に携わっていた。

しかし、ラヴェジャーとの戦争の影響で世界規模で治安が悪化。さらにラヴェジャーの残党とも

言うべき生体兵器が存在していたために無人地域の危険度も増加。

軍を動かすにも金額が掛かりすぎるために各警備会社と各国政府は警備会社の装備の増強を決定。旧式兵器の供与を行った。

以下は猟全の転移に巻き込まれた警備会社の名前。

陸戦兵器については装甲戦闘車両のみ記載。海上兵器は艦型のみ記載。

日系警備会社

極東海洋警備保障

護衛空母梁山泊を拠点に活動する民間警備会社。

主に海上での船舶護衛や哨戒を受け持つ。

艦隊規模は護衛空母と軽巡洋艦各一隻と駆逐艦四隻。そして輸送艦のみと小さく、

装備も古いが乗組員の練度は高い。

提携していたフロリダ沿岸輸送の船団と航行中に転移に巻き込まれた。

護衛空母

梁山泊

紫電改×4、天山×4

軽巡洋艦

球磨型軽巡洋艦

駆逐艦

朝潮型駆逐艦

陸戦兵器

九六式中戦車（史実チハ）、一〇〇式軽戦車（史実ケト）、ZSU-37対空自走砲
ヘリコプター

伏見機動警備

京都に拠点を置いている大手警備会社。転移時に保有する護衛空母オオギツネと陸戦部隊を

搭載した輸送船、護衛の駆逐艦が獺全共和国付近を航行していたために

現在は転移した乗組員がオオギツネを拠点に活動中。

護衛空母

オオギツネ
大狐

烈風×4 流星×4

軽巡洋艦

川内型軽巡洋艦

駆逐艦

陽炎型駆逐艦

陸戦兵器

一式中戦車（史実チヌ）、三式中戦車（史実チト）、三式対空戦車（史実ソキ）

陸上機

一式戦闘機鍾馗（史実キ44）、二式戦闘機飛燕（史実キ61）、三式戦闘機翔燕（史実キ100）

ヘリコプター

K a | 25

米系警備会社

フロリダ沿岸輸送

アメリカ合衆国フロリダ州マイアミに拠点を置く警備会社。元々は海上運送会社だったが、

第一次世界大戦でのUボートの脅威と各地の海賊に対抗するため、

旧式化した駆逐艦や軽巡洋艦を購入。自前の護衛戦力を保有するに至った。

以後、運送業務と共に海上護衛業務も行うようになった。護衛空母は保有していないものの

輸送艦と駆逐艦を多く保有している。極東海洋警備保障とは提携関係にある。

軽巡洋艦

クリーブランド級軽巡洋艦

駆逐艦

フレッチャー級駆逐艦

陸戦兵器

M 2 4 チャーフィー軽戦車、M 4 1 ウォーカー・ブルドッグ軽戦車、M 8 装甲車、M

4 2 対空自走砲

ヘリコプター

S | 5 8

マーティンズ・セキュリティ社

米国の大手警備会社。

護衛空母と補給船団が東南アジアでの海賊対策任務から米国へ戻る際に転移に巻き込まれた。

護衛空母

カノーパス

零戦×4、F 6 F ヘルキャット×4

軽巡洋艦

アトランタ級軽巡洋艦

駆逐艦

アレン・M・サムナー級駆逐艦

陸戦兵器

M8装甲車、M20装甲車、M4A3E8シャーマン戦車、M15対空自走砲、M1

6 対空自走砲

陸上機

P-51D、P-47N

ヘリコプター

UH-1、CH-54

オドネル・セキュリティ

護衛空母ベナンダンテを拠点に活動する警備会社。ドイツ系の移民が立ち上げた。

伏見機動警備とはライバル関係にある。

護衛空母

ベナンダンテ

F8F×4、F4U×2

アトランタ級軽巡洋艦

フレッチャー級駆逐艦

陸戦兵器

Ⅲ号戦車、Ⅳ号突撃砲、クーゲルブリッツ対空戦車

陸上機

Bf 109 K、Fw 190 G、Ta 152

ヘリコプター

H-21

猟全共和国の警備会社

猟全総合警備

猟全で一番規模の大きい警備会社。護衛空母の数が最も多い。

猟全や日本から旧式化した艦艇を多く導入している。

序盤にアルタラス王国に派遣された外交官護衛艦隊は全てこの警備会社所属の艦艇。

護衛空母

カラス

39式艦上戦闘機 旋風×8、35式艦上攻撃機 ソードフィッシュ×4

ツバメ

41式艦上戦闘機 零戦×4、40式艦上爆撃機×4

スズメ

39式艦上戦闘機 旋風×4、35式艦上攻撃機 ソードフィッシュ×4
キジ

41式艦上戦闘機 零戦×6、40式艦上爆撃機×4

軽巡洋艦

長良型軽巡洋艦

タツセ型軽巡洋艦

大戦後に退役した軽巡洋艦。幸運艦として有名で一隻が記念艦として展示されている。

駆逐艦

特型駆逐艦、初春型駆逐艦

陸戦兵器

36式中戦車、30式戦車、30式豆戦車、35式汎用装甲車、ZSU-37対空自

走砲

航空機

40式戦闘機、41式複座戦闘機、38式爆撃機、40式輸送機

ヘリコプター

M i | 6、M i | 4

誇棟警備

誇棟に拠点を置く警備会社。猟全総合警備とシェア争いを繰り返している。こちらは規模こそ小さいが一つ一つの戦力が優れている。

護衛空母

オオタカ

48式艦上戦闘機×6、47式艦上攻撃機×6

ハヤブサ

48式艦上戦闘機×6、47式艦上攻撃機×6

軽巡洋艦

球磨型軽巡洋艦

ナラツタ型軽巡洋艦

タツセ型軽巡洋艦の次型。戦後に軍から退役して解体されたが、一部は誇棟警備に売却されて運用されている。

駆逐艦

白露型駆逐艦、

ワカシオ型駆逐艦

ウズシオ型駆逐艦の前型。大戦後期まで現役だったが戦後に退役し、現在は誇棟警備で運用されている。大戦中に激しく消耗した為に残存艦は少なかったため、全て誇棟警備に引き取られた。

陸戦兵器

36式中戦車、一〇〇式中戦車（史実チへ）、M19対空自走砲

航空機

43式戦闘機、Do335、44式爆撃機、40式輸送機

ヘリコプター

Mi4、Ka25

●
○

ROT運用部隊

運用する兵器の解説は獵全共和国陸上戦力、獵全共和国海上戦力、獵全共和国航空戦力にて解説。

獵全共和国内務省警察庁隷下

特殊装備部隊、科学特捜隊

ラヴェンジャーのテクノロジーを解析して、開発された装備を運用する猟全警察が誇る最強の切り札。

ロングアーチチーム

科学特捜隊の指揮・統制を行う指令部。AECドーチェスター装甲指揮車を配備しており、

現場に赴くこともある。整備等の後方支援業務もこちらで行う。

スターズチーム

ライトニングと共に前線で活動する。

ライトニングチーム

スターズと共に前線で活動する。

マーズチーム

工事を主任務とする部隊。スターズ・ライトニングと共に前線で活動する。

スパイダーチーム

前線より一步下がった位置で観測や狙撃支援を行う部隊。

ベルシダーチーム

コベントリー装甲車と35式軽戦車を装備する車輛部隊。
火力支援や壁役として活躍する。

ナイトスカイチーム

Ka-25ヘリコプター四機で編成される。現在大型ヘリコプターの保有も計画している。

装備

火器

96式回転拳銃 ウェブリーリボルバー

00式自動拳銃 モーゼルC96

03式回転拳銃 ウェブリーホスベリーオートマチックリボルバー

97式散弾銃

35式散弾銃 イサカM37

42式短機関銃 PPSH41

05式歩兵銃 リーエンフィールドSMLE Mk III及びSMLE Mk IV

28式歩兵銃

31式歩兵銃 四四式騎銃

17式軽機関銃 フェドロフM1916

58式怪力光線銃

車輛

コベントリー装甲車

ジープ

35式軽戦車

放水車タイプとドーザーを設置したタイプが存在。

AECドーチェスター装甲指揮車

Ka-25ヘリコプター

獵全共和国陸軍

対怪獣強襲戦術部隊

戦争中に怪獣対策に備え設立された特殊部隊。

戦争が進むにつれ怪獣だけでなく様々なラヴェジャーに対応する用になりラヴェ

ジャーとの戦争で重要な戦力となった。

ラヴェジャーのテクノロジーを多く保有しているものの、陸軍が予算不足なために後日配備予定となっている兵器が多い。

メイジ

指揮管制。基本的に基地から指令を送るが、状況によっては前線に赴き、仮設指揮所を設立し現地で指揮を執ることもある。

ブレード

歩兵部隊。一般歩兵部隊の装備に加え、ROTI機関で開発した

58式怪力光線銃と熱線銃を標準装備した獵全軍最強の機械化歩兵部隊。

アックス

機甲部隊。43式中戦車と44式駆逐戦車が主力だが、試作主力戦車の先行量産型
そして少数ながら55式自走電磁砲を配備している。

スピア

自走砲やロケット砲。少数ながら50式怪力光線砲戦車を配備している砲兵部隊。

獵全陸軍では数少ない保有する火砲を自走砲で統一している部隊。

本来なら57式365mm自走砲も配備する予定だった。

ナイフ

観測部隊。先んじて前線に潜入し、各種偵察活動を行う。BC兵器の除染・洗浄も行う。

アロー

航空機部隊。44式戦闘機震電改とヘリコプターを装備。本来なら電磁砲ポッドとレーザーポッドを装備する予定だったが、予算の都合で後日配備となっている。偵察任務では観測部隊であるナイフ部隊と連携を取る。

地球防衛軍からアローヘッドとアローヴェインを融通されており、運用している。

火器

58式怪力光線銃

60式熱線銃

48式強襲銃 AK-47

46式自動歩兵銃 SKSカービン

44式自動拳銃 FNブローニングハイパワー

40式対戦車狙撃銃

44式対戦車狙撃砲

33式擲弾筒 八九式重擲弾筒

60式対戦車墳進擲弾 RPG-7

車輛

43式中戦車 T-34

44式駆逐戦車

試作主力戦車

ランドクルーザー(トヨタジープBJ)

ドーチエスター装甲指揮車

42式装甲車 ダイムラー装甲車

40式装甲偵察車 ダイムラー偵察車

57式装甲輸送車

55式24連装自走ロケット砲

49式203mm装甲自走砲

47式152mm自走榴弾砲

50式怪力光線砲戦車

5 5 式自走電磁砲

航空機

4 4 式戦闘機震電改

アローヘッド

アローヴェイン

5 4 式回転翼機 M i | 4

地球防衛軍特殊装備任務部隊

ウルトラ警備隊猟全支部

地球防衛軍の特殊部隊。陸海空全ての領域に兵力を展開可能。ウルトラ警備隊は設立に米国が関わっているため、米国製の兵器を多く保有している。

スパイナー

機械化歩兵部隊。メーサーに加え熱線銃を装備。猟全国内に存在する歩兵部隊の中では最も装備が充実している。

ライトン

熱線砲、メーサー砲を装備した砲兵部隊。ロケット砲や榴弾砲も配備している。

マグマ

戦車、レールガンを装備した機甲部隊。

ガード

艦載ヘリコプター部隊。陸上でも活動する。

ホーク

戦闘機部隊。

ポインター

指揮管制や整備等の後方任務を行う。

ハイドロ

水上部隊。揚陸艦とその護衛艦で構成される小規模な艦隊

航空機

ウルトラホーク

アローヘッド

アローヴェイン

ビートル A / B / C / D

F | 8 6

F | 1 0 4

F | 4 C ファントム II

H | 1 3

U H | 1

S H | 3

車輛

M 2 4 チャーフィー 軽戦車

M 4 A 3 E 8 中戦車

チーフテン

M 3 ハーフトラック

ジープ

M 7 1 0 5 mm 自走榴弾砲

M 4 0 1 5 5 mm 自走加農砲

M 4 2 ダスター 自走高射機関砲

ROTOR M05 怪力光線砲戰車

ROTOR L03 熱線砲

ROTOR R05 イプシロン電磁砲

獵全共和国が配備している55式自走電磁砲と同じタイプ。

火器

スプリングフィールド M1903

スプリングフィールド M1ガーランド

ウインチエスター M1カービン

スプリングフィールド M14

アーマライト AR10

コルト M1911

ROTOR M06 怪力光線銃

ROTOR L07 熱線銃

M20スーパーバズーカ

M72 LAW

艦艇

ギアリング級駆逐艦×4

ジャイアント級ミサイル駆逐艦×2

デモイン級重巡洋艦

カサ・グランデ級ドック型揚陸艦

ROTI機関(英名Ravager Over Technology Inquiry Organization)

地球防衛軍の研究機関で猟全だけでなく世界中に研究所が設置されている。

以下はROTI機関が開発して、猟全国内で配備されているラヴェジャーのテクノロジーを応用した兵器。兵器符号はROT。

怪力光線砲ROTM

所謂メーサー兵器。一部列強では戦前に開発がスタート。ラヴェジャーの技術を使

い、

複数の国との共同開発の末に実用化。

メーサーによりマイクロ波を増幅し、マイクロ波加熱による誘電加熱現象を起こし標的を高熱状態にさせる。航空機や生体兵器に効果的だが戦車や装甲車等の重装甲目標に関しては効果が無い。

50式怪力光線砲戦車 ROT-M03

装輪式の自走メーサー戦車。かなり大型だが速力、走破能力は高い。エネルギー増幅装置を

搭載していないため車体の大半を怪力光線用の発電機と

移動用のエンジンが占めており、装甲は薄い。

メーサー以外の固定装備は存在しないため、運用には護衛の随伴が必須。

56式怪力光線砲戦車 ROT-M05

エネルギー増幅装置を搭載した怪力光線砲戦車。50式と比べて小型化しており、より軍用任務に

適応した能力を持つ。エネルギー効率の上昇により照射時間が大幅に延びている。

58式怪力光線銃 ROT—M06

歩兵携行用のメーサー。エネルギー増幅装置の小型化に成功したことで開発された。小銃程の大きさと射程も小さい。それでも歩兵が携行する火力としては大きく、メーサーを歩兵が撃てるようになったのは戦力の大幅な向上に繋がった。

熱線砲 ROT—L

所謂殺人光線。

ラヴェンジャーの兵器を解析した結果実用化に成功した。艦載兵器や固定砲、野戦兵器として運用された。

総じて冷却不足になるとすぐに融解、火災、爆発事故が起きやすい欠点を抱える。

54式短照射連続式熱線砲 ROT—L02

対空戦闘を目的に作られた。従来の対空火器と比べ圧倒的な弾速や理論上は電力が切れない限り

いくらでも発射可能な継続性を持つ。但し、レンズが長時間の熱に耐えられないため交換する必要がある、このレンズの交換が装填代わりに行われる。

必要な発電量が多く、重量自体も重い為に駆逐艦程度の艦では一門しか搭載できない。冷却が不足すると火災や爆発が発生する。所謂パルスレーザー。

56式熱線砲 ROT-L03

牽引式の熱線砲。配備数は少ないものの攻撃力と命中率はずば抜けて高く航空目標、地上目標、

海上目標、そして浅い海中までなら潜水艦も撃ち抜ける。

しかし冷却機能に難があり、オーバーヒートすると砲身とジエネレーターが融解し爆発する。

外見はモスラに登場した原子熱線砲

熱戦砲ポッド ROT-L04

航空機に搭載するために小型化された熱戦砲。攻撃力は落とされているが、

それでも航空機や軽装甲目標程度は撃破可能。

運用のしやすさは向上している。

60式熱線銃 ROT-L07

重機関銃程の大きさで運用に二人〜四人必要。

熱線砲と比べ、攻撃力は低い。

しかし冷却不足になっても爆発も融解もしない等、運用の取り回しは向上している。

荷電粒子兵器 ROT—B

戦前から理論上は可能なことから一部の科学者の間で構想されていたが、必要電力等の実用化に

おけるハードルが高すぎたため空想小説でしかお目にかかれなかった。

ラヴェジャーから鹵獲した粒子加速器を使つて実用化に漕ぎ着けた。レーザー兵器と比べ安全性が高く攻撃力も同等に優れる。

しかし、弾頭たる荷電粒子自体は確保出来たものの発射薬である加速器に必要な電力が莫大な点。

そしてそれを補うためのエネルギー増幅装置がかなり高価格な為、

コストの低下を目指し研究を続けている。

地上用荷電粒子砲 ROT—B01

最初に実用化した兵器。要塞砲で地球防衛軍の基地のみに配備。

航空・地上両目標に対し十分な性能を発揮する。

電磁砲 ROT—R

理論自体は戦前からあったもののラヴェジャーとの戦争を経て漸く実用化にこぎ着

けた。

航空機のガンポッドや車載兵器や艦載兵器として運用。

総じて砲身の寿命が短いという欠点があり、二〜三回の戦闘で砲身の交換が行われる。

艦載電磁砲 ROT—R03

艦載レールガン。発電量と大きさの都合で重巡以上の大きさの艦しか装備できないが、従来の砲に比べ弾速、貫通力に優れる。

55式自走電磁砲 ROT—R05

イフシロン
E 型電磁砲、12.7mm機関銃×2、7.62mm同軸機関銃

強力な攻撃力を持つ車輛。砲塔旋回速度が遅く近距離では側面に装備した機関銃と随伴歩兵頼り。

駆逐戦車に相当する兵器。

電磁砲ポッド ROT—R06

航空機に搭載するレールガン。弾数が少ないが航空機が搭載する攻撃力としては核

兵器やバンカーバスターを除き一番高い。

弾丸加速器ROTA-R07

通称バレルアクセル。砲身に纏わせる形で装着する砲弾を加速させる装置。口径長からは考えられない速度を砲弾に与える。

砲身の寿命が短くなる。装置自体が重く車輛の操縦性能が悪化する等の欠点があるものの、艦艇や車輛等に使用される。

その他

特殊装甲ROTA-A01

ラヴェジヤーの装甲を解析して作った強化装甲。オリジナルと比べ8%の強度しかないが60年代の装甲と比べ強度はやや上回る程度だが重量は六割軽い。値段も高く一部の部隊に配備されている。

ROTA-A02

通電方式の電磁装甲。

主装甲の外部に2枚の金属板を間をあけて取り付け、これらに大容量の蓄電器コンデンサから数

千ボルトの電圧をかけておく。導電性のある徹甲弾が貫通した瞬間に回路が形成され、数千アンペアの大電流が発生。敵弾を融解気化する。

発動すると大電流によって電磁ノイズや余剰熱が発生し、敵にそれらを察知されたり、内装の電子機器の破壊や乗員への悪影響をもたらす。この為専用の安全装置を車輛に設置。電子機器と乗員の保護を行うが乗員の体質により安全装置を用いてもその乗員に悪影響が出る。

たまたま整備中や設置中、作戦行動中に漏電事故が発生し、乗員の殺傷や外装を破壊してしまう。

エネルギー増幅装置

鹵獲したラヴェジヤーの兵器に搭載されていた謎の装置。

ラヴェジヤーは未知のエネルギーをこの装置で増幅し、兵器を動かしていた。電気でも同様に作用する事が確認され、研究が開始された。

大戦前半から研究を行い、大戦末期には解析に成功。複製に取り組み始めた。

しかし、オリジナルには地球にはない材料が使用されており、代用品を用いて複製した増幅装置はオリジナルと比べて増幅可能時間が存在し、

これを過ぎると増幅率が大幅に低下するためクールタイムを設ける必要がある。

クールタイムを

無視して使用すると増幅が出来なくなる。

代用品も地球では高価な代物で民間に普及するのは不可能と言われている。

兵器では艦艇や車輛を始め、怪力光線砲や熱線砲、荷電粒子兵器や電磁砲に搭載された。更に転移前に性能が低下し使い捨てになったものの小型化と低価格化にも成功し、怪力光線銃や熱線銃に使われている。

獵全共和国航空戦力

共和国空軍

複数の諸島に派遣する必要があるのでと出来るだけ長く交戦地域へ

航空支援を行うべく航続距離はそこそ長い。

開発能力はあるもののRODの導入等で予算諸々が不足している事と、害獣駆除要請に出撃する為に未舗装の滑走路でも運用できるレシプロ機が未だに現役。

部隊

戦闘機

双発重戦闘機

爆撃機

偵察機

輸送機

その他

対空ミサイル

対地／対艦ミサイル

地球防衛空軍

部隊

第一航空師団

誇棟州を管轄する

第二航空師団

光野州を管轄する

第三航空師団

和峰州を管轄する

第四航空師団

壽州を管轄する

第五航空師団

殻重城州を管轄する

第六航空旅団

朱鷺舞州を管轄する

第七航空旅団

五十島州を管轄する。

航空教導団

光野州に指令部を置く教導部隊。

戦略輸送団

戦略輸送を一手に引き受ける輸送部隊。

戦闘機

ソッピースキャメル、ソッピースパップ、ブリストルF. 2

第一次世界大戦で導入した戦闘機。

転移前はスクラップ予定として保管されていたが、

転移後は予備兵器として保管。異世界の国々に供給する予定。

30式戦闘機 ブリストルブルドック

武装

7.7mm機関銃×2

速度

300km/h

予備兵器として保管されていたり、未だ民間で現役の機体があるが、こちらも異世界の国々に供給する予定。

38式戦闘機旋風

最高速度

517 km/h

武装

30 mm 機関砲×2

英国のハリケーン戦闘機を元に開発した国産機。1000馬力空冷式単葉でコクピットとエンジン、脚以外は骨組みに布張りで生産性は高い。後に様々な改良を施されたものの生産性は維持された。性能は今一つながら派生型含め戦争全般を空軍の数的主力として戦い抜いた。30 mm 機関砲を

装備した派生型がP-39と並び最初期にSSを撃墜した事で有名。

高い生産性と低いコストにより中小規模の国では主力として採用。世界中で戦った。現在では退役し、猟師会と民間警備会社が運用している。

41式戦闘機台風

最高速度

629 km/h

武装

地上支援型

40 mm×2

戦闘機型

30 mm×2

旋風を発展させた戦闘攻撃機。

旋風採用直前に開発に成功したエンジンを使うために旋風の設計を改良した。

エンジンを強力なものに換装したものの、そのエンジンは整備性に難がある。

高高度では出力に難ありだが、低高度での性能は良好で、

エンジン出力に由来する高い搭載量、装甲により戦闘攻撃機として採用。

現在では退役し、獵師会と民間警備会社が運用している。

44式戦闘機暴風

最高速度

714 km/h

武装

30mm×2

台風を更に洗練させた戦闘攻撃機。

モノコック構造。

列強による技術指導によりエンジンを改良。高高度性能や振動、整備性の問題点を克服した。

さらに開発中に宇宙人が本土に攻撃し工場にダメージを受けたために生産性を上げるための工夫が施されている。

この機体で猟全の戦闘機部隊は列強の戦闘機と共闘できるレベルになった。

40式戦闘機 零式戦闘機隼（史実キ43）

最高速度

515km/h

武装

12.7mm機関銃×2

戦前に日本から輸入し、ライセンス生産した戦闘機。整備性は良好。SSには非力だが、生物兵器を主に相手取った。

後期には戦闘攻撃機として活躍。他の機体と違い固定武装が12.7mm機関銃のみと低火力のため、戦後早期に退役し、現在は猟師会と民間警備会社が害獣駆除任務で主に運用。

43式戦闘機 三式戦闘機疾風（史実キ84）

最高速度

655km/h

武装

30mm機関砲×2

隼の後継機として日本から購入しこちらにもライセンス生産。大戦後半の主力の一つ。

世界中で戦い、その優れた性能から極東から来た決戦機と呼ばれた。

SSを撃墜できるので台風、暴風と共に様々な局面で活躍。戦闘爆撃機として暫く運用する予定。

44式戦闘機1型／2型 震電／震電改

最高速度

750km/h ↓ 870km/h

武装

30mm機関砲×4↓30mm機関砲×2

日本から輸入した戦闘機。

SSへの高々度邀撃のために導入した邀撃機。邀撃任務に特化した設計で、同年に採用された暴風と比較すると、速度と火力に優れるが離着陸能力と継戦能力と運動性能に問題がある。

一部を残してジェット機型の震電改に改造して運用。

ジェット機に改造してみるとプロペラが無くなったため離着陸能力の問題がなくなった。

また、機関砲の門数こそ半分になったが、火器管制装置を搭載した為に機関砲の命中率が向上した。

但し、プロペラ機の改造の為に高速度域での運動性能は後退翼を備えた機体と比べ良くない。

複座化して練習機として運用している。

55式戦闘機雷鳥

最高速度

1,992 km/h

武装

30 mm 機関砲

カナードデルタを採用した超音速戦闘攻撃機。フェアリーの実験機、デルタ2の設計をベースにイギリスの

フェアリー社と共同開発。国産の最新鋭機を欲した獵全と戦闘機の市場を広めたかったフェアリーの

思惑が一致し開発。国内に生産ラインが存在。但し、転移により輸入が必要な部品が国内の在庫しかないため、現在代替部品を模索中。

大型レーダーを搭載していないものの運動性能は優秀。軽量且つ搭載量が多く戦闘爆撃機として運用。

輸出には成功し、雷鳴と並び英国の輸出戦闘機の代表格となる。

57式戦闘機雷鳴 BACライトニング

最高速度

2,415 km/h

武装

30mm機関砲×2

ライセンスを獲得し、国内で生産。転移の時点で教導隊分までは納入できたものの、雷鳥と同じく転移により輸入部品の輸入が不可能になり、工場内の部品のストックが無くなると

生産ができなくなるため、代替部品を模索中。

航続距離が短い、雷鳥と同様高い運動性を誇り、レーダーも高性能な物を搭載している。

エンジン推力はF-15と同等。第三世代ジェット戦闘機に分類される。

双発重戦闘機

現在は攻撃機として運用するレシプロ機。

41式複座戦闘機 一式複座戦闘機屠龍（史実キ45改）

最高速度

547km/h

武装

20mm機関砲、12.7mm機関銃×2、7.7mm旋回機銃

1941年。戦前に流行った双発戦闘機の影響を受けて導入。当初はイギリスから

輸入するはずが

ラヴェンジャーの攻撃によりイギリスとの通商路が不安定になったため日本の屠龍を採用した。

専ら地上攻撃や威力偵察で使用。現在では退役し、獵師会と民間警備会社が運用している。

45式双発戦闘機 D0335

最高速度

763 km/h

武装

40mm機関砲、30mm機関砲×2

屠龍の後継機としてドイツから購入した戦闘爆撃機。双発機ながら優れたロール性を持つ。

屠龍の性能を整備性と生産性以外で上回る。戦中では生体兵器のみならず

SSの撃墜やトライポッドを撃退しており第二次世界大戦最強の戦闘爆撃機と呼ばれた。

爆撃機

38式爆撃機 ビツカースウエリントン

武装

7.7mm連装旋回機銃×2、7.7mm旋回機銃×2、爆弾搭載量2,000kg

最高速度

378 km/h

ビツカースからライセンスを得て生産。汎用性の高い爆撃機で爆撃のみならず偵察や哨戒、

輸送に訓練と多用途に使用され、戦争後半はそれらの任務が主任務となった。構造が複雑ながら

生産性と整備性も高く、生産ラインが閉じたのは1955年だった。

44式爆撃機 B-17

武装

12.7mm連装旋回機銃×4、12.7mm旋回機銃×4、爆弾搭載量5,806kg

最高速度

522 km/h

アメリカから供給された爆撃機。40年代半ばに運用する爆撃機がウエリントンだけなのを問題視した政府が余力のあったアメリカに要請。

供給時点で少し古いなどの声があったが、高高度性能や頑丈さ、速度を現場では高く評価している。

48式爆撃機 富嶽

武装

30mm旋回機銃×5、爆弾搭載量20,000Kg

最高速度

800 km/h

六発レシプロ戦略爆撃機。日本との共同開発。ベルリンまで無補給で飛べる。

大戦では日本と獵全が使用。大規模攻撃や5t爆弾トールボーイをはじめとした超大型爆弾による

爆撃で活躍した。

対艦任務にも使用可能で、魚雷やミサイルを搭載可能。

偵察機

34式偵察攻撃機

武装

7.7mm機関銃×2、7.7mm旋回機関銃、爆弾搭載量350Kg

最高速度

305km/h

国産の三座偵察機。観測や航空支援でも活用された汎用性の高い機体。機体下部にカメラを納めるスペースが存在し、取り外して貨物を収納するスペースにしたり、爆弾搭載量を増やすために

爆弾倉に改造されたりした。大戦では練習機、連絡機、攻撃機として活用されている。後継偵察機が計画されたものの、国産戦闘機計画や爆撃機の導入に予算を取られ、計画は中止。Bv141を導入するも現在まで現役を勤めている。

41式偵察機 Bv141

武装

7.7mm機関銃×2

最高速度

438 km/h ↓ 632 km/h ↓ 780 km/h

ドイツから輸入した左右非対称の偵察機。武装はないものの速力、視界は良好。34式の後継偵察機として運用。

戦争中にエンジンを取り替えられ、高速偵察爆撃機と化した。現在でも現役で任務に就いている。

輸送機

40式輸送機

最高速度

365 km/h

貨物・人員合わせて2,700 kgを搭載可能。

C-47とDC-3の獵全での制式採用名。

軍用型と民間型の違いはあるものの獵全空軍では一纏めにして呼んでいる。

信頼性の高い頑丈な輸送機で航空師団司令部直轄輸送部隊に配備されており

多用途輸送機として運用されている。

現在はビバリーの補完として戦域内輸送任務を行っている。獵師会も保有しており、

ガンシップ化等の独自の改造を行っている。

50式輸送機 ハンドレページ ヘイスティングス

最高速度

552 km/h

貨物9,213 kg

人員50人或いは空挺兵35人

担架に乗せた負傷者32人、着席した負傷者29人搭載可能

現行大型輸送機。配備された全機は戦略輸送団に配備されており大きな積載量を活かして、

戦域間輸送の一端を担う。

輸送任務以外に爆撃機パイロットの養成訓練にも使われる。

55式輸送機 ブラックバーン ビバリー

最高速度

383 km/h

貨物20,000 kg

人員80人或いは空挺兵70人搭載可能

中型戦術輸送機。師団司令部直轄の輸送部隊に配備されており

主に戦域内輸送を行っている。航続距離と積載量がヘイスティングスより

優れているため、定期便のみヘイスティングスと共に戦域間輸送も行っている。

非舗装滑走路に着陸が可能。

その他

39式練習機

最高速度

517 km/h

武装

30mm機関砲×2

旋風を複座化した練習機。戦闘任務へ転用出来るように武装はそのまま。

48式練習機

武装

30 m 機関砲

最高速度

870 km/h

震電改を複座化した練習機。こちらも戦闘任務へ転用可能。

対空ミサイル

ファイアストリーク

射程

6.4 km

獵全初の実用的対空ミサイルだが構造が複雑で予冷が必要不可欠。そして弾頭力バーにヒ素を使用しているため毒性が強く取り扱いに防護服が必要。また、雲の中ではロツクオンができない。

レツドトップ

射程

12 km

ファイアストロークの発展型で全体的な性能や取り扱い安さが向上しているが、雲の中ではロックオンができないまま。

A I M—4ファルコン／スーパーファルコン

射程

9・7 km／11・3 km

赤外線誘導のC／D／G型とセミアクティブレーダー誘導のA／E／F型を導入。

スーパーファルコンは従来の弾頭では破壊力が小さいとされ、弾体を大型化したものでE／F／G型がこれにあたる。現在の主力ミサイルだが使用にはロックオンシーカーを七〜八秒冷却する必要があり、予め冷却しようにも冷却剤の量が少ない為に予冷は不可能。それどころか一旦冷却すると再度の冷却は不可能になる。この為ロックオン範囲内に納めてからシーカーを冷却中に範囲外へ回避されると発射不可能になる。

この構造のせいで高機動の目標には当てづらいなどの理由で、評判は悪く転移直前からサイドワインダーへの置き換えを進めていた。

A I M—9 B サイドワインダー

射程

4. 8 km

赤外線対空ミサイルでファルコンの後継ミサイル。しかしファルコンより射程は短く、ジェット機であれば目標の後方しかシーカーが反応しない。そして太陽等の熱源に誤ってロックオンするなどの不具合がある。しかし、試験運用した部隊では不具合を考慮しても猟全の運用するミサイルより遥かに高性能で構造も分かりやすいと高く評価している。財務省からも従来のミサイルより価格、運用コストが安価な為に採用を推した結果採用が決定した。猟全の保有する対空ミサイルでは最も優れたミサイル。導入が始まったばかりで数が揃っていない。

対地／対艦ミサイル

A S M | N | 2 B A T ペリカンミサイル

猟全が最初に運用した誘導弾。誘導爆弾に分類される。

大戦では怪獣やトライポッドに使用され活躍した。

誘導方式は鳩。運用初期は陸軍から伝書鳩の飼育員に鳩の管理を教わった。

退役の声が挙がっているものの、電波妨害を物ともせず標的に向かうため未だに現役。

獵全国内ではペリカンミサイルの他、後述の桜花も鳩誘導方式を採用している。

現在、海外では誘導装置の高性能化により一部の新興国を除いて

鳩誘導方式は退役しているものの、電波妨害を気にせず標的に向かうことができるので、

度々再度の運用を要求する声が挙がっている。

ファイアフラッシュ

当初獵全初の対空ミサイルとして導入されたもののブースターが発射1.5秒後に切り離され、

標的には慣性飛行で向かう構造により、航続距離と速度が圧倒的に足りず、

最終的に対地ミサイルに改造された。

しかし、元が対空ミサイルなので威力はあまり高くない

桜花

陸海軍と同様の物で、史実と違い無人の誘導弾。弾頭に80cm列車砲の砲弾を使用している為、

破壊力自体は大きいがかなり重く、B-17並みの大型機のような爆弾倉を備えた機

体でなければ

運用は難しい。慣性誘導後に鳩誘導か、アクティブレーダー誘導で敵に向かう。

AGM-122ブルパップ

1958年に採用した小型対地ミサイル。鳩の世話をせず済む為に現場では歓迎された。

ファイアフラッシュと比べ高性能化しており単発機でも運用できる為に主力対地ミサイルとして運用予定。

地球防衛空軍

英米が主力を担う。通常任務を主に第88統合航空団と

NBC兵器を取り扱う特装航空打撃群猟全派遣隊の二部隊に分けられる。

爆撃機

特装航空打撃群獵全派遣隊

ヴァリアント

ヴァルカン

ヴィクターB/K

爆撃型と給油型が存在。

第88統合航空団

Tu-95

B-52

富嶽改乙

武装

155mm榴弾砲、105mm戦車砲、30mm機関砲×2、7.62mmガトリン

グ×4

最高速度

765km/h

大日本帝国が開発した富嶽の派生機体。富嶽を二機横に合体させ、

間に新たな胴体を増設した三胴大型機。乙型はガンシップとして運用。

機体構成は後述の甲、丙と変わらない。火器は三つの胴体の左側面に配置。

中央に155mm榴弾砲、105mm戦車砲。左右胴体に30mm機関砲各一挺と7.62mmガトリングを二挺ずつ装備。

富嶽改甲

最高速度

790 km/h

大日本帝国が開発した富嶽の派生機体の爆撃機タイプ。富嶽を二機横に合体させた三胴大型機。

巨体を活かし積載量50tを越え、各種ミサイルや爆弾を大量に積める。

その他

KC-97

B-29の輸送機仕様C-97を給油機にしたもの。

KC-135

最新の給油機。

T-6

攻撃から連絡、練習や観測等で幅広く使われる多用途機。

C-130

アメリカが開発した傑作戦術輸送機

アームストロング・ホイットワース アーゴシー

イギリスで開発された輸送機

富嶽改丙

最高速度

820 km/h

富嶽改の大型のレーダーを搭載しており、戦域管制機として運用される。

富嶽改丁

最高速度

830 km/h

富嶽改の輸送機仕様。地球防衛軍の戦略輸送機として運用される。

戦闘機及び攻撃機

アームストロングホイットワース プラスター（史実AW・169）
レーザーを標準装備した要撃機。

ホーカー ストーム（史実P・1103）

イギリスの主力戦闘機

ホーカー ハンター

イギリス初の後退翼戦闘攻撃機

グロースター ジャベリン

デ・ハビランド ベノム

F-86セイバー

F-100スーパーセイバー

F-104スターファイター

F-105サンダーチーフ

F-5A/Bフリーダム

A-1スカイレイダー

A-4スカイホーク

RF-101ヴードウー

T-33 シューティングスター

Mig-19

Mig-21 バラライカ

九式戦闘攻撃機 旭光

武装

30mm 機関砲

最高速度

1,080 km

大日本帝国が開発した戦闘機。

震電改で実用ジェット戦闘機を手に入れたがレシプロ機からの改造機なので、性能については満足行くものではなかった。

大日本帝国は最新の航空力学を取り入れ新たにジェット戦闘機の設計を行い、旭光が開発された。

後退翼を備え、高い運動性能を発揮する。

ミサイルの装備も可能。

一五式戦闘機栄光

武装

30 mm機関砲×2

最高速度

2050 km/h

大日本帝国が開発した外見がウルトラガードそっくりな並列複座戦闘攻撃機。運動性能は旭光よりやや劣るものの、搭載量はかなり増えている。

強力なレーダーを備え第三世代ジェット戦闘機に分類される。

ビートルA/B/C/D

武装

30 mm機関砲／なし／12.7 mm連装機関銃、40 mm機関砲／なし

最高速度

785 Km

多目的戦術垂直離着陸輸送機。

英仏の共同開発で完成した汎用輸送機。多様な派生型を持つ。

貨物を積んだ状態で垂直離着陸が可能で各型共通で主翼にロケットや爆弾などを装

備可能で、

ドアガンも装備できる。

オリジナルと違い推力偏向エンジンを搭載しており、これにより垂直離着陸を可能と
している。

A—通常

B—爆弾槽増設

C—ガンシツプ

D 早期警戒機

プサルタリー

武装

短照射連続熱線砲

最高速度

マツハ2

小型ビートルそつくりの機体。ロケットエンジンとジェットエンジンの複合動力機。
リフティングボディ機で高高度の超音速巡航が可能で航続距離も長い。

熱圏での偵察や哨戒が主な任務。衛生軌道からの爆撃も行う。

禁。
大気圏内でも戦えなくはないが、低速域での運動性が低いいためドックファイトは厳

ウルトラホークA/B型

武装

57mm機関砲、30mm機関砲×2/レーザー、30mm機関砲×2

最高速度

マツハ2

大きな搭載量を持つ大型の戦闘爆撃機。

原型はアメリカのホーク大型戦闘爆撃機を音速にしたスーパーホーク。

大幅にアップグレードされており格闘性能こそ低いものの速度や火力については大幅に上昇。

多彩な装備を搭載可能で対空対地対艦、さらに装備を付け足せば空中給油等も行える万能機。

また、機体を三区画に分ける事で整備性向上と装備の更新等を容易にする試みがなされている。

分離合体などを行えない。

A―通常型

B―レーザー搭載型

アローヘッド

武装

30mm四砲身ガトリング砲×2

MATアロー1号そっくりの並列復座型戦術戦闘機。高性能レーダーを搭載しミサイルだけでなくレーザーポッドやレルガンポッドも運用する。

また機動性能も高く模擬格闘戦では優秀な戦績を納めている。

高速で飛び回るSSを確実に落とすために30mmガトリング砲を二門を搭載。30mmガトリング砲の反動に耐えるため機体は頑丈に作られている。

アローヴェイン

武装

57mm機関砲×2

最高速度

870km/h

MATアロー2号そっくりの攻撃機。頑丈な構造で生存性が高いタフな攻撃機。爆弾やロケット、ミサイル、ガンポッドも搭載可能で近接航空支援が主な任務。

獵全共和国陸上戦力

共和国陸軍

人員は三十万人で三軍の中で最も大きな組織。但し予算の割合は一番低い。

獵全に生息する恐竜の一部の種の家畜化に成功しており積極的に活用している。

空軍と同じくROTの導入と新兵器の開発に予算を取られ、未だに戦前の兵器が未だに現役。

また、完全な自動車化や機械化も達成されておらず騎兵隊も未だに現役。

更に弾薬更新にも手間取っている。

部隊

戦車

駆逐戦車

自走砲

装軌装甲車

装輪装甲車

非装甲車

対空砲

火砲

航空機

ヘリコプター

歩兵携行火器

地球防衛陸軍

○●部隊○●

第一機械化歩兵師団

誇棟を管轄する都市型師団。

首都防衛師団としての性格が強く装輪車両が多い。

第二自動車化歩兵師団

和峰を管轄する。密林や山岳部での活動に長ける。

第三空中機動化歩兵師団

壽を管轄とする。空中機動師団化の為にヘリコプターを配備中。

第四機甲師団

光野を管轄とする機甲化師団。光野が平野部であるために戦車や自走砲といった機甲化戦力が豊富に揃つてゐる。

第五水陸両用旅団

朱鷺舞を管轄とする。上陸用の舟艇を多数保有。水陸両用車両の陳腐化が課題となつてゐる。

第六水陸両用旅団

五十島を管轄とする。五十島には宇宙基地があるため、その重要性から第五師団より歩兵装備は優れているが水陸両用車両は同様にお寒い限り。

第七空挺旅団

穀重城に拠点を置く空挺旅団。山岳歩兵としての任務も受け持つ。

第八機械化歩兵師団

憩月を管轄とする。装甲輸送車を最も多く保有。

陸軍教導旅団

光野に所在。様々な兵器を配備されており、獵全共和国の各部隊に教導を行っている。

制式名称は西暦下二桁＋兵器の種類のみ。公式の愛称は存在しない。

例：〇〇式＋戦車

戦車

F T | 17、M k. C、M k. A ホイペット

第一次世界大戦で導入した戦車。

転移前は廃棄予定として保管されていたが、

転移後は予備兵器として保管。異世界の国々に供給する予定。

30式戦車 ヴイツカース6t軽戦車

武装

7.7mm対空機関銃

QF 2ポンドポンポン砲（対戦車仕様のみ）

57mm山砲（火力支援仕様のみ）

最高速度

30km/h

ヴィツカース6t軽戦車の獵全仕様。

主砲に関しては対戦車仕様がポンポン砲を。火力支援仕様が57mm山砲を搭載した。足回りも度々改造されている。後に獵全国内では実験的に様々な派生型が製造されたが、これ等は制式採用はされていない。

予備兵器として保管されていたり、未だ一部の部隊で現役の車輛があるが、こちらも異世界の国々に供給する予定。

35式軽戦車

武装

48口径40mm戦車砲、7.7mm対空機関銃

最高速度

42km/h

猟全の国産戦車。史実の九五式軽戦車に類似。

対戦車任務と強行偵察を任務とする。

軽いため山岳部などのインフラ未整備の場所には貴重な戦車として重宝された。一部は放水銃を搭載した警察車両に改造され、暴徒鎮圧に投入されている。現在も山岳部隊で運用中。

36式中戦車

武装

19口径57mm砲（歩兵支援仕様）

48口径40mm砲（対戦車仕様）

7.7mm同軸機関銃、7.7mm機関銃

最高速度

37km/h

パット見史実試製チニだが、砲塔が大型化し二人乗りとなっている。乗員は四名と

なっている。

30式戦車の後継として活躍する国産戦車。火力支援型と対戦車型の二種類が開発された。開発当時の国内インフラを鑑みて開発されたが、それが裏目に出てラヴェエジャーとの戦争で苦戦した。各国の戦車と比べると見劣りするが足回りはかなり頑丈。

40式重戦車 KV—1

武装

41.6口径76.2mm砲、7.7mm機関銃×3

最高速度

35km/h

ロシア帝国から輸入。

各国が多砲塔戦車を初めとした重戦車を実用するなかで、自国でも重戦車を保有するべきとの声に押され、多砲塔戦車では無く単砲塔戦車に妥協してロシアから輸入。重く運用にはかなり苦勞したもののラヴェエジャーとの戦争序盤を支えた。

43式中戦車 T—34

武装

4 1. 6 口径 7 6. 2 m m 砲或は 5 4. 6 口径 8 5 m m 砲、

1 2. 7 m m 機関銃、7. 7 m m 同軸機関銃

最高速度

5 5 k m / h

ロシア帝国が各国に対して輸出していた戦車であり人類の主力戦車の一つ。ラヴェ
 ジヤーの脅威に既存の国産戦車では戦力不足と判断した陸軍上層部と政府はロシア帝
 国に対し、T-34を導入したい旨を伝えた結果、最終的ロシア帝国よりライセンス生
 産の許可をもらう。

8 5 m m 型は火力支援として運用。

4 4 式重戦車 KV-2

武装

2 0 口径 1 5 2 m m 砲、7. 7 m m 機関銃×3

最高速度

2 6 k m / h

ラヴェジヤーに対抗するため更なる火力と防御力の向上を目指した結果ライセンス
 生産した。

152mmの巨砲と重装甲により拠点防衛や火力支援に威力を發揮した。KV-1を超える稼働率の低さにより拠点からあまり離さず運用した。

試製主力戦車

武装

52口径90mm砲、12.7mm機関銃、7.62mm同軸機関銃

最高速度

45km/h

史実の61式戦車と類似。

国産主力戦車で90mm砲を搭載。主力戦車の区分で生産。36式中戦車全部、KV-1とT-34の一部を更新する予定。

既に試験的に教導隊とMATに配備されている。

改良砲塔が存在し、これに換装することで105mm砲を搭載できる。

試製主力戦車2型

武装

47口径105mm砲、12.7mm機関銃、7.62mm同軸機関銃

最高速度

39 km/h

試製主力戦車の105mm砲搭載型。見た目はVSGジラシリーズの61式改戦車。周辺国で保有され始めた第二代主力戦車に対応するために、火力と砲塔のみを改良した。

砲塔は旋回出来るものの旋回速度が遅い為、機動戦は難しく、駆逐戦車的な運用がされる。

駆逐戦車

38式駆逐戦車

武装

50口径76.2mm砲、7.7mm同軸機関銃

最高速度

33 km/h

36式中戦車の車体をベースに16式高射砲を固定砲塔で搭載し製造された。加速力が高く、容易に陣地転換出来た。

44式駆逐戦車

武装

45口径127mm砲、7.7mm同軸機関銃、7.7mm機関銃

最高速度

28km/h

KVの車体を流用。駆逐艦の127mm主砲を固定砲塔で装備した駆逐戦車。機動性能は低いものの火力と防御力は抜群に高い。

自走砲

45式自走砲

武装

31口径105mm榴弾砲、7.7mm機関銃

最高速度

30km/h、水上3km/h

105mm榴弾砲搭載。36式中戦車の設計を流用、軽量化したオープントップの自

走砲。フロートを装着することで水上航行が可能。

47式自走砲

武装

27口径152mm榴弾砲、7.7mm対空機関銃

最高速度

37km/h

152mm榴弾砲搭載。T-34を流用した自走砲。左右45°まで旋回できる限定旋回砲塔。

49式203mm装甲自走砲

武装

23口径203mm榴弾砲、12.7mm重機関銃

最高速度

39km/h

火力支援車両としてのKV-2の後継。KVの車体を流用し固定戦闘室を備える砲兵部隊と機甲化部隊に配備された。

通常の自走砲としてはもちろん、駆逐戦車のような戦法もできる。

57式365mm自走砲

武装

20口径365mm砲、30mm機関砲×2、12.7mm連装重機関銃×4

最高速度

10km/h

戦艦の主砲を流用して製造した固定砲塔式の対怪獣用超大型自走砲。

接近戦に対応するために機関砲や機関銃を複数搭載。弾丸加速器を装備することで

口径からは

考えられない弾速で砲弾を目標に叩き込む。

トライポッドにも有効。

45式多連装ロケット砲 BM-8/BM-13カチューシャ

武装

36連装82mmロケット砲/16連装132mmロケット砲

ロシア帝国製の多連装ロケット。数撃ちや当たるを体現したロケット砲。獵全でも

ラヴェンジャーに対し戦果を挙げている。

トラックや戦車など様々な車両に搭載されて運用された。

55式自走200mm多連装ロケット砲

武装

24連装ロケット砲

最高速度

80km/h

国産車輛。200mmロケット弾を24連装で専用の装甲トラック搭載。

派生型として12連装にしたロケット砲が海軍で艦載兵器として運用されている。

愛称はポンポン砲

49式自走800mmロケット砲

武装

地对艦用桜花或いは地对地用桜花

桜花ミサイル発射機。オネスト・ジョンのようにトラックの荷台に単発でミサイルが

乗っている発射機、装填クレーン車、弾薬運搬車、搜索レーダー車、射撃管制車で構成。

飛行中は慣性誘導を。終末誘導には鳩誘導とアクティブレーダー誘導の複合型で誘導される。近年は鳩誘導装置を省いたタイプを生産、配備している。

尚、この世界の桜花は弾頭に80cm列車砲の砲弾を流用している。

52式自走無反動砲

武装

B—10 82mm無反動砲

速度

80km/h

ホンダのスーパーカブに射撃後に速やかに離脱出来るように

B—10無反動砲を後ろ向けに搭載した怪物。

戦闘時は無反動砲が座席からせり上げて、照準を合わせて攻撃する。なお、発射した際に発生するガスがハンドルを損傷するので真後ろへの発射は不可能で斜め後ろか横にしか発射出来ない。

装軌装甲車

30式豆戦車 カードン・ロイド豆戦車

武装

20 mm 機関砲或いは 7・7 mm 連装機関銃

最高速度

42 km/h

カーデンドロイドを猟全仕様にした戦車。

主に足回りを強化。操縦席は装甲で覆われているが後方がむき出し。砲の牽引や歩兵の直援に使用。

35 式汎用装甲車

武装

57 mm 山砲或いは 20 mm 機関砲、7・7 mm 機関銃

最高速度

36 km/h

豆戦車。砲兵の牽引車と歩兵の直援を目的として 30 式豆戦車の後継として開発。操縦席が全周囲を装甲で覆われた。7・7 mm 機関銃は外付けで装備

40 式水陸両用装甲車

武装

57mm山砲或いは20mm機関砲、7.7mm機関銃

最高速度

37km/h

4km/h（水上）

35式汎用装甲車の派生型。車体の一部材質を軽量化し、フロートを内蔵することで水上航行能力を付与された。

57式装甲輸送車

武装

連装12.7mm重機関銃

最高速度

33km/h

無限軌道の装甲輸送車。地球で言うところの歩兵戦闘車に近いコンセプトで開発された。

重装甲で正面ならば30mm機関砲程度なら余裕で弾く。砲塔式で重機関銃を連装で装備している。

乗員二名と兵士十名をのせられる。

装輪装甲車

17式装甲車

武装

7・7mm機関銃

最高速度

72km/h

英国から輸入したロールスロイス装甲車。現在でも民間で運用されている。異世界の国々へ供給予定。

42式装甲指揮車 AECドーチエスター装甲指揮車

武装

7・7mm機関銃

最高速度

60km/h

マタドール汎用8tトラックをベースに開発された移動指揮車輛。

居住性が高く、通信設備も優れており、軍だけでなく警察や猟師会や警備会社でも運用している。

40式装甲偵察車 ダイムラー偵察車

最高速度

82km/h

ダイムラー偵察車の獵全仕様。観測任務や哨戒で使用。

固有の武装は無いが、銃座が備えられておりそこに機関銃等を装着できる。

42式装甲車 ダイムラー装甲車

武装

40口径40mm戦車砲、7.7mm同軸機関銃、7.7mm対空機関銃

最高速度

70km/h

原型と違い国産兵装を装備。強行偵察や歩兵部隊の支援を主な任務とする。

42式半装軌輸送車 M5ハーフトラック

武装

12・7mm重機関銃、7・7mm機関銃

最高速度

72km/h

米国から供給された兵器。対空砲や榴弾砲を乗せて自走砲にも転用された。

58式装甲偵察車

武装

23口径76・2mm砲、7・62mm機関銃

最高速度

73km/h

英国のサラデン偵察車両の獮全仕様。

42式装甲車の後継車両。42式装甲車同様強行偵察と歩兵部隊の支援が任務。

60式装甲輸送車

最高速度

68km/h

国産装輪輸送車。乗員二名と兵員十名を輸送できる。固有の兵装は無いが、銃座に機関銃等を装備。

コベントリー装甲車 Mk. I

武装

40口径40mm戦車砲、7.7mm同軸機関銃

最高速度

68km/h

警察で採用している車輛。ダイムラー装甲車の後継としてサラデイン偵察車と競つた結果、

コベントリー装甲車は不採用となった。しかし、警察が目をつけて採用。科学特捜隊を始めとした警察系特殊部隊が運用している。

非装甲車

トラック

各種1. 5t、2t、3. 5t、6tトラック。現時点では戦前に導入した日英の車輛のライセンス生産品及び

輸入したものと、戦中にアメリカから供給されたものが主力。徐々に国産車が増えており将来的には国産車により更新される予定。

ジープ

米国製の小型四輪駆動車。戦争中に供給された。

ランドクルーザー（史実トヨタジープBJ）

ジープの後継として日本から採用。現在は猶全で生産中。

オートバイ

歴代の運用したオートバイはエクセルシオール、バーミンガム・スモール・アームズ、ローバー、ノートン・モーターサイクル、目黒製作所、三共、ホンダの物を運用。

戦前の計画が順調に進めば騎兵を60年代には完全に代替となるはずが、大戦勃発で発生した予算不足により騎馬や恐竜と併用して運用している。

対空砲

トラックに乗せられ簡易的な自走対空砲としても運用される。

10式40mm機関砲QF 2ポンドポン砲。

当初は歩兵砲の一種として運用された機関砲。

第一次世界大戦からは対空用途にも使用された。

38式40mm機関砲 ボフォース 40mm機関砲

スウェーデンから購入したボフォース製機関砲。

26式20mm野戦機関砲

近接防空火器として運用。ドイツのベツカー20mm機関砲がベースの国産。単装砲架と連装砲架が存在。

41式対空機関銃 M45機関銃架

12・7mm機関銃を四連装にしたもの。生体兵器との戦いで活躍した。

42式30mm野戦機関砲

ラヴェジヤーの航空戦力対策に導入された次期近接防空火器。単装砲架と連装砲架

が存在。

16式76.2mm高射砲 QF 3インチ 20cwt高射砲
第一次世界大戦から装備している野戦高射砲。ラヴェジャーとの戦争でも運用された。

航空目標だけでなく地上の敵にも使用された。

33式76.2mm高射砲

16式高射砲の後継。国産砲。16式と共に主力野戦高射砲として戦場の防空を担った。

16式と同様に地上目標にも使用された。

40式95mm高射砲 QF 3.7インチ高射砲

重量が重く再配置に時間が掛かり、機動運用には適していたとは言い難く拠点防空用の高射砲として活躍した。

16式と33式と同じく地上目標にも使用されたが、前述の理由から防衛兵器として使用された。

火砲

28式40mm対戦車砲

ポンポン砲を対戦車任務に適用させたものだが、対戦車能力は低い。

35式40mm対戦車砲

24式40mm対戦車砲の後継。口径は変わっていないものの砲身が延長され、使用される火薬や砲の強度を見直し、性能を向上させた

44式76.2mm対戦車砲

33式高射砲を対戦車砲として改造した砲。大がかりだが、その分威力は高い。

49式82mm無反動砲 B-10無反動砲

ロシア帝国製造の無反動砲。獵全国内でも生産され大戦末期で活躍した。

88式57mm歩兵砲

初の国産火砲。採用直後に分類を山砲に変更され山岳部で運用。戦車砲としても採

用された。

96式75mm山砲

57mm歩兵砲の後継としても運用。88式共々山岳部での貴重な火力として重宝された。

30式105mm榴弾砲

榴弾砲としては軽く山砲としても運用可能。

96式75mm山砲を更新した。

38式152mm榴弾砲

主力榴弾砲として生産。

39式152mm加濃砲

主力カノン砲として生産。

41式203mm榴弾砲

重砲として採用。

27式81mm迫撃砲

国産の中迫撃砲

33式120mm迫撃砲

国産の重迫撃砲

38式330mm迫撃砲 九八式臼砲

日本が開発した砲身部分が弾丸として飛翔するユニークな火砲。日本では臼砲とされ、

構造が迫撃砲に近いことから獵全では迫撃砲に分類される。

歩兵だけで運用可能で隠密性が極めて高く、威力も大きいことから戦争では活躍した。

航空機

不整地での運用能力と防御力に優れる。

戦術規模の支援が得意。観測機としても運用される。

35式艦上爆撃機

武装

7・7 mm機関銃×2、7・7 mm旋回機関銃、爆弾搭載量300 kg
 最高速度

305 km/h

陸軍で初めて導入した複葉急降下爆撃機。

40式急降下爆撃機

武装

7・7 mm機関銃×2、7・7 mm旋回機関銃、爆弾搭載量500 kg

最高速度

367 km/h

優秀な急降下爆撃機だったが陸軍機の中で損耗が最も激しかった。トライポッドには有効な打撃を与えられなかったが、生体兵器相手の航空支援には活躍した。

41式襲撃機

武装

12・7 mm機関銃×4、7・7 mm旋回機関銃、爆弾搭載量200 kg

最高速度

372 km/h

40式と比較して爆弾搭載量には劣るものの機関砲の火力と防御が優越する。

トライポッドには無力だったが、40式急降下爆撃機と同じく、生体兵器に戦果を挙げている

46式襲撃機

武装

30mm機関砲×2、爆弾搭載量600kg

最高速度

506 km/h

40式急降下爆撃機と41式襲撃機の後継。急降下爆撃や大口径機関砲による掃射が得意。

53式襲撃機

武装

30mm機関砲×2、爆弾搭載量1000kg

最高速度

675 km/h

46式のターボフロップ化。エンジンの高出力化に伴い装甲が増設された。

ヘリコプター

57式回転翼機 Mi-6

最高速度

250 km/h

貨物を12t搭載可能な大型ヘリコプター。

54式回転翼機 Mi-4

最高速度

185 km/h

1.6tの積載量を持つ汎用ヘリコプター。輸送任務だけでなく観測や航空支援にも使われる。

57式回転翼機 Ka-25

最高速度

220 km/h

海軍の哨戒ヘリコプターを改造した観測ヘリ。仕様を変えて警察でも採用された。

歩兵携行火器

歩兵銃

05式歩兵銃

リーエンフィールドSMLE Mk III及びSMLE Mk IV。

1905年採用。独自に改良や派生型を生み続けながら運用されている。

現在では主に狙撃銃として運用されており、300サヴェージ改良弾（史実NATO弾）に対応させた派生型も運用中。

民間でも広く普及している。

28式歩兵銃

三八式実包を使用する初の国産小銃。

三十年式歩兵銃とその派生型の使いやすさに三八式実包を使う銃を希望する声が挙がり、

騎兵や車輛の搭乗員向けに開発となった。

直動式ボルトアクションを採用。クリップを廃止し、弾倉で装填する野心的小銃。

しかし当時の猟全の工業では実用に耐えうる弾倉が作れず、

クリップ装填方式に戻すはめになった。直動式ボルトアクションも不具合が続出した。

これらの不具合は生産後期に漸く実用に耐えうる弾倉と直動式ボルトアクション機構が

製造された事で解消された。

不具合の解消後は取り回しがリーエンフィールドより向上している事から騎兵銃や車輛の搭乗員のみならず前線の歩兵部隊でも運用された。また、弾丸の威力の弱さに目を着けた警察も犯人を

殺さず無力化しやすいということで運用した。

31式歩兵銃 四四式騎銃

元々は警察が採用したカービン銃だったが、28式歩兵銃が欠陥だらけだった為に急遽採用された。騎兵や搭乗員のみならず前線の歩兵部隊でも運用された。現在は予備武器となっている。

46式自動歩兵銃 SKSカービン。

7・62×54mmR弾を短縮したM43（史実7・62mmロシアン）を使用。歩兵分隊の選抜射手がマークスマンライフルとして運用。

下記の48式強襲歩兵銃と同様の弾薬を使うことで兵站の負担を減らしているが、前線では弾倉の融通ができないため、

AK—47の弾倉を共用できるようにする要望が上がっている。

48式強襲歩兵銃 AK—47

ロシア以外にも日本を始め様々な国が自国仕様に変更して採用した傑作アサルトライフル。

獵全のものは20発入りの弾倉を使い、二脚とフラッシュサプレッサーを標準装備している。

軽機関銃

17式軽機関銃 フェドロフM1916

軽機関銃と銘打ちながら突撃銃や騎兵銃のような運用もされ、後継の37式軽機関銃

が配備されても長く活躍した。

18式軽機関銃 ルイス Mk I

・ 303ブリテイツシュ弾に対応した軽機関銃。第二次世界大戦でも後方や搭載兵器として運用した。現在でも運用中。

37式軽機関銃 九六式軽機関銃

17式軽機関銃の後継として運用。命中率が高く前線では評価が高い。ラヴェエジャーの猟全本土侵攻により更新が滞り、全てを更新する事は出来なかった。

38式軽機関銃 ブレンガン

ルイス Mk Iの後継。第二次世界大戦勃発時点で歩兵隊分の更新はほぼ完了したが、

それ以外の兵科では一部の部隊しか配備されなかった。

ラヴェエジャーの猟全本土侵攻により更新が滞り、ルイス Mk Iを全て更新することは出来なかった。

対空用のドラム型弾倉が存在し、生体兵器に威力を發揮した

55式機関銃 RPK軽機関銃

上記の軽機関銃を更新する予定。48式強襲歩兵銃と同様の弾倉を使うことができない。

一部の部隊にはすでに行き渡っており好評価を受けている。

重機関銃

15式重機関銃 ヴイツカース重機関銃

第一次世界大戦から運用。現在でも運用は続けられている。

42式重機関銃 ブローニングM2重機関銃

15式重機関銃の後継。対空、対地様々な場面で使われた。

短機関銃

20式短機関銃 MP18

マウザー弾を使用。予備役や民間等幅広く普及している。

42式短機関銃 PPS41

主力短機関銃。警察組織や公共施設の警備隊でも運用されている。陳腐化してきたために後継の短機関銃を模索している。

散弾銃

97式散弾銃

猟全の製作した単発散弾銃。薬室が振出式で飛び出し、そこに弾丸を装填する。

拳銃のように小さかったが、拡張性が高くストックやグリップ等が追加されるだけでなく、銃身が追加され、二連装散弾銃となる個体も存在する。弾数以外は他の散弾銃と比べ見劣りしない性能となっている。

メトロ2034とメトロエクソダスのAショットに類似。

22式散弾銃

前線から五発以上装填できる散弾銃を要望され、開発した国産のリボルバー式自動散弾銃。

拡張性の高い戦闘用散弾銃として開発。猟全に生息する生物との戦闘も視野に入れており、

接近戦で破壊されないようにあえて頑丈に作った結果、他の散弾銃と比べて重い。

メトロ2033のシャンプラーに類似

35式散弾銃 イサカM37

前線から軽い弾数が少ない97式散弾銃と弾数が多いが重い22式散弾銃のギャップを埋める散弾銃を要望する声が拳がり採用。

フェザーライトと呼ばれるほど軽いが、強度も確保しており軍だけでなく警察や民間でも活躍している。

拳銃

96式回転拳銃 ウェブリーリボルバー

獵全国内で普及しているリボルバー。様々な改良型が存在しマグナムや+P弾にホットロード等の実包だけでなくストックやグリップ等の拡張パーツも存在する。

00式自動拳銃 モーゼルC96

主力拳銃。バースト機能追加やストックを付与。そしてトカレフ弾への弾薬の強化とそれに伴う機構の強靱化等の様々な改良を施されながら現役で貫通力に優れている。

民間では強力な弾薬が使用できないように機構の強靱化前の個体が普及している。

03式回転拳銃

ウエブリーホスベリーオートマチックリボルバー

その特異な機構から汚れやすい前線では故障が多発。

性能自体は良好な為に主に警察や憲兵隊を始めとした司法関係機関が運用。

民間にも普及しており改造パーツも出回っている。

44式自動拳銃 ブローニングハイパワーR44

次期主力拳銃。猟全独自で改良した派生型でC96と同じ7.62mmトカレフ弾を使用する。

猟全国内では9mmパラベラム弾を使用する個体が出回ってる。

R44とは1944年に^{Ryozen}猟全で採用された事が由来。

対装甲兵器

40式対戦車狙撃銃

口径12.7mmの対物ライフル。

ポルトアクション方式で動作。

44式対戦車狙撃砲

口径20mmの振出式二連装対戦車ライフル。

33式擲弾砲

八九式擲弾筒

グレネードランチャーとしても軽迫撃砲としても運用した名作。

43式対戦車擲弾 P I A T

英国が開発したバネと火薬で発射する対戦車兵器。

獵全での評価は装填しにくい点以外は個人で携行可能で攻撃力は高い割りに見つかりにくく

発射時の音やガスが極めて小さいことからそこそこの評価を受けている。

44式対戦車墳進擲弾 パンツァーフアウスト

ドイツから輸入した対戦車墳進擲弾。簡単な構造で使い捨て。

60式対戦車墳進擲弾 R P G ー7

44式対戦車墳進擲弾の後継。生産設備は整っている為、現在転移による新たな脅威の発生に備え急ピッチで生産している。

地球防衛陸軍

イギリスとロシアが中核を担っている。米国から供与された兵器も多く保有している。

但し、構成される兵器の大半は第二次世界大戦〜50年代頃のものであり
史実で60年代に開発・採用された兵器は少数である。

駐留部隊

第11師団、第7空中旅団、第12支援飛行隊

運用兵器

センチュリオン

コンカラー

チーフテン

T-54

T-55

T-34-85 中戦車

JS-2 重戦車

M24 軽戦車

M 4 1 輕戦車

M 4 A 3 E 8 中戦車

IV号戦車

M 7 1 0 5 m m 自走榴弾砲

M 4 0 1 5 5 m m 自走加農砲

M 5 2 1 0 5 m m 自走榴弾砲

M 4 4 1 5 5 m m 自走榴弾砲

M 1 5 対空自走砲

M 1 6 対空自走砲

M 1 9 対空自走砲

M 4 2 ダスター 自走高射機関砲

Z S U 5 7 2 対空自走砲

Z S U 3 0 4 自走式高射機関砲

史実のシルカ自走式高射機関砲に相当。

B T R 4 0

B T R 1 5 2

B T R 6 0

M3ハーフトラック

サラデイン装甲車

ジープ

ROTM05メーザー戦車

ROTL03牽引熱線砲

ROTR05イプシロン自走電磁砲

猶全共和国が配備している55式自走電磁砲と同じタイプ。

ヘリコプター

小型ヘリコプター

S51

H13

Ka15

Ka18

汎用ヘリコプター

UH1

S | 55

S | 58

M | 4

M | 8

大型ヘリコプター

CH | 47

CH | 46

CH | 54

M | 6

保有小火器

小銃

スプリングフィールド M1903

スプリングフィールド M1ガーランド

ウィンチエスター M1カービン

スプリングフィールド M14

アーマライト AR10

モシン・ナガン M1891/30

SKSカービン

AK-47

リーエンフィールド

L55 (史実EM-2)

イギリスが開発したブルパップアサルトライフル。

FN FAL

H&K G3

短機関銃

オートオードナンス トンプソン

M3 グリースガン

Czスコープオン

ステンガン

軽機関銃

F N M A G

R P K

M 6 0

ブレンガン

対装甲火器

M 7 2 L A W

M 2 0 スーパーバズーカ

R P G ー 7

8・4 c m G r a n a t g e v ・ r m / 4 6 (史実では m / 4 8)

スウェーデン製の無反動砲。史実の自衛隊が運用しているM2カールグスタフの改良前の兵器。

その他多数の小火器を保有する。

獵全共和国海上戦力

目次

兵装

甲種空母

乙種空母

戦艦

重巡洋艦

軽巡洋艦

駆逐艦

潜水艦

補給艦

工作艦

輸送艦・揚陸艦

警備艇

艦載機

陸上機

駐留地球防衛軍

共和国海軍

人員十五万

前大戦により甚大な被害を被るも駆逐艦を中心に建造中。

獵全共和国軍の中で予算を最も豊富に与えられ、陸空軍と比べ、兵器の更新は比較的小スムーズに進んでいる。

しかし、不足している部分もあるのでやはり戦前の兵器が運用されている。

12. 7 m m機関銃と7. 7 m m機関銃については全艦艇共通で装備しているので省略。

兵装

40口径51cm三連装砲

軽量化の為に諸外国の同規模の砲と比べ口径長が短い。

45口径46cm連装砲

41cm砲の経験を基に開発した国産砲。

45口径41cm連装砲

初の純国産大口径砲。

45口径36・5cm連装砲

ビッカース製の主砲を国産化したもの。

尚、上記の戦艦砲は全て弾丸加速器を装備している為に口径長以上の弾速を叩き出す。

50口径20・3cm連装砲

日本から輸入した砲を国産化したもの

50口径15・2cm連装砲

ビッカース製の主砲を国産化したもの。

45口径12・7cm砲

戦前に採用した両用砲。開発は第一次世界大戦後に拠点防空用対空砲として始まったが、

軍縮のあおりを受けて中断。その後海軍が用途を艦載両用砲に変更して開発を続行。実用化にこぎ着けた。

52口径76・2cm砲

33式76・2mm高射砲を艦載兵器として改修し採用した。

80cm魚雷発射管

水上艦用の大型魚雷発射管。

日本より国力が小さい獵全が列強の大型艦に対抗するために考え抜いた末に、たどり着いた兵器。

日本の魚雷を越える大きさにより威力は高い。

駆逐艦は二連装か三連装。軽巡洋艦には四連装か五連装が装備される。

大きさと重量ゆえに装備する弾数が少ない。

Mk32短魚雷発射管

口径32・4cmの魚雷発射管。獵全ではMk.44短魚雷を発射する。近接対潜水兵器として優れた性能を持ち、史実の海上自衛隊も現在運用している。

桜花

日本が開発した世界初の対艦ミサイル。

弾頭に80cm列車砲の砲弾を使用している為、大威力だが重くかさばるため多くは積めない。

航空機には爆弾槽を備えた大型陸上機にしか搭載できない。飛行中は慣性誘導で目標に向かい、

終末誘導には鳩誘導と電波誘導の複合型か、電波誘導のみを使う。

猟全の水雷戦隊所属の艦艇は前述の80cm魚雷を搭載する事を前提に大きめに設計されていたために桜花を駆逐艦に搭載することができた。

P-15テルミット

ロシア製の対艦ミサイル。桜花と正反対の特徴で元々は小型艦艇から発射することを

目的に開発されたが、猟全では桜花と違い多めに積めることと安価なことから、桜花と同じく採用。戦闘機や攻撃機等にも搭載可能。

20cm12連装ロケット砲

陸軍が開発したロケット砲を改修した艦載兵器。

弾種を変えることで対空、対艦、対地、対潜と多用途に使える。

40mm機関砲

ボフォース社が開発した機関砲。陸軍と共通

30mm機関砲

陸軍のものと同種の機関砲

20mm機関砲

陸軍のものと同種の機関砲

40mm回転式機関砲

駆逐艦の砲塔ほどの大きさのガトリング砲。

連射速度や砲弾の威力も相まって、ラヴェジヤーの航空戦力の大半を撃破できる

30mm回転式機関砲

四砲身のガトリング砲。アローヘッドの機関砲と同種の機関砲。

追尾レーダーは搭載しているが有人操作で運用する。史実のゴールキーパーより軽

い。

20mm回転式機関砲

史実のファランクスと類似。但しレーダーの類いは搭載しておらず、

照準は光学式の有人操作でジェット機には能力不足。

現在は追尾・補足レーダーを搭載する新型の開発が進められている。

54式短照射連続式熱線砲

艦載対空光学兵器。従来の艦載対空砲を遙かに上回る攻撃力を持つ。水平線下には攻撃できない。

ターター対空ミサイルシステム

優れた性能と繊細さから口の悪い乗員からはター様と呼ばれる。

ヘッジホッグ

多弾散布型の前投式対潜迫撃砲。二十四発の小型弾体が一斉に投射され目標に接触、爆発することでダメージを与える。

スキッド

ヘッジホッグとは真逆に、大型の弾体を三連装で搭載したタイプ。

目標海面に三角形を作るように着水。時限信管により目標が航行する深度に到達すると爆発し、至近弾によるダメージを与える。

M／50対潜ロケット砲

ボフォースが開発した対潜ロケット砲。対潜兵器としての20cm12連装ロケット砲の後継機。20cm12連装ロケット砲の対潜弾の威力が低いために新たに導入

するに至った。

艦艇

武装は現状の物を、速度は現状の最高速度のみ表記。

甲種空母（雲、霧が名前に着く）

艦載機一個飛行隊の運用能力の他に補給艦や輸送艦としての能力を併せ持つ。

記載されている搭載機の数に予備機は含めていない。

ムラクモ型航空母艦

同型艦

ムラクモ

アサグモ

武装

45口径12.7cm連装砲×2、40mm連装機関砲×4、20mm四連装機関砲

×6、30mm機関砲×4

速度28kt

搭載量

航空機×8、戦車×4、装甲車×6

戦前に竣工した空母。前型で予算の圧縮のために航空母艦に補給艦と輸送艦としての能力を付与し予算の縮小に成功。味を占めたので本型でも付与され、以降の猟全の空母の設計を決定付けた。

本型は余裕を持った設計にすることで近代化改修を容易にした。

近代化改修によりジェット機も運用可能となり戦後も運用されている。

但し、輸送艦や補給艦としての能力、搭載航空機の規模が小さくなっている。

ユウギリ型航空母艦

同型艦

ユウギリ

ヤマギリ

武装

45口径12.7cm連装砲×2、40mm連装機関砲×2、20mm回転式機関砲

×4、30mm機関砲×6

最高速度

31kt

搭載量

航空機×16、戦車×8、装甲車×16

アングルドデッキを設けた航空母艦。

所謂戦後型空母の一種でジェット機の運用を前提として設計。

輸送、補給機能は改装前のムラクモ型より向上している。重戦車の搭載も可能となっている

クロクモ型航空母艦

同型艦

クロクモ

ライウン

武装

54式短照^パ射^ル連^ス続^レ式熱^ザ線^イ砲×2、30mm回^レ転^イ式機^ガ関^イ砲×2

最高速度

31.6kt

搭載量

航空機×32、戦車×14、装甲車×18

ROTを本格的に取り入れた設計。戦闘を護衛に任せ、兵装を思いきって最低限度まで削減した。

パルスレーザーを搭載した事で個艦防護能力はかなり高い。

分割した状態で50式怪力光線砲戦車二輦の搭載能力を持つ。

乙種空母（空の動物）

商船改造の航空母艦。平時は警備会社所属の民間船舶として海上監視や魚群探査、調査活動の支援や護衛等、多岐に活動しているが、有事には軍に編入される。

運用されるのはいずれもレシプロ機。

猟全総合警備

カラス

39式艦上戦闘機 旋風×8、35式艦上攻撃機 ソードフィッシュ×4

ツバメ

41式艦上戦闘機 零戦×4、40式艦上爆撃機×4

スズメ

39式艦上戦闘機 旋風×4、35式艦上攻撃機 ソードフィッシュ×4
キシ

41式艦上戦闘機 零戦×6、40式艦上爆撃機×4

誇棟警備

オオタカ

48式艦上戦闘機×6、47式艦上攻撃機×6

ハヤブサ

48式艦上戦闘機×6、47式艦上攻撃機×6

極東海洋警備保障

梁山泊

紫電改×4、天山×4

伏見機動警備

オオギツネ
大狐

烈風×4 流星×4

オドネル・セキュリティ

ベナンダンテ

F8F×4、F4U×2

マーティンズ・セキュリティ社

カノーパス

零戦×4、F6Fヘルキャット×4

戦艦（武器）

他国の戦艦と比べて高速、軽武装、重防御が際立ち生存性に重点をおいている。ダメコン技術も後の艦になるにつれ向上している。

オオタチ型戦艦

同型艦

オオタチ（大太刀）

コダチ（小太刀）

タツタチ（龍太刀）

キリタチ（鑽太刀）

武装

45口径36、5cm連装砲×4、45口径12、7cm連装砲×4、40mm連装
機関砲×6、

20cm12連装ロケット砲×4、20mm四連装機関砲×8

速度

30kt

獵全初の超下級戦艦。36、5cm三連装砲4基搭載。珍しく三連装四基の重武装だが斉射だと煙による観測不良や艦の揺れにより艦体にダメージが来るなどの問題があつたためにタツタチから

連装四基の戦艦として建造され、後にオオタチとコダチも連装砲に改装された。第二次世界大戦中にコダチ、タツタチが戦没した。

現在オオタチが第四艦隊、キリタチが第三艦隊に所属しており退役が近い。

リヨウキユウ型戦艦

同型艦

リヨウキユウ(獵弓)

リヨウトウ(獵刀)

武装

45口径41cm連装砲×3、45口径12.7cm連装砲×2、52口径7.62cm連装砲×4、

40mm連装機関砲×6、30mm連装機関砲×8、20mm機関砲×10、20cm12連装ロケット砲×3

速度

28kt

抗堪性能や対空性能が高い。ラヴェンジャーとの戦争前に竣工。当初は諸外国の同規模の戦艦と比べ軽装備ながらオーソドックスな戦艦だったが、大戦の勃発後に防空能力の改修を受け

現在の兵装になった。数々の激戦に投入されながらも小破以下の損傷で無事に生き残ったことから幸運艦と名高い。

ライソウ型戦艦

同型艦

ライソウ（雷槍）

ライトウ（雷刀）

武装

45口径46cm連装砲×4、45口径12.7cm連装砲×2、52口径7.62cm連装砲×4、

40mm回転式機関砲×4、30mm回転式機関砲×6、20mm回転式機関砲×8、20cm12連装ロケット砲×4

速度

28kt

リヨウキユウ型戦艦の打撃力と対空能力を超え、尚且つ両立を求めて建造された防空戦艦。

間接防御にも気を配っており、撃沈にはかなりの労力が必要となる。

センライ型戦艦

同型艦

センライ(戦雷)

ライリユウ(雷竜)

51cm三連装砲搭載の新型戦艦。現在建造中。オオタチとキリタチの後継。

ROTを本格的に取り入れ、短照射連続式熱線砲等の兵装を搭載予定。建造中。

重巡洋艦（風）

戦艦より多く水上機を運用し、防空性能が高い。小回りの効く航空巡洋艦。

単艦での任務から艦隊の指揮まで幅広くこなす。戦後はヘリコプター空母として運用する予定。

ハタカゼ型重巡洋艦

同型艦

ハタカゼ

タチカゼ

武装

50口径20・3cm連装砲×2、53口径15・2cm連装砲×2、30mm連装
機関砲×6、20mm機関砲×10

速度

31kt

搭載量

水上機×12

獵全最後の砲煩^{ほうこん}兵装のみを搭載した重巡洋艦。水上機のみ運用可能。

カチカゼ型重巡洋艦

同型艦

カチカゼ

ヤカゼ

グフウ

タツマキ

武装

50口径20・3cm連装砲×2、桜花発射機×2、40mm回転式機関砲×2、2

0mm機関砲×8

速度

32kt

搭載量

水上機、ヘリコプター合計六機

獵全初の対艦ミサイル搭載重巡洋艦。

桜花にスペースを取られ、艦載機の搭載量については前型より低下している。また、ヘリコプターの運用能力を初めて付与された。

キョウフウ型重巡洋艦

同型艦

キョウフウ

ノワキ

アマツカゼ

リョウフウ

武装

50口径20・3cm連装砲×2、54式短照射連続式熱線砲×2、

30mm機関砲×4、20mm回転式機関砲×4

速度

32kt

搭載量

水上機、ヘリコプター合計十二機

カチカゼ型重巡洋艦では桜花を搭載したことで艦載機の運用能力が低下した為、対艦兵装を削り艦載機の運用能力を向上。戦闘力も防空火力を向上させる方向で強化。

軽巡洋艦（河川） 16

駆逐戦隊、哨戒隊の旗艦。六隻の軽巡洋艦が八隻の駆逐艦を指揮下に置き、九隻一組のユニットとして行動する。

駆逐艦と比べ多くの装備を搭載しているいわば、でっかくなつた駆逐艦。

キヨ型軽巡洋艦

同型艦

キヨ

ミネ

メグミ

サカイ

武装

50口径15.2cm連装砲×3、80cm四連装魚雷発射管×2、45口径12.7cm連装砲×2、

30mm機関砲×4、ヘッジホッグ

速度

37k t

最後の在来型軽巡洋艦。駆逐艦と共に突撃する役目を持っているため、最高速度は軽巡洋艦の中では高い。

ナント（難渡）型軽巡洋艦

同型艦

ナント（難渡）

カナホ（金捕）

武装

50口径15.2cm連装砲×2、対潜ロケット砲×2、30mm機関砲×6、ヘッ

ジホッグ、Mk32短魚雷発射管×2

速度

34.6k t

キヨ型軽巡洋艦をベースに対潜戦闘に最適化した軽巡洋艦。

海軍が対潜艦艇を対潜駆逐艦を複数建造することで主力とする方針となったので二隻だけの建造となった。

ガクノス（鰐之巢）型軽巡洋艦

同型艦

ガクノス

カナメ

武装

50口径15.2cm連装砲、桜花発射機、40mm回転式機関砲×2、30mm機

関砲×6、スキッド

速度

33.4kt

雷装を撤去し、代わりに桜花対艦ミサイルを搭載。さらに50口径15.2cm連装砲を

艦前部の一門のみに減らし、艦橋の直前・直後の空いたスペースに15.2cm連装

砲より小型な40mm回転式機関砲を搭載。対潜装備にスキッドを装備した。

対艦ミサイル搭載艦の試作品としての性格が強く、製造は二隻となっている。

オオナガレ型軽巡洋艦

同型艦

オオナガレ

ジヨウカン（常緩）

ツネトヨ

アラツネ

武装

50口径15.2cm連装砲×2、P—15テルミット発射機×2、M／50対潜口
ケツト砲、

Mk32短魚雷発射管×2、20mm回転式機関砲×2、30mm機関砲×6

速度

36kt

大型の桜花の代わりに小型なP—15テルミットを搭載したタイプ。

この為対艦ミサイルだけでなくガクノス型より高性能な対潜装備や対空装備等を多く搭載できたために多用途に活躍する。

リュウホ型軽巡洋艦

同型艦

リュウホ（竜補）

イワツ

コトスミ艀装中

キヌミ艀装中

武装

50口径15.2cm連装砲、桜花発射機、ターターミサイル、Mk32短魚雷発射管、

40mm回転式機関砲×2

速度

36kt

ミサイル巡洋艦として建造されたが、対艦ミサイルも装備している。

システム艦の試作品としての性格もある為獵全では最も高価でハイテクで繊細な艦

となっている。

駆逐艦

目的別に三種類に分類。艦名に波と潮と着いたものが汎用駆逐艦。

雨と霧関係の文字が着いたものが防空駆逐艦。

月関係の文字が着いたものが対潜駆逐艦に分類され、目的任務に最適な艤装を付けられる。

航空機の出現後は127mm両用砲を主砲に切り替えた。

防空なら機関砲やレーダーの増設と魚雷を撤去し、代わりに対空火器を増設。

対潜なら大型ソナーとヘッジホッグ、対潜ロケット等を装備

四隻一組の駆逐隊を編成し、奇数に軽巡洋艦が配備される。

多数在籍するため艦名は省略。

ウズシオ型

武装

45口径12、7cm連装砲×3、80cm三連装魚雷発射管×2 或いはP-15テ
ルミット発射機×2、

30mm機関砲×6、爆雷投射機

速度

38kt

戦争中の主力駆逐艦。ラヴェジャーを仮想敵として建造された。戦後も建造を続け、
暫くは駆逐艦戦力の数的主力として運用する予定。

オオナミ型

武装

45口径12、7cm連装砲×2、80cm連装魚雷発射管×2 或いは桜花発射機、

30mm連装機関砲×2、30mm機関砲×2、スキッド×2

速度

37kt

大戦終了後の50年代初頭から建造開始。大戦を通して得られた戦訓を反映。

更に強力な兵装を搭載し、戦後の獵全海軍駆逐艦部隊の次期主力を担う

ワークホースとなるはずだったが、駆逐艦にしては少々大型で価格も高く、

最終的にオオナミ型とウズシオ型のハイローミックスで運用する事になった。

ユミツキ型

武装

52口径7.62cm連装砲×3、20cm12連装ロケット砲×2、ヘッジホッグ
×2、

爆雷投射機、30m連装機関砲×4

速度

34kt

大戦中に海中を進むラヴェジャーへの対策のため建造。ソナー等の内装は新型に変えたが、兵装は量産のため従来の艦艇の対潜兵装を流用。

マンゲツ型

武装

52口径7.62cm連装砲×2、M50対潜ロケット砲×2、スキッド×2、Mk
32短魚雷発射管×2、20mm回転式機関砲×2

速度

35 kt

武装、内装両方を新型に変え、より対潜能力が向上した。

QH-50 DASH無人対潜ヘリも搭載予定だったが予算不足により後日搭載となっている。

対空性能が低下している。

ユウサメ型駆逐艦

武装

45口径12.7cm連装砲、52口径7.62cm砲×2、20mm回転式機関砲

×2、30mm機関砲×4、

スキッド、Mk32短魚雷発射管×2

速度

36 kt

強力な対空装備と優秀な火器管制能力を備えた防空駆逐艦。後述サギリ型の補完が目的で建造。

魚雷やミサイルといった強力な兵装を搭載していないものの、

汎用性は高く一部の隊員からはこっちがワークホースとも呼ばれている。

サギリ型駆逐艦

45口径12.7cm連装砲、52口径7.62cm連装砲×2、ターターミサイル、30mm機関砲×2、20mm回転式機関砲×2、Mk32短魚雷発射管×2
速度

37kt

艦隊防空ミサイルを搭載したミサイル駆逐艦。高性能だが高価な艦艇。

潜水艦（水の動物）

諸外国と違い砲煩^{ほうごう}兵装の代わりにロケット砲を装備している。

諸外国の潜水艦と比較して加速に優れている。戦前は本土近海での活動が前提のため

航続力は低めだったが戦争を通して長距離任務が発生したため潜水艦の大型化が進んだ。

任務は哨戒と艦隊乃至船団への奇襲、偵察等

ホムレ（鮪群）型潜水艦

武装

20 cm 12 連装ロケット砲、30 mm 機関砲×2、80 cm 魚雷発射管×4

速度

水上16 kt、水中6.6 kt、

が大戦後期に竣工した潜水艦型。前型やそれ以前の潜水艦は獵全共和国周辺での活動

前提だった為に大戦勃発から多数発生した海外での任務に対応した際に、航続距離や居住性が足りずかなりの負担を乗員にかけてしまった。

そこで本型が海外での任務に十分に対応できるように大型化して建造された。

ユウゲイ型潜水艦

武装

20 mm 機関砲×2、80 cm 魚雷発射管×4

速度

水上18 kt、水中15 kt

水中での能力を重視した潜水艦。

対空兵装はSSへの対策ではなく飛行する侵略生物を目標としている。

これは前型のホムレ型で装備した30m機関砲がSSに対して

命中率が低く有効でなかったことから、SSへの対応を諦め、

当てやすい生体兵器にシフトしたことによる。

水中での抵抗を減らすためロケット砲を撤去し、さらに20m機関砲を浮上時のみ艦橋から運び出して銃座に設置し運用するようになった。

しかし、この手の機関砲の使い勝手はよくない為に浮上時の警戒は

兵士の火器のみで行うか、機関砲を常時設置し潜行時カバーを取り付ける。

補給艦（島）

給燃艦と給糧艦の給兵艦の三種類が混在。

それぞれが燃料、食糧や日用品、武器の部品と弾薬を積載。

最近は統合補給艦の建造を計画中。

ハシ型給燃艦

同型艦

ハシ

タツ

武装

7・62cm連装砲×2、30mm機関砲×4、

速度

燃料を積載した補給艦。

ツノ型給糧艦

同型艦

ツノ

ホウセチ

武装

7・62cm連装砲×2、30mm機関砲×4、

速度

食糧を積載した補給艦

カザミ型給兵艦

同型艦

カザミ

ナカサテ

武装

7・62cm連装砲×2、30mm機関砲×4、

速度

弾薬を積載した補給艦。

工作艦（湖）

航空工作艦と艦艇工作艦の二種類が混在。

修理と予備部品の補給、航空機の製造が任務。

ハツミ型航空工作艦

同型艦

ハツミ

武装

40mm回転式機関砲×2、30mm機関砲×6

速度

21kt

航空機を対象として修復や部品の製造と供給を行う。

フナトメ型艦艇工作艦

同型艦

フナトメ

武装

7・62cm連装砲×2、30mm機関砲×8

速度

18kt

艦艇を対象として点検や臨時の修復。部品の製造を行う。

輸送艦・揚陸艦（山岳）

三番型輸送艦

同型艦

三〇四

三〇六

三一七

三二一

武装

52口径7.62cm連装砲×2、30mm連装機関砲×6、30mm機関砲×8、
0cm12連装ロケット砲×4

速度

22kt

戦時量産型輸送艦のタイプの一つで敵中強行輸送任務のために戦中に開発された。上陸作戦時の支援艦や輸送船団の護衛艦としても使用できる。

戦時量産型輸送艦は本型の他にも多数量産されたが、戦況によつては護衛なしで過酷な任務に投入され続けたため、最終的に生き残りは本型しか存在しない。

艦名は最初に三が入り、〇一から建造順に番号が増える。

タツミネ型揚陸艦

同型艦

タツミネ

ツルギ

オオヌキ

テンレイ

武装

40mm連装機関砲×2、30mm機関砲×6

速度

14.6kt

米国から供与されたLST—1級戦車揚陸艦の改造艦。

機関の換装と武装を削減することで原型より速度が速くなった。

キリツ型揚陸艦

同型艦

キリツ

オオクマ

武装

52口径7.62cm連装砲×2、30mm連装機関砲×2、30mm機関砲×6、2

0cm12連装ロケット砲×2

速度

22. 3 k t

獵全が建造した最新のドック型揚陸艦。カサ・グランデ級ドック型揚陸艦を参考に建造した。

原型より大型化しており機関についても大出力の物を使用。速力が向上している。

警備艦艇（植物）

沿岸警備隊で運用される哨戒艦。

機関砲と爆雷を装備。旗艦を割り当てられた艦は通信設備が充実してる

モミジ型警備艦

武装

52口径76.2mm連装砲×3、57mm連装機関砲×2、30mm機関砲×4、爆

雷投射機×2

最高速度

34 k t

大戦前から配備している警備艦。

原型は第一次世界大戦において猛威を振るったUボート等の潜水艦対策の為に

戦時急造型商船護衛艦として発案されていた。

しかし、大戦の終了とそれに伴う軍縮の煽りを受け、計画は一旦停止された。

その後沿岸警備隊の設立により沿岸警備に適した艦艇を求めた海軍が計画を修正して再開。

戦争前に配備を開始した。

大戦中は護衛任務や哨戒任務に適した手頃な艦として様々な場所で活躍した。

また、元々が戦時急造艦だった為に、大戦中や戦後も量産され続けた。

クス型警備艇

武装

30mm回転式機関砲×2、P-15ミサイル、爆雷投射機

速度

43kt

大戦後期から建造された戦時急造型警備艇。

モミジ型より小型高速な警備艇として配備され、配備初期は魚雷艇として運用された。

戦後にP-15ミサイルを搭載しミサイル艇として改修され、現在も活躍する。

艦載機

戦闘機

39式艦上戦闘機 旋風

武装

30mm機関砲×2

最高速度

517km/h

旋風を艦載機に改造したもの。艦上戦闘機の国産化を焦るあまり運用初期は不具合が続出したが、不具合が収まると初めて開発した艦載機としてはそれなりに優秀な性能を持ち、整備性も高く

後述の烈風の採用まで運用は続いた。

41式艦上戦闘機 零式艦上戦闘機二一型／二二型

武装

20mm機関砲×2、7.7mm機関銃×2

最高速度

533 km/h、540 km/h

日本から輸入。抜群の運動性能を誇り、一時期は旋風の採用を見送る声も上がった。しかし、SSに対しては無力であった事が判明。最終的に零戦は生体兵器を相手取るように指導された。

SSとの戦闘では運動性が低い火力の高い旋風と組んで囿役として旋風を援護した。

43式艦上戦闘機台風

武装

30mm機関砲×2

最高速度

629 km/h

41式戦闘機台風の海軍型で旋風と零戦の後継機。

大出力のエンジンを搭載したことで速度、防御力を大幅に向上した。

しかし、空軍でも問題になったエンジンの整備性の低さが足を引っ張り、旋風と零戦を

代替するには至らなかった。

後述の烈風と48式の導入で旋風、零戦共々退役した。

45式艦上戦闘機 烈風

武装

30mm機関砲×2

最高速度

624.1km/h

零戦の後継機として導入された艦上戦闘機。同世代機と比べ高い運動性と頑丈さを
持つが速度が控え目。

戦闘爆撃機としても適正が高い。

48式艦上戦闘機 史実XF5U

武装

30mm×2、

最高速度

765km/h

円盤翼を持ち、離着陸能力に優れるだけでなく運動性や防御力、速度を高いバランス

で保つ優秀な艦載機。

30mm機関砲をモーターカノンで装備。胴体中央に爆弾やロケット弾を搭載する。

50式艦上戦闘機ホーカー シーホーク

武装

30mm機関砲×2

最高速度

964km/h

獵全海軍初のジェット戦闘攻撃機。レシプロ艦上攻撃機の後継として運用される。

52式艦上戦闘機 デ・ハビランド ベノム

武装

30mm機関砲×1

最高速度

961km/h

英国から輸入した全天候艦上戦闘機。並列複座型の座席を持ち、ミサイルを運用可

能。

57式艦上戦闘機 F-4ファントムII

最高速度

2,370 km/h

史実B型相当の機体。固定の機関砲は装備しておらず、20mmと40mmガンポッドで代用する。

大出力のエンジン二基による高い機動性と高度な電子機器が特徴。

最新のAIM-7スパローミサイルの運用も可能だが、予定ではAIM-4ファルコンがある程度

損耗したラスパローミサイルを導入予定だったが転移により不可能になってしまい無用の長物となってしまった。

爆撃機

35式艦上爆撃機

武装

7.7mm機関銃×2、7.7mm旋回連装機関銃、爆弾搭載量300Kg

最高速度

305 km/h

陸軍の採用している複葉急降下爆撃機の艦載型。

現在は予備兵器として保管されるか民間で運用されている。

40式艦上爆撃機

武装

7・7 mm機関銃×2、7・7 mm旋回連装機関銃、爆弾搭載量500 Kg

速度

367 km/h

35式の国産後継機。こちらも陸軍の採用している急降下爆撃機の艦載型。

全金属製単葉機で諸外国の急降下爆撃機同様頑丈。

トライポッドには運用する爆弾が通用せず、生体兵器を主に相手取った。

現在は予備兵器として保管されるか民間で運用されている。

攻撃機

35式艦上攻撃機 ソードフィッシュ

武装

7. 7 mm機関銃、爆弾搭載量680 kg
最高速度

222 km/h

イギリスが開発した傑作艦上攻撃機。

イギリスでは退役しているが、猟全では軍では退役したものの民間では現役。

38式艦上攻撃機

武装

7. 7 mm機関銃×2、7. 7 mm旋回機関銃、爆弾搭載量500 kg、航空魚雷
最高速度

390 km/h

全金属製の攻撃機。これと言った特徴はない。

機体に余裕を持たせているために任務に合わせて様々な改造が施されている。
現在でも対潜哨戒機として運用されている。

47式艦上攻撃機

武装

30mm機関砲×2、爆弾搭載量700kg、航空魚雷
最高速度

530km/h

流星やA-1と同じく急降下爆撃と雷撃が可能な攻撃機。

水上機

36式観測機

武装

7.7mm旋回連装機関銃

最高速度

211km/h

ソードフィッシュを水上機にした機体。大戦中は旧式ながら高い信頼性により戦争全般で運用された。

40式観測機 零式水上観測機

武装

7.7mm機関銃×2、7.7mm旋回機関銃、爆弾搭載量120kg

最高速度

370 km/h

日本の水上観測機

観測機ではあるが、優れた旋回性能を持ち、戦中の模擬戦ではF6Fを撃墜している。他、哨戒中に生体兵器を撃墜するなどの戦果を上げており、三菱の空飛ぶ不条理の異名をつけられた。

46式多用途水上観測機 瑞雲

武装

20mm機関砲×2、12.7mm旋回機関銃

最高速度

490 km/h

日本から輸入した瑞雲。多用途に活躍するマルチロール機。
エンジンを強力なものに換装した他、機体形状を改善したために速度が早くなっている。

57式哨戒回転翼機 Ka-25

最高速度

220 km / h

哨戒ヘリコプターとして採用。

警察でも運用されている。

陸上機

38式哨戒機 ビツカースウエリントン

武装

7・7 mm連装旋回機銃×2、7・7 mm旋回機銃×2、搭載量1,000 kg

最高速度

378 km / h

38式爆撃機の派生型。海上での哨戒に最適化するように改造。

哨戒機材を詰め込んだため爆弾搭載量が半減した。

99式飛行艇 九七式飛行艇

武装

20 mm旋回機関砲、7・7 mm旋回機関銃×4、

爆弾搭載量 2, 000 k g 或いは航空魚雷× 2

最高速度

385 k m / h

救難や爆撃で活躍した。現在は予備兵装として保管中。

3 式飛行艇 二式飛行艇

武装

30 m m 旋回機関砲× 5、7. 7 m m 旋回機関銃× 4、

爆弾搭載量 2, 000 k g 或いは航空魚雷× 2

最高速度

470 k m / h

改造されながら現在も活躍する多用飛行艇。空飛ぶ戦艦とも呼ばれている。哨戒から爆撃任務や救難任務等幅広く活躍する。

56 式対潜哨戒機 P | 2

爆弾搭載量

3, 630 k g

最高速度

574 km/h

米国製の高性能な陸上哨戒機。

高性能な対潜装備を搭載しており、対潜戦闘のみならず爆撃や哨戒任務でも活躍する。

獵全では未舗装の滑走路に対応するため降着装置が頑丈に作られている反面、爆雷や燃料の搭載量が若干減少している。

地球防衛海軍西部太平洋方面軍

第五艦隊、第二飛行集団獵全共和国分遣群

日英中心で編成

戦艦

信濃

大和型戦艦三番艦。副砲が撤去され、代わりに短照射^{パルス}連続式熱戦砲^{サー}を搭載。搭載航空機もヘリコプターになっている。

近江

紀伊型戦艦三番艦。紀伊型は撃沈された大和と武蔵。

建造中に攻撃を受け、廃棄された大和型戦艦111号艦の代艦として三隻建造。所謂

改大和型。

主な違いは

- ・10・5cm高角砲の本格搭載。

- ・間接防衛性能の向上

- ・機関の高性能化。ROTB兵装に対応

モントナ級戦艦

モントナ

オハイオ

アメリカが建造した防空戦艦。ミサイルは搭載していないものの高性能な火器管制

システムにより濃密且つ高精度な弾幕を展開可能。ヘリコプターを八機搭載。

ユナイテッド・ステーツの随伴艦として活動中に転移に巻き込まれた。

航空戦艦

ロシア帝国海軍

オケアン・ブリュステイティル

ロシア語で海の守護者の名を持つ航空戦艦でハリアーとビートルを搭載している。艦橋前部に41cm連装砲二基。後部は大きめの航空甲板となっている。

基本的にかタパルトで発艦し、VTOLで着艦する。

航空母艦

ウエルシユドラゴン

英国の大型空母。人類初の電磁かタパルト搭載艦。

かタパルト使用時は艦内は節電体制になる。

グリフォン

英国の大型空母。世界各地の英連邦諸国へ派遣するために燃料を大量に搭載。史実のフォレストアル級航空母艦とよく似た設計。

ユナイテッドステーツ

アメリカ海軍の人類初の原子力空母。

短照射連続式熱戦砲や電磁カタパルトなど先進的な装備を運用している。別任務で獵全付近を航行中に転移に巻き込まれた。

巡洋艦

日本

伊吹型航空重巡洋艦

水上機とヘリコプターを多数搭載する。

穂高型重巡洋艦

桜花対艦ミサイルとテリア対空ミサイルを積んだ戦闘艦。

阿賀野型巡洋艦

大戦半ばの44年頃に就役した軽巡洋艦。

全艦桜花対艦ミサイルを搭載している。

イギリス

マシユー・キリエライト

光学兵器を本格的に装備した試作型防空巡洋艦。

光学兵装戦闘システム「イージス」を搭載することで高い戦闘力を発揮する。

一隻しか建造されていない。

ユリシーズ型巡洋艦

対艦ミサイルと対空ミサイルを搭載した巡洋艦。

ハンプトン型航空巡洋艦

ヘリコプターのみ搭載する航空巡洋艦

アメリカ

ロングビーチ級原子力ミサイル巡洋艦

テリア対空ミサイル、アスロツク対潜ミサイルを搭載している。ミサイルを主兵装とした世界初の艦艇。

駆逐艦

日本

夕雲型駆逐艦

史実の夕雲型と。戦後に対潜駆逐艦に改装。

61cm酸素魚雷を撤去しロシアと共同開発した対潜ミサイルを搭載した。

有明型駆逐艦

夕雲型の発展型で桜花発射機を搭載した汎用駆逐艦。また、電子機器についても一新している。

高月型駆逐艦

ミサイルは搭載していないものの対空、対潜戦闘に高い適正を持つ汎用駆逐艦。

旗風型ミサイル駆逐艦

ターターミサイルを搭載した駆逐艦。

アメリカ

ミッチャー級ミサイル駆逐艦

戦後の高速艦隊護衛艦のプロトタイプとして建造。

大型で高性能だがその分高価で大量建造は不可能と判断され、嚮導駆逐艦として就役した。

ターターミサイルやアスロックを標準装備している。

フォレスト・シャーマン級駆逐艦

アメリカ最良にして最後の艦砲と魚雷を主武装とした艦隊駆逐艦。

ハイローミックスのローに相当する艦としてミッチャー級ミサイル駆逐艦を補佐する。

イギリス

ウエポン級駆逐艦

戦時量産駆逐艦の一つ。戦時急造大型駆逐艦のバトル級が高価だったために数的に補完する目的で大量建造された。

改装され戦後も運用。様々な場面で活躍する。

デアリング級駆逐艦

戦時急造大型駆逐艦のバトル級を発展させた駆逐艦。

カウンティ級ミサイル駆逐艦

イギリスが開発した最新鋭の駆逐艦。

ロシア

コトリン型駆逐艦

外洋駆逐艦。兵装は見劣りするものの居住性が高い。

高度な電子兵装も搭載しており嚮導艦としても運用可能。

クルツプニイ型ミサイル駆逐艦

カニン型対潜駆逐艦と準同型艦でM—1 ヴォルナ防空ミサイルを装備。
カニン型対潜駆逐艦
クルップニイ型ミサイル駆逐艦と準同型艦。日本と共同開発した対潜ミサイルを搭
載。

補給艦

リツカ・F・キリエイト型補給艦

所謂統合補給艦。艦内に工場が設置しており部品の供給も可能。

食料の搭載量は少なめ。

平^{たいら}館^{だて}型補給艦

給糧艦間宮の後継として建造された統合補給艦。

潜水艦

原子力潜水艦

アメリカ

機動部隊の随伴と火力支援が任務。

スキップジャック級攻撃原子力潜水艦

兵装

533mm魚雷発射管×6

速度

水上15.5kt／水中29kt

艦隊に随伴する潜水艦。

ジョージ・ワシントン級ミサイル原子力潜水艦

兵装

ポラリス弾道ミサイル発射筒×16基、533mm魚雷発射管×6

速度

水上16kt／水中22kt

アメリカ初のミサイル潜水艦。

イギリス

在獵地球防衛軍として各種支援が任務

ポーパーズ級哨戒潜水艦

兵装

533mm艦首魚雷発射管×6、533mm艦尾魚雷発射管×4

速力

水上12kt／水中17kt

流体力学を考慮した設計が特徴で大戦時の潜水艦と比べ水中での能力が向上している。

オベロン級哨戒潜水艦

兵装

533mm艦首魚雷発射管×6・533mm艦尾魚雷発射管×2

速力

水上12kt／水中17kt

ポーパーズ級哨戒潜水艦の後継級。戦闘はもちろん、特殊部隊の回収などにも使える潜

水艦。

レゾリューション級ミサイル原子力潜水艦ラミリーズ

兵装

ポラリス弾道ミサイル発射筒×16基、533mm魚雷発射管×6

速力

水上20kt／水中25kt

イギリス初のミサイル原子力潜水艦。

ラミリーズには戦争時に茶葉の供給が途絶える状況に備えて、試験的に小規模な茶畑が存在する。

ドレットノート級艦隊原子力潜水艦

兵装

533mm魚雷発射管×6

速力

水上15kt／水中28kt

艦隊に随伴する潜水艦

日本

在獵地球防衛軍として哨戒を目的

呂118型潜水艦

速力

水上19 k t / 水中14 k t

武装

533 m m艦首魚雷発射管×6、533 m m艦尾魚雷発射管×2

水上船型の潜水艦としては最後の潜水艦で旧式化した大戦中の潜水艦を更新するために建造された潜水艦級。

呂168型潜水艦

速力

水上14 k t / 水中19.5 k t

武装

533 m m魚雷発射管×6

呂118型潜水艦の後継として建造された艦

史実パーベル級潜水艦に類似。世界初の涙滴型潜水艦で水中での能力を重視。

伊408型原子力潜水空母

武装

12・7cm連装砲、533mm魚雷発射管、30mm機関砲

艦載機

ヘリコプター×6、VTOL機×3

伊400型の後継。ヘリコプターとVTOL機を搭載している。

主に哨戒任務を行うが、ある程度の地上戦力も収容可能でヘリコプター揚陸艦としても運用可能

ロシア

機動部隊の随伴艦。

641型潜水艦

武装

533mm艦首魚雷発射管×6、533mm艦尾魚雷発射管×4

速度

水上16kt／水中15kt

ロシア初の外洋型潜水艦。旧態依然とした設計だが、扱いやすく途上国を中心に各国で採用される。

航空機

戦闘機

F-8

シービクセン

一〇式艦上戦闘機炎鷹

武装

30mm機関砲

速度

1,360km/h

赤い竹の戦闘機そっくりな外見。

戦闘攻撃機

スーパーマリン シミター

F—4

ホーカー・シドレー ハリアー

攻撃機

バツカニア

ブラツクバーン ファイアブランド

流星

A—4

A—1

哨戒機

フェアリー ガネット

P—3

アプロ シヤクルトン

陸上哨戒機 東海

史実の東海と同様に機体

大鷲

東海の後継哨戒機。

瑞雲

エンジンをターボフロップに改造したタイプ。

ウエストランド ワस्प

K a—25

H S S—1

S H—2 シースプライト

S H—3 シーキング

エクリプセ皇国の詳細

歴史

地域

魔法

固有生物

インベーダー

エクリプセ皇国

面積 105,800 Km²

人口 87万5000人

惑星ゾラから転移。暦は新聖暦を使用。

エクリプセ皇国は本土と周囲の島を領有している

島国であるが山がちの地形で鉄や魔石等の鉱物資源がよく取れる事から工業が盛ん

で

工業製品や宝石、鉄鉱石等の鉱物資源を主に輸出していた。

また、森林も豊富ではあるが、寒冷な気候で耕作地が少ないため食糧は主に狩猟や採集と

輸入で補っている。

活火山が存在しており、度々小規模な噴火を起こしているものの、火山の熱により温泉が湧き出している。この為火山付近は温泉街として栄えている。

魔物も多数生息しており、危険地帯に指定されているところも存在する。

エクリプセ本土を一周するように幹線鉄道が存在する。

現皇帝はローラント・アルベルト・ベルカ九世。

ゾラについて

ゾラと地球の違いは大陸や島の位置の東西があべこべになっていること。

ブリテン島の面積が亜大陸レベルに巨大化し、名前がアルビオン大陸となっており、地球ではフランス共和国と呼ばれる国はフランク連合と呼ばれ、ヨーロッパも

アクシズと言う名称になっている。

魔法が科学と並行して存在するが、エルフやドワーフといった異種族は存在しない。

魔物は存在するがゾラの魔物は基本的に地球上の生物と大まかな形状は一致しており、

ワイバーンやユニコーンといった地球では伝説上の生き物とされた生物も魔物として存在するが、スライムのような不定形や、ケンタウルスやペガサスのような二種類以上の生き物の特徴が

混ざったような生物は存在しない。

また、魔力の影響を世代レベルで受け続けた結果変異や巨大化した生命体も魔物として扱われる。これ等の魔物は魔法を行使可能な点で他の生物とは一線を画する。

さらに地球では絶滅した動物が多数存在する。

元々は聖暦という暦を使っていたが、魔物の発生に端を発する大規模な国家の再編の後

新聖暦の暦を使うようになった。

歴史

アルビオン大陸のブリタニア王国とアクシズの大国、フランク連合共和国という大国の狭間にあるアルビオン海峡に存在する島へ、有史以前に人間が漂着し、それらが集

まづて独自の文明を築く。

国内で群雄割拠の時代が続いたが、その中でベルカ王国がエクリプセを統一し、エクリプセ皇国を建国。当時のベルカ国王は自らを皇帝と呼ぶようになった。

二つの大国に近い位置に存在した為に度々占領され、

その都度レジスタンスが結成され撃退を繰り返し、最終的に武装永世中立を国外に宣言。

鉱物資源と工業製品と備兵をブリタニア、フランク双方に輸出する。

その一方で、同盟等には参加せずに中立を維持しつつ国力を蓄える。その一貫した姿勢により、

815年に永世中立国として認められた。

近代に自国の特産品である鉱物資源を生かすため、工業化政策を推し進め、小国ながら

アクシズ有数の工業国となった。

新聖暦890年代、科学技術を取り入れゴーレムを近代化した魔法機士と

パワードスーツに相当するMVHを開発し、工業国としての地位を不動のものにした。

914年にインバーダーがゾラ各地に來襲し世界大戦が勃発。

し
アクシズに降下したインベーターはフランク連合を占領した後、アクシズ各地に進軍

その支配地域を広げた。

エクリプセ皇国はフランク連合とブリタニア王国中間にあったことから、

インベーターの攻撃に晒された。

エクリプセ皇国はアルピオン大陸の防衛拠点とアクシズ奪還の最前線として奮戦。

上陸され、領土の一部を占領されるも、アクシズから退却した兵士やブリタニアを始

めとした

列強の支援で持ち堪え、インベーターを撃退。アクシズへの橋頭堡となった。

922年にインベーターの旗艦であるテュランシユタットを撃墜し、残ったインベ

ーターが

撤退したことで戦争は集結。戦後は荒廃した国土復興のため、様々な復興計画を実行

するが、

新聖歴928年に新世界に転移してしまった。

地域

ざつくりとした国土の図

首都 ベルカ行政直轄市

ズユーデンクロイゼルン県に位置する国政の中枢都市で皇族の居城が存在。

近衛部隊が首都防衛部隊を担っている。

ハルトシャイネン県

県庁所在地ハントデアマント市

ハルトネツキヒベルク県の西隣に位置する。

宝石の原石が豊富に採掘されるため。装飾品が盛んに取引されているが、

宝石に惹かれた犯罪組織も多く存在し、治安は悪い。

シユネーヴィント県

県庁所在地ハルトハーフェン市。

北方に位置する。寒く厳しい環境であるが良港となる地帯が多く海軍本部が存在する。

海軍の本拠地であることから造船業が盛んで造船所も多数存在する。漁業も盛んでエクリプセの食糧供給源の一つとなっている。

ズューデンクロイゼルン県

県庁所在地ゲヴュルツマルクト市

南西に位置する経済の中枢。ベルカ行政直轄市も所在していることから首都圏として多数の人口を有する。

元は香辛料扱っていたが、今では様々な品物を取り扱っている。

沿岸部にはエクリプセ随一の工業地帯が存在し、国内外の需要を担っていた。

戦中はインベーターの空爆に甚大な被害を被ったが、

現在は復興により戦前の姿を取り戻しつつある。

ハルトネツキヒベルク県

県庁所在地アイゼングリユック

最東部の県。鉄鉱石等の鉱物資源が豊富に採れる。

エクリプセ初の製鉄所が存在しており、製鉄業が盛ん。

インベーターの攻撃を受けたが早期に復旧し、復興に必要な鉄鋼をフル稼働で生産

中。

シュバルツネウスト県

県庁所在地エツシンゲン

唯一海に面していない。

鬱蒼とした森とエクリプセ最高峰の火山が存在し度々小規模な噴火を起こしている。居住可能面積が少ない為人口が一番少ない。

温泉街も存在し、観光地として知られる。魔物が多く生息する為狩人が多い。

マクスイムムゲトライデ県

県庁所在地コツホンヴィーゼ

西部に位置する。

エクリプセに唯一存在する平原地帯で、

農業や牧畜が盛んでエクリプセにとって重要な食料供給地帯。

カルトシフアート区

北西に位置する王国の直轄領。二つの島から構成されているが、位置は離れている為

同じ行政区とは思えないほど住民の連帯感がない。二島とも海軍の泊地と飛行艦隊の基地が

それぞれ存在する。

漁業が盛んだが、主な産業は島に立ち寄る船員や駐留する軍人への接客業となっている。

ノルトムーティヒ区

北東の三つの諸島からなる直轄領。

アルビオン大陸に一番近いため、ブリタニアから攻撃を受けると真っ先に占領された。

この為戦前から大規模な部隊が駐留していたが、大戦中はブリタニアからの援軍が停泊する

大規模な泊地や空軍基地や飛行艦隊の基地が建設され、一大拠点として発達した。

ズーヒャーインゼル区

南東に位置する島からなる直轄領。

離島の中では一番大きい。魔法技術や科学技術の研究所や学校が多数存在し、学者・学生等が多く居住する学園都市が所在する。

ウンボイクザーム区

南西に位置する三つの諸島からなる直轄領。

転移前は大陸の一番近い立地上、大陸からの侵略に真っ先に標的になり度々占領されたことから要塞を建設しそれぞれの島に軍を配置した。大戦中では島民を全て疎開させ、戦力を大幅に増強。防衛の矢面に立った。

魔法

魔法は魔法使いのみ使用可能。簡単な魔法を起こす魔具であれば一般人でも使用可能。

魔法使いは魔法を行使するだけでなく魔力による身体能力の向上の恩恵を受ける。

また、魔法使い一人一人に固有魔法が存在しており、詠唱なしに特殊な魔法を行使できる。

固有魔法以外の魔法は、主に小規模な自然現象を起こす、物体の浮遊移動、簡単な肉体強化が挙げられる。

使い魔がいれば効率よく発現するため、殆どの魔法使いが使い魔を使役する。

魔法を使う時、使い魔の耳と尻尾、或いは使い魔と同じ毛色の体毛が体に発現する。魔法使いは四〜七歳の間に魔法を発現させる。

その後は七歳から十二歳の六年間までは非魔法使いの子供達と共に初等教育を学ぶ。初等教育を修了した後は非魔法使いと別れ

十三歳から職業別に分けられ、それぞれの職業訓練を受ける。

軍では飛行課程は三年、それ以外は二年の学修課程を経て実戦部隊に配属される。

二十代に入ると魔力が減衰し始め、三十代に差し掛かると小規模な固有魔法や

魔力増幅装置を搭載した魔法機士での固有魔法の使用は可能なものの、MVHで魔法をメインにした戦闘や固有魔法以外の本格使用は不可能になる。

その時は軍を退官するか他の職種に転属することになる。

一部の家系では魔力の減衰が起こらず定年まで魔法使いの部隊に居続けることが可能。

Mag^マg^ギi^シs^シc^ユh^フ V^フe^アr^シs^ユt^タ・r^タk^クu^ンg^ン H^ハa^ハr^ニn^ニi^シs^シc^ユh^ユ

所謂。ワードスーツに相当する鎧でゾラでは軍民間わず広く普及している。

汎用作業型、空中作業型、重量物運搬型、水中作業型の四種類が存在。

着るのではなく、体の部位に直接装着する形で着用する。

原型は教会や魔法使いが鎧に強化魔法を与えたものだが、産業革命や技術の進化により

高性能化し、現在の形になった。

魔法使いのみが使用可能で、汎用型以外は一定の資質や魔力量も必要となる。

ゾラでは多数の企業がMVHを開発しており、エクリプセでも開発されている。

エクリプセ軍では国産の軍用モデルを主に使用しており汎用型、飛行型、装甲型、水中型の四系統に分けられる。

また、飛竜やサーベルタイガーのような動物用のものも存在する。

略称はMVH

汎用型

最も普及しているMVH。魔法使いであれば誰でも使用可能。

外観は歩兵に近く、脚部と腰部に小型のブースターを装着。

戦闘でも通常の歩兵と殆ど同じ武装と戦法で戦う。突出した性能こそ無いが、装着者に対し魔法障壁の展開補助と強化、負担の軽減、筋力の強化を行う。

この為、重装備のまま長時間凹凸の激しい地形を走破したり、

高い跳躍や短時間のホバリングが可能。整備性は高く長時間での稼働に優れる。

飛行型

空中での飛行が可能。女性の魔法使いにしか扱えない。

外観は翼の生えた歩兵だが、前腕と太ももより下、胴体上部以外は、軽量化のため露出している。

魔法障壁による高い防弾性能、小さな投影面積、

高い機動性から由来する回避能力により生存率は以外に高い。

しかし、素の防御力は地上のMVHより低いため攻撃は喰らわないことが前提。

主な兵装は突撃銃、狙撃銃、機関銃や対装甲小銃や弓矢に弩
剣や槍、盾といった近接装備も装備する。

装甲型

重装甲で固めた装甲歩兵。男性魔法使いにしか扱えない。

汎用型と同じく陸上で戦うが、汎用型と比べ力が強く、魔法障壁の強度とMVHが頑丈で

高い防御力を持つが、重く動作は緩慢で運動性は劣る。

ただ、移動補助用のブースターを装備している為、瞬間的な移動力は高い。

主に重機関銃や機関砲、歩兵砲、山砲、迫撃砲、パイルバンカーや大型の剣や盾等通常の歩兵では装備できない兵装を運用する。兵装は野戦では一〜二つ、基地や陣地の防衛時は四つ携行する。機関砲や砲兵装を運用する場合、運用の補助として一〜二名の装甲歩兵が随伴する。

水中型

水中での活動に特化したMVH。

地上での動作は通常の歩兵と比べると少し緩慢だが、水中では高い機動性を誇る。

可視光線の増幅と音波による索敵が可能で暗闇でも自由に動ける。

主に水中での調査や破壊工作で運用されるが、夜間の行軍にも使用される。

武装は銃や梱包爆薬の他に機関銃や機関砲等も使用可能。

魔力砲

ゾラで運用されている砲撃兵器。魔力を指向された方向に発射し、着弾と共に爆発を

起こす。爆発は榴弾と違い爆圧のみでダメージを与える。

魔導砲と実弾を用いる火砲と比べ弾速が速く、弧を描かず直線的に敵に向かう。

さらにこれらの砲兵装と比べ軽量なのが特徴。射程と威力は供給された魔力量に比例。
例。

欠点として直射しか出来ないこと。

必要魔力量が大きい事と威力が大きさに比例する事。そしてエクリプセの技術では小型化が難しいことが挙げられる。

海軍では直射しか出来ない為短射程な事と着弾時のダメージが爆発でしか与えられない事、

後述の圧縮魔力砲撃と集束魔力砲撃も実弾を用いる火砲と比べると装填速度と砲身の寿命が劣る為

採用されず、現在は空軍の飛行艦艇の主砲や、エクリプセの要塞砲の一つとして採用されている。

さらに、近年魔法機マジックニューパイター士用の兵装や航空機の兵装レベルに小型化することに成功した。

過給魔力砲撃

魔力を規定値より多く供給し、発射する。

高い爆発力と弾速を持つが、射程と装填速度が低下する。また、魔力砲に対して高い負荷が

掛かるので頻繁に使用すると魔力砲の寿命が縮まる。

集束魔力砲撃

連装された魔力砲で使用可能。砲口からそれぞれ発射している魔力を一つの砲口に集束し、発射することで高い射程と貫通力を付与する。

但し着弾しても爆発は発生しないため加害範囲は小さく装填速度も

圧縮魔力砲撃より遅くなっている。

固有生物

ここではエクリプセ軍が使役するゾラ由来の生物を記載。

サーベルタイガー

大きな牙が特徴の虎。肉体強化の魔法を使い、強力な一撃を敵に行う。動作も俊敏。人に懐きやすく、頭も良いためエクリプセでは古くから猫と呼ばれ使役されている。

MVHを装着した場合は非装甲車両であれば一撃で破壊出来る程の肉体強化魔法が施される。

ユニコーン

角の生えた馬。身体能力的には馬と大差ない。

通常の馬よりデリケートな部分も存在しており運用コストも普通の馬と比べ高い。個体により属性が違う攻撃魔法を行使する。

MVHを装着した際は、魔法障壁の展開と魔法の射程距離が延長する他、持久力が大幅に強化され、身体機能も向上する。

ワイバーン

最高速度 172 km/h

詳細はエクリプセ空軍の該当項目へ

インベーター

ゾラに襲来した宇宙人。ゾラや新世界と比べ優れた魔法技術を有する。

新聖暦914年にゾラ最大の大陸、ローマジア大陸の列強本国地域アクシス、極西の
央華帝国各地の列強租界、新大陸の合衆国首都コロンプスC・C、

人類発祥の大陸と言われるサピエンス大陸北西部に存在するナイル王国に襲来。

激しい戦闘の末、922年に旗艦であるテュランシユタットが撃墜されたことでゾラ
から撤退した。

テュランシユタット

暴君都市の名を持つ半径三キロの大型円盤。全面に武装を施し、凄まじい攻撃力を持
つ。

また、直掩部隊として様々な戦力を搭載し、戦闘時は次々と降下させてくる。

大戦勃発からアクシズに居座っていたが、末期頃にエクリプセ経由でブリタニア連合
王国に向かう際に、進路を予測した連合軍にエクリプセで待ち伏せされ、決戦を行う。

決戦では内部に決死隊が突入し、内部から暴君都市を攻撃し、撃墜した。

ズイルバゾルダート

グレイのような巨人で魔法機士と概ね同じ大きさ。装甲服を纏って戦う。

大型の火器と装甲服を装備して戦車や自走砲の役割を担う。装甲服には背中と脚部にスラストが備わっており、高く跳躍するのはもちろん、海で火器を構えながら移動することができる。

フロツシユゾルダート

人間より少し大きい蛙のような容姿の人型生物。現代兵科で言うところの歩兵に相当。

銀兵の手下のような存在だが、容易に使いつぶされる存在。物量責めで攻撃を行う。接近戦では時折交戦相手を丸呑みにしようとする事がある。

単独でも川、海を問わず高い水中機動能力を持つが、長距離の海上移動ではグンタイアリのように大量の群れで抱き合って即席の船を組んで移動する。

キャリアー

空中を飛行する輸送船。非武装だが、強固な装甲を持つ。

陸空間問わず多数の戦力を降下させるが、降下させるハッチが弱点。

ガンシツプ

インベーターの保有する円盤型の無人戦闘機。武装は魔力で構成された貫通光弾と炸裂光弾のみ。

速力は遅いが、火力は高い。

一応地球基準で第一次世界大戦末期レベルのゾラの航空戦力を総動員すれば落とせる程度に弱い。

ギガントアイゼン

全長300mの巨大空中戦艦で人型に変形可能。主に拠点としても運用され、ゾラ各地に進軍し、

占領地域の上空で静止した。

母艦機能を持ち兵器や兵士を多数射出することが可能。

ゾラの飛行艦隊との戦闘で一部が撃沈されたが、撃沈を免れた機体はテュランシユタツト撃墜後に残存戦力や破壊された兵器の回収と処理を行った後に撤退した。

怪獣

エルギヌス

全高60mの巨体で暗い茶褐色の体色に青い発光体が所々に着いている。怪光線を

口から照射。

怪光線は巡洋艦を一撃で大破に追い込むほどの火力を持つ。

アーケルス

全長70mの生物で四足歩行で移動し、背中に爆発するコブが生えている。

エルギヌスより高い俊敏性を持ち、かなりの戦闘能力を誇る。

光線こそ吐かないものの背中のコブを飛ばして広範囲を攻撃可能。

インベーターテクノロジ

大戦で鹵獲し、研究が進められているインベーターのテクノロジ。

マジックパルス銃

魔力の塊を銃弾として連射する。フロツシユゾルダート用と

ズイルバゾルダート用の二種類が存在しており、両者ともに出力を調整することで散

弾銃や突撃銃、狙撃銃として使用可能。

マジックグレネード

魔力の塊を発射するグレネードランチャー。こちらもフロツシユゾルダート用と

ズイルバゾルダート用の二種類が存在。両方とも無音無煙で発射され、前者は迫撃砲相

当だが射程はゾラの野砲に匹敵し、規模も個人携帯可能なレベルのため隠蔽されながら発射されると捜索には著しく時間が掛かった。

後者もゾラの軍隊が保有する重砲並の射程を持ちながら山砲以上の移動能力を発揮するためかなり苦戦した。

装甲服

ズイルバゾルダートが着用する装甲服。戦車に匹敵する防御力を持ち、破壊することは困難。

背中と脚部スラストアスターが着いている。

装甲は魔力によって戦車並みに強化されているが、装甲に供給された魔力は被弾や強い衝撃を

与えると減衰し防御力が悪化する。また、関節部分が脆い。

ガンシップ

破壊されたガンシップの残骸から使用可能な部品を選別しニコイチで修復した。

武装の復元に失敗した為、兵装はゾラ製のもので構成。

エクリプセ皇国空軍戦力

過去にエクリプセに侵攻した経験のある大国に囲まれている為、敵地への侵攻より陸海軍への航空支援に重きを置いており、航空機は全て爆装可能で対地火力は高い。

また、装甲化された飛行船で構成される飛行艦隊と呼ばれる存在により敵地への攻撃力を保有し、

艦載機には航空戦力の他に魔法機士が存在。

戦後は外征能力の獲得や新型機の拡充を目指す為、

復興のため軍事費を抑制している為、旧式化した機体の更新が遅れており、

追撃機は更新がされつつあるものの、それ以外の機体は改修や搭載機材の更新で

お茶を濁す状態が続いている。

V e r f o l g u n g

追撃機 || 戦闘機

U n t e r d r u c k u n g

制圧機 || 攻撃機

A u s r o t t u n g

殲滅機 || 爆撃機

I n f o r m a t i o n e n

情報機 || 偵察機

機体の型式番号は開発計画が出された時点で付与され、上記の頭文字＋番号で表記される。

また、海軍や飛行艦隊でも艦載機として運用されている。

追撃機

制圧機

殲滅機

飛行艦艇

飛行戦艦

飛行母艦

巡航艦

飛行補給艦

掃空艦

追撃機

V—15アトラ—

武装

27mm機関砲×1、13mm機関銃×1、魔力砲×1、ロケット弾×4、爆弾搭載量150Kg

最高速度

247km/h

単葉機。大戦末期に計画が開始された次期主力戦闘機。推進式のプロペラが特徴。

機体は頑丈で重戦闘機としての性格が強く、速力と攻撃力が高い。

航空支援を行うことも考慮しており、エクリプセが採用した追撃機では爆弾搭載量が一番多い。

また、魔力砲を機首に装備することで火力も向上している。

現時点では首都防空隊に配備されているのみで本格的な配備はこれから。

V-8クロイツーク

武装

8mm機関銃×3、13mm機関銃×1、ロケット弾×4、爆弾搭載量100kg、

ロケット弾

最高速度

206km/h

単葉機。高出力の液冷エンジンを搭載した速度と火力に優れる高速追撃制圧機。持ち前の高速による一撃離脱戦法を得意とする。

エンジンの信頼性の低さに泣かされつつも、下記のV-7と共に主力として活躍している。

V-7ピラート

武装

8 mm機関銃×2、爆弾搭載量75 kg、ロケット弾×2

最高速度

187 km/h

複葉機。前大戦半ばから就役した主力追撃機。

優れた格闘戦能力を持ち、爆弾やロケット弾も搭載可能で制圧機としての任務も可能。

V-8と比べ信頼性が高く、配備されている機体はV-8より多い。

V-3アイス

武装

8 m m機関銃×2、爆弾搭載量50 k g
 最高速度

176 k m / h

前大戦で運用した旧式の三葉追撃機。

プロペラ同調装置を始めて搭載した追撃機として戦前に就役。

高い整備性と素直な操縦性と頑丈な機体が利点。

能力不足を嘆かれつつも数的主力として大戦前半を戦い抜いた。

現在では練習機として運用されている。

制圧機

U / I - 3 ルクス

最高速度

175 k m / h

武装

8 m m機関銃×2、8 m m連装旋回機銃×1、爆弾搭載量300 k g、航空魚雷、口

ケット弾

正確な分類は制圧情報機で単発の三座三葉機。

航空支援と観測が主な任務で優れた低速性能と短距離離着陸性能をもつ。速力は低い。

U—1ヒンメルファウスト

最高速度

232 km/h

武装

13 mm機関銃×1、8 mm機関銃×2、8 mm連装旋回機銃、航空魚雷、爆弾搭載量500 kg

ロケット弾

双発複座複葉の制圧機。海軍でも運用されている。

エンジンが二つあるため高い搭載量を持ち、速力は高いが運動能力は低く機敏な動きは困難。

また、大型であるため母艦に搭載できる量は少ない。

殲滅機

A-2ドラッヘ

速度

205 km/h

武装

8 m m連装旋回機銃×4、爆弾搭載量1000 kg

ブリタニアから輸入した大型複葉全翼機。戦略爆撃機として運用。空軍の航空機の中で唯一艦載機としての運用はされていない。

ワイバーン

速度172 km/h、MVH装着時241 km/h

新世界のワイバーンと比べると少し小型な事以外、外見は変わらないが、速力は劣るが運動能力は勝る。また、肉体も頑丈で舗装された滑走路でも運用可能で寒冷地への適応力も高い。

風魔法に高い適正を持ち、風魔法を用いることで高い運動能力を発揮する。

反面、攻撃手段がエアカッターしか無いいため射程距離が短い。

攻撃は主にエアカッターで行う。

龍用のMVHを装着することで速力と運動能力の向上、エアカッターの攻撃範囲の拡

大と

魔法障壁の展開が可能になる。さらに正面を向いたまま瞬間的に上下左右斜め方向に

移動するなどワイバーンの能力が上昇する。

飛行艦艇

空中飛行能力をもつ艦艇。飛行船を改良したもので、飛行船に主砲を取り付け装甲化させた外見をもつ。

速力と行動範囲と索敵能力とコストに勝り、攻撃力と装甲防御力と搭載量が劣る。地球の飛行船と比べるとあらゆる面に勝る。

大きさは大きいもので約500m、小型な物でも駆逐艦以上はある。

主砲と副砲に非実弾兵装の魔力砲を搭載することで空を飛べる程度の軽量化に成功している。

魔法障壁を展開可能で艦を覆う程の大きさから一部分を覆う程の大きさに調整可能。防御力は面積に反比例する。

艦載機として航空機、魔法機士、飛行歩兵が主に搭載されているが、

古い艦だとワイバーンの搭載能力を残す艦も存在する。

燃料は魔石から魔力を抽出して使用する。

エクリプセは飛行艦隊を三個保有している。

搭載兵装

魔力砲

30cm 魔力砲

飛行戦艦用に開発された魔力砲。

20cm 魔力砲

巡航艦用に開発された魔力砲。

15cm 魔力砲

副砲用に開発された魔力砲。対空性能を重視し、俯角仰角、装填速度、旋回速度が向上している。

12.8cm 魔力砲

掃空艦用に開発された魔力砲。魔力砲の中では一番小回りが効き扱いやすい。

実弾砲

30口径28・3cm連装砲

飛行艦艇用に試験的に開発された砲。軽量化の為、口径を短くしたが、それでも飛行艦艇には

重すぎるということでもウムラウフ型飛行戦艦のみの搭載となった。

40口径15cm連装砲

同じくウムラウフ型飛行戦艦のみに搭載される砲。

やはり重すぎるということでも少数のみの運用となった。

対空火器

尚、全て陸軍で運用している物と同じ。

8. 8cm対空砲

3. 7cm機関砲

2. 7cm機関砲

2cm機関砲

1. 3cm機関砲

8mm機関銃

ロケット砲

46cmロケット砲

飛行艦艇用に開発されたロケット砲。

射程は短く命中率も高くはないが与えられるダメージは大きく、スペースの狭い掃空艦で主に使用される。

51cmロケット砲

46cmロケット砲の後継。威力と射程が大幅に上がっている。

飛行戦艦

戦闘能力を重視した設計。防御力は高く高出力魔力砲により攻撃力も高い。命名規則は国内の著名な魔法使いから。

ファウスト級飛行戦艦

速力

120km/h

搭載機

魔法機士×4、航空機×4、飛行歩兵×30、ワイバーン×8

武装

甲板上

30cm連装魔力砲×2、15cm連装魔力砲×2、8cm連装対空砲×4、3cm連装機関砲×12、2.7cm連装機関砲×10、2.7cm機関砲×17、1.3cm機関砲×27

舷中部

15cm魔力砲×6、8cm対空砲×16、2.7cm連装機関砲×26、1.3cm機関砲×18

舷下部

8cm対空砲×8、3.7cm連装機関砲×16、1.3cm機関砲×28

戦前に主力飛行戦艦として就役。

大戦中に改装され対空砲や機関砲を多数増設し、対空火力を向上させた。

ただ、強引に増設した為、一門辺りに割り当てられる弾薬の数が減っている。

艦載機は甲板に上げてから発進する。

四番艦シーラツハ一隻を残して全て撃沈した。

シーラツハ

キユツケン級飛行戦艦

速力

130km/h

搭載機

魔法機士×6、航空機×8、飛行歩兵×30

武装

甲板

30cm連装魔力砲×3、15cm連装魔力砲×6、8cm連装対空砲×2、8cm対空砲×6、

2.7cm機関砲×12、2cm四連装機関砲×6、1.3cm機関砲×18

舷中部

8.8cm対空砲×6、3.7cm機関砲×8、2cm連装機関砲×12、8mm機関銃×20

舷下部

15cm魔力砲×12、8.8cm対空砲×6、3.7cm連装機関砲×6、2.7

cm連装機関砲×10、

2cm機関砲×18

戦前にファウスト級飛行戦艦の後継として計画されていたが、大戦により建造計画が一旦取り止めとなった。大戦末期ごろに対空能力を修正して計画が再開し、就役。

艦体をやや大型化し、対空砲と機関砲に新型の照準器を備えたことで、

一門当たりの命中率が上がった。この為対空火器が前級と比べ、減っている。

代わりに弾薬の搭載量を増やすことで、継戦能力を上げた。

搭載機の発進口が両舷に一つずつ設置されており甲板に上げなくともそのまま発進できるため

効率的な運用が可能となっている。

キユツケン

ドレヴェス

シュヴェンケ

キルシュ

ウムラウフ級飛行戦艦×1

速力

95 km/h

武装

搭載機

航空機×6、飛行歩兵×30

甲板上

30口径28、3cm連装砲×2、40口径15cm連装砲×2、8.8cm対空砲×8、8mm機関銃×18

舷中部

2cm四連装機関砲×8、2.7cm機関砲×6

舷下部

8.8cm対空砲×8、2.7cm機関砲×14

兵装を実弾のみに絞った実験作。実弾兵装は魔力砲より重いため武装は控えめだが、威力は高い。

しかし、重量が大幅に増え、魔法機士は搭載機から外され、速力も水上艦並みに低下している。

ウムラウフ

飛行母艦

母艦や輸送機としての能力を重視した設計。戦艦より大型。小型の魔力砲や機関砲、高射砲を主兵装とする。飛行甲板だけでなく舷にも発進口が備えられており、甲板をやられても艦載機運用能力は失われない。

命名規則はエクリプセ神話に登場する武器。

エツケザツクス級飛行母艦

搭載機数

航空機×8、魔法機士×4、ワイバーン×16、飛行歩兵×90

速度

157 km/h

兵装

舷中部

15 cm連装魔力砲×2、12.8 cm魔力砲×6、3.7 cm機関砲×6、

2 cm四連装機関砲×6、8 mm機関銃×14

舷下部

12.8 cm連装魔力砲×4、2.7 cm機関砲×16、2 cm連装機関砲×20、

1. 3cm機関砲×30

エクリプセ初の飛行母艦。

戦闘能力を重視した空母。見た目は飛行甲板の載った飛行船で多数の小口径砲を装備。旧式ではあるがそのぶん乗組員も慣熟している。

艦首と艦尾に15cm連装魔力砲をそれぞれ搭載しており、砲撃能力は母艦としては高い。

一番艦のエツケザックスは大戦中に撃沈されている。

ナーゲルリング

バルムンク型飛行母艦

搭載機数

航空機×20、魔法機士×12、飛行歩兵×90

速度

160km/h

武装

舷中部

8. 8 c m 対空砲×8、8. 8 c m 連装対空砲×6、3. 7 c m 機関砲×10、
 2 c m 四連装機関砲×8、2 c m 連装機関砲×14、1. 3 c m 連装機関砲×18
 舷下部

8. 8 c m 連装対空砲×6、3. 7 c m 連装機関砲×6、2. 7 c m 連装機関砲×8、
 2. 7 c m 機関砲×8、2 c m 機関砲×12、1. 3 c m 機関砲×16

戦後に就役した艦で母艦としての能力を重視した艦。

次期艦隊旗艦として運用。ワイバーンの運用設備を撤去し、飛行歩兵を除けば
 機械化戦力のみ搭載している。

また、戦闘能力を妥協することで効率的な艦載機運用が可能となっている。

バルムンク

ウルフィンゲ

巡航艦

長距離の飛行に優れる。海軍でいうところの巡洋艦に相当する。艦隊のワークホー
 スとして様々な局面に投入される。命名規則は妖精や妖怪から。

ゴブリン型飛行巡航艦

艦載機

ワイバーン×4、魔法機士×2、飛行歩兵×16

速度

160 km/h

兵装

甲板

- 20 cm連装魔力砲×3、8 cm連装対空砲×4、2.7 cm連装機関砲×4、
- 1.3 cm連装機関砲×10

舷中部

- 三連装46 cmロケット砲×6、8 cm対空砲×2、3.7 cm連装機関砲×4、
- 2 cm機関砲×4、

- 1.3 cm連装機関砲×10

舷下部

- 8.8 cm対空砲×6、3.7 cm機関砲×6、2 cm機関砲×8

大戦前に主力巡航艦として多数が建造された。

大戦では期待通りの活躍をしたが、その殆どが撃沈された。

同型艦

ゴブリン

オーク

ヴェーアヴォルフ

エルフ型飛行巡航艦

艦載機

航空機×8、魔法機士×2、飛行歩兵×24

速度

167 km/h

兵装

甲板上

15 cm連装魔力砲×3、8 cm連装対空砲×4、3 cm機関砲×6、13 m機関砲×8

舷中部

連装46 cmロケット砲×4、27 cm機関砲×4、2 cm機関砲×4、13 cm機関砲×8

舷下部

8・8cm対空砲×4、2・7cm機関砲×8、2cm機関砲×6
大戦後に建造された飛行巡航艦。搭載機の運用に重点を置いており、広い索敵範囲を
持つ。

また、巡航艦として初めて航空機を搭載した。

同型艦

エルフ

デュンケル

ハイエルフ

フェー

ツヴェルク型飛行巡航艦

速度

165 Km/h

艦載機

航空機×4、飛行歩兵×16

兵装

甲板 上

20 c m 連装魔力砲×3、12. 8 c m 魔力砲×4、8. 8 c m 対空砲×4、3. 7 c m 機関砲×10、2 c m 機関砲×16

舷中部

三連装51 c m ロケット砲×6、12. 8 c m 魔力砲×6、2. 7 c m 機関砲×6
 舷下部

8. 8 c m 対空砲×4、2. 7 c m 機関砲×8、2 c m 機関砲×10

エルフ型と共通の設計だが直接戦闘力を重視しており、防御力が高い。

戦闘能力向上の結果、魔法機士の運用能力は撤去され、搭載機も最低限まで下げられた。

同型艦

ツヴェルク

コボルト

ノーム

ガイスト

ツエンタオア

飛行補給艦

戦後に就役した新たな艦種。戦前のエクリプセ空軍は補給艦が存在せず、

自国周辺やアクシスのみしか展開できなかった。

しかし大戦において他戦線にも派兵要請がされたが、エクリプセには外征能力が存在せず結果的に少数の義勇兵の派遣のみに留まった。

この為エクリプセは飛行補給艦の建造を決定。就役させることになった。

命名規則は鉱石。

ディアマント型飛行補給艦

速度

155 km/h

兵装

甲板

8. 8 cm連装対空砲×2、3. 7 cm連装機関砲×4、2. 7 cm連装機関砲×4、

2. 7 c m機関砲×2、

1. 3 c m機関砲×10

舷中部

2 c m機関砲×20

舷下部

3. 7 c m機関砲×8、2 c m機関砲×12

エクリプセの領空が狭めな事から、安全な空域も狭く艦隊に随伴した方が安全なことから

高速性能を重視した補給艦となった。

但し、その分魔力を多く消費するため大量の魔石が必要となり、補給艦として本末転倒な評価を

得てしまった。

掃空艦艇

駆逐艦相当の艦。比較的小型軽量でコストと運動性に優れる。飛行歩兵やワイバーン、航空機等の小型航空目標の掃討を目的とする。艦載機の運用能力は無い。飛行艦に

比べ甲板に相当する部品が存在しない為、飛行船の原型を留めている。

大型ロケット弾を魚雷ポジションの兵装として搭載。真横にしか発射できないが、船体を傾ければ地上攻撃に利用できる。

命名規則はアルファベットと数字。

現在では掃空艦は主力のAタイプと小型艦廉価なBタイプ二種類に分類されている。

A57型掃空艦

速度

170km/h

艦載機

飛行歩兵×16

船体上部

1. 8cm連装魔力砲×2、8. 8cm対空砲×2、3. 7cm機関砲×4、2c

m機関砲×6、8mm機関銃×10

船体下部

三連装51cmロケット砲×3、2. 7cm機関砲×8、8mm機関銃×10

戦前に製造された主力掃空艦。対地支援や対大型艦用に大型ロケット砲を

エクリプセで初めて搭載。

大戦では対空、対地と局面を問わず活躍したが、著しく損耗。建造艦十九隻の内、四隻しか残らなかった。

B 3 7 型掃空艦

速力

1 7 6 k m / h

艦載機

飛行歩兵× 8

船体上部

1 2 . 8 c m 連装魔力砲× 2、2 . 7 c m 機関砲× 8、2 c m 機関砲× 6、1 . 3 c m 機関砲× 1 2

船体下部

8 . 8 c m 対空砲× 2、3 . 7 c m 機関砲× 4、2 c m 機関砲× 8、1 . 3 c m 機関砲× 1 0、8 m m 機関銃× 1 0

戦時量産型の掃空艦。損耗の激しかった A 5 7 型掃空艦の補助と補充として運用。

飛行歩兵の運用を最低限度に押さえ、ロケット砲も全廃している。大戦期間を通し建造され、現在では実質的な主力掃空艦として運用されている。

A 7 8 型掃空艦

速力

1 8 8 k m / h

艦載機

飛行歩兵×16

船体上部

1 2 . 8 c m 連装魔力砲×3、8 . 8 c m 対空砲×2、三連装51 c m ロケット砲×2、2 . 7 c m 機関砲×8、

2 c m 連装機関砲×8、8 m m 機関銃×12

船体下部

三連装51 c m ロケット砲×2、3 . 7 c m 機関砲×4、2 . 7 c m 機関砲×6、2 c m 機関砲×8、1 . 3 c m 機関砲×6

A 5 7 型掃空艦の後継艦。従来の掃空艦と比べ大型、高性能化しているが、

コストも相応に高くなっている。

エクリプセ皇国陸軍戦力

陸軍

戦前は海軍戦力と国土の面積の小ささから、内陸部での持久作戦を予備案に、水際作戦による

防衛計画を策定。空軍と海軍の支援を受けつつ、海岸線付近で侵略を防ぐ手はずだった。

しかし戦争中は類を見ない大規模な空挺攻撃や爆撃等による奇襲攻撃を喰らい、一部地域が陥落してしまう。後に列強の支援を受けつつ逆襲を敢行し、奪還に成功する。

その後、エクリプセ防衛のみならずアクシズ奪還部隊の一部として活動したり、実施されなかったものの諸外国から他戦線への派兵を打診された為、終戦後に外征能力獲得の為軍拡を行っていた。

山岳地帯が多いため山岳歩兵を始め山岳での行動に長ける部隊が多い。
反面自動車化や機械化は遅れきみ。

目次

戦車

車輛

列車砲

火砲

歩兵銃

短機関銃

散弾銃

拳銃

対戦車ライフル

機関銃

戦車

Lk 軽戦闘トラクターシリーズ

Lk. 1、Lk. 2、Lk. 3の三タイプが運用中。

Lk. 1

武装

46. 5口径37mm砲或いは13mm機関砲

最高速度36km/h

初期型。

Lk. 2

武装

80口径20mm砲或いは13mm機関砲

最高速度40km/h

偵察型。速力と航続距離が上がっている反面、装甲と火力が低下している。

Lk. 3

武装

24口径57mm砲

最高速度28km/h

火力支援型。装甲と火力が向上しているが、速力が低下した。砲塔が限定旋回式となっており駆逐戦車のような運用をされている。

Leichter Kampftankor軽量戦闘トラック製造計画で皇国陸軍兵器工廠で開発された戦車。

軽戦車に分類されるエクリプセ初の国産戦車。フランク連合のFT-17同様に回転式砲塔を採用。

砲塔は車体後部上面に搭載。乗員保護のため車体前部にエンジンを搭載し、後部に乗員を配置。

被弾してもエンジンで砲弾を阻止する構成となっている。

戦争中は偵察や警戒、歩兵の直掩等幅広く活躍した。

Ast. 1ランツィーラ突撃支援トラックター

武装

40口径77mm榴弾砲、8mm機関銃×4、対空用連装8mm機関銃

最高速度

10km/h

歩兵に随行し、相互に支援しつつ要塞や塹壕等の攻略することを目的に E W M が *A n g r i f f S u n t e r s t . t z u n g T r a k t o r* 計画にて開発した突撃砲。

車体の前面中央に榴弾砲を装備し、ケースメイト式で機関銃を車体の側面二ヶ所。後面、前面上部各一ヶ所ずつ装備。上面後部には対空用に連装機関銃塔を装備。

A s t . 2ランツィーラII突撃支援トラクター

武装

56口径88mm砲、対空用連装8mm機関銃

速度

12km/h

ランツィーラ突撃支援トラクターの設計を流用して開発され、

8.8cm高射砲を車載用に改良して搭載。

更に装甲を増圧し、エンジンも高性能なものに変えたことで速力と防御力の双方を向上させた。

反面これにより重量過多が発生したため、8mm機関銃を上面の機関銃塔を除き全て撤去した。

乗員は四名だが、六人分のスペースが余分にあるため歩兵戦闘車のような運用も可能。

車輛

メツサー

四輪の多目的非装甲車でブリタニア王国の民間車両をベースに改良した軍用車両。主に足回りを強化し、走破能力を向上させている。

ジープに近い役割を与えられており偵察や警戒等の任務から連絡等の雑用まで幅広くこなす。

牽引重トラクター

武装

13mm機関銃

速度

23Km/h

重砲の牽引や物資・人員の輸送を目的に開発された装甲トラクター。大きな物資もこれで運ばれる。大戦中は多目的に使われ汎用装甲車として砲の牽引や物資輸送だけでなく歩兵の直掩や警戒任務に活躍した。

牽引軽トラクター

武装

8 m m連装機関銃

速度

27 Km/h

野砲の牽引を目的に開発されたトラクター。こちらは戦後から配備が始まった新型車輛で

重トラクターと同じく汎用装甲車としても運用可能。重トラクターより小回りが効き扱いやすい。

トラック

大型の四輪トラック。運転席は剥き出しで上面に雨避けの幌が張られている。整地された部分では高速を発揮できるが、エクリプセは不整地が多いため、

その高速性能を發揮する機会は少ない。

主に輸送で使用されるが、荷台に武装を載せてガントラックとしても運用された。

騎兵

馬、ユニコーンに騎乗して戦闘を行う。大戦後はやや衰退したが、機械化兵器の信頼性が低く

充足率も低いため当面は機械化兵器と平行して運用される。

列車兵器

装甲列車アイゼンシユランゲ

構成車両

1. 機関車

2. 指揮車

3. 警戒車

兵装

13. 2mm連装機関銃、8mm機関銃×2

4. 対空車

兵装

8. 8cm高射砲塔・同軸3、7cm機関砲×2、2cm機関砲×4、13. 2mm

四連装機関銃×2

5. 榴弾A車

兵装

7. 7cm連装榴弾砲塔、7. 7cm榴弾砲×2、8mm連装機関銃×4、8mm機

関銃×6

6. 榴弾B車

兵装

5. 7cm歩兵砲×6、2. 7cm連装機関砲塔×3、13. 2mm機関銃×4

7. 近接車

兵装

3. 7cm対装甲砲塔×3、3. 7cm対装甲砲×4、2. 7cm機関砲×4、2c

m 四連装機関砲×2、

8 m 機関銃×8

8. 車輛運搬車

9. 客車

10. 電源車

路線の警備や近辺の支援、輸送任務に使われる。

状況に応じて機関車と警戒車と指揮車、各種火砲を搭載した車輛と必要に応じた数の電源車を組み合わせて運用する。

25. 4 c m ヴイルマ列車砲 / 25. 4 c m ジモーネ列車砲

55 口径 25. 4 c m 砲

戦前に開発された列車砲。戦中に機関と装填機構改良された2型が採用される。

名前は設計主任の母親と開発責任者の奥さんから。

30. 5 c m フランメファウスト列車砲

52 口径 30. 5 c m 砲

エクリプセの主力列車砲。戦艦の艦砲を流用した主砲を持つ。

61cmハーゲン列車砲

61cm砲を搭載している試作大型列車砲。運用に軌条を二つ必要とする等の労力が掛かるが、

その分火力と射程は桁違いに高い。名前は初代国王から。

火砲

※☆付きはMVHの携行火器として使用されている。

3・7cmPaK912 対装甲砲☆

口径37mmの対戦車砲。馬匹輸送や車輛で牽引され、運搬される。

魔法機士の撃破を目標に開発。魔法障壁ごと破壊するには威力不足だったため、主に待ち伏せや奇襲で魔法障壁を展開させずに撃破したり、側面や背後に回り込んで攻撃を行った。

戦争序盤からインベーターとの戦いに投入され、ズイルバゾルダート相手には役不足だったものの、改良を続けながら大戦全般を戦い抜いた。

地球の対戦車砲と違い、魔法機士を撃ち抜く為に高い俯角が取れる。

エクリプセでは対装甲砲の固有名詞を与えられている。

5 cm PaK 925 対装甲砲

PaK 912の後継機。ズイルバゾルダートの撃破を目指し開発。

計画自体は大戦前半から存在したものの、ズイルバゾルダートは魔法機士や高射砲、砲兵隊の榴弾砲やカノン砲、地雷などのトラップや戦闘車両等対抗手段が多数存在したため開発が後回しにされ結局開発の本格化は戦後になってしまった。

PaK 912と比べ射程距離や貫通力を向上しており、第二次世界大戦頃の中戦車レベルの車輛も

十分対応できる。

3.7 cm leIG 909 歩兵砲☆

フランク連合製の歩兵砲をライセンズ生産したもので機関銃陣地の破壊を目的に開発された。

インバーダー相手には威力不足ながら歩兵部隊の支援火力として戦争を戦った。

現在も砲弾を改良し現役で、主に重装型MVHの装備としても運用されている。

5.7 cm leIG 916 歩兵砲☆

3. 7 cm le IG 909を発展させた歩兵砲で転移時点の主力歩兵砲。

射程距離と火力が向上し、運搬の手間が省けている為、3. 7 cm le IG 909より迅速な展開が可能。

こちらも重装型MVHの装備としても運用されている他、戦車の主砲として採用されている。

7. 7 cm GebG 896 山砲☆

山岳部で運用することを前提に開発された主力山砲。

山岳部が多いエクリプセではこれが数の上での主力となっている。

運搬を容易にさせるため移動時は分解されて歩兵に運ばれる。その為大戦中は歩兵砲代わりに

歩兵部隊へ配備されて活躍した。

7. 7 cm FH 897 / 905 榴弾砲

新聖暦800年代後半に新世紀の新型砲を目指して開発・採用された榴弾砲。

エクリプセは国土が狭いため榴弾砲一つでも対応可能で開発費用圧縮のために榴弾砲に

一本化すべきという政府からの意見が出されたため、カノン砲もこの砲で更新された。

7. 7 cm Geb G 896 山砲と同じ砲弾を使用するが、構造が強化されているため射程はこちらが上。

905は駐退復座機を搭載した型で射撃精度と連射速度が格段に上昇した。ランツイーラ突撃支援トラクターの主砲はこの型式。

10. 5 cm FH 919 榴弾砲

7. 7 cm FH 897の後継榴弾砲。大口径化に伴い威力が大きくなった。

また、駐退復座機を整備性が向上した新式の物を採用。

物資が逼迫していた中で採用された為、大戦中は一部部隊にしか行き届かなかったが、

次期主力榴弾砲に恥じない戦いぶりを展開した。

10. 5 cm FK 920 カノン砲

駐退復座機を搭載したカノン砲。開発開始は7. 7 cm FH 897榴弾砲と同年代。

元々は7. 7 cm FH 897と同じく旧式化していたカノン砲の更新の為作られた

が、開発当時の政府から開発費用圧縮のため旧式化したカノン砲も榴弾砲で更新すると言う要求が出され、

新型カノン砲は開発を中断。この意見に反対派の者は、兵器工廠の一部門で細々と新型カノン砲の研究に勤しんだ。

後にカノン砲の必要性が再認識され、新型カノン砲の要求が出された時に研究成果を惜しみなく

注ぎ込みわずか短期間で試作品が完成、採用された。

大戦では10・5cm FH919と同じく物資が逼迫していたため少数配備されたのだが、

配備された部隊では対装甲目標や怪獣との戦闘。砲撃支援など幅広く活躍したが、やや従来の方と比べ重いため運用になれずそこを突かれて撃破された砲も多かった。

15・0cm FH922重榴弾砲

大戦中に現れた怪獣や大型兵器等の巨大目標撃破のため開発された野戦重砲の一つ。かなりの火力を誇り、野戦運用でも気を遣いある程度の軽量化を行ったことで重砲の中では高い機動性を持つ。

15.0cm FK923重カノン砲

大戦中に現れた怪獣や大型兵器等の巨大目標撃破のため開発された野戦重砲の一つ。射程距離が長く威力も十分にある。

全周旋回が可能だが、これにより15.0cmFH922重榴弾砲のような機動性は発揮できなくなっている。

21.0cm FH926重榴弾砲

大戦中に現れた怪獣や大型兵器等の巨大目標撃破のため開発された野戦重砲の一つ。あまりに大型化したため積極的な移動が困難でもつぱら拠点の防衛に運用される。

全周旋回が可能で俯角をある程度上げた状態でも装填可能。

これ以上の大型砲も検討されたが、列車砲の配備により検討止まりとなった。

7.5cm Grw917 迫撃砲☆

エクリプセ初の迫撃砲。秋津洲帝国で開発された迫撃砲を参考に

歩兵部隊が運用する支援火砲として開発した。四人で一門を運用する。

大戦中は開発目的通り歩兵部隊の火器として多数配備された。簡単な構造の為、物資の逼迫した

大戦中でもある程度数をそろえられた為、重機関銃と並び有効な支援火器として活躍した。

8. 8 cm FlaK 918

アハトアハトの同位体。対空砲として高い性能を持つが対地攻撃でも優秀な性能を持つ。

野戦高射砲に分類され、馬匹や車輛に牽引されて移動する。

12. 8 cm FlaK 922

都市や基地の防空用に開発された高射砲。重く野戦砲のような運用はできないが、威力、射程共に大きく優秀な高射砲。

3. 7 cm leIG 906 ☆

大戦前に配備された機関砲

元々は対地戦闘を主任務としていたが、飛行歩兵にも対応するため、仰角を多く取れるように設計された。

2. 7 cm FlaK 917 ☆

大戦後に配備された新型機関砲。3. 7 cm機関砲を小型化し、取り回し易さを向上。

対空目標への追従性能が上がり使い勝手が向上した。

2 c m Fl a k 9 2 2 ☆

対空用の機関砲として開発されたが、設計当初から装甲型MVHや飛行型MVHの射撃兵装としても運用を想定しており、取り回し易さが更に向上している。上記の27 m m機関砲、37 m m機関砲共々連装架に乗せられ艦載・車載兵器として運用されている。

銃の開発企業

モーゼル&グロスフス (M & G)

株式会社ヘツケラー工業

コッホ製作所

エクリプセ武器弾薬製造社 (E W M)

カール・ヴァルター社 (ヴァルター)

エアハルト金属製品・機械製造株式会社

皇国陸軍兵器工廠 (R A W)

歩兵銃

RAW M895

モデルはマンリツヒャーM1895。

口径8mmのストリートプルボルトアクション歩兵銃。

精度と連射性が高く制圧能力が列強の歩兵銃より高い。が、コストも高い。

M&G M908

モデルはシグ モンドラゴンM1908自動小銃。

ゾラ初の自動小銃。複雑な機構を有していたため価格が高く

泥濘に弱いという弱点を抱えている。その為、都会での治安維持に使われていたが、大戦の勃発に伴い前線でも使用されるようになった。高性能だが汚れに弱いことが災いし、故障率は多かった。

それでもインベーターとの戦闘では緒戦から終盤まで活躍した。

コツホ Stg919

強襲砲をベースに開発した突撃銃。弾倉が上部に存在する等軽機関銃のような外見だが、

重量はこちらが軽く取り回しも良好。

価格や新型弾薬を消費する関係で近衛兵と一部の精鋭部隊のみの配備にとどまっている。

短機関銃

ヘツケラーMP16

モデルはメトロ2033のバスタードマシンガン。

ゾラ初の短機関銃。生産性を第一に作られ、構造が単純で生産が容易。

弾丸を銃本体の横から三十発の保弾板を差し込み射撃する。高い発射レートを持つが、汚れに弱くオーバーヒートやジャムを起こしやすい。

M&G MP18

モデルはベルグマンMP18。

MP16と比べ、高価だがしっかりとした作りで扱いやすく安定した性能を持つ。

RAW MP28

MP18の改良型。セレクターや弾倉が改良されている。

散弾銃

ウインスターM897/Sf915

モデルはウインチェスターM1897がモデル

合衆国から輸入したポンプアクション式散弾銃。

元は狩猟用途で使用されていたが、インベーターとの戦いで私物で持ち込まれたものが接近戦に

威力を発揮。これを認めた軍が915年に正式採用を決定した。

元はレバーアクション方式の散弾銃をそのままポンプアクション方式にしたので撃鉄が

露出しており、排莖カバも無いためそこが原因の不具合が度々発生した。

ウインスターM912/Sf917

モデルはウインチェスターM1912。

合衆国から輸入した散弾銃。M897を更に洗練させ、露出していた撃鉄を内蔵すること

ことで撃鉄由来の不具合を解消している。

こちらも私物が戦闘で少数使われていたが、ウインスターM897の採用を受け、合衆国から軍が多数輸入した。

EW M Sg916

外観モデルはメトロク2033のバイガン散弾銃

ウインスターM897/Sg915とウインスターM918/Sg917で散弾銃

の能力を認めた軍が

速射性能と高い生産性を求めて開発した六つの銃身を持つ戦時量産型リボルバー散弾銃。

作動方式はダブルアクション式。ガトリング砲のような見た目だが連射はできない。装填時は各銃身後部からショットシエルを一発ずつ装填する。

材料にパイプや自転車の部品を使用しており、民間の中小企業でも生産できるため、量産性は高いが突貫で開発された為使いづらい等の欠点はあったものの故障しづらいため現在でも運用している。

拳銃

ヴァルター M898

外観モデルはラスト&ガツサーM1898

リボルバー拳銃。小口径の弾丸を使うため、装弾数が八発と多め。威力が低く警察や憲兵で主に運用されている。

ヴァルターM907

外観モデルはステアーM1907。

エクリプセ初の自動拳銃。マニュアルセーフティはついておらず代わりに引き金を

重くすることでセイフティの代わりとしている。装填はクリップで固定弾倉に上から装填する。ストライカー方式の拳銃。

スライドは存在せず、代わりにボルトノブが後部に存在しておりこれを引つ張りながら

引き金を引くとコッキングされる。

EW M P 0 8

外観モデルはルガーP 0 8。自動拳銃として初の弾倉給弾方式を採用した。命中精度が高く扱いやすいが、部品点数が多く汚れに弱い為整備が難しい。

シオルダーストックと3 2発入りスネイルマガジンを着けたカービンは都市部や塹壕、森林などの閉所での近接戦闘で高い評価を得ている。

M & G M 9 1 2

外観モデルはステアーム1 9 1 2

ヴァルターM 9 0 7を参考に開発された自動拳銃でスライドとハンマー、マニユアルセーフティがついた。

しかし、装填がクリップで行われるなど旧態依然とした部分もある。

派生型にフルオートへの切り替え機能がついたマシンピストルが存在し、ホルスターをシオルダーストックとして装着可能。

装弾数が八発と少なく、一連射で弾切れになる為、グリップを延長し装弾数を十六発に改良したタイプも開発された。

対戦車ライフル

ヘッケラーM913

13mm対装甲弾を放つ。反動はきつく装弾数も一発しかないが、装甲化された標的には効果のある数少ない火器。トーチカ等の陣地にも有効。

外観モデルはマウザーM1913

機関銃

エアハルトMG08

水冷式機関銃。重機関銃として陣地防御に投入される。

対空火器としても運用されている。

外観モデルはMG08重機関銃。

エアハルトMG14

空冷式機関銃。元々は航空機搭載用の機関銃だったが、軽機関銃としても運用。

外観モデルはパラベルムMG14

ヘッケラーMG924

外観モデルはオチキスM1929機関銃

フランク連合の新型の13.2mm重機関銃をエクリプセのヘッケラー社が改造、生産したもの。

対空、対地両方のあらゆる目標に対し高い効果を発揮する。

三〇発入り箱形弾倉で給弾する。

エクリップセ皇国海軍戦力

現代の基準で地^{グリーンウォーターネイビー}域海軍に分類される。

エクリップセ皇国は島国だが、海軍については陸軍と空軍と比べ予算は一番少ない。そして周辺国のブリタニアやフランク連合等の大国が強力な海軍を保有しており、両者に挟まれているエクリップセは必然的にそれらに対抗しうる戦力を模索。しかし国力の小さなエクリップセでは周囲に合わせて海軍を増強するとかかなりの負担となるため、エクリップセ海軍は史実日本軍のような漸減迎撃を行い、決戦海域で敵部隊を海軍の総力をもつて叩き上陸の意図を挫き、失敗した場合は空軍と陸軍を主体に立案された水際作戦による防衛計画を支援することを戦闘教義とした。

インベーターとの大戦後は一変して、大戦中に他の戦線へ兵力の派遣を行ったことから、遠方への派遣も視野に大型艦艇や補給艦艇の導入に舵をとった。

空軍の飛行艦隊と比べ活動や装備の更新は低調きみ。

各艦艇で使用されている機関は主に石炭を燃料とするレシプロ機関だが、潜水艦のみディーゼル機関を使用。

また、殆どの艦が飛行歩兵を搭載可能。但し巡洋艦以下のクラスの艦は必要に応じて

少数搭載可能だが、本格的な運用は不可能。

第一艦隊

戦艦が主力の打撃部隊

第二艦隊

装甲艦と巡洋艦が主力の部隊。

第三艦隊

航空母艦が主力の機動部隊

第四艦隊

哨戒艦艇主体の警備艦隊

目次

兵装

航空母艦

戦艦

装甲艦

巡洋艦

駆逐艦

フリゲート

潜水艦

哨戒艦艇

航空機

兵装

※L／○○とは後継の長さの表記。

SK／L46 30.5cm砲

ブリタニアの艦砲を基に開発した戦艦の主砲。

SK／L51 28.3cm砲

水上での通商破壊作戦用の艦艇の主砲として開発した。

現在ではアンゲラ・プレツチエ級装甲艦にしか採用されていない。

SK/L50 21cm砲

重巡洋艦向けに開発された純国産の艦砲。

SK/L50 15cm砲

軽巡洋艦向けに開発された艦砲。対空目標に対応できるように仰角は高く取れるが、装填時は水平角度でなければ装填できない。

SK/L52 12・8cm砲

後述の47口径7・5cm砲の後継として開発された駆逐艦用の艦砲。

水上目標に高い能力を発揮するが、対空射撃は考慮していない為、仰角は大きくない。巡洋艦以上の艦艇の副砲向けに連装砲も開発された。

SK/L56 8・8cm砲

海軍の両用砲。弾薬自体は陸軍と共用できるが、砲は海軍の艦艇の為に新規に開発された。

小型艦艇の主砲や副砲と対空砲としても運用する。

SK/L47 7・5cm砲

エクリプセで開発された旧式の艦砲。元々は駆逐艦や哨戒艦艇等の主砲として開発された。

現在では潜水艦の主砲か副砲としても運用されている。また、地上に揚げられ基地の陸戦隊向けに改造されて運用されている。

SK/L60 5.7cm砲

前世紀に水雷艇迎撃用の近接火器として開発された速射砲で

戦艦から哨戒艦艇まで様々な艦に搭載された。現在では近接火器としての任務を機関砲に譲り、

小型艦や潜水艦の主砲か副砲、陸戦隊の装備として運用されている。

3. 7cm機関砲

2. 7cm機関砲

2cm機関砲

1. 3cm機関砲

陸軍の採用している機関砲の海軍仕様。防塩処置を施している。

8mm機関銃

エアハルトMG08。水冷式機関銃。対空火器として運用されている。

51cm魚雷

主に戦艦と巡洋艦に搭載される魚雷。

威力、航続距離共に（エクリプセ基準で）高いが、価格も高い。

46cm魚雷

駆逐艦や潜水艦、哨戒艦艇等の小型艦艇に搭載される魚雷。

威力は低い但し価格が抑さえられている。また、小型な事から予備弾を多く搭載しやすい。

爆雷

水中目標に対抗できる唯一の兵装。当初は投下軌条を使っていたが、

大戦末期から爆雷投射機を採用。徐々に置き換えている。

爆雷投射機は両舷用と片舷用の二種類が存在。

航空母艦

ゾラで運用が始まったばかりの艦種。その為黎明期の空母独特の個性的な艦がそろっている。

命名規則はエクリプセの政治家から

ミニスター・シッフアー級航空母艦

速力

32.8 kt

武装

SK/L56 8.8 cm対空砲×2、2.7 cm機関砲×4、2 cm機関砲×3、8

m m連装機関銃×4

艦載機

航空機×34、飛行歩兵×48

エクリプセ初の航空母艦。三段式航空母艦。上段が着艦用、中段が小型機やワイバーンの発進用。

下段が大型機の発進用と分けられている。

艦橋が甲板中央に鎮座している為、着艦がかなり難しい。

ミニスター・エックホーフ級航空母艦

速力

30.4 kt

武装

SK/L50 21cm連装砲×4、SK/L50 15cm単装砲×6、SK/L56 8.8cm対空砲×8、

2.7cm機関砲×6、1.3cm機関砲×4

艦載機

航空機×17、飛行歩兵×32

設計当時の航空機の航続距離が低く、母艦自身も砲撃戦に入る状況が十分に考えられた為、

母艦としては個艦での戦闘能力を極めて高く設計された。

艦橋前後と艦首と艦尾に21cm連装砲を四基装備し、両舷に15cm単装砲を六基装備する。

反面艦載機の搭載量は少ない。

戦艦

戦前は四隻しか保有していなかったが、戦中から戦艦六隻の保有を目指し、

現在はヒルデベルト・エーデルマン級戦艦を主力として運用する為、配備を進めている。

命名規則は軍人の名前から。

アトミラール・フィッツェンハーゲン級戦艦

速力

19 kt

武装

SK/L46 30、5 cm連装砲×2、SK/L50 15、0 cm単装砲×8、

SK/L52 12、8 cm連装砲×4、SK/L56 8、8 cm連装対空砲×6、

1、3 cm連装機関砲×6、1、3 cm機関砲×4、8 mm機関銃×9、艦首51 cm

魚雷発射管×4、衝角

艦載機

飛行歩兵×12

前弩級戦艦に分類される。大戦序盤に一番艦が自身の大破と引き替えに、衝角攻撃で

人類初の怪獣撃破の戦果を挙げた。大破した一番艦は総員退艦後に自沈。

戦中に近代化改装を受け、対空火器の増設や不要な装備を撤去した。

但し魚雷と衝角はインバーダーの怪獣対策のため残されている。

転移前に退役が決まり、後継となるアトミラール・エーデルマン級戦艦の配備を持つて

退役する予定。

アトミラール・ザンダー

アトミラール・ヒルシユ級戦艦

速力

24.6 kt

武装

SK/L46 30.5 cm連装砲×2、SK/L50 15.0 cm単装砲×6、

SK/L56 8.8 cm対空砲×8

1. 3 cm機関砲×13、8 mm機関銃×7

艦載機

飛行歩兵×12

戦前に巡洋戦艦が流行り、それに伴いアトミラール・フィッツェンハーゲン級戦艦の設計を

ベースに速力向上を目的に改良され建造。前弩級巡洋戦艦に分類される。

改アトミラール・フィッツェンハーゲン級戦艦とも言われた。

原設計からの主な変更点は、装甲と武装を減らし重量を軽減。

接近戦になりやすい衝角と魚雷を廃止して被弾のリスクを減らし、更に船首の形状を変更し機関を

増設することで速力を増やした。

戦中に竣工するも、艦隊戦ではなく上陸戦における火力支援で活躍。
洋上での戦闘は航空機以外経験していない。

アトミラール・ヒルシュ

アトミラール・ハーマン

アトミラール・エーデルマン級戦艦

速力

21 k t

武装

S K / L 4 6 3 0 . 5 c m 連装砲 × 4、S K / L 5 0 1 5 . 0 c m 連装砲 × 4、
S K / L 5 6 8 . 8 c m 連装対空砲 × 6、

3 . 7 c m 機関砲 × 6、2 . 7 c m 連装機関砲 × 1 7、1 . 3 c m 三連装機関砲 × 8、
衝角

艦載機

飛行歩兵 × 1 6

エクリプセ海軍初の弩級戦艦で戦後に竣工した次期主力戦艦。

対空戦も考慮しており、敵の攻撃で誘爆し易い魚雷を撤去した代わりに対空火器を多数装備する。

怪物に対して衝角攻撃が有効と判断され衝角が復活した。

次期主力戦艦として二番艦が建造中。

アトミラール・エーデルマン

装甲艦

新たに開発された艦種で、所謂航空戦艦に分類される艦種。通商破壊と通商防護を主任務とし、

任務の特性上単独かつ長期間の行動になる為、居住性が高い。命名規則は戦艦と同じ。

アトミラル・プレツチュ級装甲艦

速力

28 k t

武装

S K / L 5 2 2 8 . 3 c m 連装砲 × 2、S K / L 5 2 1 2 . 8 c m 連装砲 × 3、

S K / L 5 6 8 . 8 c m 連装対空砲 × 4、S K / L 5 6 8 . 8 c m 対空砲 × 6、

5 1 c m 三連装魚雷発射管 × 2、

2 . 7 c m 連装機関砲 × 6、2 . 7 c m 機関砲 × 6、1 . 3 c m 三連装機関砲 × 1 1

艦載機

航空機 × 1 2、飛行歩兵 × 2 0

装甲艦のフラッグシップとして建造。砲撃能力は控えめだが、装甲と速力に重きを置

いた艦。

戦艦と比べ多くの航空機や飛行歩兵の運用が可能で広範囲を索敵可能。更にある程度の補給物資を積み込み可能で、随伴艦艇等の補給に用いられる。

アトミラール・プレツチュ
アトミラール・ガーランド

巡洋艦

航続距離に優れ、戦艦に次ぐ攻撃力を持つ。

戦後に巡洋艦の類別が一新され、エクリプセでは武装の量で重巡洋艦と軽巡洋艦に分類している。

命名規則は著名な民間人

アルフォンス・ベールケ級軽巡洋艦

速力

31 k t

武装

S K / L 5 0 2 1 c m 連装砲×2、5 1 c m 連装魚雷発射管、S K / L 5 6 8 .
8 c m 連装対空砲×2、

3 . 7 c m 連装機関砲×4、2 c m 連装機関砲×8、2 c m 機関砲×5、1 . 3 c m
機関砲×4

戦前に装甲巡洋艦として建造された艦型で戦後に軽巡洋艦に再度類別された。

水雷兵装を最低限に砲撃能力を重視した艦だが、戦中に改修され対空火力が増強され
た。

マルレーネ・デューゼル級重巡洋艦

速力

3 3 k t

武装

S K / L 5 0 2 1 c m 連装砲×3、S K / L 5 0 1 5 c m 連装砲×2、S K / L
5 6 8 . 8 c m 連装対空砲×2、

S K / L 5 6 8 . 8 c m 対空砲×6、3 . 7 c m 連装機関砲×6、2 . 7 c m 機関
砲×8、

2 c m 機関砲×7、1 . 3 c m 機関砲×9

当初は防護巡洋艦として計画されたが、エクリプセで巡洋艦の分類が変更されたため重巡洋艦となった。

戦中の改修で魚雷を完全に撤去し、砲兵装と対空火器を充実させた。

陸海空の目標に対応可能で汎用性が高い。

ヨナス・ファイアージンガー級重巡洋艦

速力

37 k t

武装

S K / L 5 0 15 c m 連装砲 × 3、S K / L 5 6 8. 8 c m 連装砲 × 2、5 1 c m 四連装魚雷発射管 × 2、

5 1 c m 三連装魚雷発射管 × 6、2 c m 機関砲 × 4

元々は防護巡洋艦だったが旧式化にともない重雷装巡洋艦に改装。

中心線に5 1 c m 四連装魚雷発射管を二基装備し、両舷に三基ずつ5 1 c m 三連装魚雷発射管を搭載。

全て合わせて二六門の発射管を搭載し、片舷だけで一七本の魚雷を斉射できる。

ザブリーナ・ゼルチュルナー級軽巡洋艦

速度

34.8 k t

武装

SK/L50 15cm連装砲×3、51cm三連装魚雷発射管×3、13cm機
関砲×5、8mm機関銃×2、

爆雷投射機

戦後に採用された新型軽巡洋艦。大型化した駆逐艦のような艦形をしており駆逐艦と共に突撃し、敵艦に雷撃を行うことを想定された。

駆逐艦

航続距離は少ないが、高速性能と魚雷等の強力な武装を有し、

戦前は砲戦型駆逐艦と水雷型駆逐艦の二種類を並行して配備しており海軍戦力の一角を担っていた。

しかし、対空能力が低かったためガンシップからの空襲により次々と撃沈していった。

戦後はその戦訓を活かした駆逐艦を配備中。命名規則は気象と現象

ドンナー級駆逐艦

速力

33 k t

武装

S K / L 5 2 1 2. 8 c m 単装砲 × 2、S K / L 4 7 7. 5 c m 連装砲、S K / L 6 0 5. 7 c m 単装砲 × 4、8 m m 機関銃 × 5

砲戦重視し、魚雷を搭載していない。

艦橋前に12. 8 c m 砲、後ろに12. 8 c m 砲と7. 5 c m 砲を混載している。

主力として量産されたが、対空能力の貧弱さが災いし、大戦では多数撃沈された。

ペー級駆逐艦

速力

34 k t

武装

S K / L 5 2 1 2. 8 c m 単装砲、S K / L 6 0 5. 7 c m 連装砲 × 2、4 6 c m 三連装魚雷発射管 × 1、

46cm連装魚雷発射管×2、8mm機関銃×6

魚雷戦を重視した駆逐艦。大戦ではガンシップからの空襲により魚雷発射管に被弾して誘爆し

そのまま沈む事例が多発した為、残存艦はドンナー級より少ない。

フォルモント級駆逐艦

速力

36.5kt

武装

SK/L52 12、8cm単装砲×4、46cm三連装魚雷発射管×3、3.7cm連装機関砲×2、

2.7cm機関砲×4、8mm連装機関銃×7、爆雷投射機

戦後を担う新型駆逐艦で従来では二種類に分けられていた駆逐艦を統合する目的で建造。

大戦での戦訓を活かし対空火器もできる限り搭載された。

秋津洲が建造した新型駆逐艦を参考に溶接を多用し、艦体の軽量化に努め、更に新型機関を採用。

これにより従来の駆逐艦と比べ、兵装搭載量と外洋航行能力が格段に向上し、不可能だった航続距離と兵装搭載量の両立を行った画期的な駆逐艦。

ブリッツ級駆逐艦

速力

36 k t

武装

S K / L 5 2 1 2 . 8 c m 単装砲 × 2、S K / L 5 6 8 . 8 c m 連装砲 × 2、3 .

7 c m 連装機関砲 × 3、

2 . 7 c m 機関砲 × 4、2 c m 機関砲 × 4、1 3 m m 連装機関銃 × 7、爆雷投下軌条
防空駆逐艦でフォルモント型と似た設計で溶接を多用。

雷装を搭載せず、代わりに対空火器を充実させた。

信管や照準器についても最新の物が備わっている。

しかし、対空火器の積み過ぎで若干トップヘビー気味で爆雷投射器も搭載をあきらめ
代わりに爆雷投下軌条を搭載した。

フリゲート

輸送船団の護衛任務の為、建造された航洋型護衛艦。

主に居住性能と航続距離と量産能力を重視しており、構造は単純でコストも安価だが、

武装や速力は駆逐艦と比べると控えめな為、戦闘能力は駆逐艦と比べると低い。

飛行歩兵を航空戦力の代わりに数名ほど搭載し、索敵能力を上げている。

これによりフリゲートのみで艦隊を組むことで、空母なしでもある程度の制空権を確保が可能。

多数建造されている事と長い航続距離と飛行歩兵の運用能力を保有する事から哨戒任務にも用いられる。命名規則は動植物。

ツイトラス型フリゲート

速度

16 k t

艦載機

飛行歩兵×6

兵装

SK/L56 8. 8cm連装砲×2、3. 7cm連装機関砲×2、2cm機関砲×4、8mm機関銃×6、爆雷投下軌条

対空能力を重視し、機関砲を多数搭載している。

飛行歩兵の運用能力は高いが、ややトップヘビー気味で揺れが大きい。

キーフアー型フリゲート

速度

18.4kt

艦載機

飛行歩兵×2

兵装

SK/L56 8. 8cm連装砲×3、2. 7cm機関砲×2、

1. 3cm機関砲×4、8mm連装機関銃×2、爆雷投射機×2

駆逐艦の設計をベースに建造したフリゲート。爆雷投射機を複数装備した事で

両舷に対潜攻撃を行える。対空火器が減らされたが、代わりに8. 8cm連装砲を一

基追加し、

砲撃能力が増した。また、機関も増設された為、速度も上昇した。

反面飛行歩兵の運用能力は最低限になった。

潜水艦

周辺国と比べ、多くの潜水艦を保有している。

戦前に周辺国と比べ海軍戦力が小さかったエクリプセ海軍は、当時新兵器だった潜水艦による

待ち伏せ攻撃で侵攻してきた艦隊の出鼻を挫く意図で潜水艦の大量配備に踏み切った。

大戦ではその隠密性を活かして占領地域への潜入や監視、哨戒などで活躍した。

命名規則は外洋型がU k |。沿岸型がU p |となっており、後ろには進水順に番号が入る。

平行して建造したり、古い艦型の潜水艦が進水する前に新しい潜水艦が進水する為、一つの潜水艦型の艦名一覧を見ると幾つか番号が飛んでいるように見える。

外洋航行型

Uk—1型

速力

水上／水中 11kt／4.7kt

武装

51cm魚雷発射管×2、51cm艦尾魚雷発射管、SK／L47 7.5cm砲、

3.7cm機関砲、8mm機関銃

大戦直前に竣工したエクリプセ初の外洋型潜水艦。外洋型潜水艦の試作品として建造され、

武装を控えめに航続距離を重視した。大戦で一隻を残し喪失している。

Uk—4型6

速力

水上／水中 12.5kt／5kt

武装

51cm艦首魚雷発射管×4、51cm艦尾魚雷発射管、SK／L47 7.5cm

砲、2・7 c m 機関砲×2

大戦中に就役したU k | 1 型の後継。U k | 1 型の設計を流用しつつ大型化し、魚雷発射管と対空火器の増設や航続距離と居住性能等多岐に渡って改善されている。

また新たに機雷戦能力を獲得した。

沿岸警戒型

U p | 1 6 型 1 3

速力

水上／水中 1 7 k t / 5 . 6 k t

武装

4 6 c m 艦首魚雷発射管×2、

大戦後半から建造されている沿岸型潜水艦。主にゲリラ戦や偵察、監視。工作員の輸送が任務。

U p | 2 9 型 5

速力

水上／水中 1 5 . 5 k t / 8 k t

武装

46cm艦首魚雷発射管×4、46cm艦尾魚雷発射管、1.3cm機関砲×2
 水中速力を重視した設計。1.3cm機関砲は潜航中は分解された状態で格納され
 ており

浮上時に甲板にある銃架に設置される。

Up|37型18

速力

水上／水中 14.3kt／6kt

武装

46cm艦首魚雷発射管×2、2cm機関砲×2

Up|29型とほぼ同じ設計で武装を大幅に削減した代わりに、機雷戦能力を獲得し
 た。

哨戒艦艇

沿岸部の哨戒を主任務とし、魚雷艇等の高速戦闘艇も分類される。

哨戒艦は、平時に於ける海上での取り締まりや治安維持活動を目的に建造されている。戦闘能力は低いものの高い巡航速度と救助設備を備えており、建造コストも極めて安い。

高速戦闘艇は小型な船体を活かし、単独か少数で遊撃戦を敵艦隊並びに上陸した敵部隊へ行う。

大戦時では、初期にエクリプセを攻撃したインベーター相手に奮戦するも、制空権を取られた上に物量と火力で圧倒され単独や少数での行動は取れなくなり、

特に哨戒艦は元々戦闘能力が低かった為次々と撃沈され、全滅した。

命名規則はP＋任務符号＋番号となっており任務符号は高速戦闘艇ならAとそれぞれの武器を示す文字が表記される。

哨戒艦↓Patrouillieren Kreuzer

魚雷艇↓Patrouillieren Torpedoboot

砲艇↓Patrouillieren Kanonenboot

駆潜艇↓Patrouillieren U-Jagdboot

PK—186型哨戒艦

速力

34 kt

武装

SK/L47 7.5 cm単装砲、3.7 cm連装機関砲×2、3.7 cm機関砲×

2、1.3 cm連装機関砲×2、8 mm機関銃×6、爆雷投射機

戦後初の哨戒艦で平時での取り締まりや国境警備、救難任務を目的に建造。

大戦時に武装が少なかった前型の哨戒艦が全滅した戦訓から

武装を対空火器を中心に大幅に強化した。

PAT-132型魚雷艇

速力

42 kt

武装

46 cm魚雷発射管×4、2 cm機関砲、8 mm連装機関銃×2

大戦前に建造された魚雷艇。

魚雷戦に割りきった装備で攻撃力と高速力を両立させた。

しかし、対空能力が低かったことが災いし、インペーダーとの戦闘では

ある程度の戦果を挙げたものの航空戦力の前に甚大な被害を被った。

PAT—172型魚雷艇

速力

38kt

武装

46cm連装魚雷発射管×2、2cm連装機関砲×2、1.3cm機関砲、8mm機関銃×4

大戦中に建造された魚雷艇。インバーダーの航空戦力の前に甚大な被害を被ったPAT—132型魚雷艇の戦訓を受け、船体を若干大型化し、分散配置されていた魚雷をまとめ、

空いたスペースに対空火器を増設した。

PAK—110型砲艇

速力

40.2kt

武装

SK/L52 12、8cm単装砲、SK/L47 7、5cm砲×2、8mm機関銃×4

駆逐艦の補完と陸軍への火力支援を目的に建造された。大戦では上陸したインベードーに対して

陸軍と協同で攻撃を行うもガンシップからの攻撃で大打撃を被った。

PAK—146型砲艇

速力

39kt

武装

SK/L52 12、8cm単装砲×2、2cm連装機関砲、2cm機関砲×2、8mm機関銃×2

大戦での戦訓から対空火器を増設した。駆逐艦と他の哨戒艦艇の増勢、充実化によりエクリプセの砲艇は本型をもって建造を終了することが決定した。

P A U — 1 型 駆 潜 艇

速 力

2 8 k t

武 装

爆 雷 投 射 機、 3 . 7 c m 機 関 砲

エ ク リ プ セ 初 の 駆 潜 艇。

P A U — 1 2 型 駆 潜 艇

速 力

2 8 k t

武 装

爆 雷 投 射 機、 3 . 7 c m 機 関 砲、 2 c m 連 装 機 関 砲 × 2

P A U — 1 型 駆 潜 艇 の 改 良 型。

航 続 距 離 や 内 装 を 中 心 に 改 良 し た 為、 外 見 は P A U — 1 型 駆 潜 艇 と 変 わ ら ない。

航 空 機

予 算 の 関 係 で 空 軍 機 を 流 用 し た も の が 殆 ど で 空 母 と 同 様 に

艦上機のノウハウを手探りで獲得しつつある。

現在既存機の改造や流用ではない、新規の艦載機を開発中。

艦載機

V-15 アドラー

防錆・防塩加工を施されている以外は空軍と同じ。

艦上追撃機として配備中。

V-7 ピラート

アドラーが高価なため、アドラーの不足を補うためと艦上追撃機として採用。

整備性の良さから現場でも評判は良い。

アドラーと同じく防錆・防塩加工が施されている以外は空軍と同じ。

I-3 ルクス・カラバ

U/I-3 ルクスの降着装置をフロートに換装した水上機。

フロートが装着された事で飛行性能が悪化したため、偵察や観測などの任務を専門に行う。

愛称がヤマネコを意味するルクスで、そこからフロートを靴に例えて、カラバと着け

られた。

カラバとは童話に登場する主人公の偽名。

U-1ヒンメルファウスト

艦上制圧機だが、情報機として偵察任務も行う。

ワイバーン

陸上機

A-2ドラツヘ

魔法機士一覧

エクリップセ語での表記は *MagischArbeiter* で読み方はマジツシューアーバイター。

漢字表記で魔法機士

惑星ゾラで運用される人型ロボット。エクリップセ皇国が開発した魔法機械で、元はゴーレムの後継を目指して開発されたもので、魔法の発展や文明の機械化に伴いロボットのような外見になった。

魔力エンジンという魔石と呼ばれる魔力を含んだ鉱物を燃料に動くエンジンで駆動する。

他の陸戦兵器とは一線を画する運動能力とヘリコプターと変わらない移動速度を發揮し、

防御力は素の状態でフルサイズのライフル弾の銃撃を防ぎ、魔力防壁を展開すること

第一世代主力戦車並みの防御力を発揮する。この為生存性は現代戦に使える程高い。また、元々が作業用のゴーレムの後継として開発されるだけあって汎用性が高く様々な任務に対応できる。

エクリプセでは重量級、中量級、軽量級の三タイプに分類しており、重量や装甲、積載量が違う。

ハードポイントは全機種共通で両前腕、両肩、腰、両太腿に存在し、機体によっては更にハードポイントが増設され、一部を除き共通して頭部に照明が着いている。

MVHと同じく魔力障壁は一方向にしか展開できない。

伝達機構

魔法機械混合方式

操縦席から機体に張り巡らされたケーブル、滑車、ロッド等の伝達機構と機体各所に設置された

補助魔法陣で構成されるシステムで、操縦席から伝達機構を通して機体各部位に入力された

動作を、魔法で補助する伝達方式。魔法の源となる魔力は搭載されたエンジンから供給される。

最初期から運用されている魔法機士の伝達機構で信頼性が高く扱いやすい。

部品の数が多いため整備がやや手間が掛かるものの専門的な技能等は要らず部品も確保しやすい。

欠点として細やかな動きや鋭い動作が苦手。機械の設置にも場所を取ってしまう事が挙げられる。

Operation By Magische Kraft オペレーションバイマジッククラフト

ケーブルの代わりに操縦席から神経のように魔力伝達管を各部位に張り巡らせ、入力から動作の反映までの時間を少なくさせ、細やかな操作を可能にした。

魔法機械混合方式と比べ場所を取らず、伝達機構の多重化が可能となり、被弾時の機能低下を

抑えられるようになった。部品が少ないため、整備性が向上している。

そして魔力消費が魔法機械混合式と比べ減っている等の利点がある。

欠点として魔力伝達管が非常に高価な素材でできており数がそろえにくい。デリケートな為扱いに専門的な技能が必要な事と、パイロットの操作に鋭敏な反応をするた

め、慣れないと機体の動作に振り回され安い事が挙げられる。

機種

軽量クラス

ジーク

世界初の魔法機士。若草色の塗装。開発者の名前が命名由来。

モノアイで頭部はフリッツヘルメットのような形状をしており、全体的に武骨で洗練されておらず、機構が剥き出しな部分があり、細身な外見をしている。

軽量小型で運動性能が高く、開発当時から蓄積された運用実績により信頼性は高い。後に改良されて各種性能が向上するも根本的な性能向上はジークⅡの開発によって完了した。

Ⅱ型と共に民間にも広く普及している。

ジークⅡ

固定兵装

頭部機関銃×2

頭部はさほど変わらないが、機体のスタイルが変わっており、剥き出しな機構が完全に覆われ

魔力伝達パイプが所々走っている。

ブースターの換装と外装への魔力伝達パイプの増設により内部に余裕ができ、様々な改良を施された結果機動性能と空中性能が格段に向上した。

汎用性が高く様々な任務に投入される他、長い間運用されている為、様々なバリエーションが存在する。転移時では旧式化していたが数の上では主力。

また、運用スペースが限られる飛行艦艇では小型軽量な事から主力艦載機として運用されている。

軍民間わず幅広く活躍している。

ジークIIカノーネ

固定兵装

頭部機関銃×2

ジークⅡの砲戦仕様。従来のジークでは搭載不可能だった大型兵装の搭載も可能になり、

弾薬や兵装の搭載量を大幅に増加させた。

また、砲撃の衝撃を吸収するために脚部の強化と姿勢安定用ジャッキを追加。これらの改修により重量が増加したため、移動速度や格闘能力は低下した。

グフー

固定兵装

頭部機関銃

格闘戦用スパイク

極東の秋津洲帝国の協力を得て開発されたジークⅡの運動性能改修型。大まかな外見はジークⅡに似ているが、格闘戦用スパイクが手足や関節に装着されており、刺々しい外見となっている。

各部分の軽量化や新型の操縦系統のO B Mを搭載することで高い反応と運動性を得た。

また、軽量化により輸送機械やインフラへの負担や高出力のブースターを搭載するこ

とで跳躍能力や地形走破能力と加速能力も向上した。

ただ、魔力消費が増えてしまい稼働時間が短くなってしまうた。

並みの一般兵では扱いきれない程の操作性となったためエース専用の局地迎撃機となつている。

ドムス

固定兵装

頭部機関銃×2

ジークIIの機動性能向上機体で新たにホバー能力を獲得した。

外観は上半身は細いが、やや太めの脚部を持つ。

この太めの脚部が足元に空気の流れを限定する特殊な結界を展開制御する機構となつており、

水上や地上をホバー移動することができる。この為陸上戦から海戦まで幅広い戦場で使用される。

砲撃時は反動制御のためホバーを停止する為、地上や船舶の甲板に足を地に着ける必要がある。

中量級

フツケバイン

固定兵装

M k. I

頭部重機関銃×2、思念式戦輪・思念式誘導弾複合発射機

M k. II

頭部重機関銃×2

軍隊におけるジークの後継の一つでエース専用のM k. Iと一般兵用のM k. IIが存在する。

大戦前に発案された中量級汎用機開発プラン、五号計画に基づき開発された。機体の大型化に伴いハードポイントの増設とウエポンベイの新設が行われた。これにより兵装の搭載量が増えた。

先行量産型のM k. IはデュアルアイセンサーにV字型アンテナで角を多用しながらも

スマートなスタイルでヒロイックな外見をしている。機体設計に余裕があるため、発展性が高い。

フツケバインMK・Iの固定武装として頭部に重機関銃二挺と両肩に思念式戦輪・思念式誘導弾複合発射機を内蔵しているが、パイロットに求められる操縦技量と思念兵装の適正があまりにも高くMk・Iはエース専用となった。

この際デザインが現在の者に改められ、士気高揚のシンボルとしての役割を与えられている。

続くMk・IIは性能をデチューンし、一般兵でも扱いやすいようにした。頭部には、顔面にゴーグル状のセンサーのみとシンプルなデザインで右側頭部からアンテナが伸びる。

肩も思念式戦輪・思念式誘導弾複合発射機が無くなったため小さくなっている。

固定兵装も頭部重機関銃のみの為、肩に兵装や弾薬を搭載できるようになった。

中量級なので前任のジークIIより重いものの内部の伝達機構や出力向上により総合性能では

フツケバインが上。

ゲシユペンスト

固定兵装

思念式戦輪発射機

空挺作戦や偵察等の特殊作戦を目的に開発した機体で外見は全体的に暗い塗装で跳躍移動や空中での体制を考慮し、

流線型の滑らかなフォルムと背部に着いた翼が特徴で重量は中量級の中では軽い。

頭部は通常用と遠距離用のスコープカメラと魔力式透視カメラが

三つ束ねて着いており優れた索敵性能を持つ。

さらに、魔力式生体センサーで生物も感知可能で、夜間でも照明無しで活動可能。

機体の駆動音が他の魔法機士に比べ、著しく小さい。

静粛性に気を配っているため、ブースターの推力は若干低いが、噴射時間は長く、機体の軽量さと空力特性に優れたフォルムから優れた跳躍移動能力を持つ。

高い精度を必要とする任務に投入される為、細やかな動作も可能だが、機体の強度は低く出力も

低めで各種索敵装備や静粛性に配慮した特有の設計のお陰で製造コストは高い。

固定兵装は音が小さい思念式戦輪発射機しか搭載していない。

ケンプファー

固定兵装

頭部機関砲×2

近接戦闘に重点をおいた機体。防御力を重視しており、被弾経始を採用した丸みを帯びた形状で

頑丈且つ信頼性に優れた構造となっている。

O B Mを採用しているが、増えたスペースは防御力の向上に割り振ったため、搭載能力はフツケバインと比べて少し減っている。

近距離での広い視界を確保するため顔の半分にカメラとセンサーを備えており、その防護のため

バイザーが覆っている。

運動性も悪くなく、格闘でも優秀な記録を持つ。

兵装と装甲で重量があるため跳躍能力が若干低い。

重量級

グリユンガスト

固定兵装

魔力砲、頭部機関砲×2

重装汎用機。

ブリタニアと共同開発したエクリップセ初の重量級で搭載能力と防御力を重視した機体。

太い手足と胴を持ち、後の重量級と比べてハードポイントの数も多い。

固定兵装に頭部に機関砲を二挺。胸部に魔力砲を装備する。

汎用性が高く射撃戦や砲撃戦だけでなく格闘戦も行える。

ゼーレゲヴェネン

固定兵装

魔力砲

重装近接機。

重量級でありながら運動性能を追求した意欲作。重装甲であると同時に格闘機であり、

装甲で敵の攻撃を防御しつつ至近距離まで近づき格闘戦や近距離での射撃戦に持ち込む。

重量からは想像できない程の運動性能を誇り

繰り出される強烈な一撃は軽量級の魔法機士なら確実に破壊される。

反面関節機構に多大な負荷が掛かり、頻繁な交換を必要とする。また、ハードポイントが少なく

兵装と弾薬の搭載量もあまり多くない。

ギカントシルト

固定兵装

魔力砲×2、頭部機関砲×2、球形機関砲塔×2

機動砲戦機

砲戦機としてをホバー移動能力を付与されたために豊富な搭載量を持ちながら高い機動性を誇る。

長距離から中距離での戦闘を得意とし、攻撃と移動を繰り返すヒットエンドラン戦法を行う。

また、移動しながらの砲撃も行える。但し、接近戦能力は低い。

この為近接兵装として頭部の他に左右に首の付け根に球形機関砲塔を装備。魔力砲も連射性能を

重視したものを二門装備している。

怪獣決戦機

ブーテンツバーア

エクリプセの技術の粋を集めて開発された世界初の対怪獣決戦兵器。大きさは怪獣と同程度。

怪獣の脅威にさらされた惑星ゾラの各国は怪獣との戦闘で一番効率的な方法は何かという

問題に直面した。従来の火器では対応に大量の弾薬が必要で、弾薬の補給が問題となった。

これに対しエクリプセでは関係者が考え抜いた結論が怪獣に対して大質量をぶつ続ける事で

確実かつ継続的な打撃を与えること

——即ち怪獣に対して殴り合いを挑むことだった。

怪獣を殴り倒すために作られた破格な重量を持つ胴体を支え且つ迅速に移動させるために

戦車の車体のような下半身をつけられ、移動はキャタピラで行う。戦闘では怪獣との戦いの他に、その巨体を活かして盾になったり、兵装や弾薬を大量に備えて

補給車や火力支援車としても活用された。
名前の意味は猛烈な熊

武装

近接兵装

基本的に近代以前に騎士や歩兵が使っていた刀剣類等を各サイズの魔法機士用に大型化したものが使用されている。機体に内蔵されるが、ハードポイントに外付けする事も可能。

魔法機士の黎明期はスコップやフォーク等の武器も製造された。
現在主に使用されているのは以下の武器。

剣

ナイフ

槍

パイルバンカー

斧

ハンマー

モーニングスター

盾

劍付小手

射撃兵装

頭部内蔵型

頭部に搭載される兵装で大きい順から機関砲、重機関銃、機関銃の三つある。

ハードポイント装着型

基本的にハードポイントから取り出して手で握って運用する。

可動式ハードポイント

射撃兵装を装着したまま射撃を可能にする画期的な装備。

アルムゲヴェーア

腕部に装着して使用される射撃兵装。高い連射力をもつ小口径機関砲で狙って撃つより

近距離で敵にばらまくような運用を想定している。

アルムカノン

腕部に装着して使用される射撃兵装。こちらはアルムゲヴェーアとは反対に大口徑砲弾を発射する。装弾数は少ない。

ピストーレカノン

魔法機士用の自動拳銃で警察等に配備されてるが、軍でも予備兵装として運用されており

専用の小口径弾薬を多数発射する。

リボルバーカノン

リボルバータイプの拳銃でこちらも警察等に配備されてるが

軍でも予備兵装として運用されている。構造が単純且つ頑丈でピストレカノンより威力の高い

弾薬を使用するが装弾数は少ない。

強襲砲

アングリフカノン

魔法機士の主要射撃兵装。大口径機関砲をベースに開発されており、威力は戦車を撃破出来るほど高い。

強襲短砲

アングリフカノンクルツ

片手で射撃可能な強襲砲。威力と射程は小さいが小回りが聞いて取り回し易い。

強襲重砲

アングリフカノンシューアー

三つの砲身を持つガトリング砲で対空から対艦まであらゆる目標にダメージを与えることが可能。

専用の弾薬。バックを肩のハードポイントから吊るして背負う形で装着する為、動作がやや緩慢になり、他の装備も難しくなる。

狙撃砲 シャーフシューツカノーネン

高射砲を基に開発されたオートマチックの狙撃兵装。対空戦も行える。

重狙撃砲 シャーフシューツカノーネンシューアー

所謂対物ライフルに相当する兵器で怪獣や大型機械等の頑丈な目標を

破壊するために狙撃砲を大型化して開発された。

大型化に伴い作動方式がボルトアクション式になった。

多目的砲 マルツウイックカノーネン

様々な砲弾を発射するポンプアクション式の小型砲でチューブマガジンに砲弾が装填されている。

軽多目的砲 マルツウイックカノーネンリヒト

上記の軽量型。単発式で現場で連装や三連装にしたり、アングリフカノンの下部に装着された。

魔力砲

マジツシューアーバイター用に小型化された魔力砲で軽量だが使い捨て。重量級魔法機士では固定兵装として装備しており、至近距離での格闘戦や近距離での攻撃に使われる。

ラケーテンファウスト

口径41cmの大型ロケットランチャー。見た目はパンツァーフアウストに近い。

飛行艦艇に搭載されている51cmロケットを魔法機士用に小型化した兵装。肩のハードポイントにマウントするか、担ぐ形で運用する。

通常の炸裂弾の他に焼夷弾等様々な弾種を発射可能。

シウトウルムシュレック

九連装ロケットランチャー。面制圧を目標とし開発された。

こちらも肩のハードポイントにマウントするか、担ぐ形で運用する。こちらも通常の炸裂弾の他に焼夷弾等様々な弾種を発射可能。

カ
ク
ー
ネ
ン
重砲

魔法機士が運用する大型砲で最大の火力を持つ武器。

戦艦の主砲をベースに作られており肩にマウントして運用する。数機の魔法機士で運用する必要があり、最低でも砲の照準と発砲、装填、弾薬運搬の合計三機が必要となる。

特殊兵装

ハンドグレネード

魔法機士用の手榴弾でポテトスマッシャーに似た形状をしている。

信管を叩いて作動し、六秒経過した後爆発する。

テレキネスチャクラム

パイロットの思念で誘導されるチャクラム。

消耗品ではないため何度でも使用可能で目標に誘導されたあと、目標を切断するが、パイロットの操作で爆破することも可能。

有線誘導型も存在し、こちらの方が制御が容易なため普及している。

但し、製造コストが高く、

制御が難しく扱いにはある種のコツが必要で運用可能な者は限られている。

テレキネスゲシユチヨス

思念魔法で制御される誘導弾。目標に当たると炸裂するが、パイロットの操作で爆破することも可能。こちらにも有線誘導型が存在する。製造が安価で制御も当てるだけとシンプルなため、広く普及している。

ケッテンボム
爆導索

基本的に手持ち式の専用発射機で使用されるが、手持ちで直接振り回す使用方法も存在する。

元々は魔法機士の装備する地雷処理装備として開発されたが、大戦で武器に転用された。

主に密集した集団に対して使われるが、大型の敵に巻き付けて起爆し大ダメージを与える運用も行われた。

第一章「接触——Contact——」

第一話「魔力なき侵犯機」

アルタラス王国。三大文明圏の一つである

第三文明圏の中心地フィルアデス大陸の南に位置するアルタラス島全域を統治する王国だ。

文明圏の外れにあるために国力が低い文明圏外国に分類されるも、

温暖な気候と豊富な食資源により、人口は約1500万人と他の文明圏外国と比べ人口が多い。

魔石と呼ばれる鉱物資源も豊富に採掘出来る為、魔石の輸出により経済的にも豊かで軍隊の能力も他の文明圏外国と比べ、突出して高い。

その日もアルタラス王国の龍騎士は哨戒の為、アルタラス西部の海域を飛行していた。

○ ●

中央暦1939年1月23日

アルタラス王国西部海域

龍騎士ゴタマは相棒であるワイバーンに騎乗し、哨戒活動を行っていた。所属する飛竜隊の中で

一番視力の良いゴタマは何事も見逃さないように視線を周囲に向けていた。

現在の世界情勢では世界五大列強の一つであるパーパルディア王国が急激な拡張政策を採った事で、文明圏外国との衝突が絶えない以外は、アルタラス王国の懸念事項もない。

万が一、パーパルディア王国がアルタラス王国に攻撃を掛けるとしても、北部海域から攻め込む方が首都にも近く皇国の海軍基地からも一番近い。

以上の事からこの海域は仮想敵であるパーパルディア王国が通過する可能性は極めて低く、この哨戒活動はどちらかというと、民間船舶の遭難や海賊の対処、航路を失った船舶の案内など、警察色の強い活動だ。この海域はパーパルディアの脅威はほとんどないので配属された龍騎士は新人が多く、この地で実地活動を行ったあと、各地の飛竜隊に配属される。

「む？ あれはなんだ？」

ゴタマは西の方角に飛行物体を確認した。

基地から離陸する前に聞いた情報では、今日この空域を通過する予定の龍騎士はいない。国内には第三文明圏とは別の文明圏国の列強であるムーの飛行機械と呼ばれる龍とは別の飛行物体が有り、アルタラス王国国内にその空港も存在し、定期的に乗り入れているがこちらにも予定には存在しない。

魔法通信機——魔信で本部に報告を行う。

「ゴタマより本部。西の方角に未確認の飛行物体を確認した。この空域を通過予定の物はそちらで確認されているか？」

間を置いて本部から返信が来た。

『本部よりゴタマ。その空域を飛行予定の物は存在しない。直ちに接近し詳細を知らせ』

「了解」

進路を飛行物体に向けて、接近する。接近するに連れて飛行物体の全容が見えてき

た。

飛行物体は龍ではなく、飛行機械のようだ。機体の色は灰色。

翼に六つの風車——ムーはプロペラと読んでいるものが着いている。

「ゴタマより本部。飛行物体は飛行機械の模様。色は灰色、翼に風車六つ。接近し誘導位置に着いた後、魔信で呼び掛ける」

『本部了解。現在ムーに問い合わせている。詳細がわかるまで呼び掛けと監視を続行せよ』

「了解」

ゴタマはさらに接近する。しかし接近するに連れて、輪郭や機体の細部がはつきり分かるだけで、大きさがそれほど変わってないことに気づき仰天する。

「どうやら未確認機の大きさはムーのものと比べて倍以上に大きいようだ。」

「何て大きさだ。一騎のワイバーンで落とせるか？」

翼に外側から緑、白、赤色で構成された円に交差するように羽と剣が描かれたマークが、

後ろで垂直に生えた翼には三本脚の楕円状の物体が炎で焼かれている絵が描かれている。

恐らく翼に描かれたマークが国籍。垂直に生えた翼のマークが部隊章なのだろう。

先頭部分に人が乗っているのも見えた。こちらを指差して魔信らしき物に報告を行っている様子が見える。

誘導位置に着こうと旋回して未確認機の右前方に着こうとするがすぐに追い抜かれた。

再び位置に着こうとするが、逆にどんどん引き離されていく。

「バカな!? あんな凶体でワイバーンより速いだど!」

ムーの大型飛行機を遙かに上回る大きさに関わらず、速度も大幅に凌駕する飛行機械の存在に驚愕しながら、懸命に追跡を行う。

しかし、追い付くことはなく振り切られてしまった。

たった今見た事を報告しても信じてもらえないか分からないが

見たままの事を本部に報告しようとしたとき、本部からの魔信が鳴った。

『こちら本部。確認が取れた。未確認機はムーににあらす。

直ちに誘導を行え。従わない場合は撃墜せよ』

「無理だ！ 既に振り切られた。アルタラス島方面に向かつてる模様。

未確認機はワイバーンの速力を大幅に凌駕。ムーのやつよりずっと巨大で速いぞ！」

ゴタマの報告に本部の管制官が驚愕する。

『何だど!? 列強の飛行機械より速くてしかも巨大なのはいくらなんでも見間違いだろ。』

実際に見たゴタマにとつても信じられない出来事だ。

管制官はもつと信じられないだろう。

一秒でも時間が惜しいゴタマは管制官の言葉に反論せずに指示をあおいだ。

「とにかく突破された！ 俺は追跡した方が良いか？」

『……龍騎士ゴタマはその場に待機。未確認機の増援が来ないか監視を行え。

新たに飛来した場合は報告せよ』

「了解」

ゴタマは魔信を切って未確認機が飛んできた方向にワイバーンを向けた。



ゴタマの報告を受けた管制本部は、

未確認機アルタラス島接近阻止のために管制下にある

ワイバーンをアルタラス島西部沿岸部上空に集結させた。二個飛竜隊、その数24騎。

既に本土空域への侵入を阻止するために未確認機への撃墜命令が下っている。

指揮官が部下たちに告げる。

「各騎に告ぐ。目標はワイバーンの速度を越えている。大きさもかなり大きい。全火力を集中的に叩き込み撃墜せよ」

『『了解！』』

未確認機の方角に向け、頭上から攻撃出来るようにワイバーンの限界高度4000mを全力で飛ぶ。

しばらく飛んでいると黒い点がポツンと見えてきた。

それに向かって進むと徐々に形がはつきりしてくる。翼に風車を六つ着いた飛行機だ。

「目標視認。攻撃準備！」

24騎のワイバーンが口内に粘性のある燃烧物質を溜め込みそこに火炎魔法と風魔法を組み込み導力火炎弾を錬成する。

射程内に入り次第発射できるよう、未確認機に相對する。そして射程内に入る直前に未確認機は

龍騎士達の想像を上回る行為を行った。

「あ!?!。未確認機上昇！」

「いかん！ 撃て！ 撃ちまくれ！」

指揮官がとつさに攻撃命令を下すも、発射された火炎弾は全て当たらず空中に虚しく散った。

未確認機はそのままアルタラス王国に侵入してしまった。

「本部。迎撃は失敗。．．．敵はワイバーン以上の高高度を飛行することで追跡を振り切った」

非現実的な出来事に衝撃を受けつつもなんとか報告を行う。未確認機が飛び去った先には経済都市シルシャリヴアがある。

指揮官は侵入した未確認機が飛竜隊が到達できない位置から都市に対し攻撃を行い、民が殺される様子を思い浮かべた。



経済都市シルシャリヴア

農耕地帯に近いことからアルタラス王国の台所とも呼ばれる経済都市シルシャリヴア。

食物や肥料の売り子の声、値切り交渉、売り物である家畜の鳴き声等活気に満ち溢れている。

その日もいつものように活発に取引が行われていた。

商人の一人が空から奇妙な音が聞こえることに気付いた。空を見上げると飛行機械が空を飛んでいた。

「珍しい。ムーの飛行機械が空を飛んでるぞ」

「ほんとだ。何をしてるんだらうか」

人々が釣られて空を見る。近くには龍騎士が飛んでいる。

「いや待て。俺は空港の警備をしているがムーの飛行機械はあんな形ではないぞ」

「新型じゃないのか？」

「いや、乗り入れる飛行機械変えたなんて話は聞いたことがない」

人々が議論するなか、誰かがワイバーンが飛行機械に振り切られていることに気づく。

「あれ？ 龍騎士が追跡してるけど全く追いついてない」

「ほんとだ」

自国の精鋭龍騎士が飛行機械に全然追いついてないことに困惑する。

「なんだか気味悪いな。仕事に戻ろう」

「そうだな。仕事に戻るぞ。休憩は終わりだ！」

人々はワイバーンが振り切られた事を見なかったことにし仕事を再開した。

○●

二日後の朝

アルタラス王国

王都ル・ブリアス、アテノール城

会議室

「それでは現在までに判ったことを報告いたします」

「うむ」

アテノール城の会議室ではアルタラス国王ターラー4世と各大臣が集まり昨日の未確認機の領空侵犯の詳細の報告を受けていた。各大臣の手元には報告書がまとめてあり

机の上にはアルタラス島西部を描いた地図が置かれている。

まずは飛竜隊総司令官が未確認機の行動について報告を行っていた。

「龍騎士ゴタマが西部海域——ちようどこの辺りですね。」

そこで哨戒中、西の方角から未確認機を確認しました」

地図上に龍騎士を示す赤い円形の駒と未確認機を示す青い円形の駒を置く。

「龍騎士ゴタマは誘導を行おうとするも未確認機はそれを振りきりアルタラス島へ接近。ゴタマの通報を受けた管制本部は二個飛竜隊を派遣します」

地図上の青い駒を移動させ、青い駒の近くに飛竜隊を示す凸型の赤い駒を二つ置く。

「飛竜隊は未確認機に対し攻撃を行いました。しかし、未確認機は攻撃を回避。高高度

に移り飛竜隊を振りきり内陸部へ侵入。農耕地帯と隣接する経済都市シルシャリヴァ上空を通過。

最終的に西部海域へ撤退しました」

飛竜隊の駒をその場に残し、青い駒を農耕地帯、シルシャリヴァ、西部海域の順番に移動させる。

「以上が未確認機の行動になります。次のページをご覧ください」

総司令官の声に資料の紙をめくる。そこには未確認機の詳細な絵が描かれていた。

「龍騎士や市民の目撃情報を元に描いた未確認機の詳細図です。ご覧の通りムーの飛行機械に近い形状ですが、この風車。ムーはこれをプロペラと読んでいますが、ムーが現在我が国との間で運用している飛行機械はこれが四つ着いているもので六つ着いているものは運用していないそうです。また、ムーの戦艦が装備している砲塔のようなものが胴体の上下に二つずつ確認できます。これはムーの飛行機械には確認されておらず軍としてはムーの飛行機械ではないと判断しています。

また、未確認機の行動と航路から偵察の可能性が高いと判断しています。

「以上で我々の報告を終わります」

総司令官の報告終了を見計らい、今度は内務大臣が被害報告を行う。

「市民への被害は軽傷者こそ出ていますが、大規模な損壊や重傷者、死者は確認されていません。詳細はお手元の資料に記載されている通り、上空を見ていたことによる転倒や衝突。それによる家畜の暴走等が主な原因となっておりパニックは発生しておりません」

「ふむ。被害がその程度で済んだのは幸いだが……。やはり国民は不安に思っているだろうな」

ターラー14世は厳しい顔をしながらそう言う。

「はい。市民はワイバーンの迎撃を簡単に振り切った未知の存在に不安を覚えています」

内務大臣の言葉にターラー14世は眉間にシワを寄せる。

自国の軍隊を遙かに上回る性能を発揮する未知の飛行機械に怯える国民に心を痛めるとともに脳内に王国が蹂躪されるのではないかという不安を覚えた。

「外務省の方で資料を漁ってみました。該当する国家は存在しませんでした。ムーの大使にも確認しましたがあちらも混乱しているようです」

「完全に八方塞がりだな」

外務大臣の言葉に内務大臣が呻くように返す。

「ただ、最近の報告で第二文明圏西に第八帝国という新興国家が現れ、第二文明圏全体に宣戦布告。彼らの武器の詳細は分かっておりません。」

また、ロデニウス大陸の近辺で未確認飛行物体が確認されたそうですが、
「こちらも詳細不明です」

外務大臣の報告に執務室にあきれ声がわずかに響く。

文明圏外の国が文明圏の国に対して宣戦布告することですら大変なことなのに文明圏全体に対して宣戦布告する事は最早無謀を通り越して蛮勇と言わざるを得ない。

「第八帝国とやらは愚かだが……こちらに来ようとしても航続距離が足りんだらう。口デニウスの未確認飛行物体も方角が合わんだらう」

「はい。そういうわけで両方とも白になります」

外務大臣がそう締め括った後軍務大臣が発言する。

「現在西部海域に一個飛竜隊とフリゲート、コルベットを中心とした

艦隊を派遣し常時警戒に当たらせています。

未確認機の目的が情報収集なら向こうの海軍が向かってくるはずです」

「よし。軍は引き続き西部海域に厳重な警戒を行え」

ターラー14世の言葉に軍務大臣が了解の返事をしようとしたとき、会議室のドアが開いた。

「会議中失礼します！」

「どうした?。」

伝令が突然入室し、軍務大臣の近くに寄る。

軍務大臣は顔をしかめながら何があったかを問う。

「軍務大臣。少しお耳を」

「——なに!? それはほんとか!」

軍務大臣の反応に何か衝撃的な事が報告されたらしい。

ターラ14世は軍務大臣に対し聞いた。

「何があった? 申してみよ」

「哨戒中のフリゲート、リガからの緊急連絡です。西部海域に国籍不明船が出現。

国籍不明船が掲げている旗は

昨日の未確認機に記されていたものと酷似しているとのことです!」

第二話 「故郷は狛全」

アルタラス島 西部海域

1月25日

アルタラス王国海軍

フリゲート、リガ

二日前の未確認機侵入事態を重く見たアルタラス王国海軍はフリゲート、コルベットを中心に編成した哨戒艦隊を派遣。

西部海域に分散配備し、警戒に当たさせた。

そして、青年将校のユーシヨが艦長を勤めるフリゲートのリガが機械動力船と思しき艦隊を発見した。

「総員、戦闘配置につけ！」

ユーシヨの命令にリガの船員は持ち場につく。その光景を見たあとに未確認艦隊の方を見た。

自らも武装を整えたユーシヨは、見たこともない艦隊に困惑していた。

艦隊の数は六隻。編成は大型艦と中型艦が各一隻、小型艦が四隻。いずれも鋼鉄製に見える。

大型艦は武装らしきものは舷側の上部に小さな砲のようなものが並んでるだけだ。

甲板は平らで甲板上には飛行機械らしきものが整列していることから機械竜母のようなものと推定する。

中型艦と小型艦は大きさは違えど、両方とも甲板に大型艦の舷上部に並んでいた砲が装備されている。さらに砲塔が前に一つ、後ろに二つ確認でき、形は概ね一致している。

「艦長。戦闘配置、完了しました。」

「よし。なにが起きるかかわからん。注意しろ！」

副長が了解の声をあげ、ユーシヨとともに未確認艦隊を監視する。

距離はリガの装備する魔導砲の射程内だ。

一番の脅威は中型船だろうと辺りをつけて中型船を監視する。

「大型未確認船から発光を確認！」

「何だと!？」

見張りの声に大型船に注目する。確かに大型船が発光している様子が確認できた。

「攻撃・・・なのか？」

「わかりません」

何をしたいのか全然見当がつかない艦長と副長。

しばらくして発光を止めて、大型船が接近し、右舷を見せるように停止した。攻撃か！

と身構えたが停止直後に何かを口に当てた大型船の乗員がリガに向けて大声を出した。

「こちらは獵全共和国海軍外交官護衛艦隊、旗艦カラス。艦隊に攻撃の意思なし。本艦にて貴艦指揮官との会談を望む」

「艦長。どうやらこちらを攻撃する気は無さそうですが・・・ずいぶん大きな声ですね」「声が大きな種族を使役してるんだろう。にしても俺を御所望か」

ユーシヨはしばらく考え込んだ後、命令を下した。

「奴らの提案に乗ろう。副長。」

戦闘科から腕つぶしに自信のあるやつを何人か出してくれ。臨検隊を出す」

ユーシヨの命令に副長が反論した。

「それは危険です！ リョーゼンとやらが何を考えてるのかさっぱりわかりません。」

領空を侵しながらなぜ交渉するのです！」

「何を考えてるのかわからないからこそ乗り込む。危険だからといつまでも尻込みしてれば好機を失うぞ」

「ならば私が行きます。わざわざ艦長を危険にさらすことなど出来ません」

「向こうは俺を指名だ。それに攻撃するなら最初からやつてるさ。」

相手はうちらよりでかい船六隻。こちらは一隻。沈められないわけないさ」

ユーシヨの言葉に副長は唸った。確かに艦長の言う通り攻撃するならとつくに行っている。それに艦長が行けばかなりの情報が手に入るだろう。

副長は近くにいた見張りの水兵に命令を下した。

「戦闘科に向かい臨検隊を編成して出すように伝えてくれ」

「了解しました。戦闘科に向かい、臨検隊を編成して出撃させることを伝えます！」

「頼んだ。」

伝令の水兵は敬礼し、甲板下の戦闘科へ向かった。



暫くして伝令が戻ってきた。

すでにボートは海面に下ろされており、護衛兼任の樞手と指揮官が九名乗り込んでい

る。
ユーシヨはボートに乗り込んだ。

ユーシヨが乗り込んだことを確認した指揮官はボートを発進させた。

指定された大型艦に近づけば近づくほど大型艦や他の艦艇の異様さが強くなる。

軍艦は通常舷に魔導砲を並べて装備する。

しかし、視認できる範囲で武装は舷上部の小型魔導砲らしき物しか存在しない。

護衛の艦艇に至っては甲板にしか武装は確認できない。

砲門が開閉式で閉じた状態なのかと推測したがそれらしきものは確認できない。

「艦長。大型艦の舷梯に人が見えます」

「案内の人間だろう。あそこに着けてくれ」

舷梯にはこちらに向けて手招きをしている水兵がいる。

ボートを舷梯のそばに寄せて停船する。

ボートに最低限の人員を残し、機械竜母「カラス」に移乗する。

カラスの水兵の案内のもと舷梯を上り甲板へ向かう。

甲板では資料で見たムーの戦闘機という飛行機械と比べよく似てるが少し大きい飛行機械と

主翼が一枚の飛行機械が並んでいる。

甲板の中央右端には建物があり、上部で回転している部分がある。

到着した臨検隊を迎えたのは見慣れない格好をした男だった。

「私はフリゲート艦、リガの艦長のユーシヨです。」

「この海域は我が国の領海に近い。貴船らの航行目的を知りたい」

ユーシヨがそう告げると相手は驚いた様子でこう告げた。

「日本語を話すのですか!。驚きましたね。私は猟全共和国外務省。外交官の蜂渡はらとと申します。ようこそ護衛空母カラスへ。あなた方を歓迎します」

「日本語?。私には大陸共通語に聞こえるが・・・」

言語が通じることに驚いた蜂渡の様子にユーシヨは首をかしげた。

ユーシヨ達から見れば流暢に大陸共通語を話している。

未開の蛮族では言葉すら通じないことが多く内心ユーシヨは言葉が通じることに安堵する。

「大陸共通語ですか?。いえ、言語が通じるなら話が早い。

二日前、我が軍の戦略爆撃機富嶽が哨戒中に誤ってあなた方の国の領空に侵入してしまつたのですが、何か心当たりはありませんか?」

蜂渡の言葉にユーシヨは二日前の未確認機侵入の件を思い浮かべた。

カラスやその護衛が掲げている旗が報告に描いてあつた未確認機のマークに似てい

「我々は風車が翼に六つついている大きな飛行機械が

領空に侵入したのが原因で今この海域にいます。その飛行機械が貴国のフガクになるのですか？」

「はい。我々はその事で貴国に対し謝罪を行うことと

国交の開設を要求することを目的にしています」

蜂渡の要求にユーシヨは、非現実的で司令部が信じてくれるか怪しいが、この場で返答を行う権限もないため、一端本国に報告することにした。

「我々の権限ではあなた方の要求に返答することはできません。一旦本国に報告します」

「わかりました。返事までどのくらい掛かりますか？」

「魔信を使うのですぐに返事が来ると思えます」

蜂渡は不思議そうな顔をしながら質問した。

「魔信？ 通信機の種類ですか？」

「そのように考えてもらえればよろしいかと。では暫しお待ちください」

機械文明とはいえ魔信を知らないことを不思議に思いながらユーシヨは司令部に報告した。

○●○

ル・ブリアス

アテノール城、会議室

リガからの報告を受け取ったアテノール城では報告の内容に困惑していた。

リガからの報告を受けたターラー4世は言葉を発した。

「新興国にはおかしなことだな。報告が本当なら我が国どころか文明圏……いや、列強並の技術力を持っていることになるぞ」

一般的に新興国は文明の程度が低く、報告にあつた鋼鉄の艦隊などは絶対に編成できない。

手こぎと帆で進むガレー船が新興国の主力というのが常識だった。

「内容から察するに敵対の意思はなさそうですが」

「……そもそもこの報告にあるような大型艦がいきなり出てくるなど考えられません。」

「何かの誤認ではないのですか？」

内務大臣の言葉を防衛大臣が否定する。

「いや、乗組員全員が誤認するとは考えにくい。」

「しかも艦長が実際に乗り込んで、報告もそこからしている」

防衛大臣は一旦言葉を区切りこう続けた。

「軍としては一度は接触してみるべきです。」

「もし彼らの技術を吸収できれば我が国の利益となります」

「侵略する気もないみたいですね」

「いや、もしかしたら我らを騙し討ちしようと考えているのでは」

「作用。リガに幻惑魔法を掛ければこのような報告をしても不思議ではない。」

「鋼鉄の艦隊とはあまりにも非現実的すぎる」

喧々譁々と意見が交わされるなかターラー4世は大臣達を静めてこう告げた。

「私は彼らと接触しようと思う」

「大丈夫でしょうか？。騙し討ち何てことは・・・」

「報告通りの船なら騙し討ちせずにはリガを沈めて直接こちらに殴り込んでくる。

その心配はないだろう」

「大型艦と報告にありましたな。」

「ログマ伯爵の領地の港湾都市ロートーが喫水も深く距離が一番近いかと」

「よし。そこで会談を行おう。確か、ルミエスが近くに視察で訪れていたな。彼女にも

会談に参加してもらおう」

かくて一番近い港湾都市ロートーで会談が行われる運びとなった。



港湾都市ロートー沖合い

フリゲート艦リガは政府からの命令により獵全皇国の艦隊を会談場所として指定さ

れた港湾都市ローターまで案内していた。

ユーシヨは獵全の旗艦であるカラスに魔信と連絡用員を残してリガに戻り、艦長室に戻り執務作業を行っていた。

艦長室の扉がノックされる。

「失礼します」

「入れ」

副長が艦長室に入室してきた。

「艦長。カラスから連絡がありました」

「内容は？」

執務をやめ、カラスに残した連絡用員からの報告を聞く

「どうやらリヨーゼンの艦隊はあそこで停泊するらしいです」

「なぜだ？ まだ距離があるが」

「どうやら船が大きすぎて棧橋に着けるのが難しいらしいです。」

あそこからはボートで向かうそうです」

副長からの報告にユーシヨは驚いた。

「あいつらの船はそんなに大きいのか」

「みたいです。一体いつの間にあんな国ができたのでしょうか？」

ユーシヨは視線を窓の方に向ける。外ではカラスから小型艇が下ろされているのが見える。

「交渉がうまく行くと良いな」

ユーシヨはそうつぶやいた。



「これより獺全共和国とアルタラス王国の会談を行います。司会進行は私ログマ伯爵が勤めさせていただきます」

会談に指定された屋敷の一室でローターの領主を司会に

獵全共和国とアルタラス王国の会談が行われていた。

獵全共和国側の蜂渡とその補佐を合わせて四人。

アルタラス王国側は、政府から派遣された外交官、ローターの市長、ローター警備隊の司令官。

さらにルミエス王女が会談に参加していた。

「初めまして。私は獵全共和国の外交官の蜂渡と申します。この度は会談にに応じていただき

ありがとうございます」

「我々も新しい国と会談できることを好ましく思っています。私はアルタラス王国王女のルミエスと申します。よろしく願いします」

蜂渡は驚いた。まさか王女が出るとは想定外だったのだ。すぐに姿勢をただした。

「王女自ら出られるとは・・・光栄に思います」

「我々はそれだけあなた方の事を重要視しているのです」
「そうですか。・・・それでは早速資料を配布させていただきます。君、例の資料を」

蜂渡がそう言うのと補佐官が資料を配り始める。

アルタラス王国側に資料が行き渡る。

資料は言語が通じないことを想定し、

ほとんどが極力文字を使わずに図や写真、絵などで表現されている。

資料が行き渡ったことを確認した蜂渡は自国である狛全共和国の説明に入った。

「それでは我が国について説明します。

我が国はアルタラス王国から西へ2000 Km程の場所に位置する島国で、本島と近くの島々を領土とし、面積は142, 816 Km²。総人口は3000万人になります」

ここで外交官から質問が飛ぶ。

「待ってください。そんな国は聞いたことがない。仮にあなたたちの話が本当だとしてもそんな島があればとつくの昔に我が国と国交を結んでいるはずです」

外交官以外に出席していたアルタラス側の者も聞いたことのない国に疑問を抱き困惑した。外交官からの質問を予想していた蜂渡は当然のように答えた。

「ええ。普通ならあなたの方のおっしゃる通りです。

ですが、今回の場合はそれが当てはまらないのです」

一呼吸置いて蜂渡は告げた。

「我々の国は地球と言う星からこの世界へ何らかの原因で転移したのです」

蜂渡の言葉にアルタラス側に困惑した空気が流れた。

「そんなばかな。神話でもあるまいし」

「そうおっしゃるのも無理はありません。我々も逆の立場なら信じられないです」

あまりにも突拍子もない発言にアルタラス側は沈黙した。

その沈黙を破るようにルミエス王女が質問した。

「あなた方は何を望むのですか？」

「国交を結ぶことと他の国への仲介です。我が国は元の世界では食料と資源を主に輸入していたのですが、転移により輸入先を失ったので新たに輸入先がほしいのです」

想定していたものとは違いかなり穏当な要求にルミス王女は安堵した。

軍事力の強い国家は大概領土などを横暴な態度で要求してくるのでそれらの対応にはかなり苦勞する。

「わかりました。あなた方の要求を受け入れましょう」

「ありがとうございます」

「ただ我が国もそちらに使節団を送りこみたいので許可をお願いします。仲介するに当たってどのような国か直接調査を行いたいです」

「わかりました」

こうして会談はアルタラス側が国交に先立ち一先ず使節団を送ることで双方合意。

この会談の三週間後にはアルタラスの使節団が旅立った。

第三話「アルタラス使節団、西へ（前編）」

中央歴1939年2月15日、AM10:18

獵全共和国、共和国政府第一直轄区宮都市

宮浦港第二埠頭

アルタラス王国使節団、ルミエス王女

アルタラス王国を出発した使節団は獵全共和国首都の

宮都市近くにある宮浦港に到着。

歓迎を受けた一行はそこからバスに乗り込み陸路で首都に向かい

獵全共和国の調査と国交を結ぶための事前準備を行う。

獵全からは外交官の熊谷が派遣され、使節団のガイドを務めることになっている。

護衛には警察の精鋭部隊である科学特捜隊の

スターズチームとライトニングチームが展開している。

ルミエス王女が資料を見ながら従者に話しかけた。

「最初は軍事博物館でしたね」

「はい。そこで歴史とこの国の軍隊について調べることになっています」

一行の最初の目的地は国立共和国軍事博物館。

都市部の近くに存在しており展示内容は猟全共和国の採用した

歴代戦車と戦闘機と銃火器等の等の軍事史料が展示されている。

使節団を乗せたバスは護衛のパトカーと共に国立共和国軍事博物館へ向かった。



AM10:42

国立共和国軍事博物館前

バスが到着し、使節団は博物館前のバス停で降りる。

熊谷の案内で門をくぐり博物館の敷地内に入るとそこには博物館への道を挟む形で噴水やベンチが並んでおり、多数の市民がくつろぐ憩いの場となっている。

「この博物館は前庭が公園のようになっており市民が憩いの場所としてよくこちらに寄ります」

獵全の外交官を先頭に博物館の入り口に向かうが、途中で市民から好奇の視線を浴びる。

博物館の中に入るまでその視線は止まなかった。

使節団が中に入ったのを確認した人々は口々に使節団のことを語り合った。



博物館の構成は横に三つ並んだ建物で構成されている。

中央にメインエントランスと兵器を展示している区画が置かれ、兵器の解説がされている。一行が最初に入ったのは博物館のメインエントランスだ。

中に入った使節団が目にしたのも兵器だった。

正門から見て右側の建物には獵全共和国の軍事史料が展示されている。

左側の建物には獵全に駐留している海外の軍隊をはじめとした海外の軍事史料が展示されている。

「この博物館のエントランスには我が国が採用した歴代戦車と戦闘機、————前者が陸軍が保有する陸戦兵器で後者が空軍と海軍が保有する空戦兵器になります。それら

の実物が展示されています。空戦兵器は大きさの都合上一部の機体は天井に吊り下げられて展示されています」

「ほお〜」

使節団が感嘆の声をあげ展示品を見る。

展示されている兵器を現代の地球の軍事知識に詳しい者が見れば

展示されている戦車は、一部相違点や見慣れない車両が有るもの、

ルノーFT-17を除き、イギリス、日本、ロシアの戦車が並んでいると判断するだろう。

戦車の世代は、一番古いもので第一次世界大戦から新しいもので第一世代主力戦車が並んでいる。

戦闘機も相違点や見慣れない機体が有るもの、こちらに関してはD0335プファイルを除き

イギリス、日本、アメリカの機体が展示されている。

世代は第一次世界大戦から第二世代ジェット機だ。

一部の戦闘機は天井に吊り下げられ、迫力を感じる状態となっている。

「それでは先に進みます」

使節団は外交官の案内の下博物館の奥へ進んだ。



最初に熊谷は転移前の地球の極東の地図の前に立って地球における猟全共和国の地理について

簡単に説明した。

「前世界における我が国の国土はこの日本列島から南に約800km。ちょうどフィリピン海と呼ばれる海域の真ん中に浮かぶ本土とその北西及び南東に存在する群島から成り立っています。有史以前、別々の地域からやってきた我々の祖先がこの島にたどり着いたときから我が国の歴史は戦いの連続でした」

熊谷の案内で一行は巨大な熊相手に槍と弓矢で戦う人間達を描いたジオラマにたどり着いた。

「この島の生態系は前の世界では、ほかの地域と比べ恐ろしく狂暴でたどり着いた人々の大半は

死に、幸運にも生き延びた者が我々の祖先となりました」

熊谷がジオラマのそばにある地図を指し示す。地図には赤い点が示されている。

「この地図に描かれている赤い点が我々の祖先が古代に建造し、現在も残っている都市です。

ここを拠点に我々の祖先は勢力を拡大。当初は別々の勢力でしたが徐々に統合。三百十三年前には一つの国としてまとまりました」

「生態系が狂暴と言われましたがどのくらい狂暴なのですか？」

「それは次のコーナーに行けばわかります。次に進みます」

熊谷の先導で次の展示コーナーに進む一行。次の展示品は猟全に生息する生物の資料だ。



「我が国で生息している昆虫の中で前世界において最も有名なのが

こちらのコウテイスズメバチです」

「大きな女王バチですね」

熊谷が紹介したスズメバチは大きさが9cm程の大きさだ。アルタラス側から見てもかなり大きい。

「いえ、殿下。これは働き蜂です」

「え」

熊谷の言葉にルミエス王女が固まる。この大きさを女王蜂ではなく沢山いる働き蜂なのだ。

ルミエス王女の脳裏に城の老執事が若い頃に蜂に集られて

ひどい目に遭ったという思い出話しが浮かぶ。

「他にもあちらに展示されているように平均的な体長が4mの熊や前世界の外国の昆虫

と比べ

一回り大きい昆虫。恐竜なども沢山生息していますね」

アルタラス王国に生息する熊で一番大きい種類の平均的体長が2〜2.5 mで体重が140 kg〜260 kg。

昆虫の方に至っては魔物を除き、手でつかめる程度の大きさだ。

因みに嘗ての日本で発生した

三毛別熊事件で射殺された熊の大きさは2.7 mで体重は340 kgである。

「恐竜とは地竜の一種ですか？」

「地竜というのは分かりませんが、恐竜は前世界では2億年前から6000万年前にかけて世界中に

生息していた生き物です。体長は様々で小さいものは1.5 m。大きなものでは20 mほどになります。現在では我が国でしか生息していない貴重な動物で現在保護活動が行われています。物語では火を吹く描写がなされますが、実際には火は吹けません」

火を吹けないということは地竜程の戦闘力はないらしい。それでも魔法なしに立ち

向かうのは相当厳しい戦いだろう。

「後は我が国で一番有名な生き物である猿神ですね」

「猿神？」

「成体で平均的な体長が17m程の大きさになる巨大な猿のような生物です。海外ではキングコングと呼ばれていますね。こちらに写真がありますね。これです」

熊谷の指した写真にはアルタラスどころか第三文明圏内では絶対にあり得ない高さの建物の屋上でゴリラに似た巨大な怪物が空に向かって威嚇している。怪物の手には小さくて判りづらいが女性が握られている。

「よくぞこんな凶悪な怪物共がいる中であなた達の先祖は住み着きましたね」

アルタラスの武官の一人が上げた声に熊谷はこう返した。

「まあ、うまく罨を張れば十分に対抗できますし、装備を整えれば大丈夫ですよ」

「装備を整えても、敵に怖じ気づいてやられたという話はたくさんあります。あなた方の先祖は中々勇敢ですね」

「ありがとうございます。次の展示コーナーに進みます」



「このコーナーは我々が近代化以前に海外から入手した武器や道具が展示されています」

原生物の展示コーナーから武器や道具などの人類が使っていた品々の移り熊谷は解説を行う。

「我々の先祖は島を開拓しながらも海外との貿易を行っていました。そして海外からの知識や道具を使い文明を発展させました。主に日本と琉球王国という国と貿易を行い、彼らの国を介して様々な国の商品を入手していました」

そう言った熊谷は鎖で繋がっているものの触ることが出来るように展示されている火縄銃を手を取った。

「この火縄銃は海外からの知識をもとに国産化したものです」

火縄銃を見たアルタラスのある武官が驚きながら熊谷に質問をした。

「これはパーパルディアのマスケット銃ではないですか？いつ頃手に入れたのですか？」

「パーパルディアというのは分かりませんが、火縄銃は四百年ほど前に猟全に伝わり当時の職人達の手で国産化しましたね」

この答えに武官は目を見開いた。

マスケット銃はパーパルディアが開発した最新銃の装備である。

それを四百年前に開発したというのだ

驚くアルタラス使節団をよそにそのまま解説を続ける。

「そして今から百一年前にイギリスという国から我が国に対して漁船の補給基地として我が国の港を使用させてほしいという要請がありました。我が国はそれを受諾しました。これが我が国の近代化の始まりです」

熊谷の案内のもと一行は先へ進む。そこには煙を吐く大きな工場や蒸気機関車と言った近代設備が白黒の写真に写っていた。

「周辺諸国との細かい諍いなどはありませんでしたが特に大きな混乱もなくイギリスをはじめとした国々から専門家を雇い我が国は発展しました。しかし、今から二十一年前にある危機が訪れます」

「危機ですか？」

「次のコーナーに移ります。そちらに詳しい情報が存在します」

ルミエス王女の疑問にそう返した熊谷は次の展示コーナーへ進んだ。

第三話「アルタラス使節団、西へ（後編）」

一行の目に写ったのは大きな地球の世界地図だった。

東南アジアのボルネオ島に赤い点。

ポーランドのダンツィヒ、中国の敦煌市、アメリカ合衆国のハワイとロサンゼルス、ロシア帝国のモスクワ、スマトラ島中央、ニューギニア東部に青い点が記されており、そこを中心に黒く塗り広げられており外側へ向かうにつれ薄くなっている。

「事の始まりは我々の世界の暦で1939年9月1日。

世界中に宇宙からの落下物が落下したことでした。この赤と青で示された場所に落下しました」

地図を指し示しながら熊谷は語る。

い 「落下物の正体は地球外——空から来た侵略者で彼らは、当時は物珍しい隕石と思

見物に来ていた人々に無差別攻撃を開始し周辺地域を確保。侵略行動を開始しました。

確保された地域は老若男女区別なく殺戮が行われ、多数の死者が出ました」

「どれ程の死者が出たのですか？」

「最初の攻撃は終結までに三日かかりました。その間の犠牲者は推定になりますが最初の一日で五百万人程。後の二日で八百万で合計一千三百万人になります。当時は戦時では無かつたために各国は奇襲を受ける形になり、有効な手を打てず大損害を被りました」

使節団側はたった三日の犠牲者数が自国の国民に匹敵することに戦慄した。一部のものは展示されている写真に写る文明の高さに興味を示し、その発展した文明に甚大な犠牲者を負わせた降り来るものに恐怖を覚えた。

写真にはそれぞれ不気味な三本脚の機械のような怪物が廃墟を歩いてる姿。空を飛ぶエイのような物体。羽を開いている虫のような怪物。

兵士から攻撃を受け、オレンジ色の体液が流れ出ている人間サイズの虫のような怪物、

黒い甲殻を纏った赤い龍が火を吹いて町を焼いている写真が確認できる

「この辺りに展示されている写真に写っているのが彼らの戦力です。当時の我々は占領された土地を奪い返そうとしましたが、圧倒的な技術力の前に次々と敗退し逆に占領地域を増やす結果になりました」

展示されている写真には博物館のエントランスに展示されていた兵器に似た兵器が燃やされたり破壊された様子で写されている。大半は溶かされた様な損傷を確認できる。

「この結果にこのままでは負けると判断した人類は今までの軋轢を捨て、

当時の国際調停機関である国際連盟を中心に超国家的軍隊、地球防衛軍を設立。侵略者にはラヴェジャーという名前が名付けられました」

熊谷が指したボードには解説と共に各国の軍隊が集結している写真や訓練を行っている写真。

更にラヴェジャーと思いき不気味な怪物の死体や頭が削れて動かなくなつた三本脚の怪物が写されている写真。

鼻先に角の着いた白い甲殻を纏った巨龍の死体が写った写真がある。

「十二年の歳月と一億二千万人の犠牲を払い、我々は地球上からラヴェジヤーの基地を殲滅することに成功します。ただ、残存した生物兵器は繁殖能力があるらしく人気ひとけのない場所です巣を作り人類に対して攻撃を仕掛けています」

「しかし、ラヴェジヤーの残骸を解析する事でもたらされたテクノロジ―は我々地球社会に大きな発展をもたらしました」

写真には三本脚の機械のような怪物が戦車と行軍している姿や、光線を放つ巨大な構造物が写る。

「こうして問題を抱えつつも我々は復興を進めると共に次に侵略者が襲来した時に備えて軍隊の増強を進めました、その最中にこの世界に転移してきました。ここまでが我が国の今までの歴史になりますね」

狛全共和国の歴史を聞き終えた使節団は改めて彼らが異世界から転移した国家であることを実感した。



14:15

共和国軍事博物館前

博物館の見学を終えた使節団は館内で昼食をとった後、博物館の門前に集合し、外務省に向かうバスに乗り込もうとしていた。

ふと、アルタラスの外交官の一人が何かを感じ、顔を上げた。

「ん？あの動物は何ですか？」

「動物ですか？」

「ほら、群れでこちらに接近しているあれですよ」

猟全が派遣した人員の一人が外交官の指した方向に視線を向けた。そこにはそしてそれを見た瞬間顔が青ざめた。

「ラ、ラヴェジャーだ！ラヴェジャーが来た！」

「スターズリーダーよりロングアーチ！一号侵略生物を確認！」

「猟全の外交官が指を指しながら叫び、それに反応した護衛の警察官がそれぞれ拳銃——ウエブリーフオスベリー・オートマチック・リボルバーやモーゼルC96を抜き、パトカーを盾に戦闘態勢に入る。拳銃以外にある者はピストルカービン化した物を、ある者はパトカーに積載してあったサブマシンガンPPSh—41や小銃程の大きさの光線銃を構えている者もいる。」

『ロングアーチよりスターズリーダー、ライトニングリーダー。スターズは前方に展開してラヴェジヤーの足止め。ライトニングは来賓を待避させる』

「スターズ了解。みんな！後退しながら前にいる個体から確実に処理して！」

「ライトニング了解。使節団の皆さん。我々に着いてきてください！」

無線でのやり取りを終え指示を出し終えた直後。不気味な声が聞こえた。一号侵略生物と呼ばれたラヴェジヤーの咆哮だ。数は十数体程。一号侵略生物の一体が体の後部を、前方に振って糸を放ち、バスに糸を絡めて、思い切り引っ張りひっくり返す。

「撃てー！」

ダダダアーン、ダダダアーン

ダアーン、ダアーン、ダアーン

タタタタタタタタタタタタタタ

ピィー　　ー　　ー　　ー

隊長の号令で一齐に射撃を行う。狙うは前方にいる一号侵略生物達だ。

45口径の拳銃弾や7・62mm拳銃弾の集中攻撃を、或いは光線を喰らった個体から断末魔を上げ倒れるが、他の個体は気にせず前進し糸を飛ばしてくる。発射を察知した隊員がパトカーから離れて回避し、パトカーが糸に絡めとられ、横転する。

「装填する！援護を！」

「了解」

スターズが時間を稼ぐ間にライトニングは使節団を博物館に避難させようとしていた。

「博物館に立て込もって増援の到着を待ちます。速く！」
「わ、わかりました。」

ライトニングチームが使節団を博物館に誘導する。既に前庭にいた民間人は博物館内に避難している。入り口には二人、リー・エンフィールドとPPSh-41をそれぞれ携行している警備員がこちらに手招きをしている。

しかし、博物館までの道を途中まで進んだときに、一号侵略生物がライトニングチームの右手に見えた塀を破壊し、侵入した。一部の個体がライトニングに気づいてライトニングに接近していた。接近されないように銃撃を行うも徐々に接近されつつある。博物館から警備員が出てきて小銃やサブマシンガンを構えてライトニングチームを援護する。何体か倒しているようだが効果は低いようだ。

「不味い。これじゃ押し負ける」
「攻撃力が足りませんよ」

手持ちの武器に対して敵の数が多すぎる。

死人が出るのを覚悟で突撃するか逡巡するライトニングリーダーに使節団の軍人の

中で階級が一番上の人物がライトニングリーダーに声をかけた。

「我々も手伝いましょう」

「待ってください。危険です！」

「大丈夫です。皆の者。よく狙え！」

既に使節団の人間は戦闘準備を整えている。ライトニングリーダーが困惑するなか軍人が叫んだ。

「放てえ！」

「「ファイアボール！」」

詠唱と共に一斉に放たれた火球が一号侵略生物の群れに殺到。次々と甲殻虫を倒した。ライトニングチームの隊員が信じられない様子で使節団を見つめる。

「す、すごい。これが魔法……」

「スターズチーム。突破口が出来た。早くこっちに！」

『了解。みんな！、着いてきて！』

ライトニングリーダーがスターズチームに撤退を促し、それに反応したスターズリーダーが指示を出し、撤退する。門の方向からスターズチームとスターズチームを追跡する一号侵略生物が見えてきた。

「スターズの皆さんを左右に分けてください。大きいのを放ちます」
「わかりました」

ライトニングリーダーがルミエス王女の指示に従い、スターズに無線を送る。スターズリーダーは困惑するものの指示に従い部隊を左右に分けた。

それを見届けたルミエス王女は深呼吸をして詠唱を開始した。見つめているのは一号侵略生物と

スターズチームの間の空間だ。

「英雄を見守りし火よ、我を覆う闇を燃やす紅蓮の焰ほむらとなれ。ファイアストーム！」

詠唱を唱え終えた直後、一号侵略生物の前に巨大な炎のうねりが現れ、

一号侵略生物の群れを呑み込み断末魔を上げさせずに焼き付くした。

炎が収まるとそこにあつたのは

地面の僅かな焦げ目と一号侵略生物の体液で変色した地面だけだった。

護衛の科学特捜隊や猟全の外交官、博物館の中から様子を伺っていた警備員と市民が絶句する。

スターズリーダーが指令部に連絡を取る。

「スターズリーダーよりロングアーチ。一号侵略生物は殲滅。繰り返す。一号侵略生物は殲滅しました」

『ロングアーチ了解。やけに増援の到着早いけど何処の部隊？。陸軍？、それとも猟師会？。』

「使節団の人が魔法で殲滅しました」

『は？何やて？魔法？』

無線で指令部が困惑し素の口調をうっかり出すなか熊谷がポツリと呟いた。

「ま、魔法ってスゲー」

遠くからサイレン音と飛行機のプロペラ音が聞こえてきた。



同日19:00

獵全共和国、共和国政府第一直轄区宮都市

首相官邸

あの後、増援が到着し、後始末を行うなか、アルタラス王国使節団は宿泊先の共和国ホテルに移動し、本日の予定を明日に持ち越すことを決定。ホテルにて休息を取った。

そして、首相官邸では獵全共和国の国家元首である高野共和国首相が閣僚と閣議を行っていた。

「つまり、今回のラヴェジャーの巣は完全に破壊されたのだな」

高野首相の問に強面こわもての国防大臣が答えた。

「はい。陸軍の対怪物強襲戦術部隊（Monster Attack Tactic
I troopの略）及び地球防衛軍のウルトラ警備隊により完全に破壊しました」
「そうか。これで宮都市にラヴェンジャーが来ることは当分ないだろう」

国防大臣の報告に満足そうに高野首相はうなずき、女性の外務大臣の方へ向い訪ねた。

「使節団はどうか？」

「先程申し上げた通り死傷者はいません。彼らが特に興味を示していたのは軍事関連と
鉦山の採掘技術や重機でした」

「採掘技術に重機？」

外務大臣の言葉に閣僚の中で一番年を取っている国土交通大臣が反応する。鉦山の
管轄は国土交通省が担っている。自分の担当はアルタラスのインフラのみと思ってい
たために疑問の声を上げた。

「国内に魔石と呼ばれる鉱物資源の採れる鉱山があるらしく、我が国の炭坑及びタングステンやニッケル等の鉱山の採掘技術に関心を示していました」

「なるほど」

国土交通大臣は合点がいったようで、うなずいた。

次に一番若い経済産業大臣の質問が国土交通大臣に飛ぶ。

「アルタラスが求める重機や戦車は輸出については可能ですか？」

「アルタラス王国のインフラがどれ程の物か判断できないので何とも……。技術レベルは地球の16世紀相当。だが魔法という物があるから文明は同時期の地球より、発展しているはずだ。かといって下手に高性能なものを輸出すれば運用できないだろう」

高野首相が国土交通大臣の言葉に頷きながら答える。

「そこはアルタラス王国を調査しなければわからないが、恐らく予備兵器やスクラップから輸出になるだろう。話しは変わるが資源はどうなっている？」

「資源に関しては、朱鷺舞^{とまひまい}海底油田がようやく稼働しました」

眼鏡を掛けた戦災復興大臣の言葉に安堵の声が上がる。

朱鷺舞油田とは猟全共和国本土の北西に位置する朱鷺舞州の土師島^{はし}に位置する油田で戦前から開発が進められていた油田の一つだ。ラヴェジャーの襲来で一時開発が中断されていたものの、戦後に開発が再開された油田だ。

「これで石油資源に関しては一息つけたか」

「はい。これで木炭車とおさらばです」

安堵の声を遮るように国土交通大臣が諫めた。

「まだこれからだ。油の供給源が一つ増えたただけだ」

「南東部の五十島州^{いそ}の油田が稼働していませんね」

国防大臣が国土交通大臣の言葉に同意する。

「原油の供給源について一つ気になることを使節団の方から聞きました」

「気になること？」

「はい。外交官の一人が原油に関してさりげなく聞いたところ、東の文明圏外にあるクイラ王国

という国では燃える水が自然に沸きだし、それをムー帝国という列強国が利用している」と

外務大臣の報告に静まり返った。直ぐに高野首相が脳内で今後の方針を決めた。

「外務大臣。アルタラス王国との国交を結んだら

直ぐにクイラ王国とムー帝国への仲介を依頼しろ」

「分かりました」

閣僚会議は一時間後に終了した。獵全共和国は一先ずクイラ王国とムー帝国との国交締結を目指して動き出した。

第四話「来たのは何だ?。」

中央歴1939年1月30日AM10:35

イルネティア王国本土より北西約400km。

第十二飛竜隊

オーギ、コバーシ

寒空の中、二騎のワイバーンが飛翔する。イルネティア王国所属の龍騎士だ。

彼らはいつもの日程の哨戒任務でイルネティア王国北部の空域を飛行していた。

今日も寒さに耐えながら空を飛んでいた。

『最近西方世界で侵略を頻繁に行っている何とか帝国でしたっけ?』

こっちにも来るのでしょうか?』

コバーシが上官であるオーギに通信で疑問を投げかけた。

「第八帝国だな。こっちはいくらなんでも距離がある。」

「西方世界を全部制圧するまでそれはないだろう」

『もしかしたらもうこの海域のどこかにいるんじゃない？』

「それを調べるのが俺たちの任務だ」

暫く会話をしながら北方の空を飛ぶ。コバーシが遠くの方で何か飛んでいる事に気づいた。

『あれ？オーギ大尉、前方に何か飛んでませんか？』

「前方？」

オーギは兜のバイザーを上にならして目を凝らす。確かに前方で何かが二つ飛んでいた。

ぼんやりとだが輪郭も確認できた。だがその輪郭はどうみてもワイバーンではない。心なしかこちらに向かつて飛んでるようにも見える。

「ワイバーンでは無いようだが・・・接近して確認しよう」

『了解』

二騎のワイバーンが加速し、距離を詰める。

細部がはつきりと見え始めた頃に、二人は自分の目を疑った。

『人だ。人が空を飛んでいるだ?!』

「鎧のようなもので飛んでいるのか? 顔からして少女のようだが・・・」

オーギ達遭遇した少女達は本当にこちらに向かって飛んでいるようだった。オーギ達と少女達が互いに驚愕の表情を浮かべながらすれ違った後、少女達はワイバーンでは考えられない急旋回で

向きを変え、オーギ達の横に着いた。

空を飛ぶ少女達は、頭部に獣の耳と臀部には獣のしっぽが生えており獣人族であることが伺える。二人とも同じデザインの鎧を装着している。

頭部は獣の耳を出すための隙間以外を覆うバイザー付きヘルメットを被り、バイザーを両者ともに上にずらしており、端正な顔に困惑したようすを浮かべている。

手足にはそれぞれ腕甲と脚甲をそれぞれ装着しており、腕甲は手首から肘まで覆っており、手には手袋を装着している。脚甲は足先から太ももの下部分まで覆っているもの。それより上は露出しており少女達の脚に対してやや長い。

胴体部分には、肩から肩甲骨と胸を守るように鎧が装着されている一方、下部分は胸の鎧から吊り下げられたベルトにポーチが着いているだけで防具のようなものは一切見当たらない。

背中には翼が着いており、翼端から付け根部分の丁度半ば辺りに前後に長い楕円形の部品が

着いている。

脚甲の踵かかと部分と楕円形の部品からは青い炎が進行方向とは逆に吹き出している。

鎧の下には袖が肘まであるレオタードのような肌着を来ているようだ。

見えないが、しっぽを出すために臀部の上部分に穴が空いている

手には銃のようなものを保持していた。

こちらに敵意はないのか銃口はこちらに向いてない。

オーギは魔信で管制に連絡。未確認飛行物体と遭遇した事を報告した。

「オーギより管制。聞こえるか？」

『こちら管制。どうぞ』

「未確認飛行物体と接触。鎧を纏った少女が空を飛んでいる」

『鎧を纏った少女？ワイバーンじゃないのか？』

「少女だ。これより魔信で呼び掛ける」

『了解した。十分に警戒せよ』

魔信の周波数を変えて呼び掛ける。ただ、相手の周波数が分からないため片っ端から試すつもりだ。

「未確認騎に告ぐ。こちらはイルネティア王国竜騎士団。君たちは我が国の領空に接近しつつある。所属と目的を明らかにせよ」

「・・・あれの単位って騎で合ってるんですか?」

「知らん。これで反応してくれるといいんだが・・・。どうやらいきなり当たったみたいだ」

少女の一人がオーギの通信に反応し、魔信の様なものを取り出した。

『Unbekannteの
 Hier ist
 Dragoon
 Kaiserliche Luftwaffe
 Zum Erzherzog
 Dritter Luftflotte。』
 Zuns、

Keine Feindseligkeit。
 In Ozeanische Sprache order Eclipse—Sprache、
 Antworten Sie』
 「言葉がわからん。共通語じゃないぞ」
 「え？魔信の周波数は？」

コバースが自分の魔信の周波数をオーギから聞いたものと合わせる。

再度オーギが呼び掛けを行うも、やはり言葉の意味がわからない。

オーギは再度管制と連絡を取った。

「オーギより管制。未確認飛行物体と接触に成功した」

『こちら管制。向こうはなんと？』

「少女だ。少女が二名飛んでいる。獣人族と思われる。大きさは人間と変わらない。向こうは敵意は無いようだが言葉が通じない」

『了解。少し待て』

管制からの声が途絶えた。恐らく管制隊指揮官と対応について話しているだろう。

オーギは少女達の様子を伺った。向こうもどこかに向かって報告しているらしい。暫くして管制から無線が届いた。

『・・・こちら管制。オーギ・コバーシ兩名はそのまま監視を続行。その近辺に島などの陸地はない。また、空を飛べる鎧なんて話は聞いたことがない。恐らく彼女達は遠く離れた未知の文明圏

から来た可能性が高い。その大きさでは航続距離が足りないから母艦があるはずだ』
「母艦を探し出せと?」

『そうだ。ワイバーンの航続距離限界まで探せ』

「了解。通信終わり」

『了解』

オーギはコバーシに管制からの命令を伝達した。

「本部は未知の文明圏のものと推測しているようだ。あの少女達を追跡して母艦の位置と装備や

規模を確認するぞ」

『了解しました。しかし、大丈夫でしょうか。彼女達はかなりの運動性能を持っています』
『よ』

コバーシは一抹の不安を抱えながらオーギに言った。

「さて。確かに奴さん達の運動性能は十分だが、・・・振り切られるか心配はしなくてもいいようだぞ」

「え？」

オーギの無線を聞いたコバーシが少女達の方を向く。

少女達はオーギ達の前に出た。片方の少女がこちらに片手の甲を向けて前後に大きく振っている。

「着いてこいということでしょうか」

「だろうな。せつかくの美少女からのお誘いだ。乗ろう。まあもうちつと成長してた方が好みなんだけどな」

「その通りですが、大尉はこのまま選り好みしていると結婚できなくなりますよ」

「ぬかせ」

軽口を交わしつつ二人は少女達の後に着いて行った。



「おいおい、マジかよ」

「これが彼女達の母艦? 見たところ飛空船の様にも見えますが・・・」

少女達の案内の元、飛行を続けたオーギ達。十数分の飛行の末に目にしたのは空を飛ぶ艦隊の姿だった。

「大きさも形も全然違うぞ。楕円形の飛空船なんて聞いたことがないぞ」

飛空船と思わしきそれは彼らの知る飛空船と明らかに異なる。

飛空船は帆船の様なものゝ形状が一般的な形状だが、目の前の艦隊を構成する船は、楕円形に近い形状をしている。大きさに至っては一般的な飛空船よりも数倍は巨大だ。

大半は魔導砲の様なものを上部に載せているが、中には飛行甲板を上部に載せている船もある。

「大尉。もしかしてあれが彼女達の母艦じゃないですか？」

コバーシが指を指した船にオーギ達を誘導した少女達がオーギ達の方へ振り返り母艦に着艦するようにジエスチャーで示した。

「一端管制に報告すべきだな。」

オーギは魔信で管制を呼び出した。

「オーギより管制。少女達の母艦を発見した。飛空船の様に空を飛んでいるが形状が著しく違う。大きさに至っては一般的な飛空船よりかい。また、飛空船は艦隊を組んでいる模様。視認できるだけでも十二隻は確認できる。また、向こうの母艦に着艦するよ。うに要請されている。どうぞ。」

間を置かずして返事が来た。

「こちら管制。了解した。指示を待て」

「了解」

通信を一端切り、再度母艦を見つめる。よく見れば甲板には三葉機と複葉機が幾つか並んでいる。

「ムーの飛行機より古いな」

オーギは甲板に並んでいる飛行機が資料で見たムーの飛行機より古い事に気づいた。暫く飛んでいると管制より魔信が届いた。

「管制よりオーギ大尉。一時基地へ帰還せよ」

「了解。帰還する。コバーシ、聞こえたな。一端基地に戻るぞ」

「了解」

二騎のワイバーンはイルネティア方面に進路を向け、自分達の基地に向かった。少女達は一瞬逡巡したものの、ワイバーンを追いかけずに母艦に着艦した。

○●

P M 12 : 17

イルネティア王国

第十二飛竜隊基地司令室

帰還したオーギとコバーシは報告のために基地の司令室でデイロ司令官とアープ参謀の前で報告を行っていた。

「ふむ。では侵略の意図は見られなかったと?」

「はい。あれほどの文明国相当の技術を持ちながら終始武器を向けず、我々に通信を行い、最後に基地に帰還する我々を追跡しなかったので侵略の意図はないと小官は判断します」

「ふむ」

オーギの報告にデイロは唖った。

報告のような文明国レベルの国家が辺境に突然現れ、言語が通じないとはいえ逃げたオーギとコバーシに攻撃を加えず逃がすなど、現実的ではない。

かといって彼らの妄言とも思えない。

侵略活動としてはあまりにも穏当な対応にデイロ判断に迷っていた。

「やはり侵略ではなく何らかの接触——恐らくは国交の樹立辺りが目的ではないでしょうか?」

「国交の樹立か」

「報告のような技術水準であれば、準列強に相当する文明国です。

下手な対応をして戦争でも開けば・・・」

「最悪負けるか、負けなくとも損害は大きいだろうな」

アーブの分析にデイロは同意の声を挙げる。

デイロは今までの文明国から文明圏外国への外交を思い浮かべた。

技術格差を背景とした高圧的な態度で脅迫を行い自らの要求を文明圏外国に押し通し、未知の土地に原住民がいれば一方的な通告の後、攻撃を行い原住民を支配下に置く

か

最悪浄化して土地を確保するなど平然とやってのけた。

しかし、今回接触した勢力は文明国並みの技術水準を持ちながら今までの文明国とは異なる穏当な態度で接触してきた。

「とりあえず、この事は上に報告する。我々だけでは手に余る」

「了解です」

「下がっていいぞ」

失礼しました。の声と共にオーギとコバーシは司令室から退室した。部屋に残されたのはデイロとアーブの二人だけだ。

「アーブ。これは一波乱起きるぞ」

デイロが険しい顔をしながらアーブに告げた。

この後、直ぐにオーギの報告は上層部に伝えられ、直ちに軍に戦闘準備命令が発令された。政府も未知の文明国が接触する可能性が高いと言うことで、様々な対策が練られ

始めた。

しかし、報告の二日後に事態は急変した。

北西の海域にて哨戒中の海軍のフリゲートが報告に合致する特徴を持った飛空船と接触したのだ。

第五話 「エクリプセの使者」

2月1日11:54

イルネテティア王国港湾都市ドイバ郊外

「でかいな……」

港湾都市ドイバの警邏兵が呟く。視線の先にあるのは先日オーギ達が遭遇した巨大な飛行物体だ。

一隻だけ旗艦と思わしき飛行甲板を載せた大きな艦が郊外に着地しており、その他の船はドイバ沖上空で制止している。着地した飛空船の周囲には船から出てきた小銃装備の歩兵部隊に大きな牙が生えた虎——サーベルタイガーが随伴し、その周辺に巨大な一つ目のゴーレムの様なものが

数体程配置されておりそれをショウゴ伯爵軍とドイバから派遣された部隊が包囲していた。

「あのゴーレム見たいな奴、持つてるのって銃じゃないか？」
「あれだけでかいと砲だな」

彼らの視線には巨大な一つ目のゴーレムの様なものがあつた。

配置されているものは二種類存在し、一種類目のゴーレムは色は灰色で全体的にやや細身な印象を受ける。頭部は兜——地球人が見れば第一次世界大戦頃のフリッツヘルメットを被つたような形状をしている。目は顔の中央部分に着いており、赤色をしている。警戒しているためかキョロキョロと視線を傾かせている。

もう二種類目は色と頭の形状と目の位置は同じものの、頭から下は一種類目と比べややマツシブな印象を受け、所々に太い管かパイプのようなものが胴体と四肢を繋いでいる。

どちらも腰に斧を吊り下げており、銃のようなものを携行している。

「何とも不気味な連中だ。」

警邏兵の一人はそう呟きながら、飛空船で警戒するゴーレム擬きを見つめた。



陣地では部隊の指揮官であるシヨウゴ伯爵の他に、交渉に備えイルネティアの外交トップであるビーリー候を団長とした臨時の交渉チームが陣地で待機していた。

シヨウゴ伯爵は陣地である報告を聞いていた。

「つまり、彼らは元から交渉を目的としており、遭遇したフリゲートが飛竜隊に要請して、

ドイバに誘導させたと言うことだが、言語は通じない相手にどうやって目的を聞いたのだ？」

「それが、大陸共通語が通じたらしいのです」

「大陸共通語が通じた？」

「はい」

シヨウゴ伯爵は首を傾げた。先日聞いた話では大陸共通語が通じない未知の相手と聞いていた。

しかし、今回飛空船に遭遇したフリゲートや誘導に当たった竜騎士からは多少訛りが

有るもの

大陸共通語を話していたというのだ。

「最初の報告では未知の言語をしゃべっていたと聞かされたが？」

「はい。しかし、最新の報告では訛りはあるものの確かに大陸共通語を喋っていたと」

「この報告にビーリーは言語が通じることになったことに安心した。

言葉が通じない事で戦争になる事がなくなったからだ。

「何にせよ、出てくるのを待つしかありません。」

視線を着地している飛空船に向けてビーリー候は呟いた。

暫くして陣地内に伝令が入ってきた。

「報告します。12:00に使者を下船させるので攻撃をしないでほしいとのことです」

「了解した。全部隊に攻撃を受けたときの反撃のみ許可。それ以外での攻撃は禁止。

各部隊に伝えろ」

「反撃以外の攻撃は禁止。了解しました。」

シヨウゴの命令を聞いた伝令が陣地内から出ていく。ビーリー候は自分たちの部下を連れて

会談場所になる天幕へ移動した。

暫くして飛空船が動きを見せた。

飛空船の方から恐らく外交関係者であろう人物らが降りてきて、護衛人員とサーベルタイガーを

伴いこちらに向かってくる。

警護の兵が接触し、二、三言話した後に警護の案内のもと天幕にたどり着いた。



天幕にやって来た彼らは警護の兵の案内のもと、ビーリー候達と接触した。

「初めマシテ。ワッタシはエクリプセ皇国空軍第三艦隊旗艦、

ナーゲルリング艦長のフローベルガー、彼は外交官のイルクナーデス。ワッタシは彼

の通訳としてマイリマシタ」

「これはご丁寧に。私はイルネティア王国外交の長、ビーリーです」

エクリプセ皇国第三艦隊のナーゲルリング艦長フローベルガーという人物は訛りが有るものの

確かに共通語を喋っていた。

互いに自己紹介をした後、早速ビーリーが切り出した。

「さて、早速ですが我が国に來た目的を教えてください」

「ワツカリマシタ。ワツレワツレは当初はチョウサの為に周辺に艦隊を派遣チュウにアナタガタのワイバーンを発見し、コチラに來マシタ」

「調査？」

ビーリー達が訝しむ。新たな領土の獲得のために來たと推測し、

その後の展開が予想できたからだ。

しかし、イルクナーの言葉を通訳したフローベルガーは彼の推測とは別の事を言った

「ワツガ国とその周辺国とトツゼンレンラクがトレナクナッターのです。

そのタメに艦隊を派遣シマシタ」

「ここに来たのは全くの偶然と？」

「そうデス」

フローベルガーの言葉にビーリーは、訝しむ様子を隠さずに言った。

「近くの国への方向を間違えるとは思いませんが・・・」

「はい。当初はワツレワツレも機材の故障や乗員のミスを疑いマシタ。

シカシ、根本的な部分で間違えたのデス」

一呼吸しててフローベルガーは信じられないことを言った。

「周辺国が音信不通になったのデハナク、ワツガ国が消えたのデス。母なる惑星「ゾラ」
カラ」

一瞬ビーリーは虚を突かれたかのように無言になった。

「それはいくらなんでも・・・おとぎ話ではないんですよ」

フローベルガーがビーリーの言葉をイルクナーに通訳し、イルクナーは苦笑しながらフローベルガーに何かを告げて、次に自分の部下にも何かを告げた。

「シンジラレナイのもムリないです。タダ、証拠は持っています」

そう言いながらフローベルガーがイルクナーの部下に視線を向けた。向けられたイルクナーの部下の一人がカバンから写真を二枚取り出し、机に置いた。

「これは？」

「ゾラの月とこの世界の月デス」

夜空を写した写真には一枚目には見慣れている月。二枚目には見たこともない青と

黄色の月が

二つ写つてる。

「ワツレワツレの世界であるゾラには月がヨツツあり夜には青と黄色の月が、ヒルマには赤と緑の月が見えるはずナノデス。シカシ、イマハ夜に二つの月がミエルダケデ、しかも転移前は

満月だったのに転移後はミカツキになってマシタ。この事から我が国は元の世界から何らかの原因で転移したと考えマシタ」

ビーリーらイルネティア王国の人々は写真を見ながらフローベルガーの話聞いた。

「この情報によりワツレワツレは調査任務に国家の発見と国交の締結をクワエ、この国にヤツテキマシタ」

イルクナーの話聞き終えたビーリーは考え込んだ。

転移とは馬鹿馬鹿しいが、外交の場でこのような事を言うのはあり得ない。

そもそもここまで文明が発展していたら、とつくにイルネティア王国と接しているは

ずだ。

「国交を締結すると言いましたが、あなた方が要求するのは何ですか？」

「さしあたっては貿易デス。元の世界で我が国は工業製品と鉱物資源をユシユツシテオリ、食料は海外からユニユウシテイマシタ。イルネティア王国とも同じような貿易を行いたいのでス」

「具体的に食料はどれ程の量を？」

フローベルガーがイルクナーに視線を向けた。イルクナーは首を横に振った。

「イマハお答えする事はデキマセン。ただ、我が国カラは工業製品と魔法機士——
マジックシュアーバイター

——我々の

フネを守っている巨人を輸出するヨウイガアリマス」

流石に弱味になる情報は教えないらしい。イルクナーの外交手腕に感心したが、同時に聞いたことのない単語に首を傾げた

「マギツシユアーバイター？」

「ワガクニガ三十八年前にゴレムの後継として開発した作業用魔法機械デス。

工事現場や採掘等はモチロン、今ご覧にナツテイルヨウニ武装を施し軍の任務に着かせることも

カノウデス」

ビーリーは天幕の外で見たマギツシユアーバイターを思い出す。

「・・・私の判断では国交の締結については回答できません。ですが周辺国やその情勢であれば

お話は可能です」

「ワカリマシタ。イルネティア王国の周辺の情報だけでもキチヨウデス。オネガイシマス」

「はい。我が国周辺の国々は――」

ビーリーはイルクナー達に第二文明圏の情報を伝えた。



16:45

イルネティア王国北西80km

エクリプセ皇国空軍第三艦隊旗艦

エツケザックス級飛行母艦二番艦ナーゲルリング

艦内、会議室

空を飛ぶ艦隊——国を求めてエクリプセ皇国から出港したエクリプセ皇国空軍第三艦隊の

旗艦であるナーゲルリングの会議室で外交官と艦隊司令官アუნバルトや

艦長のフローベルガーら武官が集まっていた。

「やれやれ。取り敢えず我が国のみ存在ということは無くなったが・・・」

机の上に載っているイルネティア王国との会談内容を纏めた資料を見ながら武官がぼやいた。

「ええ。前大戦が終わって六年。復興が終わってないのにこんな事になるなんて……」
それに同意するかのようには外交官の一人が資料を整理しながらぼやいた。

前大戦——新聖歴914年。突如ゾラに宇宙人が襲撃を仕掛けた。

蛙に似た人間と灰色の不気味な巨人を主力に、巨大な怪獣や無数の無人戦闘機械。

更には巨大な宇宙船が襲来。

列強の本国が存在するローマジア大陸東部地域——アクシスやアクシスから東にある新大陸の

合衆国首都コロンプスC・C。人類発祥の大陸と言われるサピエンス大陸北西部に存在するナイル王国。

更にはローマジア大陸極西の央華帝国各地に存在する列強租界に押し寄せた。

宇宙人はその占領地をアクシスの大半、合衆国西海岸の大半、央華帝国全域

サピエンス大陸北西部とアラブ半島東部まで支配地を拡大した。

人々はこの宇宙人にインベーターと名付け、戦線をアクシス戦線、新大陸戦線、央華戦線

サピエンス戦線の四つに分け各地で抵抗を行った。

アクシス戦線ではアクシスに近いアルピオン大陸のブリタニア連合王国と

アルビオン大陸とローマジア大陸の狭間にあるエクリプセ皇国を抵抗の拠点として戦い抜いた。

八年続いた戦争は、最終的にインベーターの旗艦が撃沈されたことでインベーターがゾラから

撤退したことで連合軍の勝利に幕を閉じた。

そして終戦から六年の新聖歴928年。復興の終わらないままエクリプセ皇国は異世界に転移した。

「そんな事言っても仕方ない。我々が得た情報を伝えるぞ。イルクナー殿、お願いします」

艦長のフローベルガーが彼らを諫め悲観的な空気を断ち切るように言った。

「まずイルネティア王国周辺の文明水準。次に周辺国の情報となりますが・・・」

イルクナーはチラリと時計を見やった。

「もうすぐ夕飯の時間なので取りあえずはイルネティア王国を通して見たこの世界の技

術と周辺国の情報のさわりだけ教えます」

会議室の人間の視線がイルクナーに集中した。

「彼らの文明水準は我々から見て一世紀以上前の水準ですが、一部は同年代のゾラの文明を

凌いでる部分もあります。

イルネティア王国では音声形式の魔信とゾラとは戦闘方法が異なる

ワイバーンの存在を確認しました」

「音声魔信をあの文明で実現しているのか。どんな技術進化をしたらそうなるんだ」

デウンバルトが驚きながら言った。他のイルネティアと接触していない人間も驚きの表情を

浮かべている。

ゾラの通信機器は電気通信と魔信の二つがある。

この内魔信の方は百二十年ほど前の新聖歴808年に開発されたが、この魔信は魔法使いが

所謂モールス信号のような形式で通信を行っていた。音声形式のものは新聖歴860年に

電話のような形で開発。これも当時は魔法使いにしか使えず、魔法使い以外に普及し始めたのは

新聖歴900年頃からだ。

軍用では新聖歴910年に普及し始めた。

現在では魔法使いのみ、携行可能な無線機タイプ——腰に装着する本体と有線で繋がる30cm程度の受話器で構成される魔信を運用出来るものの、非魔法使いは固定魔信機のみ

使用可能となっている。

一方の電気通信は電信機開発が新聖歴828年。電話機は新聖歴875年と開発自体は遅いものの、

非魔法使いでも運用出来る事と整備維持が魔信より楽な事から、民間や軍への普及はかなり速く、大戦前には一家に一台は固定電話は存在しており、軍用では艦艇や基地には備えられており、

携行無線機も歩兵が背負う形で存在している。

このようにゾラの通信事情より異世界の通信事情は進んでおり

デュンバルトが驚くのも無理はない。

「ゾラのワイバーンと戦闘方法が違う、というのは……」

飛竜隊の指揮官が尋ねた。

ゾラのワイバーンはエアカッターによる近接戦術が基本で遠距離では騎手が装備する武器

或いは行使する魔法で行う。

「彼らの……というよりはこの世界のワイバーンは火炎魔法と呼ばれる方法で火球を生
成して

攻撃するようです。」

「エアカッターじゃないのですか？ 射程が段違いだ」

イルクナーの解説に飛竜隊指揮官が呻いた。

「はい。また、速度は時速235km出すそうです」

「我々のワイバーンが93ktだから」

「127kt。約1.4倍ですね」

「我々の追撃機より速い」

第三艦隊航空隊の司令官が内心の焦りを隠すように言った。

「ただ、歩兵、馬、ワイバーンに魔法強化鎧^Mは確認できなかつたので、実際の戦闘ではそこまで厳しい戦いにはならないかと」

イルクナーの言葉に飛竜隊の司令官が以外そうな声をあげた。

「強化鎧はゾラでかなり普及しているんだが・・・」

M V H ー ー ー 正式名称は M a g i s c h V e r s t a r k u n g
 H a r n i s c h とはゾラでは広く普及している

地球でいうところのパワードスーツだ。普及したのは最近であつたものの原型は魔信よりも古い。

オーギ達が最初に遭遇した少女達もこれを装着して空を飛んでいた。

他にも陸戦部隊や騎馬、ワイバーンの物も存在する。運用には魔力が必要で魔法使いや竜

ユニコーン等の魔力を持った生物しか使えないもののゾラではありふれた装備と言える。

ワイバーンが装備した場合、速力と魔法出力の向上やエアキャッターから派生した機動補助による

高機動化の恩恵を受ける。

「マスケットや戦列艦がある時点で一世紀前と思っていたのだが……流石異世界だな。我々とはひと味違う」

デユンバルトは異世界の技術に感心している。

イルクナーはそこで説明を終えた。

「これはイルネティア王国のみの情報です。イルネティア王国は全部で三つ存在する文明圏の

一つ、第二文明圏と呼ばれる場所に存在しており、国力は高くなく文明圏外国という

分類で分けられ外交的な地位はそれほど高くはないそうです」

「つまり、他の国はこれよりすごいと言うことでしょうか」

「そうです」

イルクナーは頭の中でピーリーから聞き出した第二文明圏の国々が浮かばせながらデュンバルトの言葉を肯定する。

「私としてはイルネティア王国だけでなく他の国に積極的に国交を開くべきと考えています。」

イルネティア王国に仲介を頼むのも視野にいられています」

「そうですね。流石にイルネティア王国だけで食糧問題が解決するとは思えません」

デュンバルトがイルクナーに同意した。

「まずは帰還し、本国に報告して指示を仰ぎます。恐らく第三艦隊は

当面、我々外交官を送り届ける役目になりますね」

「でしような。一部優れていたとはいえ、全体的にはまだまだまだゾラより遅れています。護衛なしでは無理でしょう」

「いささか気が早いですが、よろしくお願いします」

この後、本国に帰還した第三艦隊はイルクナーの予想通り、外交官を送り届ける使節として、

第二文明圏中を駆け回る事になる。

第六話 「日本との再開」

中央歴1939年3月4日 AM09:02

獵全共和国共和国政府第一直轄区宮都市

首相官邸

「本日はお時間を頂き、ありがとうございます」

「こちらこそ。転移の混乱がまだ収まっていないのに来ていただき、ありがとうございます
ます」

朝食を終えた高野首相は、応接室にて獵全に駐留している地球防衛軍武官と会談を行っていた。

マクミラン駐留軍総司令官と竹中参謀だ。

竹中参謀が切り出した。

「早速ですが、物資の供給についてどうなっているのでしょうか?。」

物資の備蓄に余裕はありますが、なるべく早めに解決されるに越したことはありません。

アルタラス王国なる国家と国交を樹立したとは聞いていますが……」

「現在、国交を樹立したアルタラス王国の仲介で周辺国に国交樹立の為、

外交官を派遣しています」

竹中参謀の質問に高野首相が答えた。

マクミラン司令官が続きを促す。

「詳しい状況は？」

「外交官を派遣している国の中に、クワ・トイネとクイラ王国という国があります。

クワ・トイネは現地で家畜でもうまい飯が食べると称される程に食資源が豊富です。

クイラ王国は土地は不毛で貧しい物の、自然に湧き出る程石油が出るとのこと。

両国共に援助すれば資源を輸出してくれるでしょう」

獵全共和国には地球防衛軍が駐留しており、獵全共和国の転移により彼らも転移した。

地球各国に駐留する地球防衛軍は基本的に国際連合——国際連盟は戦後に再編され、国際連合に名を改めた——と駐留国からの二つの援助で成り立っている。

転移により獵全に駐留していた地球防衛軍は、国際連合の援助を断たれ、その活動を停滞せざるを得ない状況に追い込まれた。

獵全共和国は国民のみならず、自国のみで地球防衛軍を支援せざるを得なくなり、必死に統制と

海外の探索を行った。その甲斐あり、何とか物資の困窮から抜け出せそうな状況になっ

ては、獵全に駐留する地球防衛軍はイギリス、大日本帝国、ロシア帝国、アメリカ合衆国の四か国の人員が大半を構成している。

獵全共和国が転移した時に存在していた部隊は地球防衛空軍、ユーラシア極東航空軍隷下

第88統合航空団、特装航空打撃群獵全派遣隊。司令官はミード少将。

地球防衛陸軍、極東方面軍隷下

第11師団、第7空中旅団、第12支援飛行隊司令官はレズノフ中将。

地球防衛海軍西部太平洋方面軍

第五艦隊、第二飛行集団獵全共和国分遣群。

司令官は八重垣少将。

ウルトラ警備隊獵全支部

指揮官は桐山中佐。

以上が転移時に獵全に存在していた地球防衛軍の部隊である。

転移後は獵全共和国軍と共に小規模な部隊を周辺地域の調査に繰り出していた。

周辺地域が明らかになると、活動を押さえ、物資の節約に勤めた。現状では獵全共和国のみでは

駐留する地球防衛軍が活動を押さええている現在はともかく、活発に活動するようになる

必要十分な物資を供給するのは難しい。しかし、国交の目処が立ちつつある今、物資の供給も

滞りなく進むことになるだろう。

「しかし、そちらで運用している一部の兵器についての部品の供給は現状では難しいです」

「それは仕方ないでしょう。軍事機密や特許等の問題もあります。それにラヴェジヤーとの戦いで統一規格ができたと言えど完全な統一は未だになし得ず。問題が多すぎる」

高野首相の説明に竹中参謀がため息と共に言った。

「現在は議会で一時的に特許を棚上げし、製造可能で輸入不可能なものを製造すればよいという意見もありますが、すぐに戻るかもしれないという

意見もあり中々決められないです」

「我々としては一時的に棚上げしてでも、部品の製造をしてもらいたい。必要であれば弁護も厭わない」

地球防衛軍にとっては切実な問題に高野首相は考え込んだ。

しかし、その途中。部屋のドアがいきなり開かれた。

「会議中失礼します！」

「どうした？」

「クワ・トイネ王国に派遣した第四艦隊から入電です。」

大日本帝国空軍の戦闘機と接触したとの事です！」
「何い!？」

○ ●
一時間後

沖縄県石垣島南西300km海域

猟全共和国海軍第四艦隊旗艦

ムラクモ型航空母艦一番艦ムラクモ艦長室

ムラクモ型航空母艦は猟全共和国が大戦前に建造した航空母艦だ。猟全海軍の空母は前型から

補給艦と輸送艦としての能力を付与し、予算の圧縮を試みた。試みは成功し、海軍上層部は更なる発展型を求めた。そして建造されたのがムラクモ型航空母艦だ。

戦前生まれながら余裕を持った設計により改修が容易で戦後の改修により補給能力、輸送能力を

低下させつつもジェット機を運用している。

空母ムラクモから哨戒任務で発艦した戦闘機部隊——ソード隊の二機編隊が大日本

帝国の戦闘機と接触したとの報告を受けた艦長の片桐は、報告を直ぐに猟全へ伝達。更なる情報を得るために哨戒から帰還したばかりの編隊長を艦長室に呼び出した。

「雪野大尉。その情報は確かなのか？」

「間違いありません。哨戒中の我々に日本の戦闘機が呼び掛けたとの報告は事実です」
「誤認ではないのだな？」

片桐の言葉に編隊長である雪野大尉は頷き、反論した。

「向こうから、こちらは日本国航空自衛隊。と名乗り、現像は終わっていませんが、撮影した戦闘機の主翼には確かに日本の国籍マークが有りました。間違いありません」

雪野の言葉に、片桐はさらに唸った。

信じられないことに、大日本帝国もこの世界に転移したのかもしれない。

二人とも、大日本帝国の戦闘機との接触到に困惑している。

「日本も転移していたとは思わなかったが……航空自衛隊なんて組織は聞いたことがないぞ。」

空軍隷下の民間防空隊か？」

「私も航空自衛隊という組織は聞いたことはありません。レシプロ機ならその可能性はあります。しかし、遭遇したのはジェット戦闘機なので民間防空隊ではないのは間違いありません、」

その戦闘機も全く見たことのない機種でした」

因みにソード隊の使用機材はデ・ハビランド シーベノムだ。

イギリスが開発した艦上戦闘機で全天候能力を付与されている並列複座型戦闘機だ。

現状ではなんの情報も得られないと判断した片桐は一先ずパイロットを退室させることにした。

そこで唐突に机の内線電話が鳴った。

「もしもし」

「艦橋です。艦隊司令がこちらに来てほしいとの事です」

「すぐ行く」

内線電話を切った片桐は再び雪野大尉に視線を向けた。

「もう戻っていい。今のうちに休んでおけ」

「はっ。退室します」

退室を見届けた片桐は、自らも準備を整えて艦橋へ向かった。



艦橋に到着した片桐は司令官の深沢中将、他参謀らと日本への対応について話し合っていた

「片桐准将。私は艦隊をクワ・トイネと日本の二つに分けたいと思う」

「賛成です。やはり日本をこのまま放置するのは悪手です」

片桐の言葉に深沢は頷き言葉を続けた。

「戦艦キリタチとムラクモをそれぞれの旗艦にするのは決まりですが、編成をどうするか……」

参謀の一人の言葉に司令部が意見を交わす。暫くの議論の末、参謀の一人が発言した。

「空母より戦艦の方が攻撃的な外見ですからムラクモをクワ・トイネに。キリタチを旗艦とした

分遣艦隊には重巡二隻と軽巡一隻と駆逐艦四隻を日本に向かわせてみてはどうでしょう?」

この参謀の発言により議論が一気に纏まった。

「ふむ……。片桐准将、君は外交官と共にクワ・トイネへ向かえ。

私は戦艦に移乗し、日本へ向かう」

「司令は確か日本へ留学していましたね」

「運良く同期が出てくれれば多少は話しやすくなるはずだ。オオタチの方へ伝えてくれ。」

私は移乗の準備に入る」

「了解」

○●

沖縄県石垣島南西100km

獵全共和国海軍第四艦隊分遣隊旗艦

オオタチ型戦艦四番艦キリタチ艦橋

オオタチ型戦艦は1917年に竣工した獵全共和国が初めて建造した超弩級戦艦だ。

獵全の戦艦の設計思想は概ね防御力と速力を重視し、

火力は他国の戦艦と比べて控えめとなっている。

オオタチ型戦艦の主砲は35.6cm連装砲が前部二基と後部一基の計三基。副砲

も同規模の戦艦と

比べ半分程度しかない。

艦隊はキリタチを中心に輪形陣を組んで海原を進んでいた

「前衛の駆逐艦アオナミより入電。方位四十度に船影を確認！。

日の丸と……見たことのない旗を掲げています！」

見張りの報告が艦橋へ届いた。深沢司令官が双眼鏡を見張りの告げた方向に向けた。そこには白い艦がいた。機関砲を装備していたので恐らくは哨戒艦であろうと推測したが、

日の丸と一緒に掲げている旗は何なのだろうか。

「前方の艦に打電。本艦は猟全共和国海軍。第四艦隊分遣隊旗艦キリタチ。我が国の転移により

連絡が途絶えた筈の同盟国、大日本帝国の痕跡が確認されたために、その正体の確認が目的なり。

本艦に交戦の意図なし。貴艦の所属を名乗られたし。以上」

「了解！」

通信士が前方の艦に通信を送る。暫くして哨戒艦から返信が返ってきた。

「哨戒艦より返信！。読みます。

本船は日本国海上保安庁第十一管区隊、石垣海上保安部所属、巡視船あぐに。大日本

帝国という

呼称は第二次世界大戦で敗北したことにより使われておらず。また、我が国に猶全共
和国なる

同盟国は存在せず。説明求む」

艦橋内に困惑と疑問の空気が流れた。同盟国の旗を掲げながら
自分達の国を知らないという哨戒艦。
状況から見ていたずらとは思えず本当に知らないのかもしれない。

「……こりや思ったより複雑そうだな」

深沢の言葉が艦橋内に響いた。

第七話 「日本国の謎を追え！」

中央歴1939年3月4日PM17:35

日本国海上自衛隊佐世保基地

応接室

巡視船あぐにから日本の同盟国と名乗る猟全共和国の出現の報告に日本政府は困惑しながら、

護衛艦を派遣。猟全共和国の艦隊を佐世保へ案内させ、同時に外交官を佐世保に派遣。

更に第三艦隊の戦闘機との接触の情報を入手していたアメリカが、

交渉に同席したい旨を日本に要望。最終的に日米の外交官と

自衛官と米軍人が接触することとなった。

一方の猟全側は、巡視船の案内の元に佐世保へ到着したが自分達の知る佐世保とは異なる光景に

困惑した。

艦上からみる佐世保は、地形はほとんど同じながら自分達の知る佐世保と比べ、かなり発展しており、停泊している艦艇も砲が一門しかない重巡洋艦か空母か奇妙な形の

潜水艦しか存在しない。

両者共に不安を抱えながら望んだ会談で明らかになった互いの正体に一同は驚きを隠せなかった。

「六年程とはいえ第二次世界大戦が人類同士の凄惨な戦いとは……。

まるで架空戦記のような歴史ですな」

「我々から見ればあなた方の地球の歴史も空想科学映画のようにしか見えません」

深沢司令と外務省から派遣された古川外交官が言葉を交わす。

他の人間も困惑しながら資料や相手を見ている。

古川が深沢に向かって言った。

「取りあえず本格的な交渉はそちらの外交官が来た後になりますね。」

「我々も同盟国の状況の調査を目的としていましたから。まさか、一から国交を結ぶは

めに

なるとは思いませんでした」

深沢は苦笑いしながら答えた。

元々第三艦隊に乗っていた外交官はクワ・トイネとクイラ交渉のために乗っており、キリタチ率いる分遣隊には外交関係の人間は一人もいない。

日米と猟全の両者は現状では外交活動は行えないと互いに判断。

一先ずはその前準備として、会談を行うこととなった。

「しかし、平行世界と言えど流石に五十年も経てばかなり発達してますな」

「佐世保は九州で九番目に人口が多いですし、明治時代から造船と国防の街として

発展してきました。現在でも造船が盛んで海上自衛隊や在日米海軍が駐留しています」

アメリカ大使館から派遣された外交官のジョンソンの言葉に深沢は頷き、再度訪ねた。

「国防の街……やはり最新鋭の兵器が配備されているのでしょうか？」

「そうですね。国防上重要な拠点の一つですので優秀なものが揃っています」

ジョンソンの言葉に深沢がなるほどと呟きながら頷いた。

「やはり最新鋭のミサイルや電磁砲や怪力光線砲の配備を？。或いは携行可能な物を既に一般配備しているのでしょうか？。出来れば我が国にも欲しいですな」

「え？電磁砲に怪力光線ですか？」

ジョンソンが戸惑いながら聞き返した。

「はい。貴国ではレールガンやメーサーと呼んでいますが、我が国ではそれらの装備は専門の部隊にしか配備されておりません。もしや、そちらの時代でも未だに一般部隊への普及が

進んでいないのですか？」

日米側の人間に困惑した空気が流れる。古川が戸惑いながら猟全側の人間に言った。

「深沢司令の言った最新鋭の兵器はミサイル以外は全て特撮映画や小説にしか存在しません。我が国どころか我々の地球では未だ開発段階です」

「電磁砲や怪力光線はこちらの地球では三十年代に理論が組み立てられてるんですよ。配備されてないとはいくらなんでも・・・」

「嘘ではありません。本当です」

今度は狛全側に困惑した空気が流れる。並行世界とはいえ五十年も先の未来から来たのだから当然自分達の配備する兵器よりも高レベルの水準の物も配備されていると思っただからだ。

「そもそも、軍事兵器の類いは現在新世界技術流出防止法により

輸出禁止となってますので輸出は無理でしょう」

「そうですか」

深沢は残念そうに言った。自分達にとっては同盟国だが、日本側からしてみれば、得体の知れない国だ。輸出に慎重になるのも無理はない。深沢は引き下がった。

「ところでさっき言っていたメーサーやレールガン運用の専門部隊なのですが、どのような部隊が存在するのですか？」

古川が訪ねた。随行している自衛官や米軍人も興味深そうだ。

「はい。ラヴエジャー由来の技術。我々は R a v a g e r O v e r T e c h n o l o g y、略して R O T と呼んでいます。それらに由来する技術を使った兵器を専門的に扱う部隊が運用しています。」

まずは警察の科学特捜隊。それから陸軍の M A T に地球防衛軍のウルトラ警備隊、全支部の三つが

現在我が国に存在する R O T 運用部隊ですね」

「えっ？」

部隊名を聞いた一部の日米の人員が驚いたようすで深沢を見つめた。

見つめられている深沢や他の日米の人員は深沢をなぜ見つめているか分からず困惑している。

「もしかしてジェットビートルやウルトラホークが飛んでいるのか」
「バカ。今話すことじゃないだろ」

部隊名を聞いた米軍人の呟きを自衛官が小声で諫めた。それを聞いた深沢が米軍人を興味深そうに見つめ、米軍人が居心地悪そうに目をそらす。深沢が古川に訪ねた。

「なぜそちらの軍人は地球防衛軍の汎用輸送機と戦闘爆撃機の名前を知っているのですか？」

「それもあるのか。っと失礼」

古川が目を輝かせながら思わず声に出してしまった。

直後、うっかり声に出してしまったことに気付いて、咳き込んだ後に深沢の質問に答え
えた。

「深沢司令が言った部隊名と先ほど聞こえた航空機の名称は我が国で有名な特撮ドラマに登場するものなのです。そのドラマの舞台となった年代も1960年代だったので先に話された宇宙からの

侵略者の話も相まって驚いたのです」

「なるほど。時間があれば私も見てみたいです。こう見えて私はSFが好きで、昔はよく少年雑誌にかじりついていました。今でもウエルズやヴェルヌの小説を愛読しています。」

しかし、まさか宇宙戦争や異世界転移が実際に起きると思っていませんでしたよ……」

深沢は苦笑しながらそう言った。

その後は日米と猟全は幾つかのやり取りをした後に、会談は終了した。

この後猟全側は一晩佐世保で過ごした後に、翌朝ロデニウス大陸へ向かい本隊と合流するために出港する予定だ。

○●

会談が終わった後に、外交官である古川とジョンソンは基地内の喫煙所で話し合っていた。

「私は猟全のいた世界がウルトラシリーズの世界ではないかと疑ってます」

「私はそうは思いません。少なくとも宇宙人との戦争と名前が合っただけで判断するのは時期尚早だと思いますが・・・」

二人とも難しい顔をしながら喫煙していた。

二人は万が一猟全がウルトラマンと同じ世界から来ていて且つラヴェンジャーが投下した怪獣や生物兵器の残存個体、或いは猟全の存在を察知して次元を越えて此方に攻撃を仕掛けた場合、

日本を始めこの世界に存在する戦力で対応できるかどうか話し合っていた。

二人とも最低限の軍事知識はあるものの古川はウルトラシリーズのファンであるため
知識は揃っているが、ジョンソンは有名な特撮であることしか知らない。

「対艦ミサイルを空中や地上に当てられるように改造するのは必須として

他に何かやれそうなことは・・・」

「猟全から実用化されたレールガンやレーザーにメーサーを輸入。各種NBCの防護。

後は市街地に送り込まれる場合の対処」

「送り込まれる前に円盤や基地を叩けば解決するのでは？」

「いや、超獣と呼ばれる怪獣より強力な能力を持つ敵が存在するのですが、そいつらは空間を割りながら突然現れていきなり暴れるので……」

「そんなのがいるのですか？」

古川はジョンソンに頷きながら、厄介な怪獣にも言及した。

「後、四次元怪獣のプルトンは怪獣も呼び出します。それと、個人的に厄介なのがヤメタランスとモエタランガですね」

「そのダサイネーミングの怪獣はどんな性質を？」

「前者は特殊な放射能で労働意欲を徹底的に減退させて社会的危機を。後者は人間の生体エネルギーを強制的に燃烧させることで、一時的な高揚状態にした後、燃え尽き症候群を誘発して、最悪死に至る。後、前者は食べれば食べるほど質量と大きさが大きくなってましたね。」

地盤沈下もしてたような……」

ジョンソンは古川の解説に顔をしかめながらタバコを吸い殻入れに入れた。

「取りあえず、上に報告して対策を練る。これくらいしか出来ることはないですね」

ジョンソンの言葉に同意した古川が言葉を発した。

「そうですね。そろそろ戻りますか？」

「そうします」

二人の外交官は喫煙所を後にした。

この後^{のち}ジョンソンと古川は互いの上層部にこの会談の内容を報告。日本政府は新たな国家を迎え入れる準備と共に米軍と合同で彼らが懸念していた、ウルトラシリーズの存在についても調査することを決定した。

後に北方領土に存在していたロシアも巻き込んだ調査は最終的に
猟全の詳細を知るだけに終わった。

第八話「これが魔法機士（マジツシューアーバイター）だ！」

中央歴1939年2月12日

エクリプセ皇国とイルネティア王国の協議がイルネティア王国で行われる。

2月20日

エクリプセ皇国とイルネティア王国が正式に国交を交わす。以降、軍民での交流が活発化。

貿易も開始される。

○●

中央歴1939年3月10日AM10:25

エクリプセ皇国

ゼクス演習場、監視舎

初接触の後、エクリプセ皇国とイルネティア王国は数々の協議を経て国交を交わした。

両国共に相手が自国に存在しない技術を多数保有していることもあり積極的な交流を行っている。

この日、イルネティア王国のエクリップセ皇国派遣団は皇国陸軍ゼクス演習場の高台にある監視舎で皇国軍の保有する魔法機士が二機ずつの編隊に別れて行う模擬戦を見学しようとしていた。

両編隊とも見たことない機体で片方はグフー、もう一方はフツケバインMk. IIと呼ばれる機体で構成されている。

グフーはイルネティア王国に降り立っていたジークIIの派生型の一つだ。

インベーターとの大戦前に近接戦闘能力の向上を目的に極西に存在する秋津洲帝国のアクシズ地域とは違う優れた極西の魔法技術に着目したエクリップセ。そして魔法機士の技術取得を目的とする

秋津洲帝国の利害が一致し共同で開発された。

部品を入れ換え、極西の魔法技術を取り入れて製造されたグフーはジークIIと比べ、伝達機構の

省力化と高性能化により機体の反応性と関節を始めとした可動部位の強度を劇的に高性能化。

さらに軽量化する事にも成功しており、近接戦闘で高い能力を發揮する。そして軽量化によって

輸送機械への負担の減少、ブースターを利用した跳躍能力や地形走破能力と加速能力も向上した。

その反面、防御力の低下と機体の反応に新兵や一般兵ではついて行けなくなった点。そして航続距離が大幅に減少した為、守備隊のベテランやエース専用の局地迎撃機として

ジークⅡ等と共に運用されている。

大戦では防衛戦の他、着上陸戦や空挺作戦。山岳地帯でのゲリラ戦で活躍した。秋津洲に置いても採用され、こちらにも主に迎撃機として運用している。

名前は秋津洲での愛称である颯風くふうから採られている。

外見はジークⅡに似ているが、ジークⅡにあったパイプが少なくなっている。また、模擬戦で損傷させないように覆いが着いているもの、間接部分や肩にスパイクが、そして左右前腕部には

小手のようなものが装着されている。

エクリプセ兵からから聞いた話では前腕部の小手は近接戦闘用の武器で、使われる際に刃が伸びて使われる。また、近接武器の他にも射撃兵装も装備できるらしい。

装備は先述の小手に銃——強襲短砲（アングリフカノシクルツ）と言い魔法機士用に巨大化しており箱形弾倉が上に着いている。——を両手に一挺ずつ装備している。両肩には補助腕が装備されており強襲砲の予備弾倉が保持されてる。

もう一つの見えたこともない機体はフツケバイン Mk. II と呼ばれる機体だ。

こちらはジークⅡの後継機として開発された。

元々はジークⅡという魔法機士のエポックメイキングの後継機ということで、その後継機として

恥じないように高性能化を目指し新機軸を大量に導入。結果フツケバインという高性能な大型機が完成した。

後に策定された区分でジークⅡとその派生型は軽量級、フツケバインは中量級として分けられた。

しかし、新機軸を導入するあまり非魔法使いでは運用できない事とコストが想定以上に高くなった為に運用コストの低下と扱いやすさの向上を目的に Mk. II と呼ばれる本機が開発され、従来型は Mk. I と分類された。Mk. I と比べ性能は低下しているものの全部隊に配備可能なほど安価で、ジークⅡの後継機としては十分な性能をもつ。しかし、大戦で生産設備が甚大な被害を被ったため現時点ではジークⅡと並行して運用している。

図体はジークⅡより大きいのが、機体だけで見ればスマートな印象を受ける。

ジークⅡのようなパイプは確認できず、頭部は目元をバイザーが覆っており、そこから下は

特に何も無い。強いて言うなら鼻から顎先にかけて中心線が盛り上がっているくらいか。

右側頭部からは細長いアンテナが飛び出ている。

装備は強襲砲^{アンタリファガン}——こちらはグフーの装備しているものと比べ大きく上に着いている弾倉も

やや大きい。——を両手で保持し、腰には近接戦闘で使うであろう剣が装備されており、

右肩にはドラム型——形は地球のBeta社が販売しているCマグに似た弾倉を——着けた強襲砲を。左肩に手で携行している強襲砲の予備弾倉を装着している。

両チームとも強襲砲はペイント弾を装填し、近接兵装も模擬戦用に刃を潰している。

「一体どつちが勝つか。機体性能がわからんからなんとも言えんな」

「確かグフーよりフツケバインの方が新しい機体だとか。多分フツケバインが勝つと思います」

隔離された結界内でオーギとコバーシは他の同僚達と共に模擬戦の見学をしていた。オーギ達竜騎士部隊はエクリップセ皇国が運用しているワイバーンの装備の視察を目的にエクリップセに派遣されていた。

「始まったみたいです」

エクリップセ兵の言葉に、イルネティア兵達が模擬戦場を見つめた。

ガツガツガツガツガツガツガツガツ

ガツガツガツガツガツガツガツガツ

ガツガツガツガツガツガツガツガツ

ガツガツガツガツガツガツガツガツ

先手はフツケバインが強襲砲で先制した。

一機につき肩と手、合わせて二挺の強襲砲が、イルネティア兵から見れば脅威的な連射速度で

弾幕を張っている。

「スゴい連射速度だ。」

「肩の奴はキツツキが木をつつく速さで撃ってるぜ。」

あれじゃ精密射撃は無理だな。」

「そう表現すると恐さは感じないが・・・手で持つてるやつも同じ連射速度に見えるな。」

イルネティア兵が各々がフツケバインの強襲砲の性能を言い合ってる。

対するグフーは、ジークと比べ明らかに上な俊敏さで段幕をかくぐり接近。

二挺の強襲短砲を発砲した。弾丸がフツケバインに殺到する。

ババババババババババババ

ババババババババババババ

シューアアアア

ピシャシャシャシャツ

直後フツケバインの前方に円形の輝く盾が現れ、ペイント弾が盾に着弾した。

「今のは!?!」

「結界……ではないみたいです。」

オーギとコバーシが驚きながら推測する。

他のイルネティア王国の軍人もオーギ達と同様に推測するなか、解説役のエクリプセ兵が答えた。

「あれは前の世界で一般的に使われていた魔法障壁——シールド——防御魔法です。」

「防御魔法……。」

「はい。魔法機士だけでなくMVHを着用した兵士、飛行艦艇等もこの魔法を行使します。」

解説するエクリプセ兵に竜騎士の一人から質問が飛んだ。

「防御魔法はワイバーンでも使用できますか?。」

「はい。MVHを着用すれば使用できますね。」

この言葉にイルネティアの軍人が強力な防御魔法が幅広く使われていることに驚き、外交関係の人物は改めて敵対しなかった事に安堵した。

暫くグフー達が撃ち、それを魔力障壁で防いだフツケバイン達が撃ち返す応酬が続き膠着状態になる。

「グフーが持っている・・・強襲短砲でしたか。小さいわりに凄まじい連射速度でしたな。」

「おそらくは小型な為に威力は劣るものの、

代わりに手数で勝負するといったところでしょうか?。」

「確か魔法使いにしか乗れないって話しだったか?。」

「いや、一部の特殊兵装と固有魔法が使えないだけで魔法使いじゃなくても乗れるらしいぞ。」

イルネティア兵が各々の知識を元に分析をしている。その中にオーギやコバーシも混ざっていた。

「しかし、フツケバイン……でしたか。

彼らの方が最新の機体と聞きましたが、苦戦してますよ。」

コバーシは魔力障壁を張って攻撃を防ぐフツケバインを見ながら言った。
エクリプセ兵が解説する。

「まあ、グフーに乗っているのはベテランパイロットで、フツケバインに乗っているのは一般の練度のパイロットですから。」

「なるほど。」

コバーシが納得しながら模擬戦を見てると、戦況に動きがあった。

耐え続けていたフツケバインの一機が肩の強襲砲をパージ。防御魔法——魔力障壁^{シールド}を張りながら

強引に突撃を開始した。直後に片方のグフーの強襲短砲の弾薬が切れ弾幕が途切れる。

その一瞬の隙を突いて一機のフツケバインがシールドを解除し、両手と肩の強襲砲で援護射撃を行った。グフーは咄嗟に回避するも左腕の小手と強襲短砲に直撃を喰らい

装備の半分が

喪失判定となった。

突撃を仕掛けたフツケバインがすぐに勝負を決めるため、

抜剣せずに下から強襲砲の銃床打撃を仕掛けた。

グフーがフツケバインの右手側に避けながら銃床打撃を受け流し、背後に回る。

右手の強襲短砲を棄てて、小手から薄く幅広の模擬剣が飛び出し、背後から突き刺す。

「今のは撃墜判定出ましたね。」

「とうとうと？」

「模擬剣が刺さった場所がコクピットなんです。」

エクリップセ兵が解説している間にもう一機のフツケバインもグフーのコンビに翻弄され、

魔力障壁を張ったものの背後からペイント弾を喰らい撃墜判定を受ける。

模擬戦はグフーを操るベテラン達が勝った。

「これが魔法機士。中々どうして強いな。ワイバーンで倒せるか？」

「魔法障壁が厄介だ。それに機体の材料にかなりの鉄が使われている。火炎弾が当たっても致命傷にはなりにくいだろうよ。」

「輸入するとなるとどれくらい掛かるだろうか。」

「ジークIIやグフーは旧式と言ってたからそれくらいなら安価に輸入出来るのでは？」

イルネティアの兵士たちが口々に魔法機士について評価する。

「それではそろそろシユバルツベルク基地に戻ります。バスにお戻りください。」

エクリプセ兵の言葉にイルネティアの人間は議論を切り上げて、

監視舎外に停めてあるバスに乗り込んだ。

第九話 「竜騎士対魔法少女対猫」

AM 11:30

シュバルツベルク陸軍基地

外来宿舎周辺

「こういう微妙な暇がある時間は何をするか迷いますね。」

ゼクス演習場で行われた魔法機士の模擬戦を見学し終えたイルネティア王国の軍人たちは演習場の最寄りの基地であるシュバルツベルク陸軍基地にて昼食を取るべく移動。早めに到着した為、

現在は食堂が開くまでの時間を潰していた。オーギとコバーシは基地内を散策していた。

「見ているだけでも暇潰しにはなるが・・・会話できないのがな」

エクリプセ皇国は異世界から転移してきただけあって、イルネティアでは見慣れない物が

多数存在している。

雑談がてらエクリプセ兵に用途を聞こうにも交流が始まって一ヶ月。

言葉の壁は分厚く用途を聞こうにも困った顔をされるのみ。

「こつちの言語を覚えないと不味いですね。」

「ああ、MVHの事を竜騎士として聞きたいし、何よりかわいいエクリプセ女性を口説けん。」

「大尉……。」

ジト目でオーギを見つめるコバーシ。オーギはどこ吹く風と聞き流す。

竜騎士オーギ、御年三十と幾年。竜騎士一筋だった為に同年代の竜騎士の中で未婚は彼だけだ。

そんな彼らに近づく少女が一人。暗い青色の髪を短いながらストレートに伸ばし、端正な顔に予想外な物に驚いた表情を浮かべている。バストは大きすぎず、小さすぎず品の良い形をしており、ウエストはくびれ、下半身はヒップはまろやかな曲線を描き、太めながら引き締まった太股を大胆に露出している。

地球人から見ると陸上選手かビーチバレー選手を彷彿とする美少女と言える。服装からエクリップセ皇国軍の魔法使いのようだ。

「そこの人達。少しよろしいか。」

流暢な大陸共通語でオーギ達に話しかけた。話しかけられたオーギ達は声のした方へ振り向き、

面識のない筈のエクリップセの魔法使いに既視感を覚えて困惑した。

「Ich^や wusst^はete^り...; sie^{彼ら}...」

オーギ達を見ながら何かに納得する少女。オーギが戸惑いながら声をかけた。

「あー、何かご用でしょうか？」

「失礼。見覚えのある顔だったので声をかけたのだが・・・当たりだったみたいだ。」

「は？」

「始めまして、イルネティア王国の竜騎士殿。」

私は皇国空軍第三艦隊第302飛行隊所属のマリアンネ・クラリツサ・ヘーゲル大尉。

この世界で始めて異世界人と接触している事で少し有名だ。」
「何だと？」

オーギが驚きながら女性を見つめた。

○●

女魔法使い——マリアンネはオーギ達が昼食まで暇していたと聞いて暇を潰せる場所の案内を買って出た。オーギ達は承諾し、雑談まじりに基地内を歩いていた。

「あの時の少女の一人が君だったとは……」

「コバーシ少尉。階級はヘーゲル大尉が上だぞ。」

思わず呟いたコバーシをオーギが諫める。

年齢ではマリアンネが下だが、階級ではコバーシが下だ。軍隊では階級が優先される。

「あ、失礼しました！」

「いや、気にするな。次から気を付けてもらえばそれでいい。」

マリアンネが笑いながら言った。

「今さらだが獣の耳が生えてなかったか？」

「それは使い魔だ。契約すると固有魔法を使えるようになり、

さらには魔法の行使をサポートしてくれる。魔法を使うときや

MVHを装着していると発現するんだ。因みに、私が契約している使い魔は狼だ。」

「なるほど。」

オーギは歩きながら更に質問を続けた。

「完全記憶は狼と契約してから？」

「完全記憶は私の元々の能力だな。私の固有魔法は視力強化と透視の複合型の魔眼だ。」

実質二つの特殊能力を持つ彼女に感嘆の声をあげた。

「しかし、完全記憶とは、また便利そうな能力だな。」

「確かに言語の習得とかでは重宝するが恐ろしいものや気色悪い奴を見たら絶対に忘れられないのがな……。」

「あゝ。」

出会って一月ほどの国家の言語をマリアンネは流暢に喋っていた。

元の世界であるゾラで大陸共通語と似た言語を持つ秋津島帝国と貿易していたとはいえ、

簡単に習得できない。

しかし、マリアンネは自らの完全記憶能力を使い、転移から短期間で大陸共通語を習得した。

「あの、魔法使いはヘーゲル大尉の年齢で大尉になれるのですか？。」

それとも完全記憶で大尉になれたのですか？」

コバーシの疑問にマリアンネが答えた。

「いや、完全記憶じゃ俸給が上がるだけで階級は上がらないな」

マリアンネはエククリプセの魔法使いの教育について説明した。

ゾラの魔法は魔力が発現した人になししか使えないが、血筋等の発現の条件は特になく四〜七歳の間に発現する。

その後は七歳から十二歳の六年間までは非魔法使いの子供達と共に初等教育を学ぶ。

初等教育を修了した後は非魔法使いと別れ十三歳から職業別に分けられ、それぞれの職業訓練を受ける。

軍では飛行課程は三年、それ以外は二年の学修課程を経て実戦部隊に配属される。

二十代に入ると魔力が減衰し始め、三十代に差し掛かると固有魔法の補助的な使用や魔力増幅装置を搭載した魔法機士でのみ固有魔法の使用は可能なものの、

MVHで魔法をメインにした戦闘や固有魔法の本格使用は不可能になる。その時は軍を退官するか

他の職種に転属することになる。

一部の家系では魔力の減衰が起こらず定年まで魔法使いの部隊に居続けることが可能だ。

「まあ、初等教育前や途中で専門の訓練を受ければ職業訓練での学修課程は短縮されるかな」

「そうですね。」

コバーシが頷いた。マリアンネが更に補足する。

「因みに大戦時の教育は学徒動員前提で初等教育の課程に軍事教育を平行して行っていたんだ。」

「私もこの世代だな。十二で部隊に配属されたぞ。」

「十二!?!。おいおい陸の少年騎士でも十五からだぞ。」

オーギが顔をひきつらせる。そしてコバーシが思い出したかのように言った。

「そういえばインバーダーって勢力から世界規模で侵略受けてましたね。」

「流石に亡国の危機で平時のような教育は無理だからな。さて、着いたぞ。」

マリアンネがある建物の前で止まり、続いてオーギ達も止まった。建物からは獣の臭いが漂い獣舎であることが伺える。

「ここは？」

「暇を潰せる場所だ。猫は好きか？」

「ああ。どちらかと言うと犬派だが猫も好みだ。」

「自分は猫派です。」

オーギとコバーシの答えにマリアンネが笑みを浮かべる。

「それならいい。今から猫舎に入って触れあってもらう。」

「それはいいですね。．．．こういうのって許可が必要なんじゃ？」

「今日は世話の手伝いをしたからな。その見返りにうちの部隊の隊員に許可が降りて
る。」

まあ、客人の二人位は大目に見てもらえるさ。」

オーギ達はマリアンネの案内のもと建物の敷地内に入った。



「猫だな」

「猫ですね。外見以外は。」

「どうした？。こいつらは人を食ったりはしないぞ。」

「ニャア、ア、く」

獣舎の住民を撫でながら言うマリアンネ。撫でられた住民は気持ちよさげに一鳴きする。

敷地内に入りそこから庭のような場所に出たオーギとコバーシは目の前の光景に面食らった。

目のまで魔法使いの少女数名と少女達より大きな猫————サーベルタイガーが戯れている。

「ほら。虎より猫と言った方がかわいいだろう。」

「まあ、そうだな。」

「Kapit・n Hegel。」

戯れていた少女の一人がこちらに気づき近寄ってきた。

かなり小柄な体型だ。バストはささやかに。ウエストは括れてはいないがこちらも細い。

ヒップもやはり小振りである。こちらでもマリアンネと同じく大胆に。

しかしマリアンネと違いほっそりとした足を露出している。

地球人から見ると将来有望ながらまだまだ発展途上のロリ——少女だ。

エクリプセ語でマリアンネに話しかけている。

「ヘーゲル大尉。彼女は?。」

「彼女は私の編隊の一員のヘレナ・リヒトホーフエン少尉。

私と共に君たちと接触した隊員で歳は十五だ。」

「十五で少尉……」

マリアンネがエクリプセ語でオーギ達を紹介をした。マリアンネの紹介を聞いたコバースが複雑な表情を浮かべながらヘレナを見る。

ヘレナはそれに気づくことなく笑みを浮かべながら自己紹介を始めた。

「Freut 始 mich, め dich ま kenn し en て z u l e r n e n . I c h
 Helena ヘレナ R i c h t h o f e n リヒトホーフエン F h n r i c h . G r e 少尉 す。 よろしくお願ひします

「・・・やつぱり分からんな。まあよろしく。」

「こつちもよろしく。ヘレナちゃ・・・じゃなくてリヒトホーフエン少尉」

三人が挨拶を交わしていると一頭のサーベルタイガーが寄つてきた。

サーベルタイガーはオーギに近づく。

「ニヤア、ア。」

「おっと。」

「どうやらお客人に興味を持ったようだな。触れても大丈夫だぞ。」

オーギはしやがんで、恐る恐るサーベルタイガーの頭を撫でた。サーベルタイガーは目を細めて

撫でられるがままとなっている。一方のコバーシには小虎がこつそりと近づいてい

る。

「コバーシ。」

「はい？」

「猫はいいぞ。」

オーギは表情を緩めながら言った。そのまま撫で続けた。コバーシにサーベルタイガーの子供が

飛びかかき、足に引っ付いてきた。

「ふむ・・・猫はいいぞ」

「まあ、見りやわかりますよ。」

「ナア〜」

コバーシは自分の足にじゃれついてきたサーベルタイガーの子供を抱き抱えた。更に別の小虎が足に引っ付いた。

「猫はいいぞ。」

「大尉。ミリシアルのおもちやみたいに同じ言葉を喋ってますよ。」

コバーシが抱えた小虎を置いて引つ付いた小虎をどかす。すると別の小虎が二匹同時にコバーシに飛びかかってきた。

「・・・いつまで続くんだこれ?。」

「子猫に遊ばれるのは珍しいな。見知らぬ人には滅多に人に懐かないんだ」

「昔から猫には懐かれやすいんですね。」

「ナア、ナア」

会話しながらよじ登る小虎を抱き抱えて下ろす作業を繰り返すコバーシ。

傍には親虎らしき虎たちがコバーシをじっと見つめている。

「コラコラ、危ないぞ。」

ヘーゲル大尉。こんな貴重な体験をさせていただきありがとうございます。」

小虎を捌きつつマリアンネにお礼を言うコバーシ。マリアンネは言った。

「いや、気にしないでくれ。初めて接触したよしみだ。」

「*Sehr* とて *freundlich* 懐いてますね。」

ヘレナが笑みを浮かべながらコバーシに語りかける。

戸惑いながらコバーシは返した。

「えつと・・・どういたしまして？」

「お礼を言ったわけではないのだが・・・まあ、いいか」

「猫はいいぞ。ほんとに猫はいいぞ。」

オーギ達は昼食の時間になるまで猫————サーベルタイガーとの触れ合いを楽しんだ。

第二章 「初戦——First blood——」

第十話 「展開作戦第一号」

3月4日

獵全共和国海軍第四艦隊。クワ・トイネ公国の軍船と遭遇。軍船の案内のもとマイハークに到着。

3月5日

マイハークにて獵全共和国とクワ・トイネ公国との間で協議が行われる。

同日公都クワ・トイネにあるクイラ王国大使館が獵全共和国がこちらとも国交を開設したいとの情報をクワ・トイネから聴き、獵全共和国外交団と接触。

3月8日

クワ・トイネ、クイラ合同使節団。獵全へ出発

3月15日

合同使節団、獵全共和国へ到着。宮都市にて獵全政府と協議に臨む。

3月27日

獵全共和国とクイラ王国、クワ・トイネ公国の間で国交が交わされる。



3月30日AM07:40

クワ・トイネ公国、公都クワ・トイネ

獵全共和国大使館

この日、クワ・トイネ公国駐留大使の蜂渡は執務室の窓から射し込む朝日に照らされながら

秘書と共に今日のスケジュールを確認していた。

「今日は軍事顧問団の拠点とクワ・トイネの訓練所の視察だったな。」

「後は導入する携行兵器と兵器の製造所の確認と他の交易品についての協議と為替。」

後は新たな軍事援助と輸出品目の交渉ですね。」

「確か最初は7・62mmEDF弾（300サヴェージ改良弾）に対応した05式歩兵銃と38式軽機関銃と33式擲弾砲を輸出することになってたな？」

獵全共和国はクワ・トイネとクイラに対し、当初インフラを始めとした生活設備の輸出を行おうとしていた。しかし、両国から日本から輸入していることでインフラを

拒否されてしまった。

そこで獵全共和国は旧式化した軍用装備の輸出と軍事顧問団の派遣を提案。両国共にこれに興味を示し、獵全共和国から帰国する際に05式歩兵銃と38式軽機関銃と3式擲弾砲をサンプルとして

持ち帰った。両国共、帰国後の協議でこれらのサンプルを確認した上で採用を決定。

現在獵全共和国は両国に軍事顧問団の派遣準備を進めている。

予定の確認をしている途中、唐突にドアがノックされた。

「失礼します。」

「どうぞ。」

ドアから受付嬢が入ってきた。

「どうした?。」

「クワ・トイネ公国外務局のヤゴウ様から緊急に会談の申し入れがありました。」

「何?。」

今日の予定にはヤゴウとの会談はない。

朝早くからアポなしで外務局のヤゴウという大物からの突然の来訪に蜂渡は秘書と顔を見合わせた。



蜂渡はヤゴウとの会談を受けることにした。

何らかの火急の案件が発生したのだろう事は間違いないからだ。

応接室に赴きヤゴウとの会談に臨む。応接室では既にヤゴウが座っており、ヤゴウの前にお茶が出されている。

「突然の来訪。申し訳ありません。」

「いえ、しかし何があったのです？。こんな朝早くから会談の申し入れとは。」

申し訳なさそうな表情を浮かべるヤゴウに蜂渡が聞いた。

「貴国の軍の派遣を要請します。現在隣国のロウリア王国が国境沿いに

「大軍を集結しているのです。恐らくは我が国に攻撃を仕掛けるものと思われれます。」
「なんですって?」

「このままでは貴国への食糧の輸出が不可能になります。」

蜂渡はヤゴウからもたらされた情報に表情を険しくした。これでは解決の目処がなかった物資不足が逆戻りになってしまう。

ヤゴウが次の言葉を告げようとしたとき、ドアがノックされた。

「失礼します。お茶をお持ちしました。」

「どうぞ。」

受付嬢が蜂渡の分のお茶を持って机に置く。蜂渡は礼を言っ一口飲み気分を落ち着かせた。

ロウリア王国。現在獺全共和国が新たに国交を交わそうとしている国だ。

ロデニウス大陸で一番国力が強いが、人間以外の亜人の排除を国策としており

亜人を国民としているクワ・トイネとクイラと仲が悪く、

クワ・トイネとクイラは互いに足りない所を補い合いながらロウリア王国に対抗していた。

この為クワ・トイネとクイラは軍事援助を表明した獵全共和国と早期に国交開設を決断した。

獵全共和国はロウリア王国とも国交を持つとしたが、門前払いされ、交渉を開始できていない。

気分を落ち着かせた蜂渡はヤゴウに問いかけた。

「只の威嚇という事は？」

「確かにこれまでも国境沿いに兵力を集めて威嚇してきたことはありました。

しかし、今回は兵力が尋常ではありません。ワイバーンも多数確認しており、正直我が国だけでは防ぎきれそうにありません。」

蜂渡の疑問にそう答えたヤゴウ。その表情は取り繕ってはいるが、雰囲気から焦りが漏れ出ている。

「なるほど。未だ軍事援助を開始していない状況では厳しいでしょう。」

それに現状、貴国の食糧の輸出が止まるのは我が国としても避けたいことです。」

蜂渡は頷き、言葉を続けた。

「分かりました。本国に連絡してみます。ただ、開戦に間に合うかどうかは分かりませんよ。」

蜂渡の言葉を聞いたヤゴウは安堵して、笑みを浮かべた。

「ありがとうございます。これでなんとか滅亡から逃れられる。」

ヤゴウはお茶を一気に飲んで立ち上がった。

クワ・トイネの要請はすぐに獵全政府に伝えられた。獵全政府は要請を受諾し、派兵を決定。

受諾から二日後に援軍を乗せた船団が獵全を出発した。



4月6日AM11:23

ギム防壁上

「遅すぎる。今にも攻撃が始まるというのにつ！」

ロウリア王国との国境近くに位置する都市ギムの防壁上で

西部方面騎士団団長のモイジは苛立たしげに叫んだ。

国境ではロウリア王国軍が集結しつつある一方でクワ・トイネはモイジの応援要請に
対して、

現在予備役召集中と返答。そして昨日になって最近国交を結んだ獵全共和国からの
援軍の先遣隊が今日到着予定との返答を返した。以降それ以外の返答はない。

「このままではギムを放棄することになるぞ。」

上層部の対応に焦るモイジ。そんな彼のもとに伝令が走ってきた。

「報告！。北の方角の空に多数の騎影を確認。ワイバーンではありませんが

向こうからの魔信で友軍と報告がありました。」

「なんだと？　すぐ向かう。」

モイジは伝令と共に北門に向かった。



北門に着いたモイジが見たのは、やかましい音を立てる真上に大きな風車に似たなにかを

着けている金属奇妙な形の物体とそこから荷物を下ろす見慣れない姿の兵士だ。

兵士の服装は部隊によって統一されており、モイジは傭兵団の集まりのようだと感じた。

兵士たちから階級の高そうな人物が副官らしき人物とともにこちらに近づき、騒音に負けない大声でこちらに呼び掛ける。

「我々は獵全共和国からの援軍です！。そちらの指揮官はどちらにいらつしやいますか！。」

「私だ！」

モイジは大声で叫び、近づいた。

「私は猟全共和国クワ・トイネ救援隊先遣隊指揮官の椰子木少佐です。」

「私は西部方面騎士団団長のモイジだ。援軍に感謝する。」

両方の指揮官が互いに挨拶を交わす。椰子木の副官が後ろで作業する兵士たちに命令を下す。

「荷下後はへりは避難民を乗せるため待機。地上部隊は資材とともに待機し、

許可が下り次第ギム市内へ運び入れる。」

「避難民をあれに乗せるのか？。あんなもので避難民を乗せるのは・・・」

副官の言葉にモイジは怪しげにあんなもの——ヘリコプターを見ながら椰子木に尋ねる。

「これで避難民をエジエイ近郊まで運びます。見た目はともかく全部合わせれば

二百人以上を三十分程度で運びますよ。」

「馬鹿な。短時間で運べるはずがない。」

モイジが信じられないと訝しげに表情を浮かべるが、椰子木は笑いながら言った。

「ご安心を。現在この場に着陸しているヘリコプターは、一番遅い機体に合わせても時速160km程で500km以上離れた場所へ移動できます。ワイバーンと戦うのは厳しいですが、

輸送能力についてはこの兵力と資材の全てを運んだので自信を持って高いと言えます。」

この言葉にモイジはしばらく逡巡するが、ロウリア王国の軍勢のことを思い出し、一先ずはこの獵全共和国の隊長と副官を司令部に案内することにした。

○●

椰子木率いる先遣隊はギムへ入り、市内で休息をとっている。椰子木と副官はモイジの案内のもと司令部に入った。

現在西部方面騎士団の司令部が置かれているのはギムの役所の大会議室だ。

大会議室にはモイジを筆頭に西部方面騎士団の将官が待機していた。

机の上にはギムと周辺を表した地図が設置されている。

地図の上にはクワ・トイネ軍とロウリア王国軍を示す駒がそれぞれ

ギム周囲と国境方面に置かれている。そこに北の海とギムに猟全共和国軍を示す駒が置かれた。

「本隊は十日に到着すると言うことか。」

「はい。我々と同時に船団を発ったヘリ部隊と船で運ばれている一部の部隊は

エジエイ近郊で今回の我が国の拠点となる特設飛行場の建設と管理等でそこに常駐しますが、

他はギムに向かいます。」

モイジら西部方面騎士団の面々が椰子木から援軍の状況の説明を受ける。地図上のエジエイ近郊に猟全が建設予定の飛行場を書き記された。

「なるほど。ところで一つ確認したいのですがよろしいでしょうか？」

「何でしょう?」

「先ほど見た兵士たちは服装が統一されていないようですがあれは一体?」

クワ・トイネの将官の一人が質問をする。椰子木の副官が答える。

「今市内で展開している援軍は民間軍事会社——こちらだと

傭兵に相当する者たちが主力として参加しています。」

「傭兵か……」

傭兵と聞いてクワ・トイネの面々が顔をしかめる。

傭兵と言えば早急に手練れを用意できる利点があるが、戦場に於いては略奪を行い戦争を長引かせる要因の一つになる。

「傭兵と言っても、全員軍の指導を受けており、高い規律を持っていますので市内での犯罪行為は行われませんよ。」

椰子木が説明したが、騎士団の面々は疑念を解消せずに難しい表情を浮かべ続ける。騎士団の一人が質問した。

「国軍はどうしたのだ？」

「我が軍は現在戦力が整っておらず、戦力が整い次第ロウリア王国西部沿岸から上陸し、そこから首都に直接向かいます。」

「なるほど。」

椰子木の説明に質問をした騎士が納得する。現在国境に展開しているロウリアの部隊は

かなり大規模で恐らくは主力となるだろう。

逆を言えば国境と正反対の西部沿岸部は無防備かかなりの手薄だ。

そこを攻撃すれば挟み撃ちにできる。猟全軍の動きは合理的と言える。

猟全の動向を聞いたところで、議題がギムの防衛策に移行する。

騎士団と先遣隊の会議の末に決まった内容はこうだ。

まず通電した鉄条網と地雷から構成される障害物を設置。その後方に自爆用の爆薬を設置した陣地を配置しこれを障害物と合わせ一つの防衛線を構築。

この防衛線をギムの城壁と合わせて三つ構成する。エアカバーはクワ・トイネの飛竜部隊に加え、後続部隊の対空自走砲と戦闘機が担う。

「今言った罨は効果があるのか？」

「はい。我が国でも実際に使用し高い効果を得ています。」

椰子木の言葉にモイジは顎に手を当てた。現時点でクワ・トイネにロウリア王国の展開している部隊がないことはモイジは理解している。

獵全共和国は未知の塊であるが、ロウリア軍を撃退できる可能性があるならこの際獵全共和国の

作戦に乗る方がいいかもしれない。モイジは決断した。

「防衛作戦はこれにする。異論はないな」

モイジの言葉に誰も意見を言わない。全員この作戦に異論はないようだ。

「よし。各自これを元に行動してくれ。」

「了解！」

騎士団の面々が自分達の受け持つ場所へ移動する。

「椰子木殿も頼みました。」

「任せてください。」

椰子木達も部隊に戻っていく。

斯くてギム防衛作戦の準備が始まった。

第十一話 「ロウリア軍を撃て」

4月12日AM05:24

クワ・トイネ公国——ロウリア王国国境周辺

第五監視掩体、ポスト5

「アル。何だか嫌な予感がするぜ」

「その台詞を聞いたのは六度目だぞ。ジョン」

ヘルメットを被っている中年の白人男性がアルと呼ばれた熊の獣人にそう突っ込まれた。

国境を監視するために作られた掩体で二人の男が銃を構えながら警戒を行っていた。

ジョンは無線電話の傍でM1ガーランドを、アルは38式軽機関銃をそれぞれ構えている。

ジョンは援軍として派遣された民間軍事会社所属の傭兵で

アルはクワ・トイネ公国ギム守備隊の兵士だ。

何故クワ・トイネの兵士と獵全の傭兵が組んでいるのか？

それはクワ・トイネの兵士が科学で製造された通信機器の取り扱いになれていないからという

単純な理由だ。

当初は不安視された組み合わせだが特に問題なく、現状に至る。

「俺には息子がいるんだが、ジョンは何人いるんだ？」

「娘と息子がいる。今は女房と別居中で別に暮らしてるがな」

そう言って憂鬱そうにジョンはため息をついた。アルが話しかける。

「別居？ 何でまた。」

「女房はナカトミって貿易商社の獵全支社に子供を連れて配属。俺は失敗してすぐ戻ると」

高をくくってそれについていかず傭兵として働いて・・・そしたら女房が成功して俺より稼ぐようになって。俺は意地張って獵全に行かず。

それで実質別居中になっちまったわけさ。暫くして乗ってた船が獵全の転移に巻き込まれた。」

ジョンは再びため息をつく。そんなジョンをアルは笑って慰めた。

「良かったじゃないか。」

「ああ?」

アルの言葉にジョンは怪訝そうにアルの方へ向いた。

「転移に巻き込まれなかったら一生家族と再会できないままだったかもしれないからな。」

「・・・それもそうか。」

笑みを浮かべ、ポジティブな発言をするアルにジョンも釣られて口角を上げる。

さらにアルが言葉が続ける。

「今度家族と一緒に遊びに来いよ。歓迎するぞ」

「ああ。子供とも遊ばせてやりたいな」

二人の間に和やかな空気が流れる。二人とも妻子持ちな為に会話が弾む。笑いながら会話をするジョンとアル。アルが国境を見ながら喋る。

「それで子供たちと一緒に俺とお前の女房の料理——待て。」

不意にアルが言葉を途切らせ、国境を見つめた。

「どした？。うちの女房の飯が不味そうってのか？」

「違う！。国境を見てみる。」

アルの言う通りに国境を向いて双眼鏡を覗く。

「何々？。・・・お客さんの来訪か。」

ジョンは電話の受話器を取った。

「CP、CP。こちらポスト5。」

『CP。ポスト5、何があつた？』

「敵だ。奴さん方ついにおつ始める気だぞ。ロウリア軍が真つ直ぐ此方に向かつてくる。」

ワイバーンも一緒だ！」

『了解、直ちに防衛線まで退避せよ。通信終わり。』

「了解。終わり。」

ジョンはアルの方へ向いた。

「本部から退避せよだよ。ずらかるぞ。」

「あいよ。」

二人は掩体の中の資料と無線電話を持って、近くに停めてあつたジープに向かう。ジョンが運転席に座り、アルは機関銃をジープの銃架に取り付け構える。ジープは防衛線へ向かった。



ギム第一次防衛線塹壕

防衛線に設けられた塹壕内部ではロウリア王国東方討伐軍の接近を今か今かと

多数の部隊が待ち構えていた。既に小銃や機関銃といった小火器や迫撃砲等の重火器が、

戦車や装甲車、対空自走砲等の機械化部隊が敵方に向けられている。

「隊長。司令部より入電。航空隊が敵のワイバーンと接敵。

それと全歩哨の後退を確認したとのことです。」

「わかった。」

塹壕の内部に幾つか設けられた小隊指揮所の一つで伝令の報告を受けるとある小隊長。

彼は塹壕から頭を出して双眼鏡を覗き込み、接近するロウリア軍を観察した。

上空では自軍のレシプロ戦闘機とロウリアの飛竜隊が先んじて戦っている。

数はロウリアが勝っているものの、撃墜されているのはワイバーンのみでレシプロ戦闘機は物量をものともせず、ロウリアの飛竜隊を翻弄している。

地上ではロウリア軍の歩兵や騎兵が前進してくる。その後ろに攻城兵器が追従している。

「もうちよいで有刺鉄線に接触しそうだな。」

「隊長。司令部より迫撃砲で催涙弾を敵集団に撃ち込むとのことです。」

「了解。」

双眼鏡を覗き込みながら通信兵に返事をする小隊長。

暫くして後方から炸裂音が響き渡り迫撃砲弾が敵集団の半ば辺りに撃ち込まれる。着弾したところから白煙がもうもうと舞い上がった。それに巻かれた騎兵の馬がパニックを起こし暴れ出し、

騎手や周囲の兵士達が巻き込まれた。兵士達も咳き込みながら堪らず走り出す。

一方で範囲外にいた最前列の兵士達も後ろの異変に気付き、走り出す。

しかし、走り出した先には通電された有刺鉄線が張り巡らされている。

有刺鉄線に気付いた兵士たちは止まろうとするも、後ろにいたために気づかなかつた兵士達に押され、或いはぶつかり合い転倒するものが続出する。中には有刺鉄線を乗り越えようとするものもいる。が、大電流により感電し、バタバタと倒れる。

有刺鉄線が危険な物だと気付いた兵士達は後退しようとするも、催涙ガスから逃げようとする

兵士達と衝突し身動きができなくなる。

「釘付けになったぞ。」

「射撃命令が来ました!」

「よし。射撃開始!」

塹壕から機関銃と小銃が、迫撃砲に一部の対空機関砲が一斉に射撃する。曳光弾を交えた弾幕が

ロウリア軍に殺到する。有刺鉄線により身動きができないロウリア兵達がバタバタと薙ぎ倒され、或いは砲撃により弾け飛ぶ。

僅かに弓矢や攻撃魔法で反撃を行うものや治癒魔法を詠唱するものもいるが、反撃として放たれた攻撃は塹壕には届かず、治癒魔法も余りの負傷者に対応しきれない。

「敵飛竜接近!」

「対空戦闘用意!」

地上の様子を確認したワイバーン部隊の一部が戦闘機を振り切つて防衛線に突撃する。ロウリア軍の兵士達が突撃するワイバーンを見て、戦意を再び滾らせ前進を再開する。

小隊長の命令で一部の歩兵が小銃をワイバーンに向ける。そして小隊内の対空火器——対空銃架に備え付けられ、百発入りドラム弾倉を装着した38式軽機関銃がワイバーンに対し向けられる。

塹壕にいる他部隊も対空機銃やロケットランチャーを向け、塹壕の後方に控えている対空自走砲や戦車の対空機銃もそれぞれの指揮官から命令を受け仰角を上げ、ワイバーンを狙う。

「撃てえー！」

38式軽機関銃がワイバーンに対し銃撃を加える。

それとほぼ同時に塹壕の後ろで待機していた自走対空砲が射撃を開始。弾幕を張る。

歩兵部隊から放たれた小銃弾と優秀な照準機を備えた多数の機関砲による

曳光弾や時限信管やVT信管を備えた炸裂弾を交えた濃密かつ精密な弾幕にからめ

とられて

次々と墜ちていくワイバーン。墜ちていくワイバーンを見たロウリア軍は恐慌状態に陥る。

常識ではワイバーンは十騎もいれば一万人の歩兵を足止めできると言われるほどの強力な戦力だ。そのワイバーンを敵が容易く撃ち落とす光景は、ワイバーンを最後の頼みとしていた

兵士達の士気を完全に破壊した。

指揮官が大声で指示をするも、恐慌状態に陥った兵士たちには届かずロウリア軍は完全に

統制を失ってしまった。

「敵は逃げ腰だ！ 火力で圧倒しろ！」

「情け容赦無用。Fire！」

統制を失ったロウリア軍に追い討ちを掛けるように激しさを増す弾幕。激しい弾雨はロウリア軍が戦場からいなくなるまで続いた。

その後も幾度とロウリア軍は防衛線を食い破ろうと果敢に攻撃を行うも、その度に撃退された。

この日のロウリア軍の戦果は一部のワイバーンが民間軍事会社の戦闘機部隊を振り切り、

火炎弾で塹壕に直撃弾を数発当てただけだった。

クワ・トイネ・猟全連合とロウリア軍との最初の戦闘はロウリア軍の敗退で終わった。



ギム役所司令官室 P M 19 : 08

市民の避難が終わり、民間人がいなくなったギム市内では兵士たちが初戦での勝利を喜びあっていた。

ギムの役所内の司令官室でモイジと猟全側の指揮官である柴山大佐も初戦での勝利を喜び合うと共に今後の状況について話し合っていた。

「あの軍勢に一步も防衛線を退かずに撃退できるとは。心から感謝します。」
「まだまだ戦いはこれからですよ。」

そう言うって柴山大佐は手元のお茶を口に含む。

「現状の戦力でギムを守りきれれると思いますか？」

「いや、何とも言えません。航空戦力の差が痛いですね。」

ギムの防空は敵の上空に猟全から派遣された民間軍事会社保有の戦闘機部隊が展開し

後方は対空自走砲とクワ・トイネの飛竜隊が担ってる。戦闘機部隊は個々の性能ではワイバーンに勝っているものの、数では敵が勝るためどうしても戦闘機を突破するワイバーンが出ていた。

最も突破されたとしてもクワ・トイネの飛竜隊や猟全の対空火器で迎撃可能なため現時点では

致命的な被害は無い。

「せめて日本が早期に参戦してくればギム防衛どころか

ジン・ハークまで一息に制圧できるのですが。」

「日本はそこまで強いのですか？」

「我々から見れば五十年も先の技術水準ですから。

まあ、平行世界なので我々の知る日本とは違うところもありますね。」

日本大使館や猟全からの情報によれば、日本は食糧難の危機に関わらず

未だに自衛隊の派遣を決定していない。平和憲法を制定しているためか自分達の知る日本と比べ

戦争への介入にあまり積極的ではない日本に猟全政府や軍は辟易としている。

「腰に鉄塊でも入れてんのかねえ。」

「腰に鉄塊？」

「いや、何でも。ところで我々の武器を装備した貴国の兵士についてなんですけども——」

司令官室では、二人の指揮官による話し合いが夜遅くまで行われた。



4月22日クワ・トイネ公国政治部会

「現状を報告せよ。」

カナタ首相の命令に軍務卿が答える。心なしか顔が蒼い。

「現在ギムはロウリア軍に包囲され、獵全共和国の援軍と西部方面騎士団が防衛戦を行っており、すぐ陥落するような状況ではないですが、早めに状況を打破する必要があります。ります。」

民間人は先んじて避難しており被害はございません。しかし、奴等の先遣隊は三万。更にスパイからの報告では五十万もの兵力が主力として控えており、水軍も四千隻以上の艦隊が

マイハークに向けて出港したとの事。また、列強国のパーパルディア皇国が、彼らに軍事支援をしているとの未確認情報もあり、現にロウリアは今回五百騎のワイバーンを

投入してきております。」

軍務卿からの報告に政治部会のメンバーが言葉をなくす。

獵全共和国という強力な友軍がから空きとなつているロウリア沿岸部を攻めるとはいえ、

予備を含めたクワ・トイネの総兵力の十倍の兵力が。

さらに五百騎ものワイバーンと四千隻の水軍が加わる。

あまりの戦力にクワ・トイネの政治部会は絶望に包まれた。

しかし、それを気にしていないかのように外務卿のリンスイが手を挙げた。

「まだ凶報があるのか?」

「いえ、吉報です。絶望に沈むには早いですよ。」

「何だと?」

リンスイの言葉に政治部会にいる面々がリンスイに注目した。

「実は政治部会が始まる直前に日本大使館から連絡がありました。」

「内容は？」

「全文を読み上げます。」

日本政府は武装勢力によるクワ・トイネ並びに駐留する猟全人へのテロ行為は容認できない。

クワ・トイネ政府に徹底した取り締まりを要望する。尚、クワ・トイネ政府から要望があれば

武装勢力排除の為の自衛隊を派遣する用意がある。との事です。」

リンスイの読み上げた日本の声明に政治部会にいる面々は当初は首を傾げるものの徐々に内容を理解し、目を見張った。絶望が薄れていく。

「援軍を送ってくれるということか!？」

「遠回しではありますが。彼等は武力で紛争を解決することを憲法で禁止しておりますので、

かなり無理矢理ですがロウリア王国を国家と認めず武装勢力と表記したと思われま

す。こちらから要望すれば援軍を送る意味になるかと。」

リンスイの解説がなされた政治部会で絶望に沈んでいた空気が一気に明るくなった。

「よし、日本へ武装勢力排除の為の応援を要請しろ。兵糧はこちらで準備する旨と武装勢力排除まで領土、領空、領海の往来の自由を認めると伝えろ。」

軍務卿！全軍に日本へも全面協力するように伝えろ！」

「了解しました！」

カナタの命令に大臣や閣僚が大きく返事をする。

政治部会ではその後日獵へ供給する物資策定や軍の編成。獵全から供給された武器への習熟など

ロウリアへの反撃に向けて様々な事が決められた。

政治部会終了後に各大臣や閣僚は定められた計画を遂行するため、速やかに動き始めた。

第十二話 「自衛隊出撃せよ」

ロウリア王国東方征伐軍本陣

「こんの役立たずどもおおお!!」

「ぐわあ!?!」

ロウリア軍の本陣で激しい打撃音が響いた。

東方征伐軍の副将であるアデムは陥落する気配の無いギムにその怒りを爆発させ、報告に来た部隊長を殴打した。

「この戦いは電撃戦が肝なんだぞ!。」

あんな城塞都市に何時までも構ってられない。わかっているのか!?!」
「アデム君! 落ち着け。」

東方征伐軍の総指揮官であるパンドールがアデムを諫めた。

「敵の防備は我々の予想を遥かに越えていた。

あのような魔導が有るなど誰が予想をできようか。」

「しかし、もう二週間になるのに未だにギムの城壁にすら手が届いていないのです。」

そう言い終わり部隊長を睨み付けた。部隊長は完全に萎縮している。

「彼を責めても仕方ない。彼等はあの陣地に対して良くやつてる。

現に最近は敵の罫の一部を破壊し続けているじゃないか。突破が不可能ではないのは間違いない。攻めるとしたら敵の防備を見抜けなかった諜報部だろう。」

パンドールの言葉にようやくアデムが落ち着いた。

パンドールの言葉には確かに納得はできる。事前の報告では確かにギム周辺に陣地や強力な魔導は存在していなかった。

それが開戦直前に唐突に現れた。急拵えの陣地と高を括っていたが、予想に反して物量をものともせず未だに行く手を阻んでいる。

ここまで強力な戦力が予兆すらなく現れるのは考えにくい。現場ではなく諜報部が何らかの不手際を行った可能性が高い。

「陸で電撃戦を仕掛けるのは失敗したが、我が軍が負けたわけではない。今頃海軍がマイハークに向けて進撃中だ。もし我々が撃退されたとしてもあの数の戦力をどうにかする戦力をクワ・トイネは持っていない。」

「確か、四千隻以上の大艦隊でしたね。」

アデムはそう言いながら残念そうに呟いた。

「全く。私としたことが・・・」

できれば私自身の手で最初に奴等を血祭りにあげたかったですけどねえ。」

アデムはそう言いながら嗤った。



4月25日PM19:04

海上自衛隊護衛隊群旗艦「いずも」

武装勢力——ロウリア王国の行動に対し、日本政府は遂に自衛隊の派遣を決定した。

既に陸上自衛隊と航空自衛隊の先遣隊がエジエイ近郊に進出し、猟全共和国が設営した特設飛行場を急ピッチで拡大し、F-15をはじめとした戦闘機や指揮に必要な設備の運用を可能にできるように進めている。

海上自衛隊はマイハークを指すロウリア軍を迎撃するために、ロウリア王国海軍艦隊へ向かっている。

また、同じ頃に猟全共和国から援軍として派遣されている民間警備会社連合もロウリア王国海軍の迎撃のため、機動部隊を編成。

日系警備会社である極東海洋警備保障と伏見機動警備の艦隊から一個水雷戦隊、全部で十二隻を。

猟全の警備会社である猟全総合警備から護衛空母カラスとキジの二隻をそれぞれ抽出し、機動部隊を編成してロウリア海軍艦隊へ向かわせた。

途中で合流した両者は、ロウリア海軍の迎撃という共通目標があったものの、指揮系統は別々で

このまま行けば誤射等の事故が発生する恐れが出たため、話し合いが持たれた。

最終的に民間警備会社連合の機動部隊が一時的に司令設備の優れる護衛隊群の指揮下に入るようになった。

自衛隊はクワ・トイネへの損害を避けるために、クワ・トイネ抜きに迎撃を行うことを決定。

この為クワ・トイネ公国海軍は予備兵力としてマイハーク近海に待機している。

「この凶体で駆逐艦つてのはにわかには信じがたい。まして出雲と同じ名前でもりでかいと来た。」

浅黒い肌の壮年の男が呟いた。髪は白髪が混じっており、疲れていそうな表情をしているが、

歴戦の風格を漂わせている。

「確かに出雲に乗っていた重井大尉から見れば奇妙とも思えますね。」

「大尉は止してくれ。わしゃもう退役してる。」

いずも副長の言葉に重井が返した。重井は大戦前に装甲巡洋艦出雲に配属後、航空隊に志願。

厳しい訓練を乗り越えて空母加賀の戦闘機乗りとして配属され、大戦を戦い抜いたパイロットだ。戦後に知人に誘われ伏見機動警備に就職し、現在は航空隊の事務官として勤務している。

現在は艦橋内で艦長の山本と副長の解説を受けながらいずもを見学している。

クワ・トイネから派遣されたブルーアイが興味深そうに設備を見回している。重井がブルーアイに声をかけた。

「やはりクワ・トイネでは見慣れないものが多いでしょう。」

「それもあるのですが、このような巨大な艦がどのように動いているのかまるで検討が付きません。」

ブルーアイはそう言いながらも自分なりにいずもを理解しようとしているのだろう。

観察をやめなかった。

「まあ、私どもからもしてみれば中々どうして不思議な感覚はありますな。」

重井がヘリで乗艦してから今までのいずもの艦内を思いだしながら答えた。

いずもに乗艦後から重山は五十年先の日本の艦に驚かされてばかりだ。

例えば艦載ヘリコプター。重井が乗ってきたのはKa-25ヘリコプターだ。

史実では60年代初頭に初飛行した後、71年に就役したが、猟全共和国のいた世界では

史実より早く初飛行を実施し、すぐに採用されている。

対潜作戦では二機一組によるハンター・キラー戦術が基本で搜索役と攻撃役に

別れて対潜戦闘を行う。

それと比べ、いずもに搭載されている艦載ヘリコプターのSH-60Kは性能や形状も全く異なり、

コクピット内の計器も見慣れたアナログ計器やランプ等ではなく大きなテレビジョンが並ぶ見慣れないものだ。爆雷や魚雷だけでなくヘリコプターでありながら自立誘導能力を持つミサイルを搭載可能。しかも対潜兵器を搭載しながら潜水艦の搜索も可能で一機で両方の役を担える驚異的なヘリコプターだ。

艦に目を向ければかつて乗っていた出雲と違う点がかなりある。伝声管を完全に廃止し艦内電話でやり取りできる連絡手段、停電のない電気設備にハンモックの要らない居住区画。

高出力でありながら信頼性のある機関。画面に触れて操作する電子機器等。艦種は違うものいずもと出雲には大きな技術格差があった。

「いやはや五十年も先の艦はすごいですな。」

「そうでしょうか?。外観から確認できる武装はそちらが多かったです。」

ブルーアイは資料で確認した猟全の護衛空母と乗艦する際に確認したいずもの外観を思い出しながら言った。

「ブルーアイ殿。色々聞いたり観察して見ましたが、こいつは後方での支援や輸送、艦隊旗艦の機能に特化していますよ。艦隊と一緒に行動して始めて真価を発揮するタイプです。」

重井の言葉に副長と艦長の山本は感心した。五十年も前の人間にも関わらず短い滞

在でいずもの機能を良く理解している。重井はそこで艦内の様子を思い出して言った。短い滞在でいずもの機能を良く理解している。重井はそこで艦内の様子を思い出して言った。

「そういうえば艦内を見学中に将兵が妙なことを言っていましたな。」

「と言いますと？」

「うちの艦艇を見ている将兵達が嫁がいるとかいないとかしゃやいでいましたな。それに夜戦バカに鬼教官、それにぬいぬい、はむかぜとツチノコとハレンチクルーザー。他にもわけの解らんことを言っていましたな」

「おや？ 私も嫁がどうのこうのといっていましたね。スーパーキタカミ様ハイパーオオイツチ、んちゃとか提督更正機やミツチーにガチからぬ身長とか聞きましたよ。」

二人が揃って首を傾げるそばで、艦長は苦笑いを浮かべ副長は片手でこめかみを揉み、付近の艦橋要員は一部心当たりあるものが一瞬間まり、他は巻き込まれないように祈りながら作業に集中した。



翌日ロウリア海軍艦隊

海原に行くロウリア王国東方征伐海軍、総勢四千四百隻の大艦隊がマイハークへ向けて進撃していた。文明圏外でこの規模の艦隊を持つものはいない。

ロウリア兵達は自分達が最強であると信じて疑わず、クワ・トイネを一息に吹き飛ばす腹積もりで大海原を突き進んでいた。

しかし、そこに立ち塞がる艦隊——海上自衛隊と狹全共和国の民間警備会社連合だ。

数時間前に鉄竜の二機編隊——民間警備会社連合が哨戒の為に発艦させた哨戒隊が頭上を通過し、その後奇妙な形の飛行物体——海上自衛隊のSH—60Kがロウリア艦隊上空に飛来し、拡声器による呼び掛けで撤退を促した。

無論、たかだか呼び掛け程度に応じるはずもなくそのままマイハークへとロウリア艦隊は進んだ。

海上自衛隊と民間警備会社の艦隊は一隻一隻がロウリアの基準で信じられない大きさだ。

護衛艦みようこうが接近し、警告を発した。指揮官の海将シャークンは直ぐに攻撃を命じた。

みようこうに近い軍船が距離を詰めて、甲板にいる船員が一斉に火矢を放つ。

ヒューン——カンカン

ヒュヒュヒューン——カンカンカンカン

ヒュヒューン——カンカンカン

火矢はみようこうの船体に当たるも虚しく弾かれた。

みようこうが急速離脱する。兵達が囃し立てる中、シャークンを始めとした司令官や隊長や艦長。一部の聡い兵士が艦が鉄でできていることを悟り、戦いが容易には終わらないことを覚悟した。

「新たな大型艦が接近！。数は四！」

見張りの声が響き渡る。取舵を取りながら接近してきたのは民間警備会社連合の水雷戦隊から分派した伏見機動警備の艦隊だ。

○ ●
駆逐艦雪風艦橋

「川内より入電。攻撃開始セヨ。」

「攻撃を受けてからでしか反撃できんとは……不便だな。砲雷長、始めよう。」

「了解！ 右舷、砲撃戦用意！」

通信士の報告を聞いた艦長はぼやきながら砲雷長に指示を出す。

砲雷長の指示のもと Mk. 12 38口径12.7cm連装砲と右舷のボフォース
40mm機関砲、

九六式25mm機関砲が軍船に向けて指向する。僚艦も駆逐艦であれば雪風と同じ
兵装を

軽巡洋艦であればこれに加え14cm砲が軍船に砲身を向けている。

これらの兵器は帝国海軍で大戦後半に艦艇のラヴェジャーへの対空戦闘能力向上の
為に従来型の

射撃統制器材や計算機、主砲から改装されている。

国産の長10cm砲や八九式12.7cm高角砲。機材ならレーダーに照準器や射

撃統制機、射撃計算機の搭載。最悪イギリスやロシア、猟全といった同盟国の物を搭載すべしとの声もあったが、性能不足や生産が追い付かなかったために、米国等から Mk. 12 を始めとした両用砲やボフォースやエリコンの機関砲や射撃統制システムを輸入。これらを搭載した。

只、全ての艦に搭載された訳ではなく、艦齢が若い艦艇を中心に改装が施され、他の艦は射撃統制システムやレーダー、照準器の全般か一部の改良に留まっている。

戦後に退役して、民間警備会社の管理下となった後も兵装は据え置きとなっている。

「撃ちー方始めー！」

ズドーン！ズドーン！

ズドドーン！

ドドドドドドドドドド

砲雷長の号令一下雪風の主砲と機関砲が、軍船に目掛けて砲弾や機銃弾を放つ。

僚艦と共に行われる至近距離からの砲撃と銃撃は殆ど外れることなく

ロウリアの軍船を次々と沈めた。

14cm砲や12.7cm砲の砲撃が直撃し爆散する。別の軍船は機銃弾にズタズタに引き裂かれ、

或いは火矢に使う油壺や松明が船体に引火し、船体が炎上する。

一方、海上自衛隊の護衛艦も攻撃を開始。

各艦主砲しか用いていないものの、全弾が命中しておりロウリア王国の軍船を確実に沈めている。

民間警備会社連合は感嘆の声を挙げた。

「流石未来の後輩だ。射撃計算機も勿論だがいい装填手がいるな。」

「班長。ありや自動装填装置ですよ。元の世界でも自動装填装置が配備されてたんですから」

「あつちも当然持ってますよ。」

「それに今時は射撃管制システムって言うんすよ射撃計算機とか流石に古いつすよ。」
「・・・貴様等主砲に詰めてぶっぱなすぞ。」

自衛隊と民間警備会社連合と合わせて二十二隻の艦隊は約二百倍もの敵を相手に火力で圧倒し、次々と軍船を沈める。

一部では流石に降伏するだろうと言う思考が浮かんだが、護衛艦のレーダーに映る飛竜部隊と民間警備会社連合の報告に打ち消された。

哨戒中の編隊が敵飛竜部隊を発見し、交戦状態に突入したとの事。そして既に別の哨戒隊が応援に入ったが、数が多すぎて捌ききれないと報告もされていた。

哨戒を行っていたのはカラスの39式艦上戦闘機 旋風が二機編隊二組とキジの零戦が三機編隊一組で合計七機の戦闘機がロウリア軍の飛竜部隊と交戦中だった。

○●

「数が多すぎる!。」

「全く大戦を思い出すぜ!。」

ダダダダダダダダ

タタタタタタ

39式艦上戦闘機四機と零戦三機の合計七機の戦闘機部隊が総数二百五十騎の飛竜と空中戦を繰り広げていた。

戦闘機部隊は速力と機動でワイバーンを翻弄し、着実に撃墜数を増やしている。対して飛竜隊は被害が増すばかりで攻撃は全く当たっていない。

「怯むな！ 敵は寡兵だぞ！」

飛竜隊の指揮官の檄が飛ぶ。敵味方入り乱れる乱戦が続く中、戦闘機部隊の零戦のパイロットが叫んだ。

「応援はまだ来なのいか!? このままじゃ突破されるぞ！」

「やかましい！ ラヴェンジャーよりマシだ！ 今は口より手を動かせ！」
ダダダダダダダダ

ベテランがそう返しながら飛竜を撃墜する。

だが、顔には焦りが出ている。敵の数に弾薬が足りない。戦闘開始から時間が経っており弾薬がそろそろ切れる機体が出始める頃だ。打開策を練ろうとする途中で母艦から通信が入った。

「各機に告ぐ。速やかに高度四千以上に待避せよ。」

「高度四千以上に待避？ まだ残ってるぞ。」

「自衛隊からの要請だ。直ぐに高度をとれ。」

「了解。」

母艦からの命令を受けて、四千メートル以上の高度に次々と離脱する戦闘機部隊。飛竜隊が追撃をしてきたが、限界高度まで上がった後に諦めて艦隊の方へ向かった。

「何をやる気でしよう?」

「分らん。」

四千以上の高度から下の飛竜部隊を伺う。

それは唐突に訪れた。艦隊の方角からミサイルが飛んできて次々とワイバーンに突き刺さっていく光景が眼下に広がった。



「対空誘導弾をあんな風に撃つとは・・・」

いずも艦橋でみようこうがVLSからミサイル発射する様子を見ていた重井は驚きながら呟いた。

重井は当初護衛艦の艦影を見て護衛艦という艦種は主砲と機銃、対潜魚雷のみを装備した艦で、

日本国内にはミサイルランチャーを搭載した駆逐艦や巡洋艦がいたと思っていた。

しかし、目の前の光景を見てその認識を修正せざるを得なくなっていた。

さらに発射されるミサイルの多さにも驚いていた。

「数も多い。・・・レーダーか電算機のお化けでも積んどるんか。」

「そこまですごいのですか?」

ブルーアイが重井の驚く理由が分からず、質問した。

「誘導弾の誘導は目標一つにつき一個の誘導装置が必要で大量の目標には向かないのですが、

自衛隊は大量に撃ちまくってる。重複はしてないのですか?」

「はい。全ての目標に振り分けています」

重井の質問に対し、副長が答える。重井は驚きのあまり言葉が思い浮かばず、沈黙した。

「・・・少々敵の数が多かったみたいです。まだ飛んできますね。」

「やはり次は主砲と機銃とやらで迎撃をするのですか？」

ブルーアイが重井の代わりに質問した。

「もちろんです。そろそろ主砲の射程内ですね。」

艦橋外では護衛艦のみならず、民間警備会社連合の駆逐艦と軽巡洋艦が主砲と機銃の仰角を上げて、ワイバーンを待ち構えていた。

主砲を複数装備している駆逐艦と軽巡洋艦は一門ほどロウリア軍に向けている。しばらくしてロウリア軍の飛竜隊が見えてきた。

射程内に入ったらしく、次々と対空砲火を撃ち上げ始めた。

ズドーン！ズドーン！ズドーン！

ダム！ダム！ダム！ダム！

ズドドーン！

ダダダダダダダダダ！

護衛艦からは正確無比な砲撃。駆逐艦と軽巡洋艦からは護衛艦ほどではないが正確な砲撃と銃撃が多数放たれている。

V T信管や時限信管による炸裂を喰らうか直撃弾を喰らい、見る見るうちにワイバーンが落ちていき、空にいるワイバーンはついにいなくなってしまった。

この様子を見ていたロウリア海軍はついに撤退を決めたのか、反転を開始。

近現代からみて遅い動作だったそれは、当初撤退と理解されず攻撃を受けたものの、撤退と判明した後は海上自衛隊、民間警備会社連合共に攻撃をやめて撤退を静観していた。

ロウリア海軍が海域から離れると、海上自衛隊と民間警備会社連合は漂流しているロウリア海軍の船員の救助に当たった。

救助のため35式艦上攻撃機と40式艦上爆撃機とSH-60Kが発艦し、漂流している乗組員の捜索や救助、浮き輪の投下などを行った。

戦闘とは打って変わって、自分たちを救助し、丁重に扱う日猟の連合軍にロウリア海軍の船員たちは当初警戒していたものの、次第に絆されて警戒を解いた。

救助された中には艦隊の指揮官だった海将シャーケンもいたが、他の捕虜同様に丁重に扱われることになった。

こうして後の歴史書に残るロデニウス沖大海戦は日本と猟全の勝利に終わった。

第十三話 「エルフSOS」

四月三十日PM 13:20

クワ・トイネ政治部会

「以上が本海戦の概要になります。」

ブルーアイは報告をしながら政治部会に座っている閣僚を見た。
全員ブルーアイの報告に信じられない表情を浮かべている。

「では何か。日本と猟全はたった二十隻の艦隊で四千四百隻のロウリア艦隊に挑み
二千三百隻を海の藻屑にすることで戦意を喪失させ撃退。挙げ句の果てにワイバー
ン二百騎の

空襲を僅かな航空支援と共に全て撃墜し、無傷で戦いを終わらせたということか？。」
「いえ、日本の軍船みようこうが火矢で塗料が剥がれています。」

「そんなものが損害に入るわけないだろう。」

ブルーアイも困った顔を浮かべながら内心で同意した。

損害が白紙のままでは報告書を信じてもらえないと思い、ダメ元で書いたのだ。

「日本と猟全の死者はゼロで我が艦隊は出る幕さえなかったようだがそれでこんな戦果を？」

君が嘘を言うことも思えないが、こんな戦果お伽噺でもあり得ない。あまりに現実離れしすぎて

信じられないのだよ。」

外務卿リンスイの言葉はこの場にいる閣僚全員の気持ちを代弁していた。

「報告書には大規模爆裂魔法で敵の船とワイバーンを撃滅したとあるが、

日本と猟全は魔法が使えないのでは？」

「大規模爆裂魔法のようなものです。あの攻撃は魔法とは思えませんでしたが、

私の知る限りあれに類似するのは大規模爆裂魔法だけなのでこのように表現しました。」

「魔法なしでこんな戦果挙げられるか。」

ブルーアイの言葉に出席している閣僚たちはヤジを飛ばす。本来なら亡国の危機を凌げたから

喜ばしい状況なのだが、日本と猟全が挙げた前代未聞の戦果により、戸惑いや恐怖の感情が

大きくなっている。

「いずれにせよ、海からの侵攻はこれで防げた。これだけの大被害を被ればロウリア王国でも

海から電撃戦を仕掛ける事は時間が掛かるだろう。」

カナタ首相の発言に軍務卿が答える。

「そうなります。陸の方もギムでモイジ団長や猟全の傭兵が寡兵ながら

善戦して持ちこたえております。ただ、海からの侵攻を阻止した以上、ロウリアは地上侵攻の

足がかり確保のためギムへ攻撃を集中させるでしよう。」

「早急に援軍を送ってくれ。あの軍隊を用意するのに相当の負担を負っているはずだ。

海からの侵攻に備える必要がなくなった今、ギムの敵さえどうにかすればロウリアは当面

我が国への侵略を行えないだろう。」

「了解しました。」

軍務卿の言葉にカナタ首相は指示を送る。カナタ首相はこの援軍の到着をもつてギム近辺の

ロウリア王国軍をクワ・トイネ領土から叩き出すつもりだ。

軍の動向について一段落した後、今度は外務卿リンスイが発言した。

手元には大陸共通語で書かれた申請書が握られている。

「日本の動向ですが、我が国に城塞都市エジエイの東側のダイタル平野に設立された

猟全の基地への駐屯と増設および拡張の許可を求めています。

尚、猟全にも同様の要請がされているようです。」

「猟全の基地？。あれだけ広いのにまだ大きくすると言うのか。」

カナタ首相に申請書が回される。回されたのは土地の貸し出し申請書で、すでにサイン欄は

埋まつており、後はカナタ首相のサインだけとなっている。

猟全が建設した仮設基地は、クワ・トイネの基準からすれば大規模な基地に相当する。カナタ首相は拡張に疑念を抱いたが、すぐに軍務卿が答えた。

「日本へ行ったハンキ將軍の報告によれば

現在の猟全の基地の規模では日本の鉄竜を運用するのは難しいそうです。」

「なるほど。外務卿、日本に全て許可するように伝えてくれ。」

「了解しました。」

ば
本来ならある程度の反発が起きそうな提案だが、誰もが猟全と日本の手を借りなければ

ロウリアとの戦争を乗り切ることができないと分かっていたため。

そして強大な二カ国が自分たちに牙をむくことを恐れたため、反対意見は出なかった。

許可から数日後、未舗装の短い滑走路、掘っ立て小屋のような航空機格納庫と車輛格納庫、

そして簡素な管制塔から構成された猟全の仮設基地は、自衛隊の手により短期間で大規模な陸空の複合基地に生まれ変わり、クワ・トイネと猟全の兵士を唾然とさせた。



ロウリア王国

王都ジン・ハーク、ハーク城

王城ハーク城の一室で、国王ハーク・ロウリア三十四世は
將軍パタジンから戦況の報告を受けていた。

報告を聞いた王は激怒しながらも、冷静に詳細を聞いていた。

「あれほどの大兵力をもつてしても未だギムを落とせず海軍も負けるとは……。」

開戦劈頭のギムの奇襲では獵全という新興国家の傭兵部隊が参戦。

三万もの先遣隊の猛攻を防ぎきり、本隊が到着した現在でも攻撃を防ぎ続け

戦況は膠着状態に陥った。

先のロデニウス沖大海戦では獵全に加え日本という新興国家が参戦し、航空支援のために出撃した王都防衛騎士団に所属のワイバーン二百五十騎全てが撃墜され、艦隊も半分ほどの二千三百隻が

撃沈され、指揮官の海将シャーコンも戦死

——— 実際は捕虜になっているがロウリアは知る由もない——— してしまった。

「申し訳ありません。まさか日本と獵全が此処までの戦力を保有していたとは……。」

将軍パタジンは謝罪しながら日本と獵全の情報を集めることを誓う。

ロウリア王国が日本と獵全共和国と初接触したのは日本と獵全が国交を求めてロウリア王国に来訪したときだ。来訪時はクワ・トイネと友好関係を結んでいるとの理由で門前払いをしているが、その時の外交官の反応で両国ともにワイバーンを保有していない

事から、蛮国と見なされ、ロデニウス大陸統一には支障がないと判断された。

実際はかなりの軍事国家だったのはロウリア王国の致命的な誤算だろう。

「彼らはワイバーンも知らぬ野蛮な国家ではなかったのか?。」

いや、そもそもこの報告は誤報ではないのか?。」

「軍の被った被害は本物で目下詳細を調査中であります。

戦闘の経緯も精査中ですが余りにも非現実的な証言が多く・・・。」

パタジンの言葉にハーク・ロウリアは瞑目しながら米神を押さえる。ロデニウス大陸統一計画が

破綻しかけている状況にハーク・ロウリアは頭痛を引き起こした。

米神から手を離れたハーク・ロウリアは指示を出した。

「とにかくギムを落とせ。海上からの侵攻が失敗した今地上の大軍をもって

クワ・トイネを叩くしかないが、ギムを落とさねばそれすら出来ん。」

「はっ。」

ロウリア王国は被害を堪えつつギムに更なる大軍を送り込み制圧することを決定し

た。

○●

五月二一日

ギムより東10 km

クワ・トイネの政治部会が自衛隊の受け入れを決定し、ダイタル平野の基地が拡張している頃、

ギムから離れた平野部でエルフの一団が必死の形相で歩いていた。

荷物は最低限の手持ちの品のみで最後方では若いエルフが後ろを警戒している。

彼らはギムの近くに存在する農村に住むエルフだ。元々閉鎖的な環境だった事が災いし、

ロウリア王国との開戦の情報の伝達が遅れ、

気付いた時には既にロウリア軍がギムに攻め混んでいた。

慌てた村民は、持てるだけの荷物を持ってエジエイへ避難していた。

「大丈夫だ。兄ちゃんが付いてるからな。」

避難民の一人である少年のバルンは妹のアーシャに声をかけた。兄妹の両親は母親は亡くなり、

「父親はロウリア王国との緊張が高まった時に予備役として村の男達と共に召集されている。」

「俺がいない間はアーシャを頼んだぞ。」

バルンは父親の言葉を反芻しながら前へ進む。

今進んでいる平野部は見通しが良く歩きやすい為、進みやすいが、それは敵にとっても同じだ。

一度捕捉されれば逃げるのは困難だろう。

見つからないように必死に祈るエルフ達。だが、祈りは天に届かなかった。

「まずい……。ロウリア軍だ！」

後ろを振り向けば三キロほど離れた場所からロウリア軍の騎兵が土煙をあげながら迫っていた。

彼らに迫っているのはロウリア王国ホーク騎士団第十六騎馬隊だ。

隊長は赤目のジョーヴという男で元は山賊だったが、王国が勢力を広げた際に頭角を

表し、

そのまま召し抱えられ、王国の騎士となった。

但し、素行は山賊のまま変わらず凶悪で気に入らない部下を戦死に偽装して殺害するなど

かなりの悪行を行っている。

「ギムが未だ落ちねえからもて余してたが……まあ、悪くない獲物だ。野郎共いくぞ！」
「「ヒヤツハアア」」

野蛮な叫び声を出しながらエルフの避難民に突撃する騎馬隊。

エルフ達は恐慌状態に陥りながら逃げ出した。パルンは咄嗟に近くの荷車に積んでいた

手斧を片手にとり、もう片方の手でアーシャの手を万力のように

握りながら走り出した。アーシャが悲鳴を上げるもそれを無視ながら必死に逃げる。しかし、騎馬と徒歩ではあまりにスピード差があり、徐々に距離が縮まる。

(誰か……神様。いるのなら助けてください！。)

パルンは口ウリア兵が近づいてきた事に気付き、妹を背に構える。

ロウリア兵はいかにも素人感漂うエルフの構えを見て嘲笑する。

その時、二機の濃緑の戦闘機が空を切り裂きながら飛来し、パルンに突撃していたロウリア兵を

銃撃でズタズタに引き裂いた。

○●

「キュービリーダーより各機。攻撃開始！。避難民に当てるなよ！」

「キュービ2了解。今さらそんなへまするかよ。」

「キュービ3了解。よっしゃー、やってやる！」

「キュービ4了解。みんな、油断しないで。」

伏見機動警備所属の烈風四機が避難民を守るために展開。その後方には陸上自衛隊所属の

CH-47輸送ヘリコプターが飛んできている。彼らはパルン達エルフの村の救助にきた部隊だ。

事の発端はエジエイに避難したギムの商人が出入りしていたエルフの村の避難民が

いないことを

不審に思い、クワ・トイネ政府に所在を確認したところ誰も避難していない事が発覚した事に

端を発する。

クワ・トイネの部隊では救助に時間が掛かるため、日本と猟全に避難民の救助を要請。

自衛隊からはCH—47が派遣され、万が一の護衛として予定が空いていた

伏見機動警備所属の戦闘機、烈風四機で構成されるキュービ隊が派遣された。

烈風には固定武装の30mm機関砲の他に、12.7mmガンポッドやロケット弾を搭載している。

12.7mmガンポッドと30mm機関砲が火を吹き、ロウリア兵を馬ごと打ち倒す。

ロケット弾が発射され、爆風でロウリア兵が吹き飛ぶ。

赤目のジョーヴが退却命令を出すも時既に遅し。赤目のジョーヴは機関砲でバラバラに打ち碎かれ、残った騎兵もすぐに動かなくなり、あっという間に全滅した。

圧倒的な戦闘を目にし、呆然とするエルフ達の前にCH—47が着地し、後部ハッチを開放する。

中から89式小銃を構え周囲を警戒しながら自衛官達が出てきた。一人だけ拡声器を持っている。

「我々は日本国陸上自衛隊です。あなた方の救助に来ました。怪我人はいませんか?。」

自衛官の呼び掛けにCH-47に困惑しながら近づくエルフ達。

不安や疑問を口にするエルフ達の中で、一人の老人が上空で警戒する烈風に描かれた国籍マークに気付き驚愕した。更にCH-47にも同じ国籍マークが描かれた事に気付き目を見開き体を震わせた。

「な．．．な．．．」

「おじいちゃん?。」

「太陽神の遣いじゃ．．．」

老人が呆然としながら呟く。老人の手を握っていた孫が首をかしげる。

老人は突然孫から手を放してエルフ達に叫んだ。

「静まれえ!。こちらにおわす方々をどなたと心得る!。恐れ多くも古の時代に魔王の

軍勢から人々を救い、そして此度も我らを救いに舞い戻ってきた太陽神の遣いであらせられるぞ！」

「太陽神の遣い!?!。」

若者の一人が驚きながら老人に聞き返した。

「あの空に浮かぶ鉄竜を見よ。嘗てわしが若かりし時に神森で見た太陽神の遣いの天の浮舟と全く同じ姿形。そして描かれている太陽の絵もこの浮舟と同じ太陽の絵。

すなわちこちらにおわす方々は太陽の神の遣いじゃ！」

老人の言葉にざわつくエルフ達。自衛官らは困惑しながらエルフ達の様子を伺う。

「皆のもの頭が高い。控えおろう！」

老人の言葉にエルフ達が一齐に土下座する。

「これには自衛官らも慌てた。

「えっと、我々はそんな大したものではないので」

「すいません。早く乗ってください。」

「いやいやそんな恐れ多い。乗ることはできません。」

自衛官とエルフ達の押し問答に気付いたキュービーがCH-47の一番機に無線を入れた。

『キュービーよりキャリアー、避難民の様子が妙だがトラブルか?。』

「あー、エルフ達に我々が神の遣いと判断されて、神の遣いの機体に搭乗する事が恐れ多いということまで搭乗作業が始まらない。暫く待ってください。」

『・・・了解した。燃料に余裕はあるが、なるべく手短に終わらせてくれ。』

その後エルフ達を諫めた自衛官はエルフ達をCH-47に載せ、離陸。キュービー隊の援護のもと、ダイタル平野基地に帰還した。

第十四話 「逆転のヒューイ」

○●

5月31日PM20:25

ギムより東7kmクワ・トイネ公国軍ギム救援隊陣地

ロウリア王国からギムを守り撃退するため、ギムに向かって進軍するクワ・トイネのギム救援隊。

すでにギムで上がる砲火の輝きや黒煙が視認できる距離に入り、救援隊は敵戒態勢の状態で一夜を明かしている。

その中の一際大きな天幕でクワ・トイネ軍西部方面師団將軍のノウと参謀達はいいた。天幕中央の机には地図と駒と水の入ったコップが置かれ、ロウリアへの作戦を練っていた。

そこに伝令が入ってきた。ノウに敬礼し内容を告げた。

「報告。避難が遅れていたエルフ達は日本と猟全の部隊により救出され、無事エジエイ

に到着したとの事です。」

「そうか。」

ノウ達は報告を聞いて一息ついた。

本来なら自分達が出向いてエルフ達を救出をするべきだったが、ギムへの救援とロウリアへの反撃の為に足の速い部隊は出払っており、既にエルフ達の村はロウリア軍の勢力圏内に入っており逃げ出していたとしても救出部隊の到着前に皆殺しにされる公算が高かったため、急遽自衛隊と民間軍事会社に要請してエルフ達を救出してもらった。この事にノウは歯痒い思いを感じていた。

伝令が退去したのを確認しノウと参謀達は再び作戦会議を行う。

「エルフ達はどうにかなったがギムにはいつ頃到達する?。」

「先遣の騎馬隊は翌朝に到着。全部隊となりますと昼前ごろの到着になります。」

ふむと頷きながらノウは地図を見つめる。地図上で駒が動かされ、ギムへと接近する。

ノウが質問した。

「日本の動きはどうなっている。」

「昼前にヘリコプターにてロウリア軍に警告を行って以降はギムを空から援護するための準備を行っているようです。」

「全く。何故ロウリア軍に警告を行う。ワザワザ敵に情報を与えるようなものではないか。」

「何でも日本の法律の関係でロウリア王国を犯罪組織として認定したため警告したそうです。」

参謀が自衛隊を示す駒を地図上のギムのそばに置いた。

「やはり我が軍をこれ以上速くはできないか?。」

「難しいです。今のペースでも無理をさせていますからこれ以上となると・・・。」
「分かった。流石に無茶だったか。」

ノウはそう言って、地図から目線を反らして虚空を見つめる。参謀の一人が質問した。

「何もそこまで急がなくても良いのでは？。ギムは今のところ陥落する兆候は見せていません。」

参謀の質問に、少し複雑な表情を浮かべながらノウは答えた。

「確かに、ロウリアの侵攻はうまく防いでいる。だがギムの防衛や海戦にエルフ達の救助と日本や猫全ばかりに活躍されて、我々は目立った活躍を行っていない。これでは存在意義を疑われる。」

クワ・トイネの守護は我々が担うということを示さねばならん。」

ノウはそう言いながらコップを手にし、中の水を飲んだ。



6月1日 AM 05:38

ギム第一防衛線塹壕。

「Fuoking hell!!」

「ちかづくんじゃねえ!」

ジョンは罵倒しながらガーランドを突撃してくる魔獣やロウリア兵に向けて乱射した。直ぐに弾が切れクリップが排出された。傍ではアルも対空仕様の38式軽機関銃を地上に向けて攻撃している。

夜明けの直前にロウリアが地下を掘り進む魔物を使い、地下を経由して第一次防衛線とその後方の第二次防衛線、迫撃砲や対空火器などの支援部隊に魔物とロウリア兵による奇襲攻撃を仕掛け、更に正面には魔導師を集中投入し、障害物を魔法で排除して大攻勢を仕掛けた。空中でもワイバーンを一気に大量投入し、クワ・トイネの飛竜隊や民間軍事会社の航空部隊と激しく戦っている。

予想もしていなかった奇襲に前線ではロウリア兵が猟全とクワ・トイネの兵士の間で混戦状態で組織だった行動が阻害されており、迫撃砲等の支援火力はロウリア軍の攻撃により砲撃を停止。戦車部隊もロウリア軍と味方の距離が近すぎて砲撃が困難な状況に陥っている。

「駄目です。混線していて通信ができません!。」
「くそ。仕方ない、後退!。ここじゃ不利だ!。」

既に一部の塹壕を越えられており、防ぐ目処がたっていない。このままでは包囲されると判断した隊長が後退を命じた。アルが銃座から38式軽機関銃を外し箱形弾倉を装着し、その場から離れた。

「了解!。そら置き土産だ!。」

「釣りはいらん。取っとけ!。」

クワ・トイネ兵の一人が手榴弾を数発連続で投げた。爆発と共にロウリア兵や魔獣が吹っ飛んだ。そこに追い討ちで民間軍事会社の隊員がドラムマガジンを着けたトンプソンサブマシンガンを連射し、たちまち魔獣と兵士が怯んだ。

「よし、全員後退!。」

互いに援護しながら次々と塹壕から這い上がる兵士達。全員が這い上がり終わり、隊長が叫んだ。

「車両を使うぞ。ジープとトラックは！」

「畜生！、あつちでムカデが噛ってます。」

駐車してあつた車はムカデのような魔獣により無惨な姿に変わりつつある。

「ああ、なんてこつた。走れ！」

隊長が悪態をつきながら命令を下し、部隊は第二次防衛線に向けて走り出した。立ちふさがる魔獣やロウリア兵を退けつつ退却する彼らの目の前に、一際大きい熊のような魔獣が立ちふさがつた。

「邪魔だ！、死ねえ！」

兵士の一人がトンプソンサブマシンガンを連射。ドラムマガジンではなく箱形弾倉

だ。しかし全弾撃ちきったのに関わらず魔獣は倒れずそのまま襲いかかった。食いちぎろうと覆い被さり顔を近づける魔獣に、咄嗟にトンプソンサブマシンガンを盾にする兵士。

「ぎええええ！。俺を食うなあ！」

「そのまま動くな！」

クワ・トイネの兵士が襲われている兵士を助けるため、05式歩兵銃を片手に剣を腰の鞘から

抜き出して眼孔に突き刺した。激痛で魔獣が立ち上がり悶え、その隙に覆い被された兵士は離れた。クワ・トイネの兵士は膝撃ちの体制で魔獣の喉元に狙いを定め、引き金を引いた。

放たれた銃弾は狙いどおりに喉元に飛び込み、そのまま頸椎を貫通した。更に駄目押しでもう一発撃ち込み魔獣は仰向けに倒れた。

魔獣は少し痙攣したあと力を失い、そのまま倒れて動かなくなった。

「助かった。よく当てたな。」

「まぐれですよ。次は自信ないです。」

クワ・トイネの兵士の手を借りて兵士は立ち上がる。隊長が背中に背負っていたソードオフの自動散弾銃——オート5を手にしながら声をかけた。

「拳銃弾じゃ効果は薄いようだな。こいつを使え。」

「ありがとうございます。」

「バックシヨットにスラグが二十発ずつだ。」

隊長がサブマシンガンを失った隊員にオート5と弾薬を渡した。

熊のような魔獣を撃破した部隊は再度走り出し、ロウリア兵や魔獣を倒しながら後退を続けた。

38式軽機関銃を撃ちながらアルが叫んだ。

「おい、車が近づいてるぞ。」

次の瞬間、アルの38式軽機関銃より遙かに強力な掃射が魔獣やロウリア兵をなぎ

払った。

その発射元であるハーフトラックが近くに停車した。

「こっちは全員無事だな。さあ、乗れ！」

「すまん、恩に着る！」

「お礼は酒で頼む！」

ハーフトラックのハッチが開かれ、ジョン達を収容し始める。ハーフトラックの銃座に着いていた兵士がM2重機関銃を撃ちジョン達を援護する。収容が終わるとハッチが閉鎖され、ハーフトラックは発進し、ギムへ全速で向かう。

「どけどけ！、ロレンツォ様のお通りだ！」

装備している重機関銃や収容した部隊の銃撃で魔獣やロウリア兵を撃ち倒し、時に轢いて移動するハーフトラック。

止められるものが周囲にいないことに、全員が安堵の表情を浮かべる。しかし、銃座についていた血相を変えて兵士が叫んだ。

「ヤバい！、ワイバーンだ！」

銃座の兵士が気付き上空のワイバーンに向けて重機関銃を撃ちまくり撃墜する。ワイバーンが錐揉みになりながら墜落する。それをみた兵士達が歓声を上げた。

「よっしやー！」

「やるじゃないか！」

「おい、味方の戦闘機はどこ行った？。ワイバーンもないぞ！」

「さつきまで戦ってたのに……墜とされたか？」

兵士達が上空の戦況に気づいた。

開戦当初からロウリア軍は多数保有するワイバーンによって物量に任せた航空攻撃を仕掛けた。

民間軍事会社連合とクワ・トイネはこの数的不利を補うため、質で勝る民間軍事会社の航空部隊をクワ・トイネの飛竜隊を支援する形で戦わせることでロウリア軍と立ち回る作戦に出た。

最初の航空戦であえて航空部隊を積極的の前に出すことで、ロウリアの飛竜隊に対し戦闘機という強力な戦力を認識させ飛竜隊にプレッシャーをかけた。その後航空部隊は上手くローテーションを続けクワ・トイネの飛竜隊を援護することで数の不利を補っていたが今回の大攻勢により民間軍事会社の航空部隊は弾薬を欠乏。クワ・トイネの飛竜隊も航空部隊の援護を受けられなければロウリアのワイバーンの物量に壊滅するところが一目瞭然であつたため撤退。ロウリアはギムの航空優勢を遂に確保した。

「対空戦闘用意！。戦闘機は弾薬の補給だ。これからは俺たちだけでトカゲどもの料理だ。好き嫌い言わずに全部平らげて見せろ！」

「了解！。」「」

荷台で隊長が檄を飛ばして命令する。兵士達は魔獣やロウリア兵自分達の銃を地上からワイバーンに向けた。

ふと、アルの耳が何かの音を捉えた

「ん？。なんだこの音は・・・音楽？。」

アルの耳がピクリと動き、アルはギムの方へ視線を向けた。



同時刻ロウリア軍本陣

「ヒヤッハハハハ、遂にギムを落とせるぞ。亜人どもめ散々手こずらせてくれたな！」

航空優勢を取られ徐々に押され始めたギムの守備隊を見て、アダムは高笑いした。

初戦から敵の未確認の攻撃や陣地で激しく損耗したが、回を重ねる毎に少しずつ経験を重ね対策を練った。

そして遂に本隊と直掩の飛竜隊や自らの配下である魔獣を地中、地上、空の三方面から奇襲をかけて敵の対応力の飽和を試みた。障害物も度重なる攻撃である程度除去しておりその能力を減退させている。ロウリア軍はこの大攻勢で完全に防衛線を突破し、ギムを陥落させるつもりだ。

「一時はどうなるかと思いましたが、ようやくギムを落とせますね。」

一息ついた状態で参謀がパンドールに声をかけた。

「被害が大きいがな。ギムを占領し次第略奪を許可しよう。」

「はい。しかし足りませうかね?。」

参謀がパンドールの言葉に物資の状況を思い出す。そしてギムに貯蔵しているであろう物資の量を推定し、その合計を算出する。

「ここままで長期間粘られると女もいなさそうですし、どれだけ物資が残っているか。」

「最悪持つてきている物資も開放するしかあるまい。ここままで苦戦したのだ。褒美がなければ兵達の士気が下がるだろう。」

「わかりました。その様に。」

既に勝利を確信しギムの占領について話し合うパンドールと参謀。物資の算定を話し合っていると戦場を観測していたロテムが戻ってきた。高揚した様子でアテムが戦場の状況を報告する。

「將軍、もはや勝機は完全に決しました。最前線の防衛線は勿論後方の防衛線も徐々に制圧しつつあります。」

「ああ。そのようだな。当初の予定と全く違うが、どうにか橋頭堡のギムを確保できるな。」

パンドールが安堵しながら言った。アデムが続けて自分の要求を告げた。

「つきましては將軍。ギムへの一番乗りは我々の部隊に。」

「アデム。貴様の部隊は魔獣使いだ。一番乗りなど出来るわけが無いだろう。」

アデムの要求に参謀が反発するもそれを制して將軍が答えた。

「良いだろう。今回の功労者は間違いなくアデム君の部隊だ。一番乗りを認めよう。」

「……わかりました。」

渋々参謀がアデムの一番乗りを認めた。アデムはほくそえんだ。今まで差別されて

きた自分たちが漸く認められたからだ。

ここから出世を果たし、自分たちを見下してきた相手を逆に見下してやる。そうアデムは思ったが、今は目の前のギムだ。ギムに入り次第ギムの守備隊の指揮官であるモイジを捕らえ、ついでに猟全の指揮官も捕らえてどう拷問するか。

アデムがそう考えていると、突然上空で爆発音が立て続けに起きた。

爆発音に反応しその場にいた全員が空を見上げると、東の空から光の矢が飛んできてワイバーンに次々と直撃し爆発していた。

「な・・・あれは?。」

「そ、そんな・・・こんなことが。」

飛竜隊が慌てて回避を試みる。しかし飛んでくる光の矢は全て寸分の狂いもなく直撃している。

余りの光景に本陣にいた將軍らや地上で戦っていたロウリア兵は絶句した。



同時刻

陸上自衛隊クワ・トイネ公国派遣隊

第二戦闘団

クワ・トイネ救援の為に派遣された自衛隊が現地で編成した空中機動部隊である第二戦闘団が東の空が白みがかっている景色の中をギムの救援の為に全速で向かっていた。

「目標まで後五分!。」

エンジン音に負けない大声で隊長機の副操縦士コパイが無線で第二戦闘団全体に向けて報告した。

無線を受信した戦闘団は纏う空気を鋭くし、戦闘に備える。

第二戦闘団はU H—1、A H—1、O H—6の旧式の機体で構成され、この三機種はロウリアとの戦争の

主力ヘリコプターとして派遣されている。

日本と比べ物量で圧倒的に勝り装備では遙かに劣るロウリア軍に対応するため、数が揃えやすく運用コストが安い三機種が選定されたからだ。

一部のU H—1とO H—6には武装が施されておりドアガンにM2重機関銃や74式車載機関銃といった従来の兵装の他に、一部の機体に96式自動機銃が新たにド

アガンとして装備されている。

降着装置の外側に正面に向けてハイドラ70ロケット弾ポッドや機関銃を装備している機体もいる。

これらの自衛隊のヘリコプターが地球にいた頃と比べ、重武装なものには訳がある。

転移の混乱から抜け出した日本はクワ・トイネとクイラ。そして猟全共和国から周辺的情勢を断片的にはあるが取得していた。

情報を分析するとこの世界は元の世界と比べて文明水準が低く紛争が頻発しており、平和とはとても言いがたく国際法に相当するものもない無法地帯だ。ただ文明水準相応に戦闘力も低いため、日本が紛争に巻き込まれることがあっても十分に対処は可能で深刻な状況にはならないと日本政府は考えた。

しかし、有事が発生して中世程度の軍隊と戦うとき、元の世界と同じように少数精鋭で最新鋭の装備を用いるのはあまりに効率が悪いと意見が出された。むしろ大軍で押し寄せてくると想定される敵に対してはある程度装備の質を落としこちらも数を揃えて対抗した方が効果的と判断された。この為政府は自衛隊の拡大を決定した。しかし決定したからと言ってすぐに拡大できるわけではない。

生産中の兵器が前線に行き渡るのに時間が掛り、自衛官の教育も同じく時間が掛る。

また転移のため自衛隊の装備の更新や調達が大幅に乱れたために先ず旧式の兵器の寿命向上と従来の兵器の火力の増強を決定した。

ヘリコプターに関しては退役が予定されていたOH-6の退役を取り下げた。また在日米軍からヘリコプターの武装化キットを借り受け試験的にUH-1、UH-60、OH-6に装着しガンシップにし、戦闘ヘリコプターの不足を補った。

その試験の真つ最中にクワ・トイネとロウリアとの戦争が勃発したため実地試験をかねて派遣された。

なお、今回に限って一部のヘリコプターには大型のスピーカーが装備されている。

「景気づけに音楽だ。音源の用意は。」

「音源はワルシャワ・フィル、リピート加工済みです。大音響スピーカーも準備完了。いつでも行けます。」

「パーフェクトだ。魚田二佐。」

「感謝の極み。」

指揮官と副官のやり取りを見て、隊長機のパイロット達が周囲に聞こえないように会話を話す。

D h a D h a D h a 〽 D h a D h a D h a D h a 〽

先頭に位置していたロケット弾ポッドを装備したU H—1の編隊が急加速し眼下のロウリア兵達にロケット弾を撃ち込む。弾頭に内蔵された炸薬が爆発し破片をまき散らしながらロウリア兵と魔獣達を吹き飛ばす。

さらに登場していた普通科隊員と側面に装備した機銃やドアガンを乱射し、5・56 m m N A T O 弾、7・62 m m N A T O 弾、12・7 m m N A T O 弾、40 m m てき弾の雨を降らせながら低空を通過する。

♪ D h a D h a D h a D h a 〽 D h a D h a D h a D h a 〽 D h a D h a
D h a D h a D h a 〽 D h a D h a D h a D h a 〽

A H—1がギムに接近するロウリア兵をM193ガトリング砲で掃射しダメ押しでロケット弾を斉射する。人間・魔獣問わずたに引き裂かれ殲滅される。

T O W ミサイルが発射され大型の魔獣や攻城兵器に直撃し周囲もろとも吹き飛ばす。

♪ D h a D h a D h a D h a 〽 D h a D h a D h a D h a 〽 D h a D h a D h a

D h a D h a s

観測ヘリのOH-6がロウリア兵の動きを逐一報告し、ヘリコプターを誘導する。武装しているOH-6は軽快な運動性を活かしてロウリア兵を逃がさないように射撃し、機敏立ち回る。

ワルキューレの騎行を大音量で流しながら行われる自衛隊の派手な攻撃にクワ・トイネと猟全の兵士と後方から見ていたロウリア兵達が呆気にとられるもすぐにクワ・トイネと猟全の兵士達は反撃に転じる。

戦車部隊が破城槌として自衛隊の攻撃で数を減らしたロウリア軍に突撃。そこから兵士たちも突撃し、ロウリア兵を攻撃する。ゴムや上空から攻撃を受け次々と倒れるロウリア兵達。しかし、到着したのは自衛隊だけではなかった。

「日本に後れをとるな！。全騎突撃イイー！ー！」

クワ・トイネの騎兵隊が到着しそのまま第一次防衛線の外側にいたロウリア軍の攻城兵器とその護衛にクワ・トイネの騎兵隊が突撃した。

クワ・トイネの騎兵は従来の槍と剣ではなく猟全から供給された銃器類や手榴弾で武

装している。取り回しの良い騎兵銃や短機関銃に拳銃を装備し、刀剣類は腰に吊るした
ものか騎兵銃の先に着けた銃剣しかない。

側面を突かれた形となったロウリア軍は混乱状態に陥った。反転しようにも動きの
遅い攻城兵器はすぐに動けない。

反撃しようにも射程外の距離から浴びせられる銃撃によってロウリア兵はバタバ
と倒れていく。

盾を重ねて密集陣形を組めばそのまま蜂の巣にされるか手榴弾を投げられた纏めて
吹き飛ばされていく。

「も、もうダメだ！。逃げろおー！。」

「死にたくない！。死にたくない！。」

「こら、逃げるな！。」

遂にロウリア軍が統制を失った。降伏したり逃げ出したりする兵士を指揮官が止め
るが全く効果がない。それどころか指揮官もろとも降伏する部隊も出ていた。第一次
防衛線の外側にいた部隊は攻城兵器を置いて敗走し、内側にいた部隊は降伏するか殲滅
されたかのどちらかの結末を迎えた。

「降伏する！。殺さないでくれ」

「頼む！、奴隷でも何でもいいから！」

「撃ち方止め！」

続々と降伏するロウリア軍に遂に攻撃を止める自衛隊。ラペリング降下で次々と普通科隊員達が降り立ち装備を手放したロウリア兵を拘束する。

「・・・未来の日本軍はやることが派手だねえ。イカシテるぜ。」

「うちの日本も半世紀以上経てばああなるのか？」

「君たちから聞いた日本軍とだいぶ違うが・・・。」

「いや、俺の知ってる日本軍と違う。」

自衛隊の様子を見ながらクワ・トイネの兵士と猟全の傭兵が語り合う。特に日本出身の傭兵達が未来の日本の様子を見て困惑している。

ジョン達の近くにも自衛官が降下し、負傷者の救護やロウリア兵の捕縛や掃討を行った。ジョンは近くで作業を行う若い自衛官に声をかけた。

「よう。戦場は始めてかい?。」

「はい。・・・って日本語?。」

「そりゃ猟全にいるんだから日本語位は喋れるさ。しかし、えらい攻撃だな。ワーズナー流しながら攻撃なんて。」

「映画の真似らしいです。」

「へえ。未来の日本の映画は中々キメてきてるじゃないか。」

「いや、我が国じゃないらしいです。」

「どこの国だ?。」

若い自衛官が答えようとした時、上官が呼び掛けた。

「東ー!。ちよつと来てくれ!。」

「了解!、今行きます!。」

ジョンと話していた東と呼ばれた自衛官が離れていった。

こうしてギム防衛戦はクワ・トイネ、日本、猟全の勝利に終わった。